平成 29 年度勉強会資料

安曇氏族の興亡

平成 29 年 4 月

安曇誕生の系譜を探る会

金井　恂

[ここに入力]

目　　次

１　はじめに
２　安曇郡と安曇氏族の関わり
２－１　安曇平への弥生文化の伝播
２－２　安曇郡古代史の問題
２－３　安曇平の開拓の時代
２－４　安曇郡の設立の時代
２－５　安曇氏族に関する問題点
３　氏族集団の形成と氏姓の発生
３－１　氏族集団の興り
３－２　古代氏族の氏族名のはじまり
３－３　古代の氏姓制度
３－４　実質的なウヂの誕生の時代
３－５　氏姓の混乱
３－６　平安時代初期の氏姓
４　安曇氏族と安曇姓の発生
４－１　安曇氏族の興り
４－２「安曇族」呉国渡来説
４－３　呉国「倭族」渡来説
４－４　安曇姓のはじまり
４－５　全国に分散した安曇氏族の名前はいつできたか
５　安曇氏族の祖神　綿津見命
５－１　綿津見命
５－２　天皇家と安曇氏
５－３　持衰の習慣
５－４　阿曇磯良について
６　安曇氏族の一族
６－１　安曇氏族の一族
６－２　安曇連（天武天皇のとき宿禰を賜る）
６－３　海犬養連（天武天皇のとき宿禰を賜る）
６－４　凡海連（天武天皇のとき宿禰を賜る）
６－５　安曇犬養連
６－６　八木造
６－７　安曇部
６－８　今後の課題
７　古代の歴史書に見る安曇氏族の経歴と特徴

[ここに入力]

７－１　神話の中の安曇氏
７－２景行天皇紀の安曇氏
７－３　神功皇后紀
７－４　応神天皇紀
７－５　履中天皇紀
７－６　反正天皇から崇峻天皇紀
７－７　推古天皇紀
７－８　舒明天皇紀
７－９　皇極天皇紀
７－１０　孝徳天皇紀
７－１１　斉明天皇紀
７－１２　天智天皇紀
７－１３　天武天皇紀
７－１４　持統天皇紀
７－１５　文武天皇・元明天皇・元正天皇紀
７－１６　聖武天皇紀
７－１７　考謙天皇、淳仁天皇、称徳天皇、光仁天皇　紀
７－１８　桓武天皇紀
７－１９　平城天皇紀
７－２０　嵯峨天皇紀
７－２１　淳和天皇紀
７－２２　仁明天皇紀
７－２３　平安時代以降の安曇氏族の消息
８　安曇氏族は「海人族」だったのか
８－１　海神族と海人族のはじまり
８－２　海人たちの神としての綿津見命
８－３　『魏志』の潜水漁民
８－４　海人の統率者
８－５　糟屋郡志賀村白水郎（あま）
８－６　安曇氏族と海洋航海技術
８－７　農耕・文化的特性
９　膳（かしわで）職における安曇宿禰と高橋朝臣の争い
９－１　膳職のはじまり
９－２　争いの始まり
９－３　高橋氏との争い内容
９－４　安曇宿禰の巻き返しと失敗

[ここに入力]

９－５　安曇宿禰の佐渡配流
９－６その後の安曇宿禰
９－７　食膳奉仕の職
９－８安曇宿禰の末路
１０　安曇連比羅夫は軍人ではなく文官だった
１０－１　安曇連比羅夫が軍人とする根拠はなにか
１０－２　百済国滅亡と復興運動そして日本からの救援
１０－３　日本からの救援軍の実体
１０－４　百済王子豊璋帰還
１０－５　日本からの救援軍
１０－６　安曇連比羅夫は外交官だった
１１　全国の綿津見神社と安曇氏族
１１－１　綿津見神社の調査
１１－２　安曇氏族と関連ある神社
１１－３　綿津見神社についての考察
１２　安曇氏族の全国進出
１２－１　安曇氏族の全国進出
１２－２　安曇氏族ゆかりの地を探す
１２－３　安曇氏族ゆかりの地
１２－４　安曇氏族ゆかりの地分布図

１３　ゆかりの地に見る安曇氏族の興亡
１）　安曇氏族興亡の概要
２）　福岡市東区地域：筑前国糟屋郡安曇郷
３）　畿内地域（大阪市、神戸市周辺）：摂津・河内・播磨国
４）　滋賀県高島市安曇川町地域：近江国伊香郡安曇郷
５）　舞鶴市周辺（大浦半島、由良川下流地域）：丹後国加佐郡凡海郷
６）　三河国渥美郡渥美郷地域
７）　安曇野市：信濃国安曇郡
８）　米子市上安曇・下安曇：伯耆国会見郡安曇郷
９）　隠岐島海士町：隠岐国海部郡
１０）　神奈川県湯河原町・真鶴町：相模国土肥郡　子之神社
１１）　大和郡山市：大和国添上郡　安曇田荘
１２）　山梨県北杜市大泉町
１３）　各地域間の連携・交流はあったか

[ここに入力]

１　はじめに

人は誰でも自分が生まれ育った郷土の歴史を知りたいと思う。ことに古代史については不明なことが多いけれどもロマンにあふれたものであり、その分一層好奇心を掻き立てられるのである。

長野県安曇野市はかつて信濃国安曇郡と言われた地である。古くには科野国と表記されていたが、その後 700 年代の始め頃に信濃国と表記されるように変わった。信濃国には 10 郡あり、その中に安曇郡があった。安曇郡に生まれ育った者にとって、安曇郡がどのように誕生し、開拓されてきたかということは非常に興味深いテーマである。

安曇郡は安曇という古代氏族の名前をとって名付けられたと言われている。すると安曇郡の設立当時の歴史を知るためには、安曇という氏族について探ることが大きな鍵である。それは安曇郡に住む人々にとっては自分たちのルーツを探ることであり、自分たちの祖先の足跡を探ることである。それは非常に興味深いことであり、またロマンにあふれた作業でもある。

日本列島では弥生時代以降にさまざまな民族・部族が混血融合し、そうして多様性のある日本人が形成されてきた。安曇平においても同様にさまざまな血が混じりあい、そしてさまざまな文明が衝突し、混合融和して受け継がれてきたと思われる。安曇平にも長く、複雑な歴史があり、謎に包まれたままに埋っている。

安曇野市民および周辺地域の人々が集まり、安曇誕生の系譜を探る会という市民サークルを立ち上げた。そして郷土である安曇郡の古代史の勉強に取り組んでいる。その中で安曇と言う氏族はどのようなものか、いつの時代にどこからなぜやってきたのかというテーマは重要なものの一つである。

会は元より歴史学には門外漢の集まりであり、アマチュア集団である。つまり、門前の小僧として、あっちこっちの学者・研究者・郷土史たちの著述を選り好みせずに熟読し、比較研究することができる。そして自由な思考と斬新な発想によって、それらの古代史を再構築し、理解をより一層深めることができるだろうと思っている。

安曇という氏族は古代史の中ではよく知られた実在の氏族であり、『日本書紀』ではしばしば登場している。そして多くの学者・研究者・郷土史家たちによってさまざまに語られている。しかしそれらの安曇氏族に関する説は断片的なものばかりであり、氏族としての全体像はまったくあいまいである。その上、それらは実像とかけ離れた虚像となってしまっている。

たとえば、安曇族は南方から渡来した民族だとか、もともと漁撈や海上航海に優れた海人族だったとか、弥生時代に存在した奴国の王の一族だったとか言われており、それらを基にしてさまざまに安曇族説が語られてきた。しかしこれまで調査勉強してきたところ、それらの説に明確な根拠はなにも無いことが分かった。古くに国学の権威者の誰かが語ったことがあり、それが源になって、当然のこととして語り継がれ、それが定説の如くになってきていると思われる。

本稿では、歴史のアマチュアとして、権威主義にとらわれずにそして先入観なしに批判精神に基づいて安曇氏族の実像を探り出したいと考えている。とはいえ史料不足のために不明な部分が多々ある。それゆえに合理的な推論に基づくところも多い。そしてこれまで語られてきた安曇族論とは相反する見解が多くなっている。それらについては、その根拠を明確にしたつもりであり、読者諸氏のご批判を受けたいと願っている。

平成 29 年　４月

追伸

安曇誕生の系譜を探る会の皆さんへのお願い

本書は私のこれまでの調査研究のレポートのようなもので、勉強会のたたき台として整理したものです。皆さんの持っているさまざまな知見と食い違う点や納得できない点等が多々あるかと思います。また文章内容・構成等についても、間違いや問題点等があるかもしれません。そうして点について、皆さんで忌憚なく議論して頂きたいと願っています。私もその検討会には参加したいと考えております。その検討会結果に基づいて加筆・修正して、会の総意としての安曇氏族論が出来上がることを願っております。　　（金井　恂）

２　安曇郡と安曇氏族の関わり

２－１　安曇平への弥生文化の伝播

信濃国の弥生時代のはじまり

信濃国は、現在の長野県であり、日本列島の中央部に位置している。かつては科野国と表記され、ついで信濃国と表記されていた。信濃国は海とは無縁の山国であり、南北に長く広がっており、4 つの平野から成っている。

南部地域は南信地区と呼ばれ、天竜川沿岸にある伊那平を中心とする地域である。信濃国へ弥生文化が伝播したのは伊那平がはじまりとされる。それは弥生時代の前期末ころ、紀元前百年頃であり、東海地域からの伝播と考えられている。当時の遺跡から天神平式土器と遠賀川式土器が併存して出土しており、これがその根拠とされている。これらの遺跡の分布状況については「水神平式・遠賀川系土器の分布」(『長野県史　考古資料編』長野県史刊行会　昭 63 年）に詳しい。それによると、当時濃尾平野地域に定着していた弥生人たちはまず伊那平へ進出し、ついで松本平へ進出したものと和田峠を経由して佐久平へ進出したものがあった。次に松本平から保福寺峠を越えて佐久平へ入り、さらに善光寺平へ進出した。そしてそれぞれの地域に定着し、弥生文化を育んだのである。

信濃国の中部地域は中信地区と呼ばれ、松本平を中心とする地域である。弥生文化は伊那平を経由して伝播してきたと考えられ、それは弥生時代前期末ころと考えられている。弥生人集団はこの地域に定着し勢力を伸ばし、有力な首長が誕生していた。そして 4 世紀始めには、大規模な弘法山古墳を築造することのできるほどに発展していた。その古墳は長野県の最古級のもので、全長約 66mの前方後方墳である。この古墳が前方後方墳であることは、当時の松本地域の首長は大和王権に従属するのでなく自立していたと思われる。

北部地域は北信地区と呼ばれ、善光寺平を中心とする地域である。弥生文化は弥生時代前期末頃に伝播した。伝播ルートとして諏訪から佐久地方を経由するルートと松本平を経由するルートが考えられる。ここは千曲川流域に広がる地域であり、稲作に適した地であり、弥生文化が大きく発展した地である。当時の有力な首長たちによって大きな古墳が多数築造された。なかでも森将軍塚古墳は 4 世紀後半頃に築造されたもので、長野県で最大級、全長約 100m の前方後円墳である。三角縁神獣鏡が出土しており、これらのことから信濃国は 4 世紀後半頃には大和王権の支配下に入っていたと考えられている。

なお、北信地域にある柳沢遺跡から多数の銅戈、銅鐸が発掘されている。ここには弥生時代に相当に大きな勢力が育っていたことが推測される。この地域に多数の青銅器が存在することは、全国的青銅器分布として特異点であり、研究者の間でなぜこの地に在るのか、どのようなルートで伝播してきたのかが大きな研究課題となっているとのことである。

またこの地域では、弥生時代後期において箱清水式土器が盛んに作られた。それは赤い土器と呼ばれ、周辺一帯に広がり大きな箱清水土器文化圏を形成し、北陸地方および関東地方との交流も盛んであった。

東部地域は東信地区と呼ばれ、佐久平を中心とする地域である。弥生文化は弥生時代前

期末頃に、伊那平から諏訪を経由して伝播してきた。善光寺平と同様に千曲川流域に広がる地域であり、弥生文化が大きく発展した地である。

安曇平の地勢（信濃古代図参照）

安曇平は中信地区にあり、松本平に隣接してその西側にあり、北アルプスの麓に広がる南北に細長い地域である。扇状地帯であり、縄文時代は原生林に覆われていた地域だったとのことである。そこは安曇平と呼ばれ、安曇郡が位置している。安曇平は松本平の一部のようなものであるが、間には大きな急流が流れており、それによって分断されている。松本平の中央部には奈良井川が南から北へ流れている。それが松本平を過ぎて安曇平へ流入して、北アルプスから流れ出てくる梓川と合流して犀川となる。犀川は安曇平東端を北へ流れ、そして善光寺平へ流れ込んでいる。そこで千曲川と合流し、その後信濃川となって日本海へ流れ込んでいる。

この犀川の西側が安曇平であり、東側が松本平である。そして安曇平の西側は北アルプスとなっている。従って安曇平は東側の犀川と西側の北アルプスに挟まれた地域である。そして南端には前述の北アルプスから流れ出る梓川が流れており、安曇平・松本平に流れ出した後奈良井川と合流し犀川となっている。梓川は安曇平の南限である。

一方北側には北アルプスから流れ出る高瀬川があり、さらにその北方に木崎湖があり、そこから農具川が流れ出し、高瀬川に合流している。この川も犀川に合流している。安曇平は東西方向に約 5〜6ｋｍの幅があり、南北方向に約 50〜60ｋｍの長さのある細長い平地である。そこは北アルプス側から流れ出る川の扇状地と梓川、犀川、高瀬川の氾濫地域から構成された地域である。

安曇平への弥生文化の伝播

安曇平では一万年以上前から縄文人が定住して縄文文化を育んでいた。そして弥生時代中頃、つまり西暦元年頃に稲作文化を中心とした弥生文化が伝播してきた。これは明科地区の緑ヶ丘遺跡、三郷地区の黒沢川右岸遺跡によって分かる。松本平への伝播年代より約百年遅れていた。それは安曇平は原生林に覆われた山麓地帯であったために弥生文化の伝播が遅れたものと思われる。

弥生文化の伝播は弥生人が移住してきて弥生文化を定着させ、広めたことによるものである。そのとき先住民であった縄文人たちは弥生文化を積極的に受け入れ、弥生人と混血融合して安曇平の開拓に取り組んだと考えられている。安曇平の弥生時代遺跡はまだ十分に発掘されておらず数少ないのであるが、黒沢川右岸遺跡は弥生時代中期中葉（西暦元年ころ）のものとされている。ここでは稲作や紡織が行われていたことを示す遺品が発掘されている。そして縄文住居址と弥生住居址が隣接して出土しており、さらに発掘された土器には縄文と弥生の両文化の融合が見られるとのことである。これらの事情については発掘報告書（『黒沢川右岸遺跡』三郷村教育委員会、1988 年）に詳しい。このような縄文人と弥生人の融合現象は、このころの東日本ではあちこちで見られるとのことである。例えば小田原市の中里遺跡はその典型的なものと言われている。（『日本人はるかな旅５そして日

本人がうまれた』、ＮＨＫスペシャル「日本人』プロジェクト編」）

安曇平は縄文時代から弥生時代においては原生林に覆われていたとのことであり、元来は傾斜の強い扇状地と河川敷地帯であり、農業用水に適した自然流がなく、水田稲作には適していなかった。安曇平の中央部を流れる烏川は北アルプスから流れ出る急流で、水量は豊富であるが、しばしば氾濫し、流路は変わっていたらしい。最初に進出してきた弥生人たちは、自然流や湧水のある地域を見つけて、あるいは河川氾濫後の湿地帯を見つけて、そこで水稲農耕生活を始めたと考えられる。当初は貧しい地域だった。その後人々が肥沃な地を探しだし、灌漑水路を開削し農業用水を確保し、水田を開拓することによって豊かな田園地帯となった地域である。水田地帯として開拓されるまでには数百年もの長い期間がかかり、大変な困難と苦労が積み重ねられたと考えられる。安曇平に先住していた縄文人と進出してきた弥生人とそして両者が混血融合して誕生した人々は安曇平の開拓者であり、安曇平に住む人々の祖先だったと言える。彼らを安曇人と呼んでいいと思う。

２－２　安曇郡古代史の問題点

『南安曇郡誌』（南安曇郡教育会、大正 12 年）がある。当時の信濃教育界の総力を挙げて編集したものと思われる。内容も豊富であり、これまで多くの人々に読まれ、そして影響を与えてきた。しかし、古代史に関しては当時の政治・社会情勢の影響を強く受けているように見え、今では納得しがたい部分がある。当時においては史料が無かったこともあり、『日本書紀』等に記載された神話とそれまでの著名な国学者などの見解を丸ごと信じて、皇国史観と軍国主義的な観点に立った古代史となっている。そのために記載している歴史について史実としての根拠は何も示しておらず、またその根拠を探ろうという姿勢もない。これまで多くの人々に大きな影響を与えてきていることを考えると、問題点を少し指摘しておきたい。

郡誌は安曇という地名は古代氏族である安曇連からきていると記している。そして安曇連は綿津見命、穂高見命の末裔であり、綿津見族は最も優勢な国津神であるとし、綿津見家は天皇の外戚であり、海神であったという観点に立っている。さらに穂高見命が上高地に到達し、梓川を漸次下流へ下り、やがて有明村宮城ないし西穂高村牧・塚原等の高原地に定着し、開拓したと記載している。神話の話と歴史の話は区別しなければならいことは論を待たないのであるが、ここではそれらが混淆している。穂高見命という神様が安曇平を開拓したのではないのである。安曇人たちが多くの困難に耐え、苦労を積み重ねて開拓したのである。そのことを正当に評価しなければならない。

また前述の話の関連から、安曇平が当時は湖沼であったと記している。これにより多くの人が、古代には安曇平は湖だったと信じている。古代において大雨の後、河川の洪水氾濫によってあちこちに大きな池が生じたことは理解できるが、定常的に湖であったとする根拠はなにもないのである。

そして安曇の名称を郡名に冠するはひとり我が安曇郡あるのみと記している。安曇の転訛とされる渥美郡および厚見郡は存在したが、安曇郡は確かに信濃国のみである。しかし

歴史書であるなら、郡名が制定された時代がいつか、そのときの地域の状況はどうだったか、ことに安曇氏族はどこに居住し、どれほどの勢力を有していたか等について語るべきである。安曇野市民としては、そこが知りたいのであるが、全く不明なままとなっている。

この歴史観は郷土愛の現れとして、我が安曇郡は神とゆかりのある郡であると言いたかったと思えるが、歴史の話と別の場で語るべきである。

さらに穂高古墳群について、古墳に埋葬された有力者は安曇氏族だと記している。しかしその根拠としては、連塚、犬養塚と呼ばれるものがあり、これらは安曇連、犬養氏の墓だろうと推測し、そしてだから安曇氏族の墓だとしているのみであり、それ以外の根拠はなにも示していない。

こうした傾向は郡誌に限らず、当時の日本の歴史学全般にあったことと思え、伝承と権威に基づいたものと思われる。つまり、歴史を語る根拠として歴史事実に基づくのでなく、古文書や高名な学者の著述という権威に基づく姿勢である。こうした点は是非とも修正すべきと考える。

２－３　安曇平の開拓の時代

水稲農耕を主体とする現代文明が安曇平で始まったのは、前述したように弥生時代中期ころである。その頃弥生人たちが進出してきたのである。その進出は一度に行われたのではなく、小規模の集団としてたびたびに行われ、安曇平の各地にそれぞれ進出したと思われる。そして各地に定着して、開拓していった。

その定着した地域は、安曇郡ができたときの 4 郷の地域だったと考えられる。そこは南の方から高家郷、八原郷、前科郷、村上郷の地域であった。村上郷は現在の大町市地域に位置しており、弥生時代中期頃から弥生人が定住していた。木崎湖から流れ出る農具川流域に広がっている。そして古墳も多く築造されている。借馬遺跡は規模も大きく、平安時代まで継続して多くの人々が定住していたとのことである。前科郷は現在の池田町地域に位置し、高瀬川の東側にある。滝ノ台遺跡は弥生時代後期のものとされ、鉄器も出土している。この地域にはいたるところで弥生時代の遺物が発掘されているとのことである。少し南へ行くと、そこは安曇野市の明科地域である。そこの緑ヶ丘遺跡は弥生時代中期のものであり、水稲栽培の痕跡を示す遺物が出土している。明科地域には弥生時代中期以降の遺跡が多数発掘されている。八原郷は安曇平の中央部に位置し、現在の安曇野市穂高地域である。ここでは弥生時代中期以降の遺跡が幾つも発掘されている。また山手には百基ほどの穂高古墳群があり、それらは 6 世紀後半から 7 世紀中ごろの約百年の間に築造されたものである。古墳の数が多いことは、この地域には弥生人たちが数多く定住し生活していたことを示している。高家郷は八原郷の南側と考えられ、現在の安曇野市豊科・三郷地域および松本市島内地域と考えられている。なお、高家郷の中心は明科地域に在ったとする説があり、今後の解明が期待される。高家郷地域は梓川と犀川の氾濫地域であり、たびたびに洪水被害を受けていたと考えられる。そのために古代の遺跡はわずかである。しかし、山手には前述の黒沢川右岸遺跡があり、弥生時代中期に弥生人が水稲栽培や紡織を行って

いた痕跡が発掘されている。そして、ここでは縄文人と共存していたことを示す痕跡も見つかっている。この遺跡では前述の報告書によると、石戈（せっか）が出土している。石戈とは銅戈や鉄戈を模して石で造った戈であり、集落の祭礼儀式に使われたものと考えられている。その祭礼儀式は黒沢右岸遺跡に進出してくる以前において、集団として行なわれていたものと考えられる。そして有力な首長に率いられた、社会的にかなり成熟した集団だったと思われる。遺跡の発掘調査範囲は限定されていたため、集落の全体規模ははっきりしていないが、調査範囲の外にも広がっていると推測されたとのことである。この地の弥生人集団はかなり大きな規模だったと思われる。この弥生人集団がどのような経歴をもっていたのか興味深いのであるが、それは今では全く不明である。

このように安曇平では弥生時代中ごろからあちこちに分散して弥生人たちが定住し、開拓を行っていたことが分かる。安曇平の開拓の歴史はいまのところはっきりしていないが、今後の考古学的調査研究によって明らかにされることが期待される。

２－４　安曇郡の設立の時代

安曇郡が成立した時代は大和王権が成立する段階における信濃国（科野国）設立と同じころと考えられる。つまり 4 世紀後半から 5 世紀はじめ頃と推測できる（「安曇誕生の系譜をさぐる」（金井恂、市民タイムス連載文参照）。このことは『日本書紀』によると、倭建命が東征した時に信濃（『古事記』では科野とある）を経て美濃へ入ったという記述からも推測できる。倭建命という人物は実在しないが、東征の話は大和王権が東国を支配下に入れた時期の事実に基づいて書かれたものとされている。この話からも前記の説立年代は妥当と考えられる。

これは弥生人たちが弥生時代中ごろに定着し開拓を始めてから４百年ほど経過した時代である。その間、前述したように弥生人たちは先住の縄文人たちと協調・融和して開拓に努めたと考えられる。そして安曇平では 4 か所において郷となるほどの規模で集落が形成された。それが基となって 4 つの郷ができ、安曇郡が設立されたと考えられる。

安曇郡が安曇氏の氏族名である「安曇」をもって建郡されたということは、多くの学者・研究者の一致する見解であり、定説と言える。つまり、安曇という氏族集団は弥生時代の頃から安曇平に定着し勢力を蓄え、安曇郡建郡の時には安曇平で最有力豪族になっていたと考えられるのである。そう考えないと安曇郡命名の事由が立たないのである。これはあまり明確とは言えないが、これを否定する根拠もまたないのである。前述したように衆目の一致するところであり、おそらく歴史事実と考えられる。

そうすると、安曇氏族は弥生時代に進出した弥生人たちの中で、どのようにして発展し勢力を蓄えたのだろうか。安曇郡の古代史の鍵はここにあると言える。

２－５　安曇氏族に関する問題点

安曇氏は実在の古代氏族である。海人族とも呼ばれ、海辺で生活していたと言われている。その海辺に生きる海人族が信州という山国へ移住してきたというのである。しかし現在では、安曇、阿曇を名乗る人は非常に少なく、ことに長野県では皆無と言えるほどであ

る。安曇氏に関しては、これまで多くの学者や研究者あるいは郷土史家たちによってさまざまに語られてきて、大きな虚像が出来上がっている。そこで歴史的事実の中から安曇氏の実像を全体的なものとして探り出すことが大事である。

安曇郡に安曇氏族がいたということは疑いないことと考えるが、一方、安曇郡における安曇氏族の痕跡は非常に少ないことも事実である。はっきりした痕跡としては、安曇郡という地名、穂高神社と川会神社の存在、正倉院御物の安曇郡前科郷戸主安曇部真羊（あづみべまひつじ）と書かれた麻布という３点くらいである（詳細は第 13-7 章に記載）。そのため、安曇郡には安曇部（あづみべ）（安曇氏の従属集団）はいたが安曇氏族はいなかったと言う研究者もいるようである。

安曇氏族とはどのような氏族なのか、そしていつ、どこから、なぜ安曇野へやってきたのかということは、安曇野市民にとって自分たちの祖先のルーツであり非常に興味深い問題である。この問題は深い謎に包まれており難しいのであるが、本論考では先入観にとらわれず、でき限りの史料を集めてそして推論も交えて実像を全体的に再構築しようと考えている。

３　氏族集団の形成と氏姓の発生

３－１　氏族集団の興り

日本人の形成

はじめに日本人がいつ、どのように誕生し形成されたのかということを見てみる。日本人とは日本列島に居住する人々と考えるべきであり、するとこの人々は非常に多様な特性を持った人々の集団である。日本列島の先住民は縄文人と言われる人々であり、彼らはシベリヤ方面から渡来したモンゴリアン人と南方から海を渡って渡来したモンゴリアン人の集団である。この二種のモンゴリアン人たちが混血融合したどうかは不明であるが、推測するに、地域ごとに住み分けており別々に生活していたと思える。すると縄文時代においてすでに二つの民族がいたのである。そして朝鮮半島経由で渡来した人々もいたと推測すると、さらに３番目の民族もいたことになる。それらの人々が縄文人と呼ばれている先住の日本人である。

そして縄文時代の終わり頃から弥生時代にかけて中国大陸から渡来人と呼ばれる人々が北九州地域に渡来してきて、水稲農耕を行い、土器を使用する文化を開花させた。それが弥生文化であり、その後日本列島全域に広がっていった。この時の渡来人は中国江南地方から渡来した人々、朝鮮半島から渡来した人々、南方インドシナ方面から渡来した人々がいたと考えられている。その具体的な状況は分からないが、さまざまな民族・種族・部族が日本列島へ渡来したと考えられる。彼らは北九州地域に分散し定着し、水稲耕作と土器（遠賀川式土器に代表されるもの）に基づく弥生文化を育み、成長発展していった。同時に先住の縄文人たちとも混血融合し、急速に勢力を拡大していった。この人々、つまり渡来人、縄文人および混血人たちは弥生人と呼ばれている。

これらの弥生人たちはその後日本列島を東へ移動して拡散していった。当初は先住の縄文人たちと殺し合いを含む闘争があったが、その後は共存し混血融合して定着し、発展していったとのことである。その動きは日本列島全域に広がった。その結果、新たな日本人が誕生し形成されたのである。

つまり日本人はアジアのさまざまな民族の血が混じりあって形成されたと言える。日本列島の地域によって渡来人と縄文人の勢力比が異なり、それに応じて混血割合も異なるものとなった。そのため日本人は地域ごとに特徴の異なる多様な人々の集合体として形成されたと考えられている。現代の日本において関西地方の人々の生活慣習や特性が東北地方の人々のそれと差異があることは、こうしたことの現れである。日本人は出発点において多様な民族であった。そしてその後も朝鮮半島から新たな渡来人を受け入れ、現在の日本人が形成されてきたのである。

氏族集団の発生

つぎに氏族集団がいつ、どのようにして形成したのかについて考える。この問題はあまり明確に論じられていないが、これまでの研究者や学者たちの論述を読むと、おおよそ次のような事情を読み取ることができる。

北九州地域は紀元前 400～300 年頃に中国大陸および朝鮮半島から渡来した人々が定着し弥生文化を繁栄させた地である。このことは温帯ジャポニカ種の水稲耕作がこの頃に伝来し、福岡市板付遺跡周辺で始まっていることから分かる。稲のＤＮＡ研究から見ると、中国江南地方から渡来した人々が温帯ジャポニカ種の水稲栽培技術を持っていたと考えられている。その渡来に際しては少人数ごとのグループがたびたび船で渡ってきたと推測されている。これらの状況については『ＮＨＫスペシャル　日本人はるかな旅４イネ、知られざる１万年の旅』（日本放送出版協会、2001）および『ＤＮＡが語る稲作文明　起源と展開』（佐藤洋一郎、日本放送出版協会、1996）に分かり易く記述されている。

それによると、彼らは縄文時代の終わり頃、つまり弥生時代のはじめ頃に渡来し、定着した。はじめに中国江南地方の人々が渡来し、その後朝鮮半島からも渡来した。そしてさらにはインドシナ方面からも沖縄方面の島伝いに渡来したと考えられている。

渡来した当時、彼らは刳舟（くりぶね）（大きな丸木を刳りぬいて作られた舟）で海を渡って来たと考えられている。従って大集団で渡来したと考えることは無理であり、数人から十数人の小集団であったと思われるとのことである。この小集団は渡来以前においては、中国江南地方であれ、朝鮮半島であれ、家族・親族としての集団で生活していたと思われる。つまり血縁的同族集団として形成されていたと考えられる。小集団による渡来は一度だけと言うのでなく、たびたびに、しかもばらばらに行われた。つまり渡来人たちは単一の民族ではなく、多様な部族が別々に渡来してきたと考えられる。彼らは北九州を中心とする地域にそれぞれに分散して定着し、急速に勢力を拡大していった。

これらの人々は出身地がバラバラであったから、人種的差異があったと思われる。しかし当時の頭骨について調査研究が行われているが、いまのところそのような報告はない。推測するに、中国江南および朝鮮からの渡来人たちには大きな人種的差異はなく、渡来後には混血融合して類型化していったと思われる。

この弥生人たちは血縁的同族集団として幾つもの小集団として住み分けて活動していたと思われる。当初は家族を核として、次に婚姻関係による擬制的血縁集団として拡大し、さらに非血縁の者をも一族として取り込み、大きな集団へ拡大していった。そして集団間の争いや協調を経ながら、地縁的に拡大成長した。

原ウヂ集団の形成

その後、このような集団は北九州地域から日本列島を東方へ進出していった。そしてそれぞれの地域、例えば吉備や出雲そして大和等の地域において定着し、大きく発展していった。北九州ではやがて末盧国とか伊都国とか奴国等々の国に発展する。日本列島では、邪馬台国の時代、弥生時代後半にはさらに多くの国々が誕生した。吉備、出雲、河内、大和等でも国的規模の集落に発展していた。それは東海地域や関東地域にまで広がっていたと思われる。

つまり弥生時代後半には日本の各地において血縁的同族集団としての氏族集団が多数形成されていたと考えられる。この氏族集団について大林太良氏は「親族構造の概念と王家

の近親婚」(『日本の古代１１ウヂとイエ』大林太良　中央公論　昭 62 年）の中で次のように述べている。「中国人が宗族という名で呼んだ、父系的あるいは準父系的な親族集団が三世紀には生まれていた。私はこれを原ウヂと呼びたい」と記している。ウヂ（氏の名前とカバネを有する氏族）という氏族は大和王権との繋がりのなかから形成されたと言われているが、この原ウヂ集団は大和王権誕生以前にできていたというのである。

こうして形成された多くの豪族つまり原ウヂたちの中から有力なものが現れ、それぞれの地域において支配者となったと考えられる。そうした国的集団は弥生時代中ごろには百以上あったとのことであるが、その後邪馬台国を中心として連合体的に統一されたようである。中国の史書『魏志』（倭人伝）（3 世紀末、著者は陳寿）によると、邪馬台国の時代、239 年頃には倭国には 30 ヶ国があったと記されている。そして卑弥呼の死後、それらの国々は再び分裂して争ったが、やがてそれらの国々の中から強力な国が登場し全国を統一していった。その国の指導者が大王として現れた。それが大和王権の成立段階であり、河内・大和の指導者が九州地域、吉備地域、出雲地域を含めて全国的に統一した。その統一がどのように行われたのか、大王はどのような経緯で誕生したのかということは全く不明である。この大王が大和王権の主であり、後の天皇である。

弥生時代に発生した血縁的同族集団としての原ウヂ集団は、こうした国々の誕生と大和王権の成立の過程において、氏族集団として成長し発展していった。『魏志』（倭人伝）によると、弥生時代後半には社会組織は階層化がかなり進んでおり、また氏族集団も明確に区分されていたようである。卑弥呼の死後、卑弥呼の宗女である台与（原文は壹與）を女王に立てたとある。台与は卑弥呼の娘ではなく、宗族の娘と記述されており、宗族という氏族集団が存在していたことが分かる。この氏族集団が中国漢代の父系同族集団だったかどうかは定かでないが、血縁家族を中心として非血縁家族も含めた同族集団が地縁的に形成されたものと考えられる。

さらに当時の日本（倭国）には大人、下戸という社会階層区分があり、さらに奴隷（生口、奴婢等）もいた。身分の尊卑はそれぞれ叙階があり、下位の者は上位の者に対し臣服していると記されている。そして家族、宗族（一族）という血縁集団が明確になっていた。たとえば、法を犯した場合に、軽い場合は妻子を奴婢として没収し、重い場合はその門戸（家族）および宗族（一族）を根絶する制度だったと記されている。当時の日本は人口が増えて血縁的同族集団が形成されており、社会の階層分化も相当に進んでいたことが分かる。

このように弥生時代後半においては日本全体の各地において、氏族集団は血縁的同族集団として形成されていたと考えられる。これが前述の原ウヂ集団であり、古代氏族たちの原型だった。ただしこの時代にはまだ氏族名はなく、居住地域の呼び名等で識別されていたと思われる。

このような氏族集団の一つとして、安曇氏族の集団も存在していたと考えられる。しかし、その規模や活動地域等の具体的な状況は全く不明である。そしてやがてこの安曇氏族

集団は全国に進出し、各地に定着するのである。そうすると、安曇氏族は相当に大規模な集団であったと思われる。その詳細は次章に記す。

３－２　古代氏族の氏族名のはじまり

弥生時代中期の氏族名

古代氏族の氏族名はいつ、どのように発生したのかということを考えてみる。古代史の中で、氏族名が使われている史実を探してみる。

まず古いものとして、『漢書（地理志）』に楽浪の海を越えたところに倭人がおり、百余国に分かれており、歳時をもつて来たりて献見すという記述がある。紀元前 1～2 世紀ころ（前漢の時代）、日本（倭国）は百余国に分かれていたというのである。つまり弥生時代前期頃には、日本には多数の国的集団ができていたのである。それらの国は多くの血縁的同族集団つまり氏族集団から構成されており、その中の最有力集団の首長が王として国を支配していたと考えられる。すると、国内に多数ある氏族集団を区別する必要があったと考えられるが、どのように区別していたのだろうか、今となっては全く不明である。

その後中国の『後漢書』によると、後漢光武帝のとき、西暦 57 年に倭の奴国が使者を洛陽の都に派遣して朝貢し、「漢委奴国王」金印を下賜された。そのとき奴国の使人は大夫と称していたとある。この大夫については、約二百年後の『魏誌』（倭人伝）に次のように記載されている。漢の時代（１～２世紀頃）に朝見する者がいたとあり、倭の使者は中国に至るとみな自ら大夫と称していたとある。この大夫は国の上流階層の人間という意味と考えられ、使者の名前ではなく、氏族名でもないことになる。つまりそのころの日本（倭国）では氏族名は使われていなかったと考えられる。

さらにその後、「安帝永初元年 倭國王帥升等獻生口百六十人 願請見」という記述がある。これは永初元年（西暦 107 年）に倭国王帥升（すいしょう）が生口（せいこう）百六十人を献じ、請見を願ったという記事である。この記述の倭国王については他の文献記録では倭面土国王などと記されており、疑義があるようである。しかし、『東アジアのなかの日本歴史１倭国と東アジア』（沈仁安　六興出版　1990）によると、それは倭国の王という意味であり、そして「倭国王」が「師升等」であるということでなく、「倭国王」が「師升および他の人々」を使者として遣わしたということであると解説している。つまり、師升は名前であり、等はその他に複数の人がいたとしている。この記述は、倭人の名前が初めて中国の歴史書に記載されたものとされている。この師升は氏族名ではなく使者の名前と考えられる。するとこの時代においても、氏族としての名前はなかったということになる。

先述の奴国の王が漢に朝貢した際、どの氏族のなんという名前の人間を派遣するかということは大事なことである。そのためには氏族名と個人名が必要であり、氏族名と個人名に相当する何らかの呼称があったと考えられる。しかしこの時の使人はみんな大夫と称していたというのである。結局のところ、氏族名は確立していなかったと考えざるを得ない。

邪馬台国の時代の氏族名

そしてさらに約百五十年後の弥生時代後半のこととして、『魏誌』（倭人伝）に西暦 239

年頃の日本（倭国）の様子が記載されている。それによると、倭国の王は女王であり、その名は卑弥呼と言うとある。そして幾つもの国に分かれておりそれぞれに長官と副官がいた。対馬国の長官は卑狗、副官は卑奴母離。一支国の長官は卑狗、副官は卑奴母離。伊都国の長官は爾支、副官は泄謨觚と柄渠觚。奴国の長官は兜馬觚、副官は卑奴母離。不弥国の長官は多模、副官は卑奴母離。投馬国の長官は弥弥、副官は弥弥那利と記載されている。当時倭国では漢字は使われていなかった。ここにでている倭人の名前は、倭国を訪れた漢の使者が倭人の話し言葉を耳で聞いて、それを漢字で表現したものである。つまり当時の倭人語の漢語訳のようなものである。これらは氏族名らしきものではなくて、個人の識別名と考えられる。卑弥呼の場合も氏族名ではない。このことから、当時倭人たちは氏族名を名乗っていなかったと考えられる。

このように見ると、弥生時代の後半において日本（倭国）では、人口は増え、社会の階層分化は相当に進んでおり、そして前述したように台与という宗族の娘はいたのであるが、宗族・氏族の名前はまだ使われていなかった。

倭の五王の時代の氏族名

さらにその後約百五十年後、5 世紀の倭の五王、讃・珍・済・興・武の時代になっても氏族名は使われていない。倭の五王が中国宋へ朝貢した経緯が『宋書』倭国伝に記載されている。421 年の倭王讃の朝貢から 478 年の倭王武の朝貢まで 5 人の倭王が宋へ朝貢している。『宋書』倭国伝は倭讃、倭済、倭王武と表記している。中国側では古くから日本のことを倭国と称しており、倭国王は倭という姓であり、そして倭王家は累代にわたって継続していると考えていたようである。しかし、この倭は大王家の氏族名ではない。

当時は大和王権が確立されつつある段階であり、多くの有力豪族の連合体の中の最有力者が支配権を持つ大王という立場を確立しつつあった時代である。当然のこととして、大王は他の豪族と区別する必要があり、さらに各豪族たちもお互いに識別する必要があったと考えられる。そう考えると、氏族名は漢字表記でなされていなかったとしても、話し言葉としての倭言葉で氏族名が呼ばれていたと考えられる。しかし氏族名は記載されていないのである。なぜなのか疑問の多いところである。

当時は氏族名に対する意識が低く、中国人を相手にする場合に個人を識別する名前は強調しても、氏族名を主張することはなかったように思われる。国内で氏族を識別する場合には、多分、居住地あるいは役割・職業名をもって識別していたのだろうと思われる。

なお、倭王珍は自分の官爵の他に臣下の倭隋ら 13 名にも将軍号を要請したとのことである。その倭隋とは臣下の名前であると言われている。倭という大王家の隋という一員だろうと言うのである。つまり、大王家は倭という姓を持つ氏族だと言うのである。しかし倭隋は臣下であり、倭という国名を姓としているとは考え難い。そして大王の姓が倭であるということは『紀』には記載されておらず、まったく不確かなことであり、納得し難いことである。なお、天皇家の姓名に関しては、聖徳太子の遣隋使の時にも使われていない。

結局のところ、倭の五王の時代 5 世紀代においても氏族名は使われていなかったという

ことになる。

鉄剣銘文にみる氏族名

埼玉県稲荷山古墳から出土した鉄剣に銘文が金文字で刻まれている。この鉄剣は倭王武、雄略天皇の時代に造られたものである。この銘文には乎獲居（おわけ）と言う人が自分の一族の系譜と、剣を造った経緯を記してある。制作日も記載されており、それを西暦年に換算すると 471 年 7 月になるとのことである。銘文には乎獲居の系譜の名前が 8 代にわたって記されているが、名前のみであり氏族名は記されていない。例えば上祖の名は「意富比垝（おほひこ）」と記されている。「意富」が名前で「比垝」は「彦」と同じで敬称とのことである。また 3 代目に「多加利足尼（たかりすくね）」とある。この「多加利」は名前であり、「足尼」は「宿禰」と同じで敬称とのことである。つまり、乎獲居の一族集団は血縁的な繋がりによって結ばれており、氏族集団として継続して存在していたのであるが、氏族名を持っていなかったのである。

さらに熊本県江田船山古墳出土の鉄刀銘文がある。この制作年代は、銘文内容から雄略天皇の時代であることが分かる。銘文には刀の持ち主が无利弖（むりて）であることおよび刀の謂れが記されている。この无利弖は名前であって、氏族名ではない。乎獲居、无利弖はともに雄略天皇の側近であり大和王権の中枢部組織に任命されて活躍していた人物だったのであるが、氏族名を持っていなかったのである。

とはいえ『紀』によると雄略天皇が即位したとき、「平群臣真鳥を以ちて大臣とし、大伴連室屋・物部連目を以ちて大連としたまふ」とある。これから、平群、大伴、物部という氏族名はできていたことが分かる。そして大臣、大連がいたということは、臣、連が他にも多数いたことを示している。つまりこの頃には大和王権の上層部では氏族名ができており、大和王権の政治的組織としての姓（カバネ）もできていたことが分かる。

大和王権の政治組織として氏姓制が確立するのは次節で述べるが、5 世紀後半頃という考えが通説となっている。しかしこのような事情から見ると、その時代以前に氏族の名前ができていた氏族もいたのである。そしてその中には前述の平群臣、大伴連、物部連のように、大和王権の政治組織としての氏姓（ウヂ）をもつ氏族もいた。このように氏姓ができた時代は明確ではなく、しかも画一的ではなかったようである。

３－３　古代の氏姓制度

氏姓のはじまりと漢字表記

氏族集団が氏族名を名乗り始めた時代がいつかということは明確ではない。しかし血縁的同族集団が発展して氏族集団がいくつも形成された弥生時代後半には、他の集団と区別するための何らかの集団呼称を持っていたと考えられる。しかしそれは倭人の話し言葉であり、倭国全体での共通認識ではなかった。その後、漢字が日本に伝わってきて、集団呼称が漢字表記されるようになり、氏族名として共通認識として確立したと考えられる。

日本で漢字文字が使われ始めたのは少なくとも 4 世紀以降であり、当初は朝鮮半島から

の渡来人・帰化人たちが使っていたと思われる。この頃の帰化人は朝鮮の貴族や職業技能者たちが多くなり、先進文化・技術を持っていたと考えられる。例えば倭王武（雄略天皇）が中国へ送った上表文（478 年）は格調高い漢文であり、漢文教養の高い人によって書かれたと推測されている。当時漢字を使う倭人がいたとは考えられないことから、多分百済あるいは高句麗からの帰化人が書いたものと考えられる。その帰化人たちは氏姓を持っていたのである。

当時の日本の豪族たちは、中国の高い文化と強大な国力に強い憧れと敬意を持っていたと思われる。帰化人たちの持つ優れた知識を吸収しようと努めたと思われる。当時の倭国には倭人の話し言葉はあったが文字はなかった。そこで倭人の話し言葉を、漢字を表音文字として使って書き表すようにしていたと思われる。漢字文字は、当初は帰化人たちが使っていたが、急速に大和政権や有力氏族たちに伝播していったと思われる。有力氏族たちは大和政権の中で自己主張を強くし、他の氏族たちと識別するために、文字を習い氏族名を漢字表記して名乗るようになったと考えられる。

ウヂとしての氏姓制度の形成

前述の原ウヂ集団としての血縁的同族組織は、大和王権が確立する頃には氏族の漢字表記の氏族名を持ち、そして大和王権から授与された姓（かばね）を持つものも誕生した。そうした氏族集団を氏（ウヂ、ウジ）と呼んでいる。この氏（ウヂ）には血縁的同族組織という性格の他に大和王権の政治組織としての性格があったことが、多くの研究者たちによって指摘されている。前之薗亮一氏「ウヂとカバネ」（『日本の古代１１ウヂとイエ』前掲書）によると、「古代のウヂは、血縁関係ないしは血縁意識によって結ばれた多くの家族よりなる同族集団で、有力家族の長（これを氏上という）が族長的な地位に立ち、その直系・傍系の血縁者や非血縁者の家族（これを氏人という）がこれに隷属し統率されていた」とし、「ウヂは血縁的同族組織、政治組織という二つの性格をもっている」としている。そして「ウヂは、大伴・物部・佐伯・中臣・忌部・膳氏など、一定の職務を分担・世襲して内廷に奉仕するトモノミヤツコ＝畿内貴族の間にまず成立した。それは五世紀後半のころである。ついでウヂは、殿部（とのもり）の職務を分担した車持・葛野県主氏、水部（もひとり）の職を勤めた大和の宇陀（うだ）県主・高市（たけち）県主氏、蔵人（くらひと）に任じられた秦氏、史人（ふひと）となった漢氏など、トモと呼ばれる内廷に奉仕する畿内の小豪族の間に成立した。それは五世紀末の雄略天皇の時代であった」という。さらに雄略朝には新しい技術を持った渡来人がきて、かれらは技能別に鍛冶部・馬飼部・錦部等々の集団に編成され、ついで鍛冶造・馬飼首・錦部村主・鞍作村主等を長としてウヂを形成した。そしてさらにウヂの形成は地方の豪族や部民にまで及んでいったという。このようにして、大和王権が確立される過程で豪族たちに氏族名とカバネが授与され、氏姓制度として確立していったというのである。

ここでの政治組織としては大和王権の軍事組織や官吏組織があり、また王権を支えるさまざまな職業組織もある。この説では、ウヂという氏族集団の名称は大和王権によって認定或いは授与されたということである。政治組織としてのウヂとしては、その通りと言え

る。大和政権が確立した以降においては、天皇が氏族の名前と姓（カバネ）を与えていたようである。そのことによって、それぞれの氏族集団は大和政権の中で地位を確保していたと言える。

ウヂには政治的、職業的なものとは異なり、地名に由来するものがある。例えば葛城氏、平群氏、巨勢氏、和邇氏、波多氏、出雲氏、尾張氏、吉備氏、毛野氏等の古代氏族である。前之薗氏は「葛城臣、平群臣、許勢臣、蘇我臣等など、特定の世襲の職務を持たず、本拠地の地名をウヂの名とする諸氏はウヂの成立がおくれ、五世紀に后妃を輩出した葛城氏のような大族でも、ウヂの組織とウヂの名が成立したのは五世紀末であった」という。

３－４　実質的なウヂの誕生の時代

しかしこのウヂの成立は五世紀後半から五世紀末というのは遅すぎると考える。葛城氏を筆頭にして大和の豪族たちは、4 世紀から 5 世紀にかけて大和王権成立のために戦ってきたのである。当時は多くの氏族集団が連合し、その指導者として大王が存在した。その連合体は徐々に拡大し、やがて日本全体を支配するまでに発展した。それが大和王権である。すると、大和王権の成立過程において軍事組織は必須であり、指揮命令系統と軍団組織があったはずである。そして武器の製造集団、食料の生産集団も組織されていたはずである。そして軍事・生産機能を統治する政治組織もあったはずである。それらは氏姓制度として制度化されていなかったと思われるが、実態としては存在していたと考えられる。そうでなければ大和王権として日本全体を支配することはできなかっただろう。

邪馬台国から倭五王にかけての 4 世紀の日本の状況については歴史史料がなく、どんな状況だったか不明の時代である。そのため、空白の 4 世紀と言われている。４世紀は大和王権が誕生する時代であり、大和の豪族連合が日本を統一し、支配下に治めていった時代である。日本武尊が熊襲や東国を征服していった時代である。日本武尊は架空の存在であるとのことであるが、大和の豪族連合によってそのような日本統一が行われたと考えられる。その統一は戦闘による武力征服であり、多くの豪族たちの分担によって遂行されたと考えられる。大和の大王一人によるものではない。そのような状況の中では、豪族たちはお互いに識別し、作戦行動を分担し、兵站任務を分担していたと考えられる。すると豪族たちの呼び名と政治的・軍事的・職業的な任務分担があったと考えられる。その大和の豪族連合の中に安曇氏族もいたと考えられる。

葛城氏の場合、大和王権が日本全体を統一していく 4～5 世紀において、葛城氏という氏族集団は存在し、機能していたのである。当時の大和王権にとって葛城氏の存在は不可欠のものであり、大王に次ぐ立場と権力を持っていたのである。つまり実質的にウヂとして存在していたと考えられる。そして雄略天皇と争い敗れ、衰退したのが 5 世紀末である。また大和地域に発生した他の氏族たちも 5 世紀代には実質的なウヂ、つまり大和王権に組み込まれた氏族集団として成立していたと考えられる。つまり、ウヂという氏姓制に先行する実質的なウヂがあったのである。

加藤謙吉氏は『大和の豪族と渡来人、葛城・蘇我氏と大伴・物部氏』（吉川弘文館、2002）

のなかで次のように指摘している。「葛城襲津彦の「葛城」とはウジではなく地名を表したものとみるべきである。ただ葛城地方の土豪たちは、外部勢力と政治的に対峙する必要上、共通の利害関係で結ばれており、結束を維持するために互いに擬制的な同族関係を形成していた可能性が大きい。襲津彦はこのような同族的結合の要となる象徴的存在として位置づけられた人物なのであろう」とし、さらに「「書紀」の襲津彦像は、特定の人物の歴史的実像を伝えているのではなく、四世紀から五世紀初頭の倭の対朝鮮外交や軍事行動に関与した葛城地方の土豪たちの活動を襲津彦という一人の人物に収斂し、伝承化したものであったと思われる」としている。つまり、葛城氏族集団は大和王権の政治・軍事組織に組み込まれて機能していたというのである。それはウジと全く同じ機能を持った氏族だったと考えられる。やはりウヂという氏姓制が確立する以前の 4 世紀頃において、大和王権組織に組み込まれた軍事的、職業的機能を持った実質的な氏姓があったと考えられる。

前掲の前之園氏は大王の食膳に奉仕する職業も重要なものであり、安曇氏は食膳に関わる職務を世襲して王権に仕えていた。それゆえにウヂとして成立したとしている。安曇宿禰が高橋朝臣（古くには膳臣）と争ったときの経緯（第 9 章参照）を見ると、安曇宿禰は食膳奉仕を応神天皇のときから行っていたと推測できる。すると安曇というウヂは応神天皇のとき、4 世紀末に政治組織として成立したと言うことになる。これについては次章で詳しく述べる。

また、熊谷公男氏は『日本の歴史 03 大王から天皇へ』の中で、ウジとは大和王権と中央の有力豪族との間の政治関係の中から成立したとし、当初は倭王権との同盟関係にあったものが、倭王権が確立し、大王と豪族との従属関係に変わっていった。その際従属関係の現れとして、豪族たちは大王に奉仕する義務を負った。豪族は部＝カキを従属集団として所有しており、その部を王権の舎人、靫負、膳夫等として提供し奉仕した。その部＝カキによる奉仕がウジの重要な特徴であるという。なお部、カキについては第 6-7 章で述べる。そしてウジ及びカバネが成立したのは 6 世紀前半としている。

しかしこのウジ及びカバネの成立時代は遅すぎると考えられる。これまで見てきたことから、ウジとカバネが成立したのはある時期に一斉に誕生したのではなく、4 世紀から 5 世紀にかけての時代に成立し広がっていったと考えるのが妥当と思える。そして実体としての氏族名の成立時代は制度としてのウジ・カバネの成立時代よりもずっと早い時代であったと言える。おそらく大和王権の誕生のころ、4 世紀頃から始まったと思える。それは次に見る允恭天皇の時、5 世紀中ごろにすでに氏姓に関する混乱があったことが『紀』に記載されていることからも推測できる。

３－５　氏姓の混乱

『紀』によると允恭天皇 4 年（442 年、ただし履中天皇在位年より推算したもので、定かではない）の条に天皇の勅として次のような主旨の記述がある。「上古の時代には姓名（かばね）に混乱はなかった。しかし今は自分の姓を失った者や故意に高い氏（うじ）を唱える者が多数いる。そのことによって上下の者が争い、人民は安らかでない。そこで天皇はこの乱れを正そうと

考えた。貴族や官吏たち、そして諸国の国造たちはみな、帝の後裔とか天降ったとか言っている。天地人が現れてから長い年月が経過して、一つの氏が繁栄して万姓（よろずのかばね）となっている。その実（まこと）を知ることは困難である。そこで諸々の氏姓（うじかばね）の人等は沐浴斎戒して盟神探湯（くがたち）せよ」と命じたという内容である。盟神探湯とは神に祈誓した上で、熱湯に手を入れ、無事であれば正、爛れれば邪とするという神判である。これを実施した結果については記載されていないが、故意に偽る者は恐れて退いてしまったとある。その後氏姓は自然と定まり、偽る者は無かった、というのである。この話は『古事記』（712 年、以下『記』と称す）にも記載されており、信憑性あると考えられる。

これによると允恭天皇の 5 世紀中ごろには、「自分の姓を失った者」や「故意に高い氏を唱える者」が多数いたことが分かる。また貴族・官吏・国造たちはみな、自分たちの系譜として「帝の後裔」とか「天降りの末裔」と称しているというのである。しかし姓（カバネ）は天皇から授与されるものであり、それが分からないと言うことはないはずである。するとこの時の混乱は、氏族名の乱れと氏族の系譜のことと考えられる。大和政権が確立しつつある段階では、中央・地方の貴族豪族たちはみな自分たちの系譜を天皇あるいは神と関連させて、権威づけしようとしていたと思われる。それも自分勝手に行っていたと考えられる。こうした事情から推測すると、大和王権が把握していない範囲において、多くの氏族名ができており、それもかなり古い時代、漢字文字の伝来に伴って始まったように考えられる。

３－６　平安時代初期の氏姓

なお『紀』では、この後では氏姓の乱れはなくなったとしているが、必ずしもそうではない。『日本後紀』（森田　悌訳、株式会社講談社、2006）によると、桓武天皇 18 年（799 年）に、「天下の臣民が所属する氏族は多数にのぼり、中略　、戸籍・計帳では、本宗と枝族とを区別できない。そこで天下に布告して本系帳（氏族の始祖名や事績・賜姓・本枝の別などについて記した帳簿）を進上せよ。」という勅が出された。そしてこれを基にしたと思われる『新撰姓氏録』（以下『録』と記す）が弘仁 5 年（815 年）に編纂された。『録』の内容として、本稿ではネットに掲載された北川和秀氏の解説版をもとにしている。『録』には 1182 氏が採録されているが、その中で 117 氏が未定雑姓として分類されている。この未定雑姓は出自や系譜があいまいで確認できない氏族のことらしい。つまり、この時代においてもまだ出自不明のあいまいな氏族が多数いたのである。その後、弘仁 10 年には「『新撰姓氏録』の誤りを判定したい」という奏上があり、許可されている。そうして見ると、氏姓については相当に混乱があり、その混乱は後世にまで続いていたようである。

４　安曇氏族と安曇姓の発生

４－１　安曇氏族の興り

安曇氏族

安曇という氏族集団は前章で述べたように、弥生時代に渡来した人々の中で発生し拡大した部族集団の中の一つである。それは当初においては家族を核とした血縁集団であり、それが拡大成長して非血縁者も含めた同族集団となったものと考えられる。つまり安曇氏は弥生人社会のなかに生まれた多くの古代氏族の中の一つだった。そして『日本書紀』(720年完成、以下『紀』と記す）および『古事記』(712 年完成、以下『記』と記す）等の歴史書にしばしば登場する氏族であり、古代においては大和政権の中枢部で活躍していた実在の古代氏族である。以下では安曇氏族と称することにする。

安曇氏の墓誌

安曇氏族は７世紀において大和朝廷から、古代から続いている有力氏族と認知されていた。『紀』の持統天皇５年条（691 年）に、18 の氏に対してそれぞれの祖等（おやども）の墓誌を上進させたという記述がある。これは『紀』を編纂するに当たり、大和朝廷が有していた史料では不足と考えて、古代から続いている有力氏族に伝わる氏族の伝承を集めたものと考えられている。その氏族とは大美輪（おほみわ）、雀部（ささきべ）、石上（いそのかみ）、藤原（ふぢはら）、石川（いしかは）、巨勢（こせ）、膳部（かしはで）、春日（かすが）、上毛野（かみつけの）、大伴（おほとも）、紀伊（き）、平群（へぐり）、羽田（はた）、阿倍（あへ）、佐伯（さへき）、采女（うねめ）、穂積（ほづみ）、阿曇（あづみ）である。これから阿曇（安曇）氏が大和政権と関連する古代からの有力氏族であったことが分かる。

この安曇氏の墓誌が現在残っていたら安曇氏の経歴は明解になると思われるが、現在はまったく行方不明であり、残念なことである。とはいえ、この時代は安曇氏の誕生から少なくとも 7～8 百年経過していたのである。それは文字のない時代であり、氏族の歴史事実を正しく保持し伝えてきたのかという疑問がある。墓誌は氏族の表看板であり、いろいろな誇張や飾りがあり、また伏せられたこともあったと思われる。

『紀』の安曇氏族に関する記載内容は安曇氏の墓誌をもとにしたものが多いと考えられ、それゆえ信憑性高いと思われる。しかし一方で、墓誌には先に指摘した疑問点も内在していると思われるため、『紀』に記載された安曇氏族の経歴がすべて歴史事実であるとは言えない。そういう事情を考慮して読む必要がある。つまり、すべてを鵜呑みにしてはいけないと言うことである。そして『紀』には、安曇氏の氏族としての誕生・繁栄・衰亡等の歴史について断片的な情報が記述されているにすぎず、全体像を描くことは困難である。安曇氏族の歴史と実像を明らかにするためには『紀』以外に様々な史料を研究しなければならない。本論考ではそのような観点から、安曇氏族の実像を全体的に探っていくことにする。

阿曇と安曇

氏族名としての安曇連という表記は古くは阿曇連と表記されていた。それが 713 年の好字令に関連して、そのころ以降は安曇連と表記されている。それゆえ阿曇連と安曇連は全く同一氏族と考えてよい。しかし、平安時代に書かれた『新撰姓氏録』（平安時代初期の815 年に、嵯峨天皇の命により編纂された氏族の記録、以下『録』と記す）では安曇宿禰、阿曇犬養連のように阿曇と安曇の両方の表記がある。当時においてどのように区別していたのかは不明である。また福岡市志賀海神社の宮司は阿曇と名乗っており、大川市の風浪宮の宮司も阿曇を名乗っている。両神社はともに綿津見命を祭祀する神社であり、安曇氏族の末裔であることは疑う余地はないといえる。また現在においても、阿曇と名乗る人、安曇と名乗る人がそれぞれ存在している。このように若干の混同があるが、両社は同根と考えられる。本稿では特に強調する場合には阿曇と表記し、それ以外は安曇と表記している。

「安曇族」と言う表現

安曇誕生の系譜を探る会の古川幸男氏の調査報告がある（「論文・文献における「安曇族」の初見」平 27.2.22）。それによると、大正 12 年出版の『南安曇郡誌』は、綿津見族、安曇氏、綿津見家、綿津見氏というようにさまざまな表記をしているが、綿津見族とする根拠については何も触れていない。郡誌は、出雲族や大山祇族と同様に国津神と記載しており、古代に日本に定着していた氏族の一つという程度の認識だったと考えられる。その後宮地直一氏が『諏訪史』（第２巻上、昭和５年）の中で安曇族と言う表現を使っている。しかしなぜ安曇族と表現するのかということは何も語っていないとのことである。これらは国学者・民俗学者に大きな影響を与えたようで、その後はポピュラーに使われだしているらしい。そして『穂高神社史』（宮地直一、昭和 24 年）や大場磐雄氏論文「信濃国安曇族の考古学的一考察」（『信濃』昭和 24 年 5 月号）では、安曇族という表現が定着したようであるとのことである。

いまはほとんどの学者・研究者たちが「安曇族（阿曇族）」と表現している。しかし、この安曇「族」とは何かということについては全く触れていない。弥生時代のはじめに大陸から北九州地域へ渡来した人々であることは想定していたと思われるが、弥生人と異なる民族だったのかどうか、つまり日本人と異なる民族だったのかどうかと言うことについてはなにも語っていない。

先に述べたように、安曇という氏族集団は弥生時代に渡来した人々の中にいて、その弥生人社会のなかから形成された古代氏族だったのである。その安曇という氏族を安曇氏族と呼ぶか、或いは安曇族と呼ぶかはどちらでも良いことである。しかし「安曇族」が独り歩きするといつのまにか、あたかも弥生人たちと異なる民族だったかのような錯覚を生じさせることになる。そして非常に大きな錯誤を生じさせてしまう。

例えば次のような説もある。原日本人の中には常世系民族が含まれていたというものである（『古代日本の軍事航海史』、松枝正根、かや書房 1993）。インド地方にいた崑崙系民族

は存立競争の結果、アジア大陸の南方から北上し、さらに漢民族から朝鮮半島に追われ、そして徐々に日本列島へ渡ってきた。彼らは常世族と呼ばれており、その主体はメウ族である。メウ族は南方系種族であり、海洋性を有しており、航海術と造船術に優れていたと言うのである。そして綿津見神を祖神として仰ぐ筑豊地方の常世族は代々天皇家の協力者であったが、神武天皇が大和朝廷を建ててからは疎遠となり、中国・朝鮮との交易を深めていったという説である。これらの説は神話の中から想起した話と思え、なにを根拠としているのか全く不明であり、歴史事実としては論評しがたい。さらにこれ以外にも安曇族が日本人とは別の民族であり、呉国から渡来したとする説もある。これについては次節で詳しく述べる。

北九州に渡来した人々、後に安曇氏族となる人々、が渡来する以前に中国大陸ないし朝鮮半島において「安曇族」という部族として形成されていて、そして一族として大挙して渡来したとすることは、到底考えられない。そのような根拠はなにもないからである。こうした観点から見ると、ことさらに安曇族という概念を持ち出して日本人の中で区別することは、異説を助長するだけであり全く不適当である。

また「海人族」という概念についても同様である。古代に海人(あま)と言われる人々はいたけれど、彼らは多様な日本人の一部であり、海人という民族・種族などではない。なお海人族については第 8 章で詳しく見ることにする。

これまで学者・研究者たちは、多分、安曇という一族という程度に漠然と考えていたのだろうと推測する。安曇氏には第 6 章で述べるように５つの氏族がいることが分かっているので、本論考においては、安曇氏一族という概念として「安曇氏族」と表現することにする。

族という姓

なお、古代には「族(ぞく)」という姓(かばね)を有する人々がいたとのことである。例えば「物部連族」という氏姓をもち「子嶋」という名の人物がいた。また「国造族」という氏姓の「坂麻呂」という名の人物がいた。それらの人々は物部連とか国造という氏姓の親族・同族関係者と考えられるが、一段低い階層の人々であったとのことでる。ここで考察している安曇族の「族」はこれらの姓としての「族」とは無関係である。なお、「族姓」については第 6-7 章で詳しく記載する。

４－２「安曇族」呉国渡来説

呉国からの集団渡来

安曇族に関連して、安曇族は呉国から集団で渡来してきたという説がある。それは中国江南にあった呉国が紀元前 473 年に越国に滅ぼされたとき、呉国の人々の一部が集団で逃れ、福岡市志賀島付近へ渡って来たというのである。そして越国への復讐心を忘れずに、仇敵の情報と軍資金・兵力確保のために、漁撈・操船・航海術を使い、中国大陸との間を往来して交易を行っていたというのである。

[ここに入力]

この説は根拠に乏しくまた疑問点も多い。当時の舟は刳りぬき船であり、さらに航海技術も未熟であり、外洋航海を安定的に行うことは困難だったと考えざるを得ない。中国江南地域との直接航路はずっと後世の遣唐使船の時代に大型船が造られてからようやく採用されたものであり、それでもしばしば難破し渡航できないことが多かった。このような事情を考えると、当時における外洋航海が困難だったことは容易に推測できる。6～8 世紀頃においても、日本の造船技術は中国・朝鮮のそれに比して相当に低く、壱岐・対馬との航海においてさえもしばしば難破していたようである（詳細は第 8 章参照）。

中国・朝鮮との航海

すでに縄文時代において縄文人たちは朝鮮半島との間を行き来していたことが分かっている。そして弥生時代において北九州地域の首長たちは中国および朝鮮との交流を行っていた。弥生時代のルートは、まず対馬を経由して朝鮮半島沿岸を通り帯方郡あるいは楽浪郡に至り、その後海路で山東半島へ渡り、そこで上陸し陸路で長安ないし洛陽へ行くルートだったと推測されている。それ以前の弥生時代前期においても中国前漢との間での交流があった。その時の航路もやはり対馬経由であったと考えられる。それは対馬には弥生時代前期の遺跡があり、さらに前期末から中期になるとその数は増加していることから分かる。それらの遺跡から朝鮮半島で造られたとみられる磨製石剣や無文土器も出土しているとのことであり、朝鮮半島との交流があったことが分かる（永留久恵「対馬の考古学」『海と列島文化３玄界灘の島々』小学館　1990）。つまり弥生時代初期の弥生人たちは朝鮮半島を経由して中国との交流を行っていたのであり、対馬海流を乗り越えて東シナ海を自由に航海し、直接的に中国江南地方と行き来していたのではない。

当時北九州地域には多くの渡来人・弥生人集団が居住していたのであり、その中で安曇氏族だけが飛びぬけて優れた外洋航海技術を持っていたという根拠はなにもないのである。安曇族が東シナ海を自由に航海し直接的に中国江南地方と行き来していたというようなことは到底考えられないことである。それは次の事情からも分かる。

応神天皇使者の中国訪問ルート

『日本書紀』（坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋　校注　岩波文庫）の応神天皇 37 年条に「阿知使主（あちのおみ）・都加使主（つかのおみ）を呉（くれ）に遣して、縫工女（きぬぬひめ）を求めしむ。ここに阿知使主等、高麗国（こまのくに）に渡りて、呉に達（いた）らむと欲（おも）ふ。則（すなは）ち高麗に至れども、更に道路（みち）を知らず。道を知る者を高麗に乞ふ。高麗の王、乃（すなは）ち久礼波（くれは）・久礼志（くれし）、二人を副（そ）へて、導者（しるべ）とす。是に由りて、呉に通（いた）ることを得たり。呉の王、是（ここ）に、工女（ぬひめ）兄媛（えひめ）、弟媛（おとひめ）、呉織（くれはとり）、穴織（あなはとり）、四（よたり）の婦女（おみな）を与（あた）ふ。」とある。これは応神天皇の時代に呉国（このころ中国江南では東晋が治めており、都は建業、現在の南京市付近にあった）へ使節を送るに際して、道順を知らなかったので高麗国に道案内を頼んだという記述である。これは単に道順を知らなかったというのではなく、呉王への仲立ちを依頼したのだと理解することもできるが、しかし、あえて『紀』の編者が「道路を知らず」と書くのだから、やはり道順を知らなかったということである。

『紀』によると、「阿知使主、都加使主」は応神天皇 20 年に帰化してきたとのことであ

り、呉国の位置について知っているはずと思うのであるが、加藤謙吉氏は『大和の豪族と渡来人、葛城・蘇我氏と大伴・物部氏』（吉川弘文館、2002）のなかで次のような指摘をしている。「阿知使主、都加使主」は東漢（やまとのあや）氏の祖とされている渡来人であり、二人は親子である。そしてこの二人の帰化の話は後世における造作にすぎないと指摘し、彼らが渡来人であることは確かであるが、その故地は漢や高句麗等ではなく、安羅ではないかとしている。安羅とは朝鮮半島南部にあった国であり、中国、呉国の事情に疎いとしても、当然のことと言える。

するとこのころ中国江南と自由に行き来していた倭人・海人たちはいなかったということになる。応神天皇の時には後述するように、大浜宿禰という安曇連の祖が海人の宰（みことも）（後述）という立場で、大和政権に参画していたのである。もし安曇氏族が中国江南と行き来していたのであれば、彼らが案内していたはずと考えるのが道理である。結局安曇氏族は中国江南との行き来などしていなかったと言うことになる。そうすると、安曇氏族は中国大陸との間を往来して交易を行っていたという説は大いに疑問といえる。

志賀島渡来の安曇族の文化レベル

さらに、安曇族が日本へ渡来したとする当時の呉国（紀元前 585～473 年）は楚国と争い、次いで越国と争っていた。伍 子胥という人物が活躍していた時代であり、また臥薪嘗胆という諺ができた時代でもあった。安曇族は呉国で活躍していたとすれば、中国文化のなかで文化的生活をしていたはずである。すると渡来地である志賀島に、その中国文化の痕跡が残されているはずである。しかしそれらしきものはなにもない。紀元前には志賀島周辺地域において、文字は使われていなかったし、「安曇」という姓も使われていなかったことは確かである。

当時の呉国と倭国北九州・志賀島地域との間には文化レベルにおいて大きな格差があった。北九州の福岡周辺地域には紀元前の弥生時代の遺跡が多数ある。その出土品から、当時の福岡周辺地域には多数の首長が誕生していたことが分かる。そこの甕棺墓から多くの副葬品が発掘されている。その中に前漢（前 206 年～後 8 年）時代の鏡が多数あり、当時この地域の有力者たちが中国大陸へ渡り前漢と朝貢交流していたことが分かる。そして甕棺墓の副葬品の中に寒杆（そっかん）（立岩遺跡）、金銅四葉座金具（三雲遺跡）、ガラス製璧（へき）（同）がある。これらの品物は漢では死者を埋葬する際に使用するものであり、漢王室から下賜されたものと考えられている。しかし当時の人々は、これらの品物を宝物の装身具として扱っていたらしいとのことである。そこにははるかに大きな文化レベルの格差があったと言える。これらの事情については『日本の歴史２倭人争乱』（田中琢、集英社、2007）に詳しく記述されている。

結局、弥生人たちの文化レベルは中国前漢のそれに比してはるかに低いものだったのである。これらのことは呉国からの集団渡来説が不合理であることを示している。

４－３　呉国「倭族」渡来説

倭人は呉国太伯の末裔か

前述の呉国渡来説は次のような「倭族」論に基づいているようである。近年の研究によると、中国の揚子江中・下流域に古代から「倭人」と称する民族が定着して繁栄し、王国を築いていたとのことである。その末裔に春秋時代の呉国がある。この呉が越に紀元前 473 年に滅ぼされた。この時多くの亡命者が発生し、北方へ逃げた。その際船で逃れ、朝鮮中・南部に上陸し、そこで辰(しん)国を樹立した。この亡命者の一部が対馬・壱岐を経由して北九州地域へ稲作を伴って渡来した。それゆえ『晋書』倭人伝に日本の倭人は「自ら太伯の後という」とあり、呉国の始祖である太伯の後裔であることを自負していたというのである。この辺の事情は鳥越憲三郎氏の『古代中国と倭族』（中公新書、2000）に詳しい。

この説は歴史の流れとして合理的と思えるが、しかし弥生時代の文化レベルと中国呉国の文化レベルとの断絶格差が大きいことを考えると、呉国人が北九州地域へ渡来したということには賛同しかねる。

非漢族始祖漢人出自伝説

伊藤清司氏は「呉越文化の流れ」（『日本の古代３海を越えての交流』大林太良、中公文庫、1995）の中で次のように指摘している。「黄帝の子孫だとか夏王朝の末裔だとする非漢民族の始祖伝説のほとんどは、高い文化をもつ中原の漢民族と自らを関係づけようとする意図からうまれた伝説であった。蒙古高原の匈奴にも、先祖が夏后氏の子孫の淳維だという伝承があった。この種の伝説を私は「非漢族始祖漢人出自伝説」と名付けている。越の祖先が夏后帝少康の末裔だとか、呉は周太伯の建てた国であるという古伝説は、歴史事実というよりは、この非漢民族特有の始祖伝説のたぐいであったと思われる」とし、さらに「倭人が呉の太伯の末裔だという伝説もたしかな根拠のある伝承ではあるまい」としている。

４－４　安曇姓のはじまり

安曇という氏族名を名乗り始めたのはいつの時代かと言うことは、やはり興味深い問題である。前章で見たように、漢字文字の伝来に伴って氏族の名前が漢字表記として確立した。そしてそれに伴い大和王権の政治組織としてウヂ・カバネという氏姓ができた。安曇氏族の場合も同様である。氏族集団としては弥生時代において形成され、大和王権の成立に伴って安曇連という氏姓ができたと考えられる。

安曇の語源

安曇の語源についてはさまざまな説があるが、それらはすべて言語の解釈から推測した説であり信頼に値しない。太田亮氏も『姓氏家系大辞典』（太田亮、角川書店、1934 年）で次のように説を述べているが、根拠のないものである。「アヅミはアマツミ（海積）の約にて、海部の長なるよりの稱なるが如し。即ち、積（ツミ）は、山積、出雲積、鰐積等の積と同様、原始的カバネの一にして、君、ヌシ、長、タマ等の語に比すべきものとす。」と記

している。この説明は、安曇は海積の約だとしているが、なぜ元の海積ではいけなかったのか、また安がなぜ海に変化したのかということが不明である。やはり納得しがたい説明である。

そしてこのアマツミは安曇氏族の職業や政治的機能とは無関係であり、さらに地名とも関連性はなさそうである。そもそも安曇という言葉から連想する事象はなさそうである。結局のところ、安曇の語源は不明と言わざるを得ない。

なお前述の太田亮氏の説明では、安曇の発生は海部の長となったことに起因しているとも指摘している。とすると、海部の長になる以前は、安曇とは名乗っていなかったということを示唆している。興味深い指摘であり、今後の研究課題と思う。

大浜宿禰

安曇が最初に知られるのは、『紀』の応神天皇 3 年条の「処処の海人、訕彧(さばめ)きて命に従わず。則ち阿曇連の祖大浜宿禰を遣わして、其の訕彧を平ぐ。因りて海人(あま)の宰(みことものち)とす」という記述である。これは、処処の海人（淡路島の海人、詳細は第 13-3 章）が反乱を起こしたので、大浜宿禰に鎮圧させた。そしてその功により海人の統率者に任じたというものである。この記述は『記』にはない。そうすると、多分安曇氏族の墓誌に基づいて記述されたものと推測される。

大浜宿禰の大浜は氏族名ではなく名前であり、宿禰は敬称だったと考えられている。そして大浜宿禰が阿曇連の祖であると記されている。つまりこの時代には氏族の名前はなく、「阿曇」氏とは名乗っていなかったのである。この『紀』の記述は安曇氏の墓誌に基づいたものと考えられ、安曇連稲敷が『紀』の編纂に参加していたと思われることから、安曇氏の見解であったと考えられる。その点からこれは史実と考えてよい。

応神天皇 3 年は機械的に換算すると西暦 272 年となるが、しかしこれには大きな誤差があり修正する必要がある。『紀』では応神天皇 3 年条に百済の辰斯王が即位したことが記述されている。これは朝鮮の三国史記によると 385 年のことである。当時の年代記述としては朝鮮百済国の方が日本より信憑性が高いと言える。すると三国史記の年代に基づいて、応神 3 年は 385 年と考えるのが妥当ということになる。このように考えると大浜宿禰が海人の宰に任命されたのは 385 年であり、この時には安曇とは名乗っていなかったことになる。

この時代に多くの氏族が自分たちの姓を持っていなかったのであるが、氏族集団は出来上がっていたのであり、他氏族と識別する必要があったはずであるから、何らかの「氏族の呼び名」があったと考えられる。しかし、それが何かは、全く不明である。

前述の『紀』では、「大浜宿禰を遣わして」と記述されている。これから、この時大浜宿禰はすでに大和王権に組み込まれていたと理解できる。つまり、大和王権が誕生し勢力を拡大していく段階において、安曇氏族は大和王権側に参加していたと言うことである。

前之園亮一氏は「ウヂとカバネ」（前掲）の中で、「トモノミヤツコとは、朝廷の職務を分担・世襲して大王につかえる官人であり、膳・安曇氏が大王の御膳に奉仕し、大伴・物

部氏が軍事をもって朝廷につかえるというように、それぞれの職業を世襲して朝廷に奉仕する諸氏の事である」と記述している。これによると、安曇氏は食膳に奉仕する職業をもって王権に仕えていたことになる。その時代について、前之薗氏は言及していないが、応神天皇以前の時代から行われていたと受け取れる。しかし、前述したように応神天皇以前の時代については不明と言わざるを得ない。つまり大和王権の組織の中で、安曇氏族がどのような軍事・職業機能を担っていたかということはまったく不明である。その段階では、まだ軍事・職業機能は明確に分化していなかったかもしれない。そしてその頃、自分たちを何と名乗っていたのかということも全く不明である。

前述の『紀』の記述では海人の宰に任じられたと記されている。これは明らかに、大和王権の政治組織に組み込まれたことを示している。それ以前には、そうしたことはなかったと思われるから、この時が画期となったと考えられる。そして安曇連という氏姓が誕生した時と考えられる。

このことは安曇宿禰が高橋朝臣（古くには膳臣）と食膳奉仕の職務で争ったときの経緯（第 9 章参照）からも理解できる。それによると安曇氏族（安曇宿禰）は自ら応神天皇のときから食膳奉仕を行っていたと主張していたようである。安曇氏族の食膳奉仕とは海産物の提供と考えられるが、海人の統括者に任命されたのは、応神天皇ときである。さらに海人部が創設されたのはその 2 年後である。すると、このころより食膳奉仕が始まったと考えることが妥当と考えられる。

氏姓制度は 5 世紀後半から 6 世紀にかけての頃に確立したとされていることを考えると、安曇連という氏姓の誕生は 4 世紀末であり、他の氏族に比してかなり早い段階だったようである。これは安曇氏族が古代における有力な氏族集団であり、大和王権と深い関係を持っていたことを推測させる。さらにその以前において、大王の食膳奉仕をしていたのかどうかは不明であるが、何らかの機能・役割を持って大和王権の組織に組み込まれていたことも確かなことと推測できる。

阿曇連浜子

応神天皇の次は仁徳天皇である。『紀』によると仁徳天皇が崩御し履中天皇が即位しようとするときに、住吉仲皇子による皇太子（即位前の履中天皇）暗殺のクーデターが起こる。この時、阿曇連浜子は誘われてクーデターに加担したとある。その詳細は第 7-5、11-3 章に記載する。なお、このクーデターの話は『記』にも記載されている。

阿曇連浜子は、『古代氏族系譜集成』（宝賀寿男、古代氏族研究会、1986、以下『系譜集成』という）によると、大浜宿禰の子供である。この系譜はどのような史料に基づいて作成されたのか不明であるが、この著書は学術研究者からの評価は高いとのことであり、信頼してよいと思われる。

履中天皇即位年の推測

履中天皇即位年は、『紀』の年代を単純換算すると 400 年となるが、しかしこの年代は前

述の応神天皇の在位年と重なるので不合理である。このころの『紀』の記述内容や年次に関しては疑問点が多いようである。ことに雄略紀より以前については、後世に書き加えられたと考えられ信頼性に欠けると言われている。この辺の事情については『古墳の時代』（『大系日本の歴史２古墳の時代』、和田萃、小学館､1992）に詳しく記載されている。そこで履中天皇即位年について、すこし調べてみる。

履中天皇は『記』によると、64 歳で壬申年正月 2 日（432 年）に崩御したとある。すると在位は 6 年であるから、427 年に即位し 432 年逝去したことになる。一方、5 世紀代には倭の 5 王たちが中国の宋へ遣使し朝貢した。この倭の五王の朝貢については中国の史書『宋書』（倭国伝）に記載されている。その年次は信憑性高いと考えられる。それによると、始めは倭王讃の朝貢は 421、425、430 年である。次が倭王珍の 438 年である。その後倭王済が 443, 451 年に、次に倭王興が（460)、462 年、そして倭王武が（477）, 478 年に朝貢している。これらの倭王がどの天皇に対応するのかということが大事であるが、諸説ありいまのところ定説はない。このうち後の三人については、済が允恭天皇、興が安康天皇、武が雄略天皇と推測され、これについては大体意見は一致するとのことである。問題は初めの讃と珍が応神天皇か仁徳天皇か或いは履中天皇か反正天皇かという辺の問題である。

応神天皇、仁徳天皇、履中天応、反正天皇の在位期間について『紀』の記載に基づいて、中国の書と対比させてみると、どうしても食い違ってしまうのである。このころの『紀』の天皇在位年の記述には疑問点が多いようである。

前述したように応神天皇即位年は 383 年と推測すると、応神天皇が讃であると推測される。すると履中天皇の在位期間は、讃の朝貢と済の朝貢の間、つまり 430～443 年の間のどこかということになる。これは前述の『記』から推算した履中在位年とおおよそのところ重なる。そこで『記』の情報を信じることにする。

阿曇連浜子が皇太子暗殺クーデターに参加したのは履中天皇の即位年であり、『記』の記述を信じるなら 427 年となる。この年次は大浜宿禰との関係からも妥当と考えられる。

安曇姓のはじまり

そうすると、阿曇連浜子は 427 年には阿曇と名乗っていたことになる。先述したように、385 年に大浜宿禰が海人の宰に任じられた後、阿曇連と改名したと思われる。これは恐らく、応神天皇から与えられた氏姓であると思われる。そして子供である阿曇連浜子も阿曇連を名乗った。つまり安曇氏族は 4 世紀末に安曇姓を名乗ったということになる。

こうして、『紀』の大浜宿禰の記述と阿曇連浜子の記述から、両者の時代に安曇連という氏姓ができ、大和王権の政治組織の中で確立したことが分かる。それは応神天皇 3 年、385 年のことである。そして全国の海人を統率し、大王の食膳に海産物を提供する職業を世襲することとなったと考えられる。

４－５　全国に分散した安曇氏族の名前はいつできたか

しかしここには大きな問題がある。安曇氏族は全国各地に進出し、定着している（第 12

章で詳細記載)。その安曇氏族はいつ進出移動したかという問題である。

安曇氏族の氏姓が成立してから全国各地へ進出したと考えることは困難である。その理由は、5 世紀以降に全国進出していったと仮定してみると、それは古墳時代中期以降であり、その頃には全国各地域で豪族がすでに台頭しており、新参の氏族が新たに進出する余地は少なかったと考えられるからである。さらに、安曇連浜子が国家反逆者として罰せられた状況の中で、全国各地に進出することは困難と考えられる。

するとこのころよりもっと古い弥生時代に全国に進出し、各地に分散し定着していたと考えられる。安曇氏族が定着した地域の状況を見ると（第 12・13 章参照)、弥生時代に進出し定着したと考えられるのである。阿曇連浜子の場合も、427 年には、本拠地糟屋郡安曇郷を離れ、摂津国で大きな勢力を持ち活動していたのである。

すると全国に分散した同族集団に対して、安曇という氏族名を伝達したということになる。安曇連という氏姓を大王から授与されたということは、当時の氏族集団にとってとてつもなく名誉なことであったと思われる。そして権力と権威を保証されたことでもあったと思われる。そこで全国に分散した一族たちにも連絡通知したと思われる。安曇という氏族集団がそれほどに結束の固く、しかも連絡取り合い続けていた集団だったと言うことになる。それは根拠あることではなく、不思議なことであるが、そう考えざるを得ないのである。

安曇氏族は後述することであるが、綿津見命を祖神として祭祀する氏族である。それは大浜宿禰のはるか以前からの習慣だったと言える。彼らは一族としての意識を持ち、古くから「わたつみ」の「やから（族)」とでも名乗って、そして結束していたのかもしれない。

５　安曇氏族の祖神　綿津見命

５－１　綿津見命

綿津見神のはじまり

安曇氏族の最大の特徴は氏族の祖神として綿津見命を祭祀していることである。安曇氏族の定義として、綿津見命を祖神としている氏族であると定義できる。

この綿津見命はいつの時代に、安曇氏族の祖神として現れたのだろうか。氏族集団として形成された時には、当然祖神として祀られていたと考えられる。ただしその頃には、自分たちの祖先は海の向こうからやってきたと言う程度の漠然とした概念だったと思われる。綿津見命という名称もなかったと思われる。そして神としての概念もあいまいなもので、原始シャーマニズム的なものだったと思える。

その後大和政権の建国神話が出来上がる過程で、その神話に組み込まれていったと思われる。そして海の神として綿津見神が創成された。『記紀』神話に現れる綿津見命はそうした結果と思われる。そのために、綿津見命は伊弉諾尊（いざなぎみこと）から生まれ、天照大御神や天皇家の祖神たちとも関連した系譜が語られている。

前述したことであるが、『紀』の神話、神代紀は後から追加されたものだといわれている。一方『記』は 712 年に編纂されたものであり、神代記から古代の天皇記も同時に作成されていた。そこには綿津見命に関わる神話も記載されている。すると、7 世紀代にはこれらの神話はできていて、日本の神話としてほぼ認知されていたと考えられる。

すると、綿津見命が安曇氏族の私的な神として、漠然とした概念として形成されたのは、多分弥生時代の頃とおもわれる。そして大和政権の神話に組み込まれ、海の神として確立したのは大和王権が確立したころ、つまり 4～5 世紀のころと考えられる。

「わたつみ」神のはじまり

綿津見命という漢字表記は『記』、『紀』、『録』、各地の神社の祭神名表記として様々なものが多数あり、まったくばらばらである（第 12 章参照）。しかし読みは「わたつみ」「わだつみ」である。このことは、綿津見命信仰が発生したのは倭国固有の文化の中だったことを示唆している。つまり漢字文化の中で生まれたのではないと言える。そして綿津見命は漢字文化が伝わる以前の古代日本、倭国と呼ばれた時代に発生し定着したものと考えられる。

弥生時代の渡来人たちは家族的小集団で別々に、丸木舟で渡来し、それぞれの場所に定着したと考えられる。当時九州地域には縄文人たちが定住していたのである。その縄文人たちとどのように共存したのか明確ではないが、縄文人たちは殺し合いを伴う争いごとをしていなかったことを考えると、初期においては争い事が在ったかもしれないが、その後には共存して混血融合したと推測される。数の上では渡来人たちは圧倒的少数であり、話し言葉は縄文人たちのそれに順ずるものから始まったと考えられる。そして渡来人の稲作技術や土器製作技術等の優れた文化が徐々に広がった。そうして渡来人と先住民の混合集団があちこちにできていった。その中で、安曇氏族の元となる集団も血縁的同族集団とし

て地縁的に活動し徐々に拡大していったと考えられる。

日本列島の先住民である縄文人たちは自然を対象として原始シャーマニズム的信仰を持っていた。そして弥生時代に渡来人がやってきて、両者は融合し弥生文化を育むようになった。生活様式は大きく変わり、それに伴い、縄文の神も変質していったと考えられる。その際、渡来人たちの神々も混淆していったと思われる。そのようにして、縄文の神と渡来人の神は融合し、弥生の神として形成されていったと思われる。

安曇氏族は、自分たちの祖先は海の向こうからやってきたという認識を持ち続けており、倭人文化の中で自分たちの祖先は海の向こうから来た「わたつみ」神（うみの神）だと想っていたかもしれない。「わたつみ」神のはじまりはこの頃ではないだろうか。しかしその辺の事情に関しては全く不明である。

『記紀』に現れる綿津見命

わたつみを綿津見とする表記は、一定しておらずさまざまである。まず、綿津見命と綿津見神というように命と神の両方が使われている。ただしこれは表記上の違いだけであり、取り立てて論じる必要はないようである。つぎに漢字表記として、『記』では「綿津見」神としているが、『紀』では「少童」命としている。「少童」を「わたつみ」と読むことはかなり無理があると思えるが、どのような事情があったのか不明である。これ以外にも数多くの異なる漢字表記があるが（第 11 章参照）、それらの読みはすべて「わたつみ」である。そこで「わたつみ」の神と呼ぶ神はみな同一の神と考えることにする。

なお、『紀』の編纂に当たっては、安曇連稲敷が参画していたと考えられ、記述内容は安曇氏族としての見解に基づいていると考えられる。すると少童命とするのが正しいように思える。しかし、その後の歴史の中では綿津見命が一般的表記となっている。この点も、なぜなのか不明である。

綿津見命とはどのような神であるか、あまり明確ではない。その誕生の経緯と安曇氏族との関連についての事情が『記紀』に記されている。『紀』には次のように記述されている。

伊装諾尊（いざなぎのみこと）が黄泉（よもつくに）から逃げ帰って「筑紫の日向の小戸の橘の檍原（あはきはら）」で海に入って祓除（みそぎはら）った時に、多くの神が生れた。そして「・・・。又海（わた）の底に沈（かづ）き濯（すす）ぐ。因りて生める神を、号（なづ）けて底津少童命（そこつわたつみのみこと）と曰（まう）す。次に底筒男命（そこつつのをのみこと）。又潮（しお）の中に潜（かづ）き濯ぐ。因りて生める神を、号けて中津少童命（なかつわたつみのみこと）と曰す。次に中筒男命（なかつつのをのみこと）。又潮の上に浮き濯ぐ。因りて生める神を、号けて表津少童命（うわつわたつみのみこと）と曰す。次に表筒男命（うわつつつのをのみこと）。凡（すべ）て九（ここのはしら）の神有（いま）す。其の上筒男命・中筒男命・表筒男命は、是即ち住吉大神（すみのえのおおかみ）なり。底津少童命・中津少童命・表津少童命は、是阿曇連等が所祭（いつきまつる）る神なり。」（『日本書紀』（巻第一神代上第五段）、坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋、岩波文庫、1994）

『記』にも同様に記述されている。「次に、水底に滌（すす）ぎし時に、成れる神の名は、底津綿津見神（そこつわたつみのかみ）。次に、底筒之男命（そこつつのをのみこと）。中に滌ぎし時に、成れる神の名は、中津綿津見神（なかつわたつみのかみ）。次に中筒之男命（なかつつのをのみこと）。水の上に滌ぎし時に、成れる神の名は、上津綿津見神（うへつわたつみのかみ）。次に上筒之男命（うはつつのをのみこと）。此の三柱の綿津見神（わたつみのかみ）は、阿曇連等が祖神（おやかみ）と以（も）ちいつく神ぞ。故、阿曇連等は、その綿津見神の子、宇（う）都

志日金析命の子孫ぞ。その底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命の三柱の神は、墨江の三前の大神ぞ。」（『新編日本古典文学全集１古事記』　校注・訳者　山口佳紀・神野志隆光、小学館、1997）

このように『記紀』の編者たちは綿津見神を伊弉諾尊に結び付けて説明した上で、阿曇連等はその子孫であると記述している。ことに『記』では綿津見神の子は宇都志日金析命（拆とも表記する）であり、その子孫が阿曇連であると記載している。なお、『録』によると綿津見神（海神綿積豊玉彦神ともいう）の子は穂高見命と記載されており、穂高見命は別名宇都志日金析命と考えられている。このように『記紀』では阿曇連とその祖神について丁寧に説明しているが、筒之男命の末裔と思われる津守氏（住吉大社の宮司家）についてはなにも記載していない。それはなぜなのか興味あるところである。しかし残念ながらその事情は不明である。とはいえ飛鳥時代の頃には綿津見神が阿曇連等の祖神であるという氏族伝承は定着していた。そして次に見るように神話の中では、安曇氏族は大王家と姻戚関係にある、有力な氏族だったと考えられている。

大綿津見命

神社の祭神を調べていくと、大綿津見命という神がでてくる。大綿津見命はどのような神なのかあいまいであるが、次のように考えられる。『記』（前掲）の海宮訪問神話には、火遠理命（山幸彦）は「綿津見神の宮」を訪ね、「海の神」の娘の豊玉比売と結ばれたとある。そして豊玉比売と結婚した後では「大神」、「海の神」、「綿津見大神」と記述している。ここでは明らかに、「海の神」＝「綿津見神、三柱」＝「綿津見大神」である。するとこれが「大綿津見命（神）」となっていると考えられる。

また『紀』（前掲）では海神の宮を「海神の宮」、「海神豊玉彦の宮」と記載している。ここでは「海の神」＝「海神豊玉彦」であり、その娘が「豊玉姫」である。

このように見ると、海の宮では三柱の綿津見神が一人の「大綿津見神」として表現されていると解釈できる。結局、大綿津見神と綿津見神三柱は別の神ではなく、同じ神であり、単に呼び換えているに過ぎないと思われる。

住吉神との関係

『記紀』では綿津見命と筒之男命は同時に生まれたと記されているが、両神の関係については全く触れておらず、不明のままである。筒之男命は住吉神社の祭神であり、航海の神とされている。綿津見神と住吉神は関連深いと思われるが、誕生以後においては別々に存在している。これもまた謎である。

５－２　天皇家と安曇氏

海神、龍宮の王

「わた」というのは倭言葉では「海」を意味しているとのことである。そして綿津見命は海の神様、「海神」と考えられていた。それは『記紀』に記載された山幸彦と海幸彦の話に示されている。山幸彦が失くした釣り針を探して龍王に会いに龍宮へ行く話である。この龍王は海の神であり、龍宮に住んでいる。龍王は『記紀』では「綿津見神」そして「海

神」とも記載されており、安曇連の祖神である。また、山幸彦は天照大神のひ孫にあたり、彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）と呼ばれ、天皇家の祖神である。

これによると、山幸彦は龍宮を訪ねた際、綿津見神の娘である豊玉姫命と結婚し、男子、鵜草葺不合命（うがやふきあえずのみこと）が産まれる。この男子は、綿津見神の次女の玉依姫命と結婚し、産まれた子が神武天皇である。つまり神武天皇の母は玉依姫命であり、祖母は豊玉姫命であり、二人ともに綿津見神の娘である。そうすると安曇氏族と天皇家とは祖先においては非常に近い血縁関係にあったことになる。

天皇家と安曇氏

このことは、神武天皇が東征し、熊野沖で暴風にあった際の『紀』の記述にもある。そのとき神武天皇の兄の稲飯命（いなひのみこと）は「吾が祖は天神、母は海神なり」といい、また兄の三毛入野命（みけいりのみこと）は「我が母及び姨（おば）は並びに是海神なり」といい、それなのになぜ暴風を起して自分たちを苦しめるのかと恨みを残して、暴風を鎮めるために自殺したとある。この話は天皇家としても、自分たちが海神の血を濃くしていることを認識していたことを示している。しかしそれ以降の歴史において、安曇氏族と天皇家との親しい関係は記載されていない。これも不思議なことである。

また、伊弉諾尊が禊して綿津見命を産んだ後、次に左目を洗って生まれた神が天照大御神である。すると綿津見神は天照大御神の兄にあたることになる。これらは神話の中の話であるが、安曇氏族は天皇家と関連深いということを示している。このような関係は他の氏族には見られないことである。とはいえ、現実には安曇氏族は天皇家と近くはなかったし、朝廷においての地位も低かった。なぜこのような神話ができたのか興味ある。しいて推測すると、履中天皇のときに安曇連浜子が皇太子暗殺クーデターに加担して失敗し、以後衰退していた時期があった。その間に、他の氏族たちが王権中枢を占めてしまったという事情からかもしれない。

５－３　持衰の習慣

持衰

『魏志』（倭人伝）に弥生時代後期の頃の倭人たちの風俗や生活習慣などについて多くのことが記述されているが、倭人たちが信ずる神については何も記述していない。強いていえば、卑弥呼が「鬼道」に従事していたということだけである。この「鬼道」とはどのようなものかはっきりしないが、呪術による原始シャーマニズムのようなものだったと思われる。

この他に当時の海人たちが外洋航海する際の習慣についての記述がある。それは興味深い歴史事実であり、「持衰」（じさい）という習慣についての記述である。海神説話がいつ、どのようにして作られたかを考える上で重要な情報である。それは次のようなものである。船で海を渡って航海する場合、一人の者を持衰と名付けて、髪をくしけらず、しらみも取らず、衣服は垢で汚れたままにし、肉食を断ち、女人を近づけず、喪に服しているようにさせるとある。航海が無事成功すれば、彼に生口や財物を与えるが、病人がでたり災害に

あったりした場合には彼を殺すという習慣があったと記載されている。

この持衰習慣は当時の外洋航海における安全祈願の形態だったといえる。興味深い点は、航海が成功した場合持衰は生口や財物を与えられるが、病人がでたり災害にあったりした場合持衰は殺されるという点である。つまり航海の成否は持衰の斎戒沐浴の勤めにかかっているという点である。海が荒れ、大波や暴風が起こるのは持衰の勤めが悪いからだというのである。だから航海に成功すれば褒美をもらえるが、失敗すれば殺されるというのである。これは当時、外洋航海をする場合の安全祈願の根本思想だったと考えられる。

しかし、これは相当に不合理な習慣と言えるが、当時、3 世紀中ごろにはこの持衰習慣は倭国の海人たちの中で行われていた。それは魏国の使者が見聞した話であり、使者たちが乗った船の海人たちが行っていた習慣だったと考えられる。そして倭国の海人たちの中の一部で行われていた習慣と考えられる。

縄文の神

日本列島の先住民である縄文人は、九州地域にも多数定住していた。縄文末期には稲作農耕も行っていたが、基本的には狩猟採集生活だった。その縄文人たちの宗教観念は、自然に対する恐れと感謝に基づくものであった。狩猟の際にたくさんの獲物が得られたなら、それは神様が与えてくれた恵みである。また獲物が少なければ、それは神様が怒っているのであり、自分たちの行いを慎まなければならない。そういうシャーマニズム的な自然神信仰に基づいていたと思われる。つまり狩猟の獲物が得られるかどうかは、一人の人間の責任だと言う考えはなかった。獲物が多い場合にはリーダーは称賛を得たであろうが、獲物が無かった場合に殺されるとか罰を受けるというようなことはなかった。

そうすると、持衰習慣は縄文人たちの習慣ではないと考えられる。そして縄文人と異なる部族、つまり渡来人の習慣だったと思われる。弥生時代に渡来した人々の中に、持衰習慣を持っていた部族集団があったと推測される。つまり持衰習慣は渡来の文化だったと考えられる。

海神信仰

一方、海神信仰は縄文の自然神を引き継ぎでおり、弥生の倭文化の中で生まれたと考えられる。つまり持衰習慣とは異なるのである。海神信仰はその後渡来の文化に払拭されずに、日本独自の伊弉諾尊の国生み神話から始まる神話に組み込まれた。

そして、航海安全は海神に祈るものであり、そして海が荒れたり災難に遭ったりするのは海神の怒りに触れた結果であり、犠牲を捧げて怒りを鎮めなければならないという海神信仰として形成された。その例が『記紀』に記述されている。神武天皇が東征の途中、熊野で暴風に遭った際、兄の稲飯命、三毛入野命が入水して暴風を鎮めたと言う話がある。また日本武尊が東征の途中相模国走水沖で大風による大波に遭い進退窮まった際、后の弟橘比売（おとたちばなひめ）が入水して大波を鎮めたという話もある。これらは海神の怒りを鎮めるために、犠牲として海に身を投じたという話であり、荒ぶる海の神という観念が出来上がっている。ただし、この話は『記紀』に記載されているものであるが、歴史事実であ

ったかどうか、いつの時代の事なのかは不明である。とはいえ、4〜5 世紀頃には海神信仰は定着していたと思われる。

持衰から海神へ

海神信仰では、あらかじめ海神を祀り、供物をささげて航海の安全を祈るものである。一方、持衰習慣は一人の人間に依存しようとするものである。海神信仰と持衰習慣は全く異なるものである。

弥生時代後期において、航海安全祈願は持衰習慣に頼っていた海人たちがいた。この習慣は倭の海人たち、朝鮮・中国と交流していた海人たちの一部で行われていたと思われる。海人たちすべての習慣だったとは考えられない。その理由は、持衰という習慣は海が荒れるという自然現象を持衰という人間の責任とするという不合理なものであること、そして外洋航海にでない海人たちにとっては関わりないことだったことにある。

安曇氏族は海神という観念を持っており、持衰習慣を持っていなかったと考えられる。そして 4〜5 世紀ころには海神という観念が広く認知されるようになり、海神に航海安全を祈るという海神信仰が海人たち全般に広がったと思われる。

しかしこの海神信仰は、倭の海人たちすべてに浸透していたとは思えない。それは海神という観念は安曇氏族固有のものであり、他の海人、宗像氏や住吉氏等は海人氏族でありながら異なる氏神を祀っていたことから推測できる。それらの神は航海や漁業に関する神として祀られているが、海神として祀られているのではない。

５－４　阿曇磯良について

阿曇磯良が安曇氏の祖という説がある。阿曇磯良は、室町時代のころに書かれた『太平記』に初めて登場する神である。この書は鎌倉幕府滅亡から南北朝時代の歴史を物語風に書いたものである。『太平記』（校注・訳者長谷川端、小学館、1998）の最後の 40 巻に前後の関連なく突如として「神功皇后高麗を攻め給ふ事」と題する章に登場する。それは、神功皇后が三韓出兵に際して、天神地祇を集めて作戦会議をする話である。それによると、このとき日本中の神が集まったがその中で、「安曇弥（あどめ）の磯良」だけが来なかった。磯良は長く海中で暮らしていたので、醜い姿となってしまい、皇后の前に出ることを遠慮していたとのことである。しかし皇后の強い要請を受けて参上するのである。そして龍宮へ使いとして行き、竜宮の宝である旱珠（かんじゅ）・満珠（まんじゅ）を借りてくる。皇后はこの旱珠・満珠とさらに智謀の秘書とを持って三韓征伐に出立し、それにより三韓征伐に成功し、凱旋するという話である。この「安曇弥の磯良」は別本では「阿度部磯良（あどべのいそら）」と表記されているとのことである。この神が「安曇磯良」だとされているのである。しかし『記紀』には神功皇后の三韓征伐の話は記載されているが、「安曇弥の磯良」のことは何も記載されておらず、『太平記』に初めて登場しているのみである。

そして旱珠・満珠の話も疑問である。『記紀』には、山幸彦が龍宮の王（綿津見神）から潮を操る霊力を持つ潮盈珠（しおみちのたま）・潮乾珠（しおひのたま）を譲り受ける話がある。すると、この時には龍宮には旱珠・満珠はないことになる。『太平記』の話は何を根拠にした

ものか、全く不明である。

　さらに、仮に「安曇弥の磯良」が綿津見神であるなら、皇后の使いとなって龍宮の王即ち綿津見神に会いに行くことはあり得ない。すると、「安曇弥の磯良」は龍宮の王ではなく、そして綿津見神でもなく、安曇氏族の祖神でもないことになる。

　結局のところ、「安曇弥の磯良」の話ははるか後世の室町時代に書かれたものであり、その根拠は全く不明であり、創造の産物と言える。安曇磯良を主神として祀る神社がいくつもあるが、その由来については不明である。そして安曇氏族の祖神と言われるようになった事情も全く不明である。

６　安曇氏族の一族

６－１　安曇氏族の一族

安曇氏族に関する情報が記紀』および『録』等に数多く記述されている。また古代の木簡や戸籍簿等の古文書の中にも貴重な情報が多数あり、さらに伝承として伝えられてきた情報もある。そうした情報に基づいてこれまで多くの著作が出版されている。まず『姓氏家系大辞典』（太田亮、角川書店、1934 年）がある。太田亮氏が明治から昭和にかけて約 40 年かけて完成させた労作であり、多くの研究者に影響を与えた。これは古代の氏族全般について詳細に調査し記載したものであり、安曇氏族についても、氏族全体についての多くの情報を記述している。また『角川日本地名大辞典』（角川書店、昭和 53～平２年、以下『地名辞典』と記す）にも全国各地に分散した安曇氏族の情報が記載されている。さらに『系譜集成』（前掲）には、安曇氏族の系図が記載されている。この書は前述したように専門家たちからの評価は高いとのことであるが、残念ながら古代の系図情報の出典は不明である。

その後海人族と安曇族に着目して、黛弘道氏が「海人族のウヂを探り東漸を追う」（『日本の古代８海人の伝統』大林太良編、中央公論社､1996）なる論考を著している。それによると安曇氏族には 5 氏族あるとしている。それは綿津見命を祖神としている氏族を安曇氏族と考え、安曇氏族の情報を整理したものである。これは『姓氏家系大辞典』の見解を基にしているようであり、安曇氏族に関する書としては最もまとまっている。

その他に多くの研究者たちが安曇族論のような著書を刊行したり、或いは安曇族をテーマとした小説を刊行したりしている。そのように安曇氏族論は多くの人々の関心を集め、さまざまに論じられている。そこでまず、これまでに分かっている安曇氏族の一族全体について整理する。

安曇氏族とは綿津見命を祖神とする氏族のことと考えると、安曇連、海犬養連、凡海連、安曇犬養連、八木造が該当する。そしてこれらの氏族に従属して安曇部がいた。これらが安曇氏族の一族である。

なお全国各地に海部氏が分布している。海部氏は祖神として彦火明命を祭祀している。この神は尾張氏の祖神でもある。安曇連が海人の宰となっていた時期があり、海部氏との繋がりが強かったと考えられるが、海部氏は安曇氏族ではない。

６－２　安曇連（天武天皇のとき宿禰を賜る）

『紀』の神代紀に、「底津少童命・中津少童命・表津少童命は、是阿曇連等が所祭る神なり」と記述されている。また『記』の禊祓と神々の誕生の話に「此の三柱の綿津見神は、阿曇連等が祖神と以ちいつく神なり。故、阿曇連等は、その綿津見神の子、宇都志日金析命の子孫なり」と記述されている。

この綿津見命誕生の話は神話の話であり、歴史事実ではない。しかし安曇連氏の墓誌に基づいていると考えられている。つまり、当時安曇氏族は自分たちの祖神は綿津見命であると認識していたと思われる。ただし、住吉神である筒男命との関係はどうなのか、天照

大神との関係はどうなのかということについて、『記紀』はなにも記述しておらず、他にも史料がなく、不明なままである。

安曇連は天武天皇 13 年（684 年）に他の氏族と共に宿禰の姓（かばね）を賜り、安曇宿禰と改姓している。しかし平安時代に書かれた『録』（前掲）には安曇宿禰、安曇連の二つが記載されており、安曇宿禰は本貫が右京で「海神綿積豊玉彦神子穂高見命之後也」と記され、そして安曇連は本貫が河内で「綿積神命児穂高見命之後也」と記されている。それによると、あたかも安曇宿禰と安曇連が別氏族として存在していたような印象を受けるが、しかし安曇連の一族は多数分家していて、宿禰姓に変わらなかった者もいたと思われる。従って両者は同根の同一氏族と考えるのが妥当と考えられる。

また『録』の諸蕃・未定雑姓編に「未定雑姓」として安曇連が記載されていて、始祖は「于都斯奈賀命之後也」とあり、河内に在住とされている。「未定雑姓」とは北川和秀氏（群馬県立女子大学北川研究室）によれば、氏姓の由来を記した本系をあれこれ比較検討してみたけれども、祖先の名が古記と相違したり、事績が旧史から漏れたりし、検討を加えたけれども、判明しないものがあり、それらは未定雑姓として編集したということらしい。古代には自分たちの氏族系譜を勝手に語っている者たちも多かったようであり、氏族系譜はかなり乱れていたようである（第 3 章の氏姓の混乱の項参照）。この安曇連は于都斯奈賀命之後とあるが、この命の名称は、本来は宇都志日金析命であり、間違いと思える。地方では勝手に名乗る氏族がいたと思われ、安曇氏族に無関係の無姓の者が氏族経歴を詐称していたことによる間違いと推測される。

『紀』には「阿曇連の祖大浜宿禰」とある。これは、安曇連は安曇氏族の本宗家であることを示している。安曇連は『記紀』等に数多く登場している。阿曇連浜子、阿曇連百足、阿曇連比羅夫等、阿曇連稲敷等々がいる。

安曇連・安曇氏族本宗家は、弥生時代においては、福岡市東区・古賀市・新宮市地域に居住し活動していたと考えられる。そしてその後東方へ進出し、大和王権が成立する頃の4世紀後半にはすでに畿内地域に定着して、勢力を張っていたと考えられる。そして 7 世紀頃には阿曇連百足が摂津国難波の浦上に住んでいたこと、また摂津国難波には安曇江や阿曇寺があったことが分かっており、4〜8 世紀頃には安曇連は摂津国および播磨国付近を拠点として活躍していたと考えられる。

大浜宿禰が海人の宰に任じられた 385 年には大和王権の中枢部で活躍していた。その後、阿曇連浜子は皇太子暗殺クーデターに加担し敗北した（427 年、第 7-5、11-3 章参照）。その結果、安曇連氏は断絶とはならなかったけれど、相当なダメージを受けたと思われる。その後雌伏していたが、約 150 年後の推古天皇の時代になって、ようやく復活し、そして再び大和政権の表舞台で活躍する。

しかし奈良時代の終わり（792 年）に安曇宿禰継成が朝廷での天皇の食膳奉仕の職務に不満を持ち職務放棄をしてしまい、佐渡島へ流刑されるという事件が起こった（詳細は第 9 章）。この事件により安曇氏族は大きなダメージを受け、安曇氏族断絶とはならないが、以

後衰退していくことになる。その後においては、従五位下安曇宿禰大丘、従五位上安曇宿禰広吉などが朝廷に参内しているが、安曇宿禰の朝廷における地位は下落し、下流貴族ないし地方役人になり下がっていったとようである。その辺の事情については、第 7 章に記載する。

なお、隠岐国の天平 4 年（732 年）の正税帳には海部郡の郡司少領として「阿曇三雄」が記載されている。しかしこの人物は姓を持たず、安曇連とどのような関係にあるのか不明である。

６－３　海犬養連（あまいぬかい）（天武天皇のとき宿禰を賜る）

『録』では「海神綿積命之後也」と記されており、そして『系譜集成』では、大浜宿禰の弟の小浜宿禰の末裔とされている。それゆえ安曇氏族の一つと考えられる。

黛弘道氏は「犬養氏および犬養部の研究」という論考において海犬養連について記述している。それによると、海犬養連は宣化天皇のとき那津宮家（なつのみやけ）を守衛するために創られたとのことである。那津官家は『紀』によると、宣化天皇の 536 年に設置されたものである

それは非常の時に備えて全国各地から食料を集めて、それを保管するための食料貯蔵庫である。設置場所は、福岡市博多区博多駅南五丁目の比恵遺跡がその跡とされている。大和朝廷は古くから朝鮮半島との関わりを強く持っており、半島への進出を行っていた。そして当時は任那日本府を支配しており、派兵もしていた。そのための食料補給が主たる目的だったということが真相と思われる。

一方、その前の安閑天皇の 535 年に全国各地の屯倉の守衛として犬養部が設置された。そして那津宮家にも同様に守衛として犬養部が設置されたと考えられる。黛弘道氏は、このときこの犬養部を統率する氏族として海犬養連が創設されたとしている。この点については後述の安曇犬養連の項および第 13-2 章でも記載する。

その後大和政権は白村江の戦いで敗れ、那津宮家を廃止することになった。それに伴って守衛役は不要となり、海犬養連は筑紫国を去り畿内方面へ移動したと思われる。その後大和政権の中枢部で活躍している。そして約百年後の乙巳（いっし）の変（645 年）で中大兄皇子たちが蘇我入鹿を暗殺する際、海犬養連勝麻呂は暗殺用の剣を宮中に持ち込む役割を果たしている。

このことから、海犬養連は大和朝廷の中枢におり、中大兄皇子と緊密な関係にあったと言うことが分かる。

『紀』の解説によると、平城宮・平安宮には内裏を囲む宮城門が 12 通門あり、それぞれに氏族名がついている。その中に海犬養門（平安宮では安嘉門）と呼ばれる門があり、海犬養連が専属的に守衛していたとのことである。門の名前の由来として、乙巳の変（蘇我入鹿暗殺事件）に参加した氏族の功を永久に記念するために門号に氏族名をつけたとする井上薫説を記載している。さらに海犬養連氏は軍事的職掌をもっており、古くから天皇に近侍していたという佐伯有清説も記載している。

平安時代にかかれた『録』では「海神綿積命之後也」とされ、本貫は右京と記されてい

る。しかし「海犬養」と表記され、姓がついていない。平安時代には朝廷貴族から没落し、「姓」を失っていたと思われる。

海犬養宿禰岡麻呂が聖武天皇の天平6年（734年）の詔に応じて作った歌が万葉集に載っている。これは聖武朝を賛美する歌で巻6を代表する一首と評価されている。

御民（みたみ）われ生ける験（しるし）あり天地の栄ゆる時に遭へらく思へば　（万6-996）

『万葉集巻 6』（新日本古典文学全集、岩波書店、佐竹昭広）によると歌の意は、天皇の御民である私は生きている甲斐があります。天地の栄えるこの御代に生まれ合わせたことを思いますと、とある。

また『続日本紀』（新日本古典文学大系、校注者青木和夫他、岩波書店、以下『続紀』と記す）によると、藤原広嗣が九州大宰府を拠点にして反乱を起こしたとき（740 年）、海犬養五百依（いほえ）が天皇軍の軍曹として参加している。この時の軍団は一万七千人の兵からなり、大将軍一人、副将軍一人、軍監四人、軍曹四人である。この軍曹がどのような職務であったのかはっきりしないが、大軍団のなかで重要な役割を担っていたと考えられる。それにも拘らず、この記述でも姓（かばね）が記されていない。一方『続紀』の解説によると、当時海犬養は橘左大臣家の家令だったとのことである。橘左大臣は藤原弘嗣の反乱の後、正二位へ昇進しており、当時天皇の側近として権勢を誇っていた。そのために橘左大臣の指示により、海犬養五百依は軍曹に任命されたのかもしれない。結局、この時にはすでに宿禰という姓を無くしてしまい、橘左大臣の家臣となっていたのである（第7-16章聖武天皇の項参照）。

６－４　凡海連（おおしあま）（天武天皇のとき宿禰を賜る）

『録』には「海神綿積神男穂高見命之後也」とされ、右京在住のものと摂津在住のもの二氏が記載されている。しかし『和名類聚抄』（平安時代中期 931～938 年に編纂された百科事典のようなもの、以下『抄』と記す）には丹後国加佐郡凡海郷（舞鶴市の旧加佐郡地域）があったと記載されており、そこが古代における凡海連の居住地だったと考えられる。あるいはその後、丹後国凡海郷から摂津国へ移住していたのかもしれない。

なお『録』の諸蕃・未定雑姓編には、右京在住で「未定雑姓」として凡海連がおり、火明命の後なりと記載されている。神別編では凡海宿禰は綿積命の児穂高見命の後なりと記されており、この記述と異なっている。火明命は天火明命とも呼ばれており海部氏や尾張氏の祖と言われ、海部氏の系図「本系図」によると天照大神の子供の天押穂耳尊の第三子とのことである。綿積命（綿津見命）とは別系統であり、明らかに間違いと言える。前述の安曇連の場合と同様に、他の無名の氏族が勝手に名乗っていたのではないかと思える。ことに丹後地方の海部氏系の氏族の場合、氏族名としては安曇系の凡海を名乗り、海部氏の祖神を祀っていたかもしれない。後述するように海部氏の系図によると、海部氏の一族に凡海連真磯というものが居たとのことである。当時の氏姓の混乱の現れの一つと考えられる。

[ここに入力]

また『系譜集成』によると、凡海宿禰は大浜宿禰の弟の小浜宿禰の末裔である。一方、『録』では摂津の凡海連は安曇宿禰と同祖とし、「綿積命六世孫小栲梨(こたくなし)命之後也」とある。これらはともに凡海連は綿津見命の末裔であるとしている。

『姓氏家系大辞典』では、凡（おお）は大（おお）と同じに使われており、凡海と大海は同じであるという趣旨の解説をしている。そして丹後の凡海部という項を作り、「丹後国加佐郡あり、和名抄、於布之安満(おふのあま)と註す。大海部の住居せし地なるや明白也とす。」と記述している。しかし『紀』では大海と凡海は区別されていると見えるのであり、大海＝凡海ということは、その根拠があいまいであり、納得しがたい。やはり、加佐郡凡海郷は大海氏の居住地ではなくて、凡海連の居住地とするのが妥当と思える。

凡海連と天武天皇の関係

凡海連は大海人皇子（後の天武天皇）の養育者であったとする説がある。『紀』によると天武天皇の葬儀、朱鳥元年（686 年）のとき、最初に大海（おおしあま）宿禰蒭蒲（あらかま、文字は原文と異なっている）が天皇の幼時のことを誄(しのびごと)（死者の生前の功徳を讃えて哀悼の意をのべること）したとあることから、大海宿禰蒭蒲が大海人皇子の養育者だったとするのである。これはよく納得できることである。

しかし次の論点については納得しがたい。その後『続紀』の大宝元年(701 年)の記述に、凡海宿禰麁鎌（あらかま）を陸奥に遣わして、金を精練させたとある。解説では、大海宿禰蒭蒲と凡海宿禰麁鎌は同一人物だとしている。なぜなのかということについての説明はないが、大海宿禰の「おおしあま」という読みと凡海宿禰の「おおしあま」の読みが一致することおよび名前が両者とも「あらかま」と読むことから推測されたと思われる。こうして結局、凡海宿禰＝大海宿禰＝天武天皇の養育者という説ができている。

この説は興味深いのであるが、次のような幾つもの疑問がある。

まず、氏姓は異なっているが名前は同じという例はたくさんある。たとえば安曇比羅夫と阿部比羅夫、安曇百足と佐伯百足等々である。従って両者が同一人物であるとは断定し難いのである。もっとはっきりした根拠が必要であり、にわかには納得しがたい。

次に、『紀』の解説では「大海人の名は養育にあたった乳母が大海人氏であったことに由来するのであろう」としているが、皇太弟の皇子の名前として母方の姓を採ることは考えられるが、乳母の姓を付けることがあったのだろうか。大いに疑問である。さらに大海氏と大海人氏が同じなのかどうか不明である。大海人皇子が天皇位を目指して決起した壬申の乱とき、尾張氏を頼ったが、大海人氏の活躍についての記述はなにもないことも、大海人氏と大海人皇子との関連に関する疑問の一つである。大海氏は天武天皇の葬儀の記述に現れるだけで、それ以前およびそれ以後においては記述されておらず、大海、大海人なる氏族が存在していたかも疑問である。

皇太子の教育係として東宮傅という役職があり、従四位上相当であり大臣が兼ねることが多かったとのことである。大海人皇子は皇太子（大兄皇子）の弟であるから、教育係の職階はもう少し低くて、従五位上か従四位下くらいだろうと思われる。凡海宿禰の職階は

普段は六位以下であって、功績があった場合に従五位下を授与されていたようである。すると凡海宿禰は皇太子の弟の教育係の役職には不適当と思える。

凡海連は天武 13 年に宿禰の姓を下賜され、凡海宿禰となったことは『紀』に記載されている。誄したのが凡海宿禰であるなら、『紀』の編者たちは凡海宿禰と記載したと考えられる。天皇家の大事な儀式に関する記述であり、安易に名前を書き変えることなどしないと考えられる。そうすると、やはり凡海は大海とは別人物と思えるのである。

そして次のような疑問もある。大海宿禰蒭蒲が養育者、つまり守役であったとすれば、年代として皇子よりもはるかに年上であったと考えられる。すると、天武天皇は天武 14 年に 55 歳で死んでいるから、このとき大海宿禰蒭蒲は相当に高齢であったと考えられる。それから 15 年後の大宝元年の時はさらに老齢になっていた。そのような年寄りを陸奥へ派遣するなどということは考え難いのである。

大海氏とは

大海氏についての疑問もある。摂津国の住吉神社には境内社として大海神社があり、ここは「おおわたつみ」とか「だいかい」と読んでおり、「おおしあま」とは言わない。凡海（おおしあま）宿禰とは無関係と考えられる。

また、応神天皇よりはるか古代の崇神天皇の妃となった大海媛の話がある。『記』では、妃は木国造荒河刀辺の娘遠津年魚眼々微比売とし、次妃は尾張連が祖、意富阿麻比売と記述されている。これによると、意富阿麻比売は尾張連の祖先だというのである。一方『紀』によると、崇神天皇の皇后は御間城姫、妃は紀伊国の荒河戸畔の娘遠津年魚眼眼妙媛、次の妃は尾張大海媛と記述されている。ここでは、意富阿麻比売のことを大海媛へと置き換えている。そして尾張大海媛は「一に云はく、大海宿禰の女八坂振天某辺といふ」との記述が付記されている。

『記』では尾張連の祖、意富阿麻比売と記述したものを『紀』では尾張大海媛と記述しているのであるが、「尾張連の祖」と「尾張の媛」では大きな違いである。そして、大海宿禰が唐突に出てくることも不合理である。大海宿禰の存在も疑わしくなる。少なくとも、崇神天皇の時代に大海宿禰、凡海宿禰がいたという根拠はないのである。

このような事情を考慮すると、前述の凡海宿禰＝大海宿禰＝天武天皇の養育者とする設は間違いであり、この両者は別人物としか考えられない。

安曇氏族と金属精錬技術

前述の『続紀』凡海宿禰麁鎌の記述から、安曇氏族は海の氏族というよりも、金属一般の高い精錬技術を持った金属専門の氏族であったろうとする説もある。しかし、これだけの記述では判断できず、言い過ぎと言える。またこの時凡海宿禰は従八位下相当の職位であり、朝廷の最下位である。宿禰という姓はついていたものの、地位は非常に低下してしまっていた。

海部氏系図に記載された凡海連真磯

加佐郡安曇郷から少し西へ寄った所に宮津市がある。そこに籠神社がある。古代から続

く、海部氏が奉斎する神社である。そこに「本系図」、「勘注系図」というものが残っている。これは国宝に指定されたもので、推古天皇のころに編纂されたものとされ、その後代々書き加えられてきたものとのことである。これについて金久与市氏が『古代海部氏の系図』（金久与市、学生社、1999）で詳しく紹介している。系図によると、海部直の一族の中に凡海連真磯がいた。彼は允恭天皇の時に加佐郡凡海郷に移り、改めて姓を賜り、凡海連というようになった。そして、凡海連真磯―小橋―磯住―磯嶋と繋がっているとのことである。ただしこのことについて『紀』の允恭天皇紀には何も記載されていない。そして海部直から凡海連ができたのはどのような事情なのか、全く不明であり、なかなか納得し難いことである。

なお、『紀』によると允恭天皇 14 年のとき淡路島の神から、明石の海の底に真珠があるからそれを採り我に祀れと宣託された。そこで海人たちを潜らせて探したが、海底が深く採れなかった。ところが阿波国長邑の白水郎（あま）の男狭磯（おさし）が潜ったところ、光っている大鰒（あわび）を見つけ、それを採取した。しかし男狭磯は息絶えて死んでしまった。天皇は悲しみ厚く葬ったとある。この男狭磯の話が、凡海連真磯の話につながったのかもしれないが、全く不明である。

６－５　安曇犬養連

『録』には阿曇犬養連と表記され、「海神大和多羅命三世孫穂己都久命（ほこつくのみこと）之後也」と記され、摂津国在住と記されている。「大和多羅命」とは「綿津見命」のこと、そして「穂己都久命」は『系譜集成』によると、綿津見命のひ孫である。「安」でなく、「阿」を使っている事については不明である。

犬養氏について

前述の黛弘道氏によると、有姓の犬養氏には県犬養連、若犬養連、阿曇犬養連、海犬養連がいた。県犬養氏は大和政権において大蔵の守衛を務め、その後政権の中枢部に進出し活躍した。

なお、『録』には無姓の「犬養」氏が摂津国にいることが記載されている。『紀』にも孝徳天皇大化 2 年条に「犬養五十君」の名が記載されている。また天武天皇元年条に「近江の将犬養連五十君」が居たことが記載されている。これらの犬養、犬養連がどのような氏族かは全く不明である。

若犬養連は県犬養連と同族であり、当初は内蔵の守衛を務め、その後宮城門、若犬養門の専任守衛にあたったとのことである。一方、海犬養連は当初は那津宮家の守衛役を務めていたが、その後は宮城門、海犬養門の専任守衛にあたったとしている。そして安曇犬養連は海犬養連と同祖であり、彼らより先行して摂津国で屯倉の守衛として設立されたとのことである。つまり安閑天皇の 535 年に全国各地の屯倉の守衛として犬養部が設置された時に、摂津において屯倉の守衛役として設立されたと言うのである。その後も畿内摂津に留まっていたと考えられる。

安曇郡の安曇犬養連

『系譜集成』によると、海人の宰となった大浜宿禰の次男の末裔に阿曇犬養連がおり、その子供（名前は船麻呂とある）が信濃国安曇郡に定着し、穂高神社を奉斎したとある。しかし、その出典・根拠は不明であり、また彼らがいつ、どのようにして安曇平へ進出してきたかも不明である。

６－６　八木造

『録』では「和多羅豊玉彦命児布留多摩乃命之後也」と記されており、黛弘道氏は安曇族としている。これについては大場磐雄氏も同様である。しかし『系譜集成』によると、布留多摩乃命は宇都志日金析命の弟である。すると、安曇氏族とは別系統のようにも思われるが、しかしその根拠もまたないのである。

『録』には本貫は京都と記されているが、『抄』には河内国和泉郡八木郷があったと記されている。そこは現在の大阪府岸和田市八木地区である。そのためここが八木氏の本拠地と言われている。ここには夜擬神社があり、主祭神は和多罪豊玉彦の児の布留多摩命である。

この神社は八木氏が祭祀したのが起源とされているとのことである。そうしてみるとこの地が八木氏の本拠地であると頷ける。

なお『系譜集成』によると、八木造の祖、八玉彦命は淡路国三原郡八木村にいたとある。すると、ここが八木氏の故地ということになる。しかしその痕跡は薄い。

また八木氏は楊貴氏と書くこともあり、その痕跡が奈良や山口に残されている。この辺の事情はよく分からないところである。

６－７　安曇部

平城京出土の木簡等に全国各地から送られてきた貢納品の荷札があり、それらにより前述の安曇氏族の他に姓（かばね）を有さない安曇部と称する者がいたことが分かる。さらに単に安曇と称する者もいたことも分かる。信濃国安曇郡の安曇部百鳥、安曇部真羊はよく知られているが、これ以外に隠岐国、備中国、周防国、阿波国、伊予国、豊後国にもいたことが分かっている。これについては「安曇氏の研究」（松原弘宣）（『古代豪族の謎』歴史読本編集部編）に詳しい。彼らは安曇氏族の一員であることは確かである。安曇部とはどういう存在なのか、専門研究者たちの見解から次のように理解できる。

氏族の従属集団としての部

「部」或いは「部民」は古代の日本に形成された、氏族に従属する集団であり、社会的に下層階層を成していた。これまで多くの研究がなされており、それらを整理するとつぎのようになる。部とは大王・王族、豪族に隷属し、生産物の貢納や労役の奉仕を行う集団であり三つに分類されている。１）錦織部、鞍作部、馬飼部等のように職業内容を名称とした部で、品部とも呼ばれ、朝廷に直属している職業集団。２）大王・王族の特定の者に直属する集団で、大王・王族の宮号を付した部で、名代・子代と呼ばれる集団である。その中に朝廷に出仕して舎人とか靫負とか膳夫等の職業的に奉仕するものと、屯倉に居住し

て農業に従事する者（田部とも言う）がいた。３）大伴部、物部、蘇我部、安曇部等のように豪族の氏族名を付した部で、古くには部曲（かきべ）といわれた。彼らは豪族の私有民であると同時に、朝廷に出仕し職業的に奉仕する任務も負っていた。

『日本の歴史０３大王から天皇』（熊谷公男、講談社、2001）によると、「部は、王権にとっては公的な「王民」であるが、それを領有する王族・氏族にとっては、自分たちに私的に隷属する民であった。鎌田元一氏がいうように、部は同時に諸氏族に隷従するカキ（民・民部・部曲などと書き、カキベ、カキノタミともいう）でもあった。「カキ」とは、垣根のカキに通じ、区画するという意味で、ここでは諸氏族によって区画され、囲い込まれた人間集団ということである。従来は、部曲は部とはまったく別の純然たる豪族私有民と考えられてきたが、鎌田氏は、同じ人間集団を、一方では氏族へ隷属という点に着目して部曲とよび、他方では王権への隷属・奉仕という側面からとらえて部または品部ともいったとみて、「ベ」と「カキ」は同一実体のうえに重なりあって用いられる概念であることを明確にした」とある。これはもっと分かり易く言うと、古代の豪族は農業を基本とする所有地を有しており、そこに隷属民であるヤツコ（奴＝家つ子）を保有していた。そして豪族が大和王権へ組み込まれる過程で、自分たちの隷属民を王権に奉仕する集団として組織した。それが部であるというのである。だから部の民は豪族と王権に二重に隷属していた。そして豪族は自分たちに従属するカキ（部曲）を大和王権に部として提供することによって、大和王権の中で政治的な地位を確保していた。そのような豪族が氏姓制度の「ウジ」として成立したと言うことのようである。

古代社会の階層分化

部は氏姓制度が整う段階で形成されたと考えられ、当初においては、安曇部は安曇連・宿禰に従属する集団だったと考えてよい。弥生時代から古墳時代にかけてのころの氏族集団の構成がどのようなものだったのかはほとんど知られていない。『魏志』（倭人伝）に記されていることから推測すると、弥生時代後期において社会構成は相当に階層分化が進んでいた。当時において、幾つもの国ができており、それぞれに長官・副長官がおり、邪馬台国には女王（ただし魏の使者がそのように表記したのであり、制度としての王であるかどうかは不明）がいた。国民の尊卑には序階があって上下の差異がはっきりしており、「大人（たいじん）」と「下戸（かこ）」に階層分化していた。さらに犯罪を犯した場合、重罪の場合にはその家族および一族、つまり「門戸（もんこ）及び宗族（そうぞく）」を滅ぼした（奴婢（ぬひ）にした）とある。すると奴婢という階層もあった。ここから、「門戸」つまり家族という血縁集団があり、そして「宗族」という一族集団がいたことが分かる。この宗族というのは、中国においては父系の同族集団であり、同じ祖先をもち、同姓の集団だった。当時の日本でも同様だったと思えるが、母系も含めさらに非血縁も含めた一族集団だったと思われる。この「門戸及び宗族」集団は、その後さらに拡大成長し、古墳時代以降の氏族集団へ発展していったと考えられる。このように氏族集団は単一な血縁によって結ばれていたのではなく、擬似血縁関係でも結ばれ、さらに奴婢のように従属関係で結ばれた集団であったと考えられる。それはその地域全体

に広がり、大きな集団だったと考えられる。その集団の中で、部が具体的にどの階層に属していたのか不明であるが、下位のものだったと考えられる。

安曇部の勢力拡大と自立

安曇部は安曇氏族の従属民であり、膳夫として朝廷に奉仕していたかもしれない。そのような低位の身分の安曇部百鳥が、764 年には安曇郡の郡司である「主帳」に任命されていたのである。しかも従 7 位上という官位も授与されている。これは、安曇部百鳥集団は単なる安曇氏族の従属集団を脱して、朝廷から認められた氏族的集団となっていたことを示している。つまり安曇部は長い年月を経る中で、人口、生産力、財力等の勢力を拡大し、姓を有してはいないけれど、「安曇部」氏族的集団に成長していたと考えられる。
そのような例として、『日本後紀』（森田悌訳、講談社､2006）の大同 4 年（809 年）条に「正六位上安曇部福太麻呂に外従五位下を授けた」とある。また『日本三代実録』（『読み下し日本三代実録』現代語訳、武田祐吉 ・佐藤謙三、 戎光祥、2009）の貞観 6 年 8 月（866 年）条に、阿波国名方郡の賀陽親王の家令に正六位上安曇部栗麻呂がおり、部を改め宿禰を賜ったとある（第 7 章参照）。さらに天平四年（732 年）の正税帳には隠岐国海部郡の郡司少領として阿曇三雄の名がある（13-8 章参照）。

このように安曇部、安曇は全国の各地に分布して居住しており、それぞれに活躍していたことが分かる。しかしそれらの安曇部、安曇が統率されていたとは考えられず、国・地域ごとに別々の集団だったと考えられる。つまり、郡司に任命された安曇部がいた一方で、依然として隷従する安曇部もいたと考えられる。

部民たちの自立

奈良時代には、徴税や労役が相当に厳しかったようであり、人民は生活に困窮し、都は浮浪者や貧民で溢れていたようである。そして古代からの氏族たちも没落していったようである。しかし日本の全般的傾向として人口が増大し、生産力が増大していたと思われる。その結果として地方においては、氏族に隷属していた従属集団も勢力拡大し、氏族の支配から脱して自立する傾向にあったと思える。たとえば宗像部堅牛、中臣部加比、大伴部大君等々の多くの部姓者が郡司に任命され、朝廷の官位も授与され、自立していく傾向が見える。

族民について

古代日本には「部」とは別に「族民」がいたとのことである。直木幸次郎氏が「日本古代における族について」（『日本古代国家の構造』青木書店　直木孝次郎　1974）の中で詳しく考察している。それによると、通常の親族や同族（血縁関係のないものをも本家を中心とする親子関係の観念で結びあわせている共同体）集団は、一族という概念で捉えられていたのであるが、「族民」とは、例えば出雲臣族、尾張連族、物部連族のように姓（かばね）を有する氏族名の後に族を付した氏族集団である。族は姓（かばね）ではないが朝廷から認知されており、官位を有する族民もいた。そして姓氏族（姓を有する氏族）に従属する同族集団と考えられる。直木氏は古代日本では「親族の範囲を越えしかも「やから」

（　族　）の名を以て呼ぶにふさわしい同族的・共同体的な社会組織」ができており、その中で「カバネ姓者と族民とが親族または同族であるとしても、両者は社会的に対等の地位に立つ親族同族ではなくて、両者の間には階級的な差が存し、族の字はこの差を現わす標識として下級者、すなわち族民の姓に付加されたものと考えるのである」としている。また「豪族団の下部組織としては始め族民的なものが一般的であった所へ、後から大陸系の部民の制度が輸入され、次第に族民による組織にとって代わって行った」としている。つまり弥生時代から発展成長してきた血縁的同族集団の中では族民組織であったが、その後朝鮮から部民制が入ってきて、部組織に替わっていったというのである。そして族民はカバネ姓者に従属し、その点では部民と同様であるが、部民の上位にあったとのことである。つまりカバネ姓者―族民―部民という階層があったというのである。カバネ姓者のうちで族民と部民の両者を従えるものは、奈良時代の臣・連・君の中級のカバネを有するものが多いという。

６－８　今後の課題

これらの情報だけでは安曇氏族の実像は雲を掴むようである。５つの氏族が誕生した時代、その事情、相互の関係、全国にある安曇族ゆかりの地がどの氏族に対応するのか、とりわけ安曇平へ進出してきた事情はどうなのか等々分からないことばかりある。これらは今後調べていかなくてはならない課題である。

７　古代の歴史書に見る安曇氏族の経歴と特徴

『記紀』、『風土記』等の史料に記載されている安曇氏族に関する情報を拾い出し、安曇氏族の経歴や特徴を整理する。しかし、それらの史料に記載されていることのすべてが歴史事実であるとは考えられない。つまり、神話と歴史事実が混淆していること、史実ではないことが記述されていることが予測されるのである。とはいえ、逆にそれらの史料がすべて虚構ということでもない。それら史料を鵜呑みにするのではなくて、他の情報と比較検証することが大事である。そのような観点に立ち、まず安曇氏族に関わる情報を収集することにする。

７－１　神話の中の安曇氏

安曇連の名前がはじめて登場するのは、『記紀』の神代の章においてである。ここでは国産（くにうみ）神話から始め、神々の誕生神話を語り、そして綿津見命の誕生を語っている。その内容は第５章に記した。『記』と『紀』では多少ニュアンスが異なっているが、いずれも綿津見神（少童命）は安曇連の祖神であるとしている。『記』ではさらに安曇連は綿津見命の子、宇都志日金析命の子孫なりとしている。『記紀』がこのように安曇連という氏族について丁寧に説明していることの理由は不明であるが、興味深いことである。

また綿津見命は『紀』の山幸彦・海幸彦の話にも出てくる。山幸彦が釣り針を失ったとき、塩土老翁（しほつつのをぢ）に教えられて、「海神（わたつみ）の宮」を訪ねる話である。「海神の宮」とは龍宮であり、その主は龍王である。「海神（わたつみ）」と記述され、また「海神豊玉彦（わたつみとよたまびこ）」とも記述している。山幸彦は海神の宮を訪ねた際、海神の娘の豊玉姫を娶り、そして海神から潮満珠（しほみちのたま）・潮涸珠（しほひのたま）を授けられて帰ってくる。

この話は『記』にも記載されている。話の構成は全く同じであるが、海神の宮について、「魚鱗（いろこ）の如く造れる宮室」・「綿津見神の宮」と表記している。また「綿津見神」は「海の神」と表記され、山幸彦と豊玉姫が結婚してからは、「綿津見大神」と表記されている。

山幸彦は別名彦火火出見尊であり、天皇家の祖神である。この神は綿津見命と関連深いことを示唆している。

日本では古くには、海のことを「わた」・「わたつみ」と言っていたとのことであり、「綿津見」とは「海」と同義であるとのことである。すると「綿津見命」は「海の神」であり、「龍宮の王」と言うことになる。綿津見命が漁業および航海の神とされている理由はここにある。そして、綿津見命＝少童命＝海神＝海神豊玉彦命＝綿津見大神＝安曇連の祖と言うことになる。

また龍宮は海の彼方にあるものと考えられていたのであり、綿津見命はそこに住んでいたとすると、安曇氏族の先祖は遠くの海の彼方にいたということにもなる。ただし、この辺の事情については、安曇氏族がどのように考えていたのかまったく不明であり、推測するのみである。

『紀』によると、神武天皇が九州から東征する際に、速水之門（はやすひなと）にきたとき、一人の海人

に出会い、案内人としたという記述がある。海人の名は「珍彦」といい、「椎根津彦」という名を授けたとある。これは倭直部（解説に部の字は等と言う程度の意味だろうとある）の祖とある。珍彦は海人の長であり、東征の海上案内者だったとされている。この話から、この珍彦は安曇氏族の長、安曇磯良だったのではないかという説が出ている。しかしこれらの話は、神武天皇の東征のことも含めて神話の世界の話であり、また安曇磯良の話は後世に作られた話であり、歴史事実ではない。

７－２景行天皇紀の安曇氏

『紀』の景行天皇 12 年条に、熊襲征伐に向かう途中豊後国において土蜘蛛という部族を討伐したとの記述がある。このとき土蜘蛛族の抵抗が激しく、志我神、直入物部神、直入中臣神に祈ったとある。解説では、この志我神とは志賀海神社の神という説があるが、この話は豊後国速水郡（現在の別府市付近）・直入郡（現在の竹田市付近）でのことであり、地理的に不合理であるとして、この説を否定している。一方『地名大辞典』は大分県大野郡朝地町に志加若宮神社があり、その祭神が志我神（底津綿積命、中津綿積命、表津綿積命）であるとしている。しかし景行天皇の時代に志加若宮神社が在ったとは考えられない。やはりこの志我神は後世の創作と思われる。なお、『記』の景行天皇記には、この話は記述されていない。

『紀』の年代を機械的に換算すると、景行天皇は西暦 71 年から 130 年まで在位したことになるとのことである。この時代は弥生時代の中期後半であり、西暦 57 年には奴国が後漢の光武帝に朝貢し、漢委奴国王の金印を授与された時代である。そして卑弥呼の時代よりも百年以上も前の時代である。そのような時代に景行天皇或いはそのモデルとなった人物が『紀』に記載されているような活動をしていたとは考えられない。それらは歴史事実ではない。景行天皇は実在していなかったと言われており、これらは後世の創作話と考えられる。

また、『肥前国風土記』（『日本古典文学全集　風土記』植垣節也　小学館　1997）によると、景行天皇が肥前国へ巡幸したとき従者の阿曇連百足に命じて、近くの島を視察させたところ、二つの島に大耳、垂耳という土蜘蛛がいた。そこで阿曇連百足は彼らを捕らえた。彼らは貢物をすることを約束したので、天皇は恩情をかけ、赦免したとある。その嶋は値嘉嶋と呼ばれ、そこに住む白水郎は牛や馬を多く所有しており、容貌は隼人に似ており、いつも騎射を好み、言葉は俗人と異なっているとある。

しかし第 4 章で記載したように、このころまだ阿曇連とは名乗っていなかった。また景行天皇は実在しなかったとされており、阿曇連百足という人物も実在していたとは考え難い。そして『魏誌』（倭人伝）は、景行天皇の時代より約百年後の卑弥呼の時代において、日本には牛、馬等はいないと記述している。この記述の方が信憑性高いと考えられる。『肥前国風土記』（前掲）はずっと後世の奈良時代初期に書かれたものであり、歴史事実とは離れた伝承の話と考えられる。

７－３　神功皇后紀　（201～269 年　ただし機械的に西暦に置き換えた年代）

[ここに入力]

神功皇后は実在の人物ではないと言われている。在位年代とされる西暦 201～269 年は卑弥呼の時代である。『紀』の編者は中国の史書『魏志』を読んでいたと考えられ、神功皇后 39 年条（239 年）に「魏志にいはく」として、倭の女王が魏へ朝献したと注記している。さらに 40 年条、43 年条、66 年条にも同様に注記している。これらの注記は、神功皇后が魏へ遣使したというものではなく、魏志にはこういう記述があるという表現である。つまり『紀』の編者たちは日本から魏への遣使の事実を『魏志』により認識していたが、国内の記録・伝承では遣使の記録はなかったので、伝聞調で書いたと思われる。

卑弥呼の時代では邪馬台国は狗奴国と対立抗争中であり日本は統一されておらず、統一者としての大王はまだ登場していなかった。このころ『紀』に記述された三韓出兵のようなことがあったとは考えられない。『紀』の編者たちは、魏志の遣使の時代における倭国の状況、邪馬台国、卑弥呼、狗奴国等のことについて認識していなかったと考えられる。あるいは、そのような歴史事実を認めると、神武天皇以来の天皇の系譜が架空のことになってしまうために、無視したと考えられる。こうした作為は歴史事実を正しく記録するという姿勢に欠けたものであり、歴史編纂者としては避けるべきことである。

9 年条（209 年）に新羅へ出征する際、西海方面の状況を探るために、「磯鹿（しか）の海人、名は草（くさ）を遣わして視しむ」とある。解説では磯鹿の海人草は筑前国糟屋郡志珂郷（志賀島を含む地域）の海人の集団をさしているという。磯鹿の海人とは後世に安曇氏族配下であった海人と考えられるが、ここではまだ安曇との関連については何も記載されておらず、単に磯鹿（糟屋郡志珂郷地域の）海人と表現されているのみである。そして糟屋郡安曇郷との関連も不明である。また前述の志我神との関連についてもまったく不明である。

なお神功紀では三韓征伐の際に海の安全を祈る際に住吉神に関する記述はあるが、綿津見神の記述そして安曇氏族に関する記述はない。

７－４　応神天皇紀（270～310 年　ただし機械的に西暦に置き換えた年代）

応神天皇は実在の人物と考えられており、大和王権が定まりつつある時代の大王と考えられている。すでに述べたことであるが（第 4-4 章）、在位年代については『紀』の年代から機械的に換算する方法は疑問であり、朝鮮・中国の史書に基づいて算定する必要がある。すると応神天皇の在位年は 383～423 年となる。

・3 年条に「処処の海人、訕彧（さばめ）きて命に従わず。則ち阿曇連の祖大浜宿禰を遣わして、其の訕彧を平ぐ。因りて海人の宰（みことも）とす」とある。

　これは安曇連が海人の統率者となったことを示している。そして阿曇連という氏姓がこの時与えられたと推測される。このこと『記』には記述ない。

・5 年条に「諸国に令して、海人及び山守部を定む」とある。

　このとき安曇連が海人部の統率者だったかどうかはっきりしない。『日本古代の軍事航海史（上、52 頁）』（松枝　正根、かや書房）によると、「応神天皇は、三人の皇子にそれぞれの職の分担を定め、皇子大山守命を山海を担当する総宰にしている。そして阿曇連および凡海連を副総宰とし、吉備、紀伊、但馬、播磨、阿波等の諸国にそれぞれ海直（うみのあたい）を

置いた」と記述している。この記述は『大日本官職考』に拠っているとのことであるが、実態は不明であり、事実かどうかは不明と言わざるを得ない。

なお『記』には、「此の御世に、海部・山部・山守部・伊勢部を定め賜ひき」とある。解説では、伊勢部とは伊勢の海部のこととある。また山部と山守部についての説明はなく、どのような差異があるのか不明である。

７－５　履中天皇紀（427～432 年　古事記記述をもとに推測した在位年）

『紀』によると、仁徳天皇逝去に伴い皇太子である去来穂別尊（即位後履中天皇）が即位するとき、弟の住吉仲皇子は、皇太子妃と密通したことが露見したため、皇太子を殺そうとして兵を興して皇太子の宮を襲撃した。しかしその時、皇太子はすでに脱出した後だった。そして皇太子が兵を集めて待ち伏せているところに追撃者たちが現れ、彼らは「淡路の野嶋の海人なり。阿曇連浜子、住吉仲皇子の為に、太子を追はしむ」と語ったとある。そこで野嶋の海人たちは捕縛され、ついで住吉仲皇子も誅殺され、そして阿曇連浜子も捕まり事件は落着する。その後、天皇は阿曇連浜子に対し「汝、仲皇子と共に逆ふること謀りて、国家を傾けむとす。罪、死に当れり。然るに大きなる恩を垂れたまひて、死を免して墨（ひたひきざむつみ）に科す」と断罪した。そこで「此によりて、時人、阿曇目と曰ふ」とある。さらに、「亦、浜子に従へる野嶋の海人等が罪を免して、倭の蒋代屯倉に役ふ」とある。解説では、野嶋の海人たちは許されたけれど、野嶋の海人集団全体が倭の蒋代屯倉へ移住させられたとしている。この事件に関しては第 12-3 章に詳細に記す。

なお『記』の履中天皇記では、墨江中王が天皇を焼き殺そうとして大殿に火をつけたという内容の反乱を記載しているが、安曇連浜子の事は何も触れていない。

・阿曇目の由来について

安曇連浜子は死罪にはならなかったが、「黥」刑を受けた。これは顔面に入れ墨する中国の刑罰とのことで、日本では眼のふちに入れ墨をしたので、「めさききざむ（目割き、刻む）」と読むのだろうと解説されている。すると、天皇への反逆者という烙印を顔に押されてしまったのである。もはや世間にでて活動することは難しかったと思われる。

そして当時の人はこれを「安曇目」と言ったとある。解説では、入れ墨は海人の阿曇部が行っていた習慣であろう記述している。そしてこれがさらに広がり、安曇氏族は皆入れ墨をしており、安曇氏族の特徴は顔に入れ墨していることであるとも言われている。しかしこれは全くの見当はずれの説である。縄文人や弥生人の中にも身体に入れ墨している人たちがいた。さらには『魏志』倭人伝のころの北九州地域の海人たちは全身に入れ墨をしていたのである。しかしこの「阿曇目」は前科者の印であり、不名誉なものである。

履中天皇 5 年 9 月条に河内馬飼部の黥についての記述がある。それによると、当時は馬飼部は皆が黥していたようである。淡路島にいた伊弉諾神が神官に託して「血の臭きに堪えず」と託宣した。そこで占ったところ、「兆にいはく、「飼部等の黥の気を悪む」」とあった。そこで「これより以後、頓に絶えて飼部を黥せずして止む。」とある。つまり、当時馬飼部たちは皆、黥していたのであるが、この時からこの入れ墨を止めさせたという

のである。このことからも、黥することが安曇氏族の習慣であったとは考えられない。

この事件において安曇氏族は大きなダメージを受けた。浜子が、もしこの事件に関与していなければ、安曇氏族は大和政権の中枢部で要職を得て、大きな勢力となっていたと思われる。とはいえ、安曇氏族は滅亡せずに、摂津国難波津の近くに安曇江を確保し、氏族として存続し続けた。そして後世に難波宮の近くに安曇寺を建立するのである。その辺の事情については第 12-3 章に記載する。

７－６　反正天皇から崇峻天皇紀（406～592 年　機械的に換算した在位年）

この間では安曇氏族の記事はない。もはや海人の宰としての安曇連の立場はなくなってしまったと見え、次のような記述がある。

欽明天皇紀 14 年条（553 年）に「蘇我大臣稲目宿禰、勅を承りて王辰爾を遣わして、船の賦を数え録す。即ち王辰爾を以って船長とす。因りて姓を賜いて船史とす。今の船連の先なり」とある。

また 17 年条（556 年）に、百済の王子恵（ゑい）が日本から帰国するに際して、「是に、阿部臣・佐伯連・播磨直を遣わして、筑紫国の舟師を率いて、衛り送りて国に達らしむ。別に筑紫火君を遣わして、勇士一千を率いて、衛りて弥弓に送らしむ」とある。解説には筑紫火君とは肥（火）国（現在の熊本県に相当）の豪族のこととある。このころには安曇氏族は存続していたのであるが、大和王権の表舞台や朝鮮との海上交流には登場していない。

なお継体天皇 21 年（527 年）に北九州で磐井の乱がおこっており、安曇氏族もこれに加担したか或いは巻き込まれたと思われる。そのときの安曇氏族の状況は全く不明であるが、敗戦時に安曇氏族の拠点である糟屋郡は「糟屋の屯倉」として天皇に献上されたとの記述がある。安曇氏族にとって大きな事件だったと思われるが、安曇氏族に関する状況は全く不明である。

７－７　推古天皇紀（593～628 年）

・31 年条（623 年）に「時の人の曰く、「是の軍事は、境部臣、阿曇連、先ちて多に新羅の幣物を得しが故、又大臣を勧む。是を以て、使の旨を待たずして、早く征伐ちつらくのみ」」との記述がある。

これは解説によると次のような事情である。この年に新羅が任那を攻めて降伏させたことに関して、新羅への対応についての話である。日本としては当初は穏健な外交対応で問題解決にあたろうと決めたのであるが、その後軍事行動に変わってしまった。そのことをその後、蘇我大臣が早まったことをしてしまったと悔やんだということの説明である。このとき阿曇連が具体的に何をしたのか、どのような役割だったか分からないが、蘇我大臣に進言する立場にいたことが分かる。阿曇連の名前が『紀』に登場するのは、履中天皇以来約 2 百年ぶりである。このころにようやく大和政権に復帰していたと考えられる。

・32 年条（624 年）に「「今より己後、僧正・僧都を任して、仍僧尼を検校ふべし」とのたまふ。壬戌に、観勒僧を以て僧正とす。鞍部徳積を以て僧都とす。阿曇連を以て法頭とす。」とある。

[ここに入力]

解説によると、法頭とは諸寺の主として財政を監督する職掌とのことである。当時は仏教が国教として広がりつつある時であり、寺の数は増え、寺の財政も大きくなりつつある時だった。このころには安曇氏族は経済的基盤を強くしていたと考えられる。そしてやがて摂津に阿曇寺を建立するのである。また信濃国安曇郡明科の明科廃寺は 7 世紀後半の創建と言われており、丁度この時代である。創建者は安曇氏ではないかと言われており、今後の調査研究が期待される。

・32 年条（624 年）に「大臣、阿曇連、阿部臣摩侶、二の臣を遣して、天皇に奏さしめて曰さく、「葛城県は、元臣が本居なり。・・・・・臣が封県せむと欲ふ」とまうす」とある。

解説によると、これは大臣蘇我馬子が、葛城県を下賜して欲しいということを、阿曇連と阿部臣摩侶を使って、天皇に奏上させたというのである。このころには安曇連は蘇我氏に取り入り、天皇に直接奏上できる立場にいたことが分かり、大和政権の中央で活躍していたと考えられる。

７－８　舒明天皇紀（629～641 年）には安曇氏族の記述はない。

７－９　皇極天皇紀（642～645 年）

・即位年（642 年）条に「百済の使人大仁阿曇連比羅夫、筑紫国より、駅馬に乗りて来て言さく、「百済国、天皇崩りましたり聞りて、弔使を奉遣せり。臣、弔使に随ひて、共に筑紫に到れり。而るに臣は葬に仕らむことを望ふ。故、先ちて独り来り。然も其の国は、今大きに乱れたり。」とまうす」とある。

・2 月条に「阿曇山背連比羅夫・草壁吉士磐金・倭漢書直県をして百済の弔使の所に遣わして、彼の消息を問はしむ。」とある。

さらに、「翹岐を召して、阿曇山背連の家に安置らしむ。」とある。翹岐は百済国王の弟の児であるらしい。大使翹岐とも記されている。

これらの記述は阿曇連比羅夫が以前から百済大使として派遣されており、舒明天皇の崩御に接して、百済の弔問使と一緒に帰国したというものである。阿曇連比羅夫は多分舒明天皇に近く仕えていたものと推測できる。さらに大使翹岐の接待役をしていることから、文官という立場だったと考えられる。

解説では阿曇山背連の山背は住居地ではないかとしている。この山背の場所ははっきりせず、山背国のことか山背郷のことかも不明である。山背国は京都府南部に位置しており、飛鳥宮から遠く離れ、また難波津からも遠く離れている。阿曇連比羅夫の居住地とは考えにくい。すると山背とは山背郷のことと思われる。山背郷と表記は異なるが、河内国石川郡山代郷（山城郷とも書く）がある。ここだと難波津から飛鳥へ向かう途中であり、阿曇連比羅夫が住んでいたと考えても不思議ではない。この可能性は高いと思われる。しかしこの地は 721 年頃には従六位上山代忌寸真作が居住していたことが分かっており、阿曇連比羅夫がこの地に住んでいたとするには疑問が残る。

・4 年条（645 年）に「中大兄、即ち自ら長き槍をとりて、殿の側に隠れたり。中臣鎌子

連等、弓矢を持ちて為助衛る。海犬養連勝麻呂をして、箱の中の両の剣を佐伯連子麻呂と葛城稚犬養連網田とに授けしめて曰く、「努力努力、急須にきるべし」といふ。」とある。

これは中大兄皇子、後の天智天皇が大臣蘇我馬子を宮廷において斬殺しようとする際の話である。海犬養連勝麻呂がその計画に深く加担していたことを示しており、当時中大兄皇子と深いつながりを持っていたことを示している。

７－１０　孝徳天皇紀（645～650 年）

・2 年条（646 年）に、国司への訓示に違反した東国の国司たちの名前と違反内容が記載されている。その国司の中に「阿曇連（名をもらせり）」が記載されている。彼はどこの国の国司だったのかは不明である。

・『播磨国風土記』（『日本古典文学全集　風土記』植垣節也　小学館　1997）によると「石海の里」について、孝徳天皇の時、「この里の中に、百便の野ありて、百枝の稲生ひき。すなわち、阿曇の連百足、仍りてその稲を取りて献りき。その時、天皇勅りたまひしく、「この野を墾りて、田を作るべし」とのりたまひき。すなわち、阿曇の連太牟を遣りて、石海の人夫を召して、墾らしむ。故れ、野を名づけて百便といひ、村を石海と号く」とある。

また同書に「浦上の里」について「浦上と号くる所以は、昔、安曇の連百足等、先に難波の浦上に居み、後にこの浦上に遷り来たり。故れ、本居に因りて名と為す」とある。

「石海の里」は現在の兵庫県揖保郡太子町付近である。姫路市の西隣りに位置し、播磨国の西端である。安曇氏族は古くから播磨国、現在の神戸市垂水区地域で勢力を張っており、その後摂津国難波、現在の大阪市難波周辺地域にも勢力を伸ばしていた。そして孝徳天皇のころにさらに姫路の西にまで進出したことになる。石海里の開拓は単に原野を開墾するのでなく、水田用の水を引きこむ灌漑工事を伴うもので、相当に大規模なものだったようである。その名残が現在の太子町に残っている。詳しくは第 13-3 章に記載する。

７－１１　斉明天皇紀（655～662 年）

・3 年条（657 年）「西海使小花下阿曇連頻垂、小山下津臣偃僂百済より還りて、駱駝一箇・驢馬二箇献る。」とある。

・4 年条（658 年）「西海使小花下阿曇連頻垂、百済より還りて言さく、・・・・」とある。

阿曇連比羅夫と阿曇連頻垂が親子だったのか不明であるが、阿曇連一族は継続的に百済大使を務めていたようである。

７－１２　天智天皇紀（662～672 年）

・即位前年条（661 年）8 月「前将軍大花下阿曇連比羅夫・小花下河辺百枝臣等、後将軍大花下阿部引田臣比羅夫臣・大山上物部連熊・大山上守君大石等を遣わして、百済を救わしむ。仍りて兵杖・五穀を送りたまふ。」とある。

ここで「兵杖・五穀」とは武器・食料のことである。

・即位年 5 月条（662 年）「大将軍大錦中阿曇連比羅夫連等、船師一百七十艘を率て、豊璋等を百済国に送りて、宣勅して、豊璋等を以て其の位を継がしむ。」とある。

[ここに入力]

これらの記述は、大和政権が前年に新羅・唐により滅亡させられた百済国の再興運動を積極的に支援し、救援兵力を投入したことに関するものである。そしてこの記述に基づいて、安曇連比羅夫は百済救援軍に将軍として参戦したと言われている。しかしその実態はあいまいであり、むしろ無かったと考えられる。つまり、救援軍は翌年に派遣されているのである。そのことは、翌年の天智2年3月(663年)の記述に「前将軍上毛野君稚子・間人連大蓋、中将軍巨勢神前臣訳語・三輪君根麻呂、後将軍阿部引田臣比羅夫・大宅臣鎌柄を遣わして、二万七千人を率いて、新羅を打たしむ。」と記述されており、これが救援軍の本体であったと考えられる。

安曇連比羅夫は長年百済大使として勤めてきたのであり、さまざまな形で支援活動に参加したと考えられる。しかし具体的にどのように活動したのかははっきりしない。ことに安曇連比羅夫の行動に関しては、単純に白村江の戦いに参加したとは考えられない。それについて第10章で詳細に考察することにする。

・9年9月条（670年）「阿曇連頬垂を新羅へ遣わす」とある。

この時の目的は何か不明であるが、白村江の戦い後の外交関係の修復だったと思われる。

７－１３　天武天皇紀（672～686年）

壬申の乱において安曇氏族がどのように働いたのか興味あるが、『紀』では何も記述されていない。推古天皇以来朝廷と深く関わっていたことから、近江朝側についていたのかもしれないが、不明である。

・即位年3月条（672年）に「内小七位阿曇連稲敷を筑紫へ遣わして、天皇の喪を郭務悰等に告げしむ」とある。

郭務悰は白村江の戦いの後、唐から日本へ派遣され、筑紫国に滞在していた。天智天皇の崩御を伝えるための使いとして、阿曇連稲敷が派遣されたのである。なお解説に、当時の位階として七位は無いので、小山位の間違いではないかとある。

阿曇連は比羅夫から頬垂そして稲敷と続いて、外交面の任務を果たしていた。しかしこの後においては安曇連の外交面での活躍についての記述はない。百済国との関係が消滅し、新羅国との関係そして唐との遣唐使の時代に入り、安曇連は外交面での任務から外れてしまったようである。新羅大使は別の氏族に替わってしまった。稲敷は次に示すように帝紀や『紀』の編纂業務に専心していったと思われる。

・10年（681年）条に「川嶋皇子・忍壁皇子・・・・・小錦下阿曇連稲敷・・・に詔して、帝紀及び上古の諸事を記し定めしめたまふ」とある。この時に選任された編者たちが『紀』も編纂したと思われる。阿曇連稲敷は編者の一人に選ばれており、安曇連一族は依然として文官として活躍していた。

・13年2月28日条（684年）「三野王・小錦下采女臣筑羅等を信濃に遣して、地の形を看しめたまふ。是の地に都をつくらむとするか」とある。そして三野王等は13年4月11日に「信濃国の図を進れり」とある。随分と簡単に地形図を作成できたものである。

さらに14年12月条（685年）に「軽部朝臣足瀬・高田首新家・荒田尾連麻呂を信濃に

遣して、行宮を造らしむ。蓋し、束間温湯に幸さむと擬ほすか。」とある。この束間温湯とは松本市の浅間温泉と考えられており、実際に天武天皇が行幸したかどうかは定かではない。

一方天武天皇が安曇郡に行宮を造ったと言う説があるが、『紀』のこれらの記述からは安曇郡に行宮を造ったと推測することはできない。

・13 年 12 月条（684 年）に、この年 10 月に制定した八色の姓の制に基づいて、安曇連、凡海連、海犬養連等の五十の氏族に、宿禰姓を与えたとある。

この時制定された姓は上位から真人（まひと）、朝臣（あそん）、宿禰（すくね）、忌寸（いみき）、道師（みちのし）、臣（おみ）、連（むらじ）、稲置（いなぎ）である。宿禰は上から３番目であり、安曇氏族は朝廷で中級の貴族だったことになる。

・朱鳥元年条（686 年）天武天皇の殯に際して、「第一に大海宿禰蒭蒲（漢字は原文と異なっている：筆者注記）、壬生の事を誄る」とある。

解説によると、大海宿禰蒭蒲は天武天皇の養育者であり、壬生のこととは天皇の幼時時代のことである。そして天皇の乳母は大海氏であり、それゆえ大海人皇子と名づけられたとしている。さらに文武天皇大宝元年に凡海宿禰麁鎌の話が出てくる（後述の文武天皇紀）。これらの記述によって、凡海宿禰＝大海宿禰＝大海人皇子（後の天武天皇）の養育者という説が出来上がっているが、すでに第 6-3 章で述べたように明確な根拠はない。

７－１４　持統天皇紀（687～697 年）

・5 年条（691 年）に「十八の氏大三輪・雀部・石上・藤原・石川・巨勢・膳部・春日・上毛野・大伴・紀伊・平群・羽田：阿部・佐伯・采女・穂積・阿曇に詔して、其の祖等の墓記（おくつきのふみ）を上進らしむ」とある。

この時代において安曇氏族は古代から続く有力氏族として認知されていたと言える。

７－１５　文武天皇・元明天皇・元正天皇　紀（697～724 年）

文武天皇以降の安曇氏族の足跡は『続日本紀』（新日本古典文学大系、校注者青木和夫他、岩波書店、1990、以下『続紀』と称す）に記載されている。『続紀』は平安時代初期に編纂された勅撰史書であり、最終的には菅野真道らが 797 年に完成させた。

・文武天皇大宝元年（701 年）「追大肆凡海宿禰麁鎌を陸奥に遣わして金を冶たしむ」とある。追大肆とは従八位下であり、下位の位階である。解説ではこの時陸奥国で金は産出しなかったとある。

・文武天皇大宝 2 年 6 月（702 年）に「海犬養門に震す」とある。解説では震とは落雷のこととある。

・文武天皇慶雲元年（704 年）「従六位下阿曇宿禰虫名」に従五位下を授けるとある。

・元正天皇霊亀 2 年（716 年）、このころ奉膳従五位下安曇宿禰刀が居たことの記録がある（『本朝月令』、第 9 章参照）。

この頃より天皇の食膳職である奉膳（ぶぜん）職をめぐって安曇氏と高橋氏の争いが表面化する。それは朝廷での地位の優劣をめぐっての争いであり、詳細は第 9 章に記載する。

[ここに入力]

・元正天皇養老七年（723 年）「正六位上安曇宿禰坂持」に正五位下を授けるとある。
この頃に次のようなことがあった。

710 年　　元明天皇　平城京遷都

712 年　『古事記』完成

713 年　「畿内と七道との諸国の郡・郷の名は、好き字を着けしむ」という好字令がでている。つづいてそれらの国の風土記を作成させ、言上させた。

720 年　『日本書紀』完成

７－１６　聖武天皇紀（724～749 年）

・聖武天皇神亀 4 年条（727 年）「正六位上阿曇宿禰力（ちから）」に従五位下を授けるとある。

律令制度の中では、位階には正・従・上・下の 4 段階あった。下から昇進してくる場合従六位下、従六位上、正六位下、正六位上と上がり、そして従五位下となる。五位以上は貴族とされており昇殿を許され、しばしば天皇から饗応をうけており、六位以下とは大きな差があったようである。給与の面、待遇の面、身分上面などでさまざまな特典があったとのことである。

・このころ筑前国の志賀白水郎荒雄（あまあらお）の話がある。筑前国糟屋郡志賀村の白水郎と筑前国宗像郡の百姓の関係が強かったことを示すものである。詳細は第 8-4 章に記載する。

・聖武天皇の天平 6 年（734 年）の詔に応じて、海犬養宿禰岡麻呂が作った歌が『万葉集』に載っている。これは聖武朝を賛美する歌で巻 6 を代表する一首と評価されている（第 6-2 章参照）。

・聖武天皇天平 12 年 11 月条（740 年）「軍曹海犬養五百依（いほえ）を差（つかは）して発遣（はっけん）し逆人を迎えしむ」とある。

この年の 9 月に藤原弘嗣は九州の大宰府において反乱を起した。ただちにその討伐軍が編成され、海犬養五百依はその討伐軍の軍曹に任じられた。藤原広嗣の反乱は 10 月末には終わり、弘嗣は捕縛され、斬首された。前記は、このとき反乱軍の実情を調査するために、海犬養五百依が藤原広嗣の従者である三田兄人ら二十余人を聴取しに向かったという内容である。解説に「軍曹として出征した時の位階は不明だが、その後正六位上勲十二等に昇進。天平勝宝三年十一月（751 年）当時は橘左大臣家の家令、天平宝字五年三月（761 年）には摂津少進、同じころにまた右京少進」とある。当時国府に相当する職として摂津職、右京職があり、その中級職員として摂津少進、右京少進があった。位階は従七位上であり、下級官吏だった。

なお海犬養は姓として宿禰だと思われるが、ここでは姓は記述されていない。理由は不明である。また、前述の家令とは家務を統括する職であり、後世の家宰と同じと考えられる。するとこのころ海犬養氏は宿禰姓を失い、橘氏（姓は朝臣）に従属していたと考えられる。

・聖武天皇天平 16 年 2 月（744 年）条に天皇が「安曇江（あづみのえ）に幸（みゆき）して、松林を遊覧したまふ」

とある。

このころ聖武天皇は難波宮にたびたび訪れており、その際遊覧したと思われる。そしてこの頃安曇氏族は朝廷で天皇の近くに仕えていたと思われる。

・聖武天皇天平 18 年（746 年）「阿曇宿禰大足（おおたり）に従五位下」を授けるとある。

聖武天皇の時代は、東大寺・大仏建立という大事業が行われたが、その負担は民衆に重くかかり、世情不安な時代であったようである。その反映で貴族たちの反乱も起こっている。さらに、都をあちこちと移転しており、それらも人々の不安をあおっていたようにも思える。聖武天皇自身も大きな悩みと不安を抱えていたかもしれない。聖武天皇の天平時代は決して平穏な時代ではなかったようである。

７－１７　考謙天皇、淳仁天皇、称徳天皇、光仁天皇　紀（749 年～781 年）

・孝謙天皇天平勝宝 3 年条（751 年）「男安曇王に三嶋真人」の姓を授けるとある。

男安曇王とは廬原王（いおはらおう）の男子とのことであり、母が安曇宿禰の娘と思われる。これ以後は三嶋真人安曇と記載されている。

・孝謙天皇天平勝宝 5 年（753 年）「従五位下安曇宿禰大足を安藝守」に任ずるとある。

・淳仁天皇天平宝字 4 年（760 年）「正六位上安曇宿禰石成」に従五位下を授けるとある。

・淳仁天皇天平宝字 6 年（762 年）「従六位上安曇宿禰夷女（えびすめ）」に従五位下を授けるとある。

・淳仁天皇天平宝字 8 年（764 年）「正六位上安曇宿禰三国」に従五位下を授けるとある。

なお続いて「正六位上国見真人阿曇」という人が出てくるが、この人は母が安曇宿禰出身と思われる。

・正倉院の調布に「信濃国安曇郡前科郷戸主安曇部真羊・・・・主当郡司主帳従七位上安曇部百鳥　天平宝字八年十月」と記されたものがある。これは信濃国安曇郡から調として提出された麻布である。安曇部が安曇郡にいたことの根拠であり、安曇部でありながら、安曇氏を越えて郡司に任命されていたということになる。

・称徳天皇神護景雲 2 年（768 年）条に、勅して「令に准（なずら）へて、高橋・安曇の二氏を以て内膳司に任する者は奉膳（ぶぜん）とせよ。その他の氏を以てこれに任する者は、名付けて正（かみ）とすべし」とある。これは古くから安曇・高橋両氏が天皇の食膳に奉仕してきたことを示している。詳細は第 9 章に記す。

・称徳天皇神護景雲 2 年（768 年）条「従五位下安曇宿禰石成を若狭守」に任ずるとある。

・光仁天皇宝亀元年（770 年）条「典膳（てんぜん）正六位上安曇宿禰諸継に従五位下を授け、即ち奉膳に転す」とある。

典膳とは内膳司の次官であり、位階は七位相当とのことである。先の称徳天皇の勅に従って調整したと思える。

・光仁天皇宝亀 3 年（772 年）「従五位下安曇宿禰石成」に従五位上を授けるとある。

・光仁天皇宝亀 6 年（775 年）　高橋氏との争いが再開する。詳細は第 9 章に記す。

・光仁天皇宝亀 7 年（776 年）条

正月に「正六位上安曇宿禰清成」に従五位下を授けるとある。

[ここに入力]

「无位（むい）安曇宿禰刀自（とじ）」に従五位下を授けるとある。

三月に「従五位下安曇宿禰浄成を内膳奉膳」（正月の記述では清成とある）に任ずとある。

・光仁天皇天応元年（781 年）「従六位下安曇宿禰日目虫」に従五位下を授けるとある。

７－１８　桓武天皇紀（781～806 年）

・桓武天皇天応元年（781 年）「従五位下安曇宿禰刀自」に正五位下を授けるとある。

・桓武天皇延暦 3 年（784 年）「正六位上安曇宿禰広吉」に従五位下を授けるとある。

・桓武天皇延暦 8 年（789 年）「従五位下安曇宿禰広吉を和泉守とす」とある。

解説によるとその後、大同元年正月に従五位上で安房守、弘仁元年十月（810 年）に伊予権介となる。

延暦 11 年以降の安曇氏族の足跡は『日本後紀』（森田悌訳、講談社､2006）に記載されている。

・桓武天皇延暦 11 年 3 月（792 年）条「内膳司奉膳正六位上安曇宿禰継成を佐渡国へ配流した」とある。

この佐渡配流は以前から続いてきた安曇・高橋氏の争いの結果である。『日本後紀』の記述内容の要旨は次のようである。高橋・安曇両氏は神事の際の食膳の行列の順番について絶えず争っていたところ、前年の十一月新嘗の日に高橋氏を先とするように勅が出された。しかし安曇宿禰継成は不満で勅に従わず、職務を放棄し、出奔してしまった。そこで官司から死刑に処するべく提訴されたが、天皇の恩旨により流刑となったとある。結局、安曇宿禰継成は佐渡に配流されるという事態を招いたとある。詳細は第 9 章に記載する。

これは安曇宿禰氏にとって大きなダメージとなった。ただしこの後、大同元年（806 年）に「従五位上安曇宿禰広吉を安房守に任ず」とあり、従五位下から従五位上に昇進している。だから安曇宿禰一族が絶えたということではない。しかし朝廷での立場は低下したと思われる。

・桓武天皇延暦 13 年 10 月（794 年）平安京へ遷都し、山背国を山城国と名称変更がなされている

・桓武天皇延暦 16 年（797 年）正月「正六位上安曇王に従五位下」を授けるとある。

前述のことであるが、天平勝宝 3 年（751 年）「男安曇王に三嶋真人」の姓を授けるとあり、この「安曇王」とは別人物と思われる。

・桓武天皇延暦 18 年（799 年）「従五位下安曇宿禰大丘を大舎人（おおとねり）助に任じ、従五位上小倉王を内膳正に任じた」とある。

大舎人とは天皇に供奉して宿直や様々な雑用をこなす部署で、助とは副長で六位下相当の職だったとのことである。このとき安曇宿禰は内膳職から外され、位階も実質的に低下したようである。

・桓武天皇延暦 18 年（799 年）「天下に布告し本系帳（氏族の始祖名や事績・賜姓・本枝の別などについて記した帳簿）を進上させよ」と勅したとある。

[ここに入力]

当時氏族数は多数になり系譜が判明し難くなっていたようである。これは後年『新撰姓氏録』として完成する。

・桓武天皇延暦 21 年（802 年）条「右京の人阿曇継成らを隠岐国へ・・・・配流した。いずれも強盗の罪による」とある。

安曇継成は 10 年前に佐渡へ流されたのであるが、その後赦されて右京へ戻っていたと思われる。そして今度は強盗をしたというのである。名前は阿曇と変わり、姓はなくなっている。すっかり落ちぶれてしまったようである。

・桓武天皇大同元年（806 年）「従五位上安曇宿禰広吉を安房守に任じ」たとある。

安曇宿禰広吉は延暦 3 年（784 年）に従五位下を授かっていた。

７－１９　平城天皇紀（806～809 年）

安曇氏族の記述はない。

７－２０　嵯峨天皇紀（809～823 年）

・嵯峨天皇大同 4 年（809 年）「正六位上安曇部福太麻呂に外従五位下を授けた」とある。

安曇部が『記紀』等登場するのは、これが初めてである。安曇部福太麻呂はどこの在住か不明であるが、多分地方に分散して生活していたと思われる。外従五位下という位階は、中央の貴族からはずれた地方官であるということを意味している。

・嵯峨天皇弘仁元年（810 年）「従五位上安曇宿禰広吉を伊予権介に任じた」とある。

安曇宿禰広吉はこの時には 60 歳近い高齢であったと考えられる。そのようなこともあり、伊予守でなく伊予権介という下位職に任じられたと思われる。

・嵯峨天皇弘仁五年六月（814 年）「右大臣従二位藤原朝臣薗人らが勅を奉じて新撰姓氏録を撰述し、本日に至り完成し、上表した。」とある。

『録』は桓武天皇のときから 16 年かけて作成されたものである。

７－２１　淳和天皇紀（823～833 年）

・淳和天皇天長十年（833 年）「正六位上安曇秋継に外従五位下を授けた」とある。

この記述では姓の宿禰は記載されておらず、しかも外従五位という位階である。外というのは朝廷の外部という意味であり、前述の安曇部福太麻呂と同じく、中央の貴族から外れて地方官となったことを示している。このころには安曇氏族は全体としてもすっかり衰退してしまい、朝廷の中央から消えてしまったようである。

７－２２　仁明天皇紀（833～850 年）

『続日本後紀』（森田　悌　現代語訳、講談社 2010）がある。

・仁明天皇承和七年（840 年）条に「対馬島の和多都美御子神・（他３社）・を官社とした」とある。理由は不明である。

７－２３　平安時代以降の安曇氏族の消息

『録』は嵯峨天皇弘仁五年（814 年）に当時の氏族リストとして完成した。ただし、京（左京・右京）と五畿内に住む姓氏に限られており、また漏れているものもあったらしいとのことが『続日本後紀』に記載されている。

[ここに入力]

『録』には安曇宿禰（右京）、海犬養（右京）、凡海連（右京）、八木造（右京）、凡海連（摂津国）、阿曇犬養連（摂津国）、安曇連（河内国）が記載されている。当時、安曇氏族は健在であったことが分かる。ただし、その勢力がどうであったかは分からない。

安曇、海犬養、凡海氏は天武天皇の時に宿禰の姓を授かっていたのであるが、ここでは海犬養は無姓であり、凡海は連姓となっている。降格されていたのかもしれないが、はっきりしない。また安曇宿禰と安曇連の両者が、所在地は異なるものの存在している。なぜ両者が存在するのかはっきりしないが、多分天武天皇の時代以前の安曇の分家が残っていたのではないだろうか。凡海連も右京と摂津国とにそれぞれ在るが、これも同様の事情ではないかと思う。

その後の状況は『日本三代実録』(『読み下し日本三代実録』現代語訳、武田祐吉 ・佐藤謙三、 戎光祥、2009）により見ることができる。貞観 6 年 8 月（866 年）の記事に「阿波国名方郡の人、二品治部卿兼常陸太守賀陽親王家令正六位上安曇部粟麻呂、部字を改め宿禰を賜ふ。粟麻呂自ら言ひけらく、『安曇は百足宿禰の苗裔（のち）なり』と。」とある。

賀陽親王は桓武天皇の皇子であり、朝廷で要職についており、かなりの勢力を有していたと思われる。安曇部粟麻呂は安曇氏から離れ、賀陽親王の家令職に従事していた。そこで親王は長年の粟麻呂の働きに報いるために、朝廷に対し宿禰の姓を下賜するように働いたと考えられる。このころには安曇部は安曇氏族から離れ、自分であらたな主家を探し、そこで生きていたと考えられる。或いは安曇宿禰は衰退してしまっていたため、かつての名家である安曇宿禰を復活させたいという願いがあったのかもしれない。

安曇氏族の衰退が目に見えるようである。このような安曇氏族の衰退は、前述の海犬養五百依が聖武天皇天平 12 年 11 月条（740 年）のとき、橘左大臣家の家令になっており、藤原広嗣の乱の鎮圧軍に軍曹として参加していたころから始まっていたと思える。

平安時代初めのころにおいては、安曇宿禰（連）、海犬養、凡海連、八木造、阿曇犬養連の 5 氏族が実在していたことが分かる。しかしこれらの氏族の勢力は奈良時代から平安時代にかけてどんどん衰えており、朝廷の下級貴族となるかあるいは海犬養氏のように他の有力貴族に従属したと思われる。一方、安曇部は地方において勢力を強くし、信濃国安曇郷や隠岐国海部郡（後述）などで郡司に任じられ。また前述の粟麻呂のように他の有力氏族に従属したりしていった。そしてやがて中央ばかりでなくゆかりの地においても、安曇氏族の系譜は途絶えてしまうのである。

その原因はなんだったのか。中央の安曇氏族は、朝廷での地位低下に伴い経済的基盤を失くし、衰退せざるを得なかったと考えられる。しかしゆかりの地においては古くから土着しており、自分の土地を所有していたと思われる。それにも拘らず衰退したとすれば、それは地域における勢力争いに敗れて衰退或いは追放されたと考えられる。第 13 章で詳しく見ることにする。

８　安曇氏族は「海人族」だったのか

８－１　海神族と海人族のはじまり

海人族といわれる氏族

これまで多くの学者・研究者が安曇族は海人族(海神族)であり、多数の海人族の中の最有力氏族であったと語ってきた。なお、海人族の読み方として「あまぞく」と「かいじんぞく」のいずれなのかについては分からない。また沖縄では海人と書いて「うみんちゅう」と読むとのことである。

海人族とされる氏族には、安曇族、住吉族、宗像族がおり、それ以外にも海部氏、尾張氏、和邇氏等々の多くの氏族がいたとされている。さらに吉備氏、紀氏等は朝鮮半島との航海や海戦等に活躍していた氏族であり、そのように海上航海や戦闘で活躍していた氏族もいた。彼らも海人族と呼んでいいと思う。それらの海人族の中で、古代においては最有力氏族だったというのである。

海神族、海人族

「安曇族」という表現が使われるようになった経緯については第 4 章で述べた。ここでは「海人族」、「海神族」という表現の経緯について見る。

『紀』では「海神豊玉彦」（ただし読みは「わたつみとよたまひこ」だったようである）と記載されており、その故にその末裔である安曇氏族は海神の一族として理解されてきたようである。国学者たちは以前から、安曇氏族が祖神として海神豊玉彦命（綿津見命）を祀っていることから、海神族（かいじんぞく）と称していたようである。

『姓氏家系大辞典』(前掲) は姓氏家系を調べる際に誰でもまず開く書である。多くの人々に利用され、そして影響を与えてきた。ここに安曇氏族に関する様々な情報が記載されている。それによると、安曇連は綿津見命の末裔であるとし、綿津見命が生まれたのは博多付近の「橘（たちばな）小戸の檍原（あはきはら）」だとしている。そして「安曇氏ならびにその配下たる海部の民は海洋的大氏族たりしかば、早く各地に航海殖民すると同時に、朝鮮中国と通商しその文化を摂取せしかば、その富強天下に聞こえ」（安曇の項）としている。さらに志賀島で金印が出土したことに関して「これ日漢交通最古の記録なりとす。かくのごとく海部（あまべ）を率いる安曇氏が記録上最も早く中国と交通したるは、海部の民が早くより航海漁撈殖民に従事せし結果にして」（海部の項）としている。ここには明らかに安曇氏族＝海神族＝海人族という観念がある。これは前述の国学者たちの見方と同じである。

しかしこの見解には賛同できない。綿津見命は神話の中の話であり、歴史事実ではないからである。考古学的調査によると弥生時代前期に北九州地域には幾つもの国的な規模の大きな集落が誕生しており、それぞれが中国と交流していたことが分かっている。安曇氏族だけが中国と交流していたのではない。また金印と安曇氏との関係は全く不明である。このような事情を考慮すると、海神族という概念は神話と歴史を混淆した結果の産物とい

うことになる。

海人族

一方、民俗学者たちは、日本人の源流としての海人（あま）という概念に着目しており、海人族（あまぞく、かいじんぞく）という表現を受け入れたように見える。しかし安曇族＝海人族＝海人ということについて深く考察したとは思われない。そして後述することであるが、日本列島における海人たちの分布と安曇氏族の分布にはなんらの相関性はないのである（第 11 章参照）。つまり海人と安曇氏族とは同じではないのである。

にも拘らず、国学者たちと民俗学者たちは安曇族＝海神族＝海人族という説を受け入れたようである。そしてこの説が定着し、独り歩きし、安曇氏族の虚像が膨らんでしまっている。ただでさえ不明な点や謎を含んでいる安曇氏族がますます謎めいて、しかも歪曲されてしまっている。

例えば、安曇族は海人族なのだから、以前は南方で居住していたが、あるとき船で海上を渡って日本へやってきた。そして海上航海に優れており、中国大陸との間を自由に航行して、貿易を行っていたとなる。さらに、だから安曇氏は奴国の使者として後漢へ行き、金印を授与された。或いは普段は漁撈活動をしていたが、必要な場合には海上戦闘集団として戦いに参加しており、白村江の戦いにも参加した。等々と言うような話に膨れ上がってしまっている。そうして、安曇氏族があたかも海人族という異種民族であり、弥生人とは別民族であるかのような印象をまき散らしてしまっている。これは第 4 章で述べたことと同様である。

８－２　海人たちの神としての綿津見命

安曇氏族は自分たちの祖先は海の向こうから来た「わたつみ＝うみ」の神だと想っていたのかもしれない。しかし、安曇氏族がなぜ綿津見命を祖神として祭祀したのかという事情はまったく不明であり、なんとも言えない。

天皇家と安曇氏の関係

『記紀』神話は、安曇氏族は海神の末裔としており、いかにも安曇氏族＝海人族というように思わせている。しかしよく見ると大きな矛盾が見える。

『記紀』の山幸彦神話では、山幸彦（彦火火出見尊）は海神（綿津見神）の娘豊玉姫と結婚し、鵜草葺不合尊が産れた。そして鵜草葺不合尊は豊玉姫の妹である玉依姫と結婚し、4 人の男児が産れた。その四男が神武天皇である。すると海神（綿津見神）の娘は二代に亘って妃となっており、海神は神武天皇の外祖父となる。海神と天皇家は非常に深い繋がりがある。

さらに『紀』の神武天皇紀に、東征の際に熊野で大嵐にあったとき、兄の稲飯命（いなひのみこと）が「わが祖先は天神、母は海神であるのに、どうして陸で苦しめ、また海で苦しめるのか」と嘆き海に入った（入水した）とある。さらにもう一人の兄の三毛入野命もまた「母と姨（おば）とは、二柱とも海神である。それなのにどうして波をたてて私をおぼれさせるのか」と言って海

（常世国）へ行ってしまったとある。そうすると天皇家は、自分たちは海神・綿津見神と血縁関係にあると認識していたと考えられる。つまり天皇家もまた海人族であるということになる。これは安曇氏族が海人族であるということの不合理性を示している。しかしこれらの話は神話の中の話であり、歴史事実としては根拠のない話である

安曇氏族は海人たちを支配する過程で海人の神を取り込んだ

また安曇氏族は海人集団を支配する過程で、海人集団が神としていた綿津見命を自分たちの祖神として取り込んだと主張する説もある。この説では、もともと海人たちは綿津見命を自分たちの祖神として祀っていたというのである。

しかしこれは次のような事情から納得できない。安曇氏族は弥生時代から全国へ進出し、各地に定着するのであるが、前述したように安曇氏族の分布地域と海人（あま）の分布地域を比較してみると、両者には全く相関性はないことが分かる。つまり安曇氏族と海人とは同じではないのである。

そして全国に分布する海人たちみんなが綿津見命を祀っているのではない。住吉神や宗像神は有力な海の神であり、安曇氏族以外の多くの海人たちが祭祀している。安曇氏族は海人族の中の最有力氏族だったとされているが、安曇氏族に属さない海人たちはそれ以上に多数いたのである。海人集団を支配する過程で、海人の祖神を自分の祖神として取り込んだとする説には、かなり無理があると言える。

そもそも海人的生活は日本人の基本的生活特性の一つである。日本列島では縄文時代からあちこちの海辺で漁撈活動が活発に行われていた。それは縄文時代の貝塚遺跡が多数存在していることから分かる。海辺で漁撈活動を主として生活する人々は異質な民族ではなく、通常の縄文人だった。そして弥生時代の人々は内陸や海辺に分散して定住し、内陸では農耕を、海辺では漁撈を主として生活していた。愛知県豊橋市の瓜郷遺跡は弥生時代のものである。稲作の他に漁撈・狩猟も行い、半農半漁撈の生活を行っていたとのことである。弥生時代に海辺で、漁撈に頼って生活する人々はたくさんいたのである。その海辺の人々、ことに「海人」と呼ばれる人々の生活習慣は農耕民とはかなり異なっていたけれど、「海人族」という異種民族ではない。つまり「海人族」という民族は日本にはいないのである。

持衰の習慣と海神信仰

第 5 章で持衰の習慣について述べた。弥生時代の後半のころ、外洋航海する場合に、当時の海人たちが持っていた習慣である。それは航海の安全を持衰という人間に頼るものであり、海の神に祈るというものではない。つまり『魏志』倭人伝に記載された海人たちは持衰習慣を持っていたと考えられる。一方、安曇氏族は海神信仰を持っていたと思われるのであり、それは持衰というような原始的信仰とは異なるものである。綿津見命という海神は安曇氏族独自の神と考えられる。

８－３　『魏志』の潜水漁民

安曇氏族が海人族であるとする根拠ははっきりしないが、前述の事情の他に次のような

ことが考えられる。『魏志』（倭人伝）で倭国の北九州地域に潜水漁民がいたことが語られていたために、北九州志賀島付近で「海人（あま）族」たちが定住していたと受け取られてしまった。そして志賀島付近は安曇氏族の居住地域と考えられていたために、安曇氏族は海人族だったと短絡してしまったように見える。

しかし、『魏志』（倭人伝）の潜水漁民の記述は対馬国、一支国、末盧国（佐賀県唐津市付近）およびその周辺地域についての記述であり、奴国（志賀島）地域に限られた話ではない。そして魏の使者たちが末盧国（唐津市）に上陸したと言うことは、当時においては博多湾・志賀島よりも末盧国の方が外洋航海港として栄えていたと思われる。

こうしてみると、潜水漁民は対馬、壱岐島、唐津市および玄界灘沿岸地帯に広く分布していたのであり、志賀島だけに居たと言うことではない。

奴国の安曇氏族

弥生時代では北九州地域には末盧国、伊都国、奴国等々多数の国があった。安曇氏族の本拠地は筑紫国糟屋郡安曇郷・志珂郷とされており、現在の福岡市東区・古賀市・新宮市地域である。ここは奴国の範囲であった。この地域では水稲耕作が盛んであり、青銅器生産も盛んに行われており、当時の北九州における中心的地域だった。

奴国王は、『魏志』（倭人伝）の時代よりずっと以前、西暦 57 年に後漢へ使者を派遣して朝貢し、その結果「漢委奴国王」金印を授与されている。その金印が志賀島で出土している。なぜ朝貢したのか、なぜ金印が志賀島で出土したのか、詳しい事情はまったく不明である。当時において志賀島が奴国の範囲であったと言うことは納得できる。しかし、志賀島は奴国の中心地から遠く離れた辺境の島であった。安曇氏族の勢力範囲であったとしても、やはりその勢力範囲の辺境の地だったと思われる。

安曇氏族と金印の強い結びつきがあったと想定する場合には、安曇氏族は奴国で重要な地位を占めており、それ故に後漢への朝貢に参加したと思われる。つまり、奴国の有力者であり重要な役割を担っていたと考えられる。すると奴国の主要産業である水稲耕作と青銅器製造に関しても強く関わっていたと考えられるのである。その安曇氏族が辺境の地の志賀島に拠点をおいて、海人的生活をする海人族だとすることは不合理といえる。つまり安曇氏族が金印と強く関係しているとすれば、それは安曇氏族は海人族ではないということを示しているのである。

とはいえ、志賀島周辺に住む人たちは当然のことながら漁撈を主として生活していたと考えられる。この人たちは奴国の辺境に住む人々であり、そして安曇氏族の従属集団だったと思われる。つまり安曇氏族の大半は奴国の中心部（春日市・糟屋郡地域）におり、一部の人々が漁撈を主とする生活をしていたと考えるのが妥当である。

８－４　海人の統率者

つぎに考えられる理由は、安曇連の祖である大浜宿禰が「海人の宰」に任命されて、海人の統率者となったことである。

淡路島の海人の反乱

[ここに入力]

大浜宿禰は海人たちの反乱を鎮め、そのことによって海人の宰に任じられたのである。その反乱の原因や状況は不明であるが、反乱した海人たちは淡路島の海人たちだったと推測される。その状況については第 13-3 章に詳しく記載するが、要旨は次のようである。安曇氏族はこの時代には福岡周辺から播磨・摂津地域に進出してきて定着していた。当時、大和王権（橿原、難波地域）と九州そして朝鮮との間の交通は海路が主であり、その海路において明石海峡はルート上の重要な要衝であった。明石海峡を確保し海上ルートを安全に維持することは大和王権にとって非常に重要なことであった。そこで明石海峡・淡路島で反乱する海人たちを鎮圧することは重要課題であり、大浜宿禰を派遣して鎮圧する必要があった。もしも反乱した海人たちが他の地方、例えば九州の大分地方としたら、あえて鎮圧の軍を派遣することはなかったと考えられる。

海上支配権

こうして大浜宿禰は淡路島の海人たちを支配下に収め、海人の統率者に任じられたのである。そして安曇氏族は戦略的要衝である明石海峡を管轄する場所を拠点とし、海人たちを支配下に収め海運を支配し、海上支配権を握ったと考えられる。この時点では海人の統率者として海人族的性格が強かったと考えられる。

安曇氏族の凋落

しかしその後、大浜宿禰の子供である阿曇連浜子の時に、国家反逆罪を犯してしまい、安曇氏族は凋落するのである。海人の宰として栄えた期間は数十年に過ぎなかったのである。その辺の事情は第 13-3 章に記載するが、その要旨は次のようである。履中天皇即位のとき、阿曇連浜子は淡路島の野嶋の海人を率いて皇太子（後の履中天皇）暗殺クーデターに加担する。しかし失敗し捕えられてしまう。そして死罪を宣告されるが、減刑されて入れ墨の刑となった。この事件は天皇即位を控えた皇太子暗殺という国家反逆事件であり、重罪事件である。安曇連は当然のこととして海人の統率者としての任務を罷免されたと考えられる。その結果、その後の『紀』には、海上交通や船に関することで安曇氏族の記述はなにもない。それは安曇氏族の凋落を示している。

そして欽明天皇の時（553 年）王辰爾が船史（ふねのふひと）（船の行政管理官と思われる）に任じられている。王辰爾は百済系の渡来人であり、難波津・大和川の船輸送を担当し、そしてその陸上輸送に関しては弟の牛（津史（つのふひと）の姓を下賜された）が担当したとのことである。彼の一族は大和朝廷の船による物流を介して大和朝廷の財政業務に深く関与し、大きな力を付けていったとのことである（『日本古代氏族と国家』、直木孝次郎、吉川弘文館）。このように、阿曇連浜子の事件以降、安曇氏族は大和朝廷から縁遠くなり、大和朝廷の海運から外れてしまったのである。

また朝鮮遠征や造船の任務に関しても、他の氏族の活躍が記載されており、安曇氏族の活躍は記載されていない。つまり、安曇連浜子以降、安曇氏族は海人の宰としての任務をはく奪され、海人の統率者としての立場を失ってしまったと考えられるのである。

８－５　糟屋郡志賀村白水郎（あま）

[ここに入力]

万葉集掲載の志賀白水郎の歌

つぎの理由は、『万葉集』に掲載されている筑前国志賀白水郎歌十首（3860～3869）（『万葉集巻 16』（日本古典文学全集、佐竹昭弘他、岩波書店）である。これは筑前国糟屋郡志賀村の白水郎と筑前国宗像郡の百姓の関係が強かったことを示すものである。その説明に、神亀年間（724～729 年）に大宰府が筑前国宗像郡の百姓宗像部津麻呂を対馬に食料を送る船の船頭役に任じた。しかし彼は、自分は年を取って老い衰え、海路に堪えられそうにないと考えた。そこで滓屋郡（糟屋郡）志賀村の白水郎荒雄を訪ね、役目を代わってもらえないかと頼んだ。そのとき白水郎荒雄が、私は住む郡は違うが、長い間同様に船で生きてきた。志は兄弟より篤い。殉死することあるとしても辞することはないと答えた。そして肥前国松浦県から対馬を目指して出発した。しかし天候が急激に悪化し暴風雨となり、海中に沈んでしまった。その事故を悼んで作られた歌で、山上憶良臣が妻子に同情して作ったと記述されている。

安曇氏と宗像氏

黛弘道氏は「海人族のウヂを探り東漸を追う」（前掲）の中でこの歌に関連して、海人族として安曇氏は沿岸航路型・内国志向型であり、宗像氏は外洋航路・海外志向型だと指摘している。そして筑前国志賀村は安曇連の支配地であり、白水郎荒雄は安曇連の配下であったとしている。そして白水郎荒雄は海人であり、漁業・航海に長けていた。だから安曇連は漁業・航海に長けた海人族だとしている。黛弘道氏は安曇連が海人族であることの根拠について明確に記述していないが、全体の論調として見ると、このようになる。

白水郎荒雄に関する疑問

しかしこの歌から、白水郎荒雄が漁業・航海に長けた海人だということは納得できるが、それだけでは安曇氏族が海人族ということにはならない。そして当時の状況として疑問に思うことがある。

一つは、白水郎荒雄と表記しているが、阿曇部荒雄と表記していないのはなぜなのか。当時の志賀村に安曇連、安曇部という明確な安曇氏族はいなかったのではないか。つまり白水郎荒雄と安曇氏との関連は薄かったと思われる。

二つ目は、白水郎荒雄は漁業・航海に熟練しており海の天候予測に長けていたと思われるのに、なぜ暴風雨になるような日に出発したのだろうかという疑問がある。海人としてこの付近の海域を普段から航海していたとすれば、1～２日先の天候予測はできたはずと思うのである。そうすると白水郎荒雄は博多湾内での漁撈活動をしていたのであり、対馬までの外洋航海の経験は少なかったと考えられる。つまり海人としての外洋航海技術はつたないものだったのではないかという疑問がでてくる。

三つ目は、宗像郡の百姓津麻呂はなぜ海人津麻呂と表記されていないのか。宗像海人族は有力な海人族であり、外洋航海に長けていたと言われている。大宰府が輸送役として宗像郡の百姓津麻呂を任命したと言うことは、宗像郡の海人たちはそれなりの航海能力を持っていると認知されていたのである。そして海人の人数も多く、津麻呂以外に若く力のあ

る海人がたくさんいたと思える。それにも拘わらずなぜ、このときの航海では志賀村の白水郎に任務の肩代わりを依頼したのだろうか。そして、当時安曇連が健在であり、海人族としての力を持っていたとしたら、大宰府はなぜ直接に安曇連あるいは白水郎荒雄に食料輸送を命じなかったのだろうか。

博多から壱岐・対馬への島への食糧輸送

当時、壱岐の島への食料輸送は相当に危険であり困難な航海であったようである。まして対馬島への航海は大変危険なものだったと推測できる。そして前述解説文の内容とは異なり、津麻呂と荒雄の関係はただ友情に結ばれていたというより、もっと別の何かの事情により強く結ばれていたように思える。

壱岐・対馬への航海が難儀だったことは次の記述から分かる。『日本後紀』（前掲）によると、延暦 23 年（804 年）条に、大宰府から「壱岐の島の防人の食料には筑前国の穀物を当てていますが、運漕が困難でしばしば漂失しています」として、西海道から送られてくる防人を廃止し壱岐島内の防人のみで編成配置して、食料輸送に苦労しないようにと申し出ている。この言上は許可されたとある。

また『続日本後紀』（前掲）によると、承和七年（840 年）の記事として、対馬島司が「海上では風波の危険があり、貢上する調や四度使の携える公文書がしばしば海に沈んでいます」として、大宰府が所有する新羅船を一隻わけて欲しいと上申したとある。当時、新羅船（新羅国で建造された大型船）は外洋航海に倭船よりはるかに適していたようである。

こうしてみると、白水郎荒雄が航海に長けた海人だったと言うことに疑問がでてくる。そして安曇氏族が外洋航海に長けていたとは思えないし、まして中国との間の外洋航路を自由に航海していたなどとは考えられない。

８－６　安曇氏族と海洋航海技術

船の構造

安曇氏族が航海に優れていたとすると、優れた造船技術とそして操船技術をもっていなければならない。海上を船で航海する場合、船の構造は重要な要素である。外洋を航海する船と陸地沿いに航海する船の構造形状は大きく異なる。船の構造形状によっては沿岸航海しかできず、外洋航海などは無謀な行為だからである。そしてそれらは河川を通行する舟とも構造的には大きく異なるのである。従ってどのような船を使っていたかと言うことが重要ある。安曇氏族は一体どのような船を造りそして使用していたのだろうか。

当時の高速船

『記紀』に枯野（からの）と名付けられた船の話がある。『紀』では応神天皇の時、『記』では仁徳天皇の時の話であり、5 世紀始め頃の話である。この船は非常に大きな木（寸法は不明）を切り出して作られた丸木舟（刳り舟）と考えられる。かなり大きかったと考えられ、多数の漕ぎ手を備えていた。当時は非常に早く走ることができ、そのため大いに評判となったようである。おそらく当時の船としては最速の性能を誇ったと思われる。この枯野という船は、『紀』によれば伊豆国で造られ、『記』によれば大阪府高石市にあった巨樹を切

って造られたと記されている。誰が造ったか不明であるが、製作地から考えると、安曇氏族が造ったとは思えない。とすると、安曇氏族以外に高速の丸木舟を造り、海上で活躍する氏族が居たと言うことになる。その人々は、巨大な樹木を切り出してきて、刳りぬいて丸木舟に加工するのであるから、大きな集団・氏族であったと考えられる。

『紀』の応神天皇紀 22 年条に、兄媛(えひめ)を吉備の実家に「淡路の御原の海人八十八人をめして水手(かこ)として」舟で送ったとある。この船は高性能な丸木舟と推測され、八十八人もの漕ぎ手がいた。ただし交替要員も含まれていたかもしれない。ここでは淡路の御原の海人と記述されており、野嶋の海人ではない。仁徳天皇紀即位前記にも、韓国に滞在中の吾子籠(あごこ)を至急連れ戻すために「淡路の海人八十を差して水手」として使者を派遣したとある。また、岐阜県大垣市の荒尾南遺跡（弥生時代から古墳時代）から出土した壺にオールが 80 本ある舟の絵が描かれているとのことである。この舟は丸木舟と見える。

朝鮮渡航に使われた船

この頃すでに大陸、朝鮮半島との交流が盛んであったが、それに使われた船は大型構造船ではなく、このような丸木舟だったと考えられる。つまり朝鮮半島へ渡る場合、非常に多人数（80～88 人程度）の漕ぎ手をつけて、一気に対馬海流を乗り切って航海していたと思われる。そしてそれらの高速船は伊豆国、和泉国（高石市）、美濃国（大垣市）でも造られていた。これらの地域の氏族たちは海上航海において大いに活躍していたと考えられる。そしてこれらの地域の氏族は安曇氏族とは異なる別氏族である。

安曇氏族の造船技術

海人族と言われる安曇氏族はどのような造船技術および航海技術を持っていたのか全く不明である。造船や航海に関して、他の氏族の方が優れており、朝鮮半島との交流においても活躍していたと考えられる。前述の枯野舟は伊豆国で作られており、駿河湾一帯には造船技術に優れた氏族がいたことが分かる。また紀伊国には紀氏がおり、古くから有力な水軍を有して韓国との戦いに参戦していた。さらに吉備氏も古くから強力な水軍を有して韓国との交流や戦いで活躍していた。このように『紀』には中国・朝鮮との交流・戦いに活躍した氏族が多く記載されているが、安曇氏族についての記載はない。

結局、安曇氏族と造船技術および航海技術に関して、他の氏族に比して優れていたということは全く不明なのである。そして安曇氏族が外洋航海に優れていたとは考えられない。

当時の中国・朝鮮との航海

663 年の白村江の戦いで日本・百済連合軍は唐・新羅連合軍と海上で戦い全滅に近い敗北をした。その原因について、井沢元彦氏は船にあったと書いている（『逆説の日本史２古代怨霊編　聖徳太子の謎』井沢元彦　小学館　1997）。それによると、当時の日本の船は竜骨のない構造であり、構造強度の低い粗悪なものだったからとしている。竜骨のない構造船は外洋航海に不適であることは確かであり、海上戦いに不適だったといえる。

600 年代以降にたびたびに遣唐使を派遣した。その際、遣唐使船を仕立て、難波津を出発し、九州の那の津を経由して中国大陸へ向かったようである。時には 150 人乗りの船を４

槽仕立てて向かったこともある。しかしその遣唐使船はしばしば難破した。その原因は天候ばかりでなく、船と航海技術が外洋航海に堪えられなかったことが大きな原因と考えられる。またその頃渤海国から使節団がたびたび渡来しているが、多くの場合難破したり、北陸地域に漂着したりしている。当時の中国大陸・朝鮮半島との航海は命がけであり、運の良いものだけが渡航できたようである。

『続日本後紀』（前掲）によると仁明天皇承和六年（839 年）「大宰府に命じて新羅船を作らせた。これは風波に堪えることができることによる」とある。新羅船とは新羅で建造され、使用されていた様式の船である。結局、当時の日本の船・航海技術は未熟だったといえる。安曇氏族ばかりでなく、日本全体の船・航海技術はレベルが低かったのである。

８－７　農耕・文化的特性

農耕・灌漑技術

安曇氏族は海人的特徴よりも農耕民としての特徴をむしろ多く持っていた。前述したことであるが、『播磨国風土記』（前掲）によると、孝徳天皇（645～650 年）の時、阿曇連百足（ももたり）、阿曇連太牟（たむ）が播磨国の石海里（いわみのさと）で大規模な灌漑工事を行い、水田開発を行った。この灌漑工事は近くの林田川は水量不足であったために、その川を越えて数キロ離れた遠くにある揖保川から導水するという難工事であったが、それに成功している。このことは安曇連が水田開発や大規模な灌漑工事を行う能力を持っていたことを示している。この水田開発は天皇の勅により行われたとのことであり、このころ安曇氏族は天皇の近くに仕えていたと考えられる。

東国国司

また孝徳天皇の時（645 年）には安曇連は東国の国司に任命されている。これらは海人とは関連のない職務である。

仏教との関係

『紀』によれば推古天皇のとき阿曇連は法頭（ほうず）に任命されている。解説によると、法頭とは寺の財政を監督する職であり、俗人が任命されたとのことである。さらに孝徳天皇の時には安曇氏の氏寺として阿曇寺が摂津国難波付近にあった。これは四天王寺や法隆寺に続く寺であり、仏教導入期の創建である。国学博士だった旻（みん）法師が晩年にここで療養しており、そのとき孝徳天皇が見舞ったという寺である。建築物の詳細は不明であるが、立派な寺構えだったと思われる。安曇氏族がこの頃に氏寺を建立する力を持っていたということは、安曇氏族の勢力が盛んだったことを示している。そして仏教という外来文化の吸収にも積極的な文化的で先進的氏族だったと考えられる。

外交官職務

安曇連は推古天皇のころから大和政権の中央に復帰し活躍していた。『紀』によると、阿曇連比羅夫は百済国へ外交大使として派遣されており、続いて阿曇連頬足（つらたり）は西海使として百済国へ派遣されていた。また阿曇連稲敷は帝紀、上古諸事の編纂委員に選任されている。彼らは文官として重要な役職についていた。

[ここに入力]

安曇氏族は海人族と異なる特性が強い

こうした特性は、安曇氏族は海人族ではなかったことを示している。これまで安曇族＝海人族という考えが流布されてきたが、これは間違いと言える。安曇氏族が海と関係していることは確かであるが、それは安曇氏族の特性の中の一部分にすぎない。安曇氏族は大きな集団であったと考えられ、その中には海人と言われる人々がおり、同時に農耕を主とする人々がおり、そして青銅器製作を行う人々もいたと思われる。さらに仏教にもかなり深く関与し、外交官の職についていた文化的氏族だったと考えられる。このように安曇氏族は海人族以外の特性の方が強いのである。安曇氏族は海人族だったという先入観を捨てて、白紙の状態から安曇氏族の全体像を描くことが必要である。

９　膳職（かしわで）における安曇宿禰と高橋朝臣の争い

９－１　膳職のはじまり

古代氏族が大和王権の政治組織として組み込まれる過程で、古代氏族はウヂ（氏姓）として成立したといわれている（第 3 章参照）。その際軍事的集団として組み込まれた氏族と職業集団として組み込まれた氏族があった。安曇氏族は大王の食膳に奉仕する職業集団として、すなわち安曇連として成立したと言われている。それはすでに述べたように、応神天皇のとき大浜宿禰が海人の宰に任命された時と推測される。そのころ安曇氏族は播磨国に勢力を張っており、その地域の海人たちも支配していた。それで新鮮な海産物を大王の食膳に供することは容易だったと考えられる。これは安曇氏族が海人族だから大王の食膳奉仕の職に任じられたと言うことではなく、播磨国、淡路国一帯の海人を支配していたからである。なお後述するように、安曇氏族は応神天皇の時から食膳奉仕を職としていたようである。

９－２　争いの始まり

大王の食膳奉仕の役割は、安曇氏と高橋氏（古くには膳臣）との二氏が担当していたようであり、それゆえ両者は競合することになる。それは大和朝廷の中での勢力争いのようなものであった。大和朝廷の初期の頃には、安曇氏族は重要な地位にいて活躍していたと思われるが、その後律令制度が整ってくる頃には安曇氏族は徐々に衰退していったようである。高橋氏との争いは、安曇氏族にとって徐々に衰退する状況を打開してかつての栄光ある勢いを取り戻そうとする必死の思いがあったと思われる。その状況を見てみる。

天皇の食膳奉仕は古代では膳職と言われ、多くの氏族が関与していたようである。その中で安曇連および膳臣の二氏は古代から担当していたらしい。大宝律令（701 年）において、食膳奉仕の職は内膳司（ないぜんし）、大膳職（だいぜんしょく）、大炊寮（おおいりょう）、造酒司（みきのつかさ）に分離された。内膳司は、大宝律令以前は膳職という官司であったが、大宝律令制定時に、饗宴における食事の調理と配膳を担当する大膳職を分離して、天皇の日常における食事の調理と配膳および食料の調達を担当する官司として設立されたとのことである。

『続日本紀』の称徳天皇神護景雲 2 年（768 年）条に、勅して「令に准（なずら）へて、高橋・安曇の二氏を以て内膳司（ないぜんし）に任する者は奉膳（ぶぜん）とせよ。その他の氏を以てこれに任する者は、名付けて正（かみ）とすべし」とある。内膳司の長官は奉膳（ぶぜん）であり、次官は典膳（てんぜん）であった。高橋・安曇二氏を長官に任じる場合のみ内膳奉膳とし、他の氏の場合は正と称せという勅である。解説では内膳司の長官は二名であるが、高橋・安曇二氏を同時に任命することを避ける狙いだという説を記述している。ともあれ、高橋、安曇氏は別格の扱いを受けていたのであった。

９－３　高橋氏との争い内容

安曇氏と高橋氏（膳氏の後裔）との争いは元正天皇霊亀 2 年（716 年）頃から表面化する。

[ここに入力]

三品泰子氏が「論争する氏と天皇：『高橋氏文』の祭祀技術と起源神話をめぐって」（慶応義塾大学藝文学会）と題する論考を著して、その辺の事情を考察している。それによるとまず、「霊亀二年十二月神今食の日、奉膳従五位下安曇宿禰刀、典膳従七位上高橋朝臣乎具須比に語りて曰く、「刀は官の長たり、年の老たり。前に立ちて供奉せんことを請ふ」」ということがあった。これは宮廷の行事である神今食（じんこんじき）のとき、食膳を運ぶ順序についての争いごとである。神今食は、宮廷の年中行事の一つで重要な神事である。陰暦 6 月・12 月に行われる月次祭の夜、神嘉殿に天照大神　を祭り、前年に収穫した穀物（旧穀）を天皇が神と一緒に食する祭礼であり、天皇がみずから火を改め、新たに飯を炊いて供え、みずからも食する神事とのことである。なお新嘗祭ではその年に収穫された新穀を使うとのことである。この時、高橋朝臣は安曇宿禰の提案に対して「神事の日、御膳に供奉するは膳臣らの職にして、他氏の事にあらず」として拒否し、先に立って進んだとのことである。この神今食の両者の任務は、高橋氏は鰒（あわび）の羹（あつもの）という御食、安曇氏は海藻の羹（あつもの）という御食をそれぞれ作り、それを神殿の入り口まで運ぶことだった。そして神殿の内側に控える者に渡すところまでである。その際の運ぶ順番を争ったと言うのである。この順番というものには実質的な価値があるとは思えず、どちらでも良いのではないかと思えるが、しかし当時の両者にとっては非常に重要なことだったようである。

この高橋氏と安曇氏の争いに対し、天皇は「累世神事更に改むべからず。宜しく例に依りてこれを行ふべし」と勅判した。つまりこれまでのやり方、高橋が先で安曇が後という順番でやるように裁定したとのことである。

これ以降、食膳の順序に関しては天皇の裁定通り、高橋氏が先で安曇氏は後という順序で行われたとある。しかし約 50 年後、順序を巡る争いが再燃する。

光仁天皇宝亀 6 年（775 年）に、6 月の神今食において食膳を運ぶ際、安曇宿禰広吉が強引に前に進み出て、高橋朝臣波麻呂と行列の前後を争った。結局、広吉は行列から引き出されたとある。その結果両者ともに祓（はらい）を科され喧嘩両成敗のようになったが、高橋朝臣波麻呂は自分には罪はないことを天皇に向かって釈明した。その結果天皇の勅判が下り、安曇宿禰広吉はより重い祓を受けたとある。

９－４　安曇宿禰の巻き返しと失敗

そこで安曇宿禰広吉は安曇氏の食膳職の起源を崇神天皇の時に始まるとする「氏記」を提出し、安曇宿禰が先頭であるべきことを訴えた。その結果、行列の先頭となることができたようである。

その後、憤慨した高橋氏は太政官に訴えたところ太政官のコメントがでた。「その私記の文を検するに、行の下に追ひて注し、筆迹殊（ひっせきこと）に拙（つたな）く字庶（ちか）からず、奸詐（かんさ）の端ここに見（あらわ）れたり」として、食膳奉仕は高橋氏の方が古くから勤めていたと裁定した。そして食膳を運ぶ行列では、高橋氏を先とし安曇氏は後に在るべしと結論した。

これから次のようなことが分かる。それまで安曇氏は応神天皇のときから膳職を受け持っていたという安曇氏記を持っていたようである。しかし高橋氏はそれを指摘し、自分た

ちはもっと早く、景行天皇のときから受け持っていたと主張したようである。そこで安曇宿禰広吉はそれまでの氏記に加筆修正して、崇神天皇の時から膳職を受け持っていたと改ざんしたようである。太政官はそれを見て、その字はまったく拙い文字であり、後世の偽作と判断したのである。どうやら安曇氏の原本は応神天皇の時代に食膳奉仕を始めたという内容であったようである。

これに対して、天皇からは先帝の時には安曇氏が先で高橋氏は後という勅判定を下したことがあるので、妥協案として、「一先一後」という方式、つまり安曇氏と高橋氏が 1 回ごとに順序を入れ替える方式にしなさいという案を提示したとのことである。

９－５　安曇宿禰の佐渡配流

しかし安曇宿禰継成はその勅を聞かず、頻りに前に出ようとして争っていたとのことである。そして桓武天皇延暦 10 年の十一月新嘗の日は高橋氏を先とするようにとの勅が出されたのであるが、しかし「安曇宿禰継成は宣勅を奉らず、直ちに出でて退き、供奉ぜず」として職務放棄してしまった。その結果、桓武天皇延暦 11 年 3 月（792 年）条に「内膳司奉膳正六位上安曇宿禰継成を佐渡国へ配流した」とある。

この件について『日本後紀』（前掲）に経過説明が記載されている。その内容の要旨は次のようである。高橋・安曇両氏は神事の際の食膳の行列の順番について絶えず争っていたところ、前年の十一月新嘗の日に高橋氏を先とするように勅が出された。しかし安曇宿禰継成は不満で勅に従わず、職務を放棄し、出奔してしまった。そこで官司から死刑に処するべく提訴されたが、天皇の恩旨により流刑となったとある。結局、安曇宿禰継成は佐渡に配流されるという事態を招いたとある。

当時は流刑者の妻子は行動を共にすることが原則だったようである。従って家族全員で佐渡へ流されたと思われる。この佐渡流刑は安曇宿禰にとって大きなダメージとなったと思われる。

９－６その後の安曇宿禰

その後の安曇宿禰に関する『日本後紀』（前掲）の記述はつぎのようなものがある。桓武天皇延暦 18 年（799 年）「従五位下安曇宿禰大丘を大舎人助に任じ、従五位上小倉王を内膳正に任じた」とある。大舎人（おおとねり）とは天皇に供奉して宿直や様々な雑用をこなす部署で、助（すけ）とは副長で六位下相当の職だったとのことである。このとき安曇宿禰は内膳職から外され、位階も実質的に低下していたようである。

そして大同元年（806 年）に「従五位上安曇宿禰広吉を安房守に任ず」とあり、従五位下から従五位上に昇進している。だから安曇宿禰一族が絶えたということではないが、朝廷での立場は低下したと思われる。そして安曇氏族の没落は継成の事件を契機として急速に進んだと思える。しかし没落の原因はこの他にもあったように考えられる。つまり、律令制度の中で、古代氏族の大半が没落していった。大化の改新以降、古代氏族は存立基盤としてきた領有地を失くし、替わってそれらは天皇家に集中するようになった。結局、古代氏族の権力基盤は崩壊し、国家権力として天皇に集中するようになった。そして藤原氏を

中心とした官僚貴族が、天皇の名のもとに権勢を振るうようになる。そういう時代状況の中では、安曇氏族の没落は時代の流れであった。

９－７　食膳奉仕の職

食膳奉仕の職としては、海産物の提供の他に米と野菜そして酒などの提供もある。安曇氏族がそれらすべてを担っていたとは考えられない。多分、海産物の提供だけだったと思われる。そして海産物の提供としては、膳氏も担当していた。膳氏は天武天皇の時、683 年に高橋朝臣の氏姓を賜り、改名したようである。

安曇氏が神今式で担当したのは、わかめの汁物提供であり、アワビの煮物は高橋氏が提供した。さらに天皇の食膳には他の食材、米、野菜類も必要であり、それらは海人族でなく農耕者が提供するものである。農産物は日本の各地で生産しており、ことさらに納入氏族を定める必要がなかったと思われる。ただし、新嘗祭に供する米については、毎年占いをして生産田を決めていたようである。その生産田、悠紀・主基に決まった地の国司・郡司が大事に育て、秋に収めていた。アワビやわかめの海産物はどこでも収穫できると言うものではないので、特定の氏族が選ばれていたと考えられる。膳臣（高橋朝臣）は海人族とは呼ばれないが、食膳奉仕の職についている。天皇の食膳奉仕は海人族が行うことが慣例であったという説もあるが、前述の事情を見ると、そのようなことはないのである。

９－８安曇宿禰の末路

その後の状況として『日本後紀』（前掲）によると、桓武天皇延暦 21 年（802 年）条「右京の人阿曇継成らを隠岐国へ・・・・配流した。いずれも強盗の罪による」とある（第 7 章参照）。安曇継成は佐渡流罪の後、赦されて右京へ戻っていたと思われる。帰京後において、一族からの支援がなく、生活に困窮したものと思われる。そして今度は強盗をしたというのである。名前は阿曇と変わり、姓はなくなっている。すっかり落ちぶれてしまったようである。

１０　安曇連比羅夫は軍人ではなく文官だった

１０－１　安曇連比羅夫が軍人であるとする根拠はなにか

安曇連比羅夫は百済復興運動に際し、大将軍として白村江の戦いに参加し戦死したといわれている。そのような史実は全く不明であるが、さまざまなところで語られている。その真偽について検証してみる。まず、軍人として白村江の戦いに参加したとする根拠は、『紀』の二つの記述である。

（A）661 年 8 月百済救援軍の条

天智天皇即位前年（661 年）8 月条に、「前将軍大花下阿曇比邏夫連・小花下河辺百枝臣等、後将軍大花下阿部引田比邏夫臣・大山上物部連熊・大山上守君大石等を遣わして、百済を救わしむ。仍りて兵杖・五穀を送りたまふ」とある。「兵杖・五穀」とは武器・食料のことである。

（B）662 年 5 月王子豊璋帰国の条

天智天皇元年（662 年）5 月条に「大将軍大錦中阿曇比邏夫連等、船師一百七十艘を率て、豊璋等を百済国に送りて、宣勅して、豊璋等を以て其の位を継がしむ」とある。

これらの記述に基づくと、安曇連比羅夫が将軍であり、白村江の戦いに参加したと考えられる。しかし、多くの識者たちから、この記述内容は疑問とされており鵜呑みにできないようである。森公章氏は白村江の戦いの前後の状況について詳しく考察し、『「白村江」以後　国家危機と東アジア外交』（森公章、講談社、1999）を著している。その中で『紀』に記述されている当時の状況について次のように記している。「『紀』の編纂には、たとえば史料整理中の『日本世記』やその他各氏族の家記など、さまざまな史料が用いられたらしく、百済の役にも記事の重複、造作が指摘されており、豊璋帰還要請年次、豊璋の渡海および倭の百済救援軍派遣の様子など、いくつかの問題がある」と述べている。たしかに『紀』の編纂に当たってはさまざまな情報があったらしく、明らかに矛盾する記述があり、また「或る本に曰く」とか「日本世記に曰く」として別の異なる説も併記している。多分、安曇氏族の墓誌ないし氏記の内容も取り入れられていたと推測される。前記の二つの重要な記述についても、それと矛盾する別の記述も記載されている。つまり、救援軍派遣と王子豊璋帰還について、二つの異なる歴史が記述されているのである。そのどちらが史実なのか見極める必要がある。

なお『紀』は百済国滅亡に関連して、『日本世記』から多くの引用をしている。『日本世記』は、このころに日本に帰化した高句麗人である沙門道顕（釈道顕とも言う）が記述した歴史書であり、百済滅亡など当時の半島情勢を詳細に記載しており、信憑性も高いとされている。こうしたことを考慮しつつ、森公章氏の考察に基づきながら、前記の『紀』の記述内容について検証してみる。

[ここに入力]

１０－２　百済国滅亡と復興運動そして日本からの救援

まず百済国滅亡と復興運動の興り、豊璋帰還要請年次、豊璋の渡海および日本の百済救援軍派遣を時系列的に整理し、当時の状況をはっきりさせる。

朝鮮『三国史記』によると、百済国が滅亡したのは660年7月18日とのことである。その報告が9月5日に日本へなされた。この報告は、『紀』には沙弥覚従等が伝えたとある。彼らは百済国の正式な使人ではなく、百済国が唐・新羅に敗北した際に脱出し、日本へ急を伝えにきたと思われる。

日本は百済敗北の報告を受けて、百済救援を積極的に行うこととし、ただちに百済救援の戦備・軍団の準備に着手した。軍船を多数建造する必要があり、駿河国に勅して造らせたとあるが、その建造に3か月ほど要した。そして斉明天皇が自ら百済救援軍を率いて12月には難波津から出陣し、前線司令部の九州朝倉宮へ入ったのが661年5月である。この間随分長くかかっているが、その事情は不明である。救援軍は斉明天皇を総司令官として編成された。斉明天皇は女性であったが自らが総司令官となった。彼女は伝説の神功皇后の三韓征伐を想起していたのかもしれない。

一方、百済では唐・新羅連合軍に敗れた時、義慈王、太子、王子を始め大臣・将軍88人および12,807人が捕虜となり、唐へ送られたとのことである（『「白村江」以後』前掲）。そして百済国滅亡後すぐに百済遺民たちの抵抗運動が各地で起こり、全国に広がっていった。当初は自然発生的に興り、武器は不足しており、ゲリラ的なものだったとのことである。その中から鬼室福信等が徐々に主導権を握り、抵抗運動は相当な勢いに盛り上がった。各地の抵抗運動は地域によっては征圧されたものもあるが、中には合体連合して強力な勢力に発展したものもあった。その一つは僧道琛であり、もう一つは鬼室福信であった。そして661年には彼らの間に主導権争いが生じ、その結果、鬼室福信が僧道琛を殺害し復興運動の主導権を握ることになった。そして新羅・唐との戦線は、660年には一進一退の状況であったが、661年には復興運動側が優勢となったようである。

このような状況の中で日本側は積極的に百済復興運動を支援しようとしており、斉明天皇を総司令官とする救援軍を編成し、福岡の朝倉宮へ進出したのである。しかし斉明天皇は前線司令部の朝倉宮で661年7月24日に逝去した。これは救援軍にとっては大事件であり、救援軍百済派遣計画は一旦白紙に戻ったと思われる。中大兄皇子たちは天皇の遺体を伴って磐瀬宮に移った。磐瀬宮とは博多の那津宮家のことであり、ここで遺体をしばらく安置し、船で難波へ移送し、さらに11月に飛鳥の川原で殯した。天皇の死後、中大兄皇子は即位式を挙げずに政務を行い、那津宮家にいたとのことである。『紀』では7月に「長津宮に遷り居します。稍（ようやく）に水表（をちかた）の軍政（いくさのまつりごと）を聴めす」とある。解説には長津宮とは那津宮家のこと、水表とは海外のこととある。これは中大兄皇子が斉明天皇の葬儀に忙しく、百済救援軍のことが棚上げされていたが、ようやく百済救援軍について話を聞いたということである。天皇の葬儀と百済救援を同時に進めなければならず、大いに混乱していたことと思われる。

[ここに入力]

１０－３　日本からの救援軍の実体

斉明天皇が率いてきた救援軍がどうなったのかについて、『紀』は何も記述していない。天皇の葬儀は最優先で行われるべきものであり、天皇の喪中に大軍が発進することは通常では行われない。この時の百済救援軍は一旦解散になったのではないかと思われる。

百済復興運動側では、まず復興運動の盟主としての王子糺解（くげ）を迎えることが大事だった。百済では王族をはじめとして主だった人々は捕虜として唐へ送られてしまっていた。そこで日本に滞在していた王子豊璋を迎え、国王とすることを考えた。百済側では王子糺解と呼ばれ、日本側では王子豊璋と呼ばれているが、この両者は同一人物であると考えられている。そして百済側では、唐・新羅軍に攻められて敗れたときに武器類をすべて失ってしまっており、武器および食料も必要としていた。

日本側では救援軍の進駐を進める一方、王子豊璋の帰還と武器食料の援助を進めていた4たと考えられる。当初斉明天皇が百済救援軍を率いて進発した時には、唐・新羅攻撃軍派遣とともに王子豊璋の帰還、武器食料の提供も行う予定だったと考えられる。

しかし天皇の逝去に伴い、唐・新羅攻撃軍派遣は一旦棚上げとなったが、王子豊璋の帰還、武器食料の援助は先行して行うことにしたと考えられる。特に武器食料の援助を急ぐことにしたと考えられる。

そこで実行されたことが、前述の（A）661年8月の百済救援軍と考えられる。その救援軍の実体はあいまいである。この救援軍の実体について、『紀』の解説では「阿部比邏夫の発遣は2年（663年）3月条にも見える。しかし、これは重複でなく、この時の本軍は発遣されず、後に再編成されたのであろう」（この時とは661年8月のこと）と記述している。阿部比羅夫は蝦夷征討から帰ったばかりであり、この時は出陣しなかったと思われる。そして総司令官である斉明天皇の逝去の直後に、前将軍、後将軍を備えた大軍団を編成し百済へ派遣したとは考え難く、このとき軍団は派遣されなかったと考えられる。

そして『紀』は続いて9月に王子豊璋を、五千人余りの軍団とともに百済へ送ったことを記述している。この時の事情の詳細は次節で記すが、内容として信憑性高く、納得できるものである。8月に軍団を進発させ、続いて9月にまた軍団を進発させるということは不自然である。つまり8月の救援軍は戦闘することを目的として編成されておらず、当面の急務である武器・食料を輸送することを目的としていたと考えられる。

１０－４　百済王子豊璋帰還

つぎに百済王子豊璋の帰還要請の時期と帰還の時期について検証する。

百済国からの救援要請と王子豊璋帰還要請の時期について調べると次のようである。『紀』には660年10月に「百済の佐平鬼室福信、佐平貴智等を遣して、来て唐の俘一百余人を献る。中略。又、師（いくさ）を乞（まう）して救を請ふ。あはせて王子余豊璋を乞して曰さく、中略。方（まさ）に今、謹（つつし）みて願わくは、百済国の、天朝（みかど）に遣（まだ）し侍（はべ）る王子豊璋を迎へて、国の王とせむとす」とある。つまり660年10月に鬼室福信は、唐の捕虜百余名を倭国へ献じて、救援要請をし、続けて王子豊璋を王として迎えたいと要

請したと言うのである。

しかしこれは時期的に早すぎると考えられる。つまり、百済国滅亡が 7 月で、抵抗運動が興きたばかりであり、その抵抗運動は当初は自然発生的に興り、ゲリラ的な状況であり、各地でばらばらに戦っていたようである。抵抗運動側の指揮命令系統はまだ整っていなかったのである。その時期に唐の捕虜が百余名という多数も居たとは思えず、そして百余人もの唐人捕虜を日本へ移送することができたとは思えないのである。

このことは次の記述からも理解できる。斉明天皇 7 年 11 月（661 年）条に、「日本世記に云はく、十一月に、福信が獲たる唐人続守言等、筑紫にいたるといふ」とある。「福信が獲たる唐人続守言等」とは唐の捕虜のことであり、これを日本へ送致したのは 661 年 11 月というのである。すると 660 年 10 月に救援要請と王子豊璋の帰還要請があったということは、事実ではないことになる。

そして『紀』にはこの救援・帰還要請と矛盾する記述が別にある。斉明天皇 7 年（661 年）条に「夏四月に、百済の福信、使いを遣（まだ）して表（ふみ）を上（たてまつ）りて、其の王子糺解を迎えむと乞（まう）す」と記載している。そして「釈道顕が日本世記に曰はく、百済の福信、書を献りて、其の君糺解を東朝（みかど）に祈（まう）すといふ。」と記載している。つまり、661 年 4 月に福信から王子糺解を帰還させて欲しいという書状がきたのである。そのことは釈道顕の日本世記にも記載されているというのである。これは事実として断定してよいと考えられる。

このような事情から、百済からの救援・帰還要請は鬼室福信により 661 年 4 月になされたとするのが正しいと考えられる。これは、斉明天皇が博多の那津に至り朝倉宮へ入る直前の事である。日本からの百済救援軍はまだ進発しておらず、博多湾付近に滞在している時期である。その後、斉明天皇が逝去してしまうので、中大兄王子（天智天皇）は前述したように武器・食料の送付を急ぎ、続いて王子豊璋の帰還実現を進めたと推測できる。

そして『紀』661 年 9 月条に、「皇太子（ひつぎのみこ）、長津宮に御（おはしま）す。織冠（おりもののこうぶり）を以て、百済の王子豊璋に授（さづ）けたまふ。復（また）多臣少將敷（おほのおみこもしき）の妹を妻（めにあは）す。乃（すなわち）大山下狭井連檳榔（さゐのむらじあぢまさ）・小山下秦造田来津（はたのみやつこたくつ）を遣わして、軍五千余りを率て、本郷（もとつくに）に衛り送らしむ。是に、豊璋が国に入る時に、福信迎へ来、稽首（をが）みて国朝（くに）の政（まつりごと）を奉（あげ）て、皆悉（ことごと）に委（ゆだ）ねたてまつる」と記載されている。この内容は、王子豊璋に大職・小職の官位を授け、多臣の妹を妻とし、五千人の軍団を付けて、百済へ帰還させた。福信は出迎え、国政をすべて豊璋に返上したというものである。

これは（B）662 年 5 月王子豊璋帰国の条と明らかに矛盾している。そこで百済の王子豊璋が帰国したのがいつかと言うことについてもっと掘り下げてみる。

『紀』の斉明天皇紀の補注九に「百済滅亡後の動乱」とする解説が記載されている。それには「新・旧唐書、三国史記などの海外史料を書紀の記事と対照させながら、経過を略述すると以下の如くである」として、660 年 7 月百済滅亡後の復興運動の状況について述べ

ている。その中で王子豊璋と日本の救援軍の到着について、海外史料は記すところがないが、旧唐書、百済伝から判断すると、「豊璋の帰国は 661 年冬のことと考えられる」と記載している。この情報は信ずべきものである。

このように情報がいろいろあり混乱しているがそれらを整理すると次のようになる。661 年 4 月に鬼室福信から王子豊璋の帰還要請があり、日本側では直ちに応じたと考えられる。斉明天皇出陣と逝去によって多少の遅れはでたものの、8 月には武器・食料を供給し、9 月には王子豊璋に織冠を授け、五千の軍を付けて送り出した。そして秋から冬にかけて、百済復興運動側に王として豊璋が加わり、百済復興運動の士気が高かまった。これは当時の状況から時系列的に妥当なものと考えられる。

すると（B）の記述内容は間違いということになる。この記述には他にもいくつかの疑問点が指摘されている。阿曇連比羅夫の肩書として、「大将軍」と「大錦中」がついているが、「大将軍」に任命されたという記録はない。軍団が大きい場合には大将軍がおり、そして将軍が数人いるのが通常の軍団編成である。この場合は、そのような大軍団ではないのである。さらに「大錦中」は後年の天智 3 年 2 月に制定された位階であり、この時にはなかったものである。この記述には、将軍として安曇連比羅夫しか記載されておらず不自然である。また船師 170 艘を率いて行ったというが、他の軍団派遣では兵士の数で表示している。これは軍団としての規模をあいまいにしているように見える。そして解説は、三国史記（新羅紀）には白村江の戦闘に参加したのは「倭船千艘」とあり、旧唐書には倭兵の船「四百艘を焼く」と記載されていると指摘している。これらの情報によると、大将軍安曇連比羅夫が百五十艘の船で出陣したということとは大きな食い違いがある。結局のところ、（B）の記述は信憑性に乏しいと言えるのである。

王子豊璋は、鬼室福信からの 661 年 4 月の帰還要請を受けて、661 年 9 月に日本を出発し、秋ないし冬に百済へ入り、福信たちに迎えられ、王位に就いたことになる。

この時、狭井連檳榔・秦造田来津が軍五千余りを率いて同行し、彼らはその後百済に止まり復興運動の戦いに参戦していた。なお、この時に安曇連比羅夫が王子豊璋に同行し、王位就任を支援したということは『紀』には何も記載されていない。しかし安曇連比羅夫は王子豊璋と親しい間柄であったこと、以前には日本の大使として百済宮廷の事情にも詳しかったことを考えると、そのようなことは十分にあり得たことと思われる。

661 年から 662 年にかけて百済復興運動側は有利な状況だったらしい。ことに 661 年冬は寒気が非常に厳しく、唐軍は食料補給に困窮したようである。しかしその後は新羅側からの反撃により徐々に劣勢となり、662 年冬には苦戦を強いられるような状況になった。そして 662 年（天智元年）12 月に百済王豊璋は都を周留から避城（へさし）へ遷都する計画を建てるに至った。それに対して朴市田来津（えちのたくつ）（上記の秦造田来津と同一人）一人が強く反対したが、結局遷都したとある。この時点では秦造田来津、狭井連檳榔は百済国に滞在し、百済王豊璋等と行動を共にしていた。この遷都は新羅の反撃に遭い失敗し、再び周留城へ戻ることになった。

[ここに入力]

１０－５　日本からの救援軍

661 年 8 月の救援軍は前述のように、食料および武器の運搬供給を行ったのみで、戦闘には関わっていなかったという説が合理的と考えられる。そして続いて 661 年 9 月には、百済王子豊璋は戦闘集団と共に百済へ渡り、復興運動側の指導者の地位に就き、百済復興の戦いに参加した。ただしこの軍隊は五千人規模であり、新羅・唐に正面から対抗できる勢力ではなかった。

そこで日本側はさらに 663 年 3 月に前将軍上毛野君稚子・間人連大蓋、中将軍巨勢神前臣訳語・三輪君根麻呂、後将軍阿部引田臣比羅夫・大宅臣鎌柄を司令官とする３軍団体制で、2 万 7 千人の軍隊を派遣した。この軍団と先に上陸していた秦造田来津、狭井連檳榔の五千人の軍団が白村江の戦いに臨んだのである。

その後さらに、『紀』663 年 8 月 13 日の条に、百済王が「廬原君（いほはらのきみ）臣、健児万余を率いて、正に海を越えて至らむ」と諸将に語ったと記載されている。ただしこの庵原君臣の話はこれだけであり、その実体は全く不明である。多分、百済王が味方の士気を高めるために流した虚報ではないかと思われる。そして安曇連比羅夫が白村江の戦いにどのように関与したかは、何の記述もなく全く不明である、少なくとも元外交官だったものが戦闘に参加したとは考えられない。

１０－６　安曇連比羅夫は外交官だった

安曇連比羅夫の動きについて考えてみる。『日本世記』によると、百済王子「豊璋」＝「翹岐」＝「糾解」と言うことになる。『紀』の舒明天皇紀 3 年 3 月（631 年）条に「百済の王義慈、王子豊章（ほうしょう）を入（たてまつ）りて質（むかはり、身替）とす」とあり、豊璋（豊章）はこのとき人質として来日したことが分かる。このころ安曇連比羅夫が百済への使人だったかどうかははっきりしない。

また皇極天皇元年（642 年）2 月条に「翹岐を召して、阿曇山背連の家に安置（はべ）らしむ。」とある。安曇連比羅夫はこの年正月に舒明天皇の葬儀に参加するために帰国したところだった。そのような時期に翹岐の面倒を見るという厄介事を与えたのである。当時、翹岐と共に日本へ送り込んだ弟の塞上がいつも悪事を働いていて日本側を困らせていたようである。朝廷では翹岐とその弟の塞上の扱いに困っていたと思われる。安曇連比羅夫は百済国の事情に通じており、翹岐とも古い付き合いがあった。そこで安曇連比羅夫に面倒を見させたのかもしれない。すると、安曇連比羅夫は翹岐の来日以来の付き合いのある親しい関係だったと思われる。約 30 年前からの古い付き合いがあったことになる。始めて知り合ったとき、阿曇連比羅夫は百済大使であり壮年だったと思える。それから 30 年経過しているのであり、かなりの年輩、老齢になっていると思われる。

一方、安曇連家では比羅夫から頬垂へ代替わりしている。斉明 3 年（657 年）には阿曇連頬垂は西海使小花下として百済大使として活躍している。安曇連比羅夫が百済大使であった時期は、その以前、舒明天皇、皇極天皇の時であった。安曇連家では比羅夫は引退して、頬垂に代わっていたと思われる。頬垂はこの後も外交官として活躍しており、天智 9 年（670

年）には新羅へ派遣されている。

このように見ると 663 年の白村江の戦いのころには、安曇連比羅夫は老齢であり外交官活動から引退していたと考えられる。とはいえ豊璋とは深く関わっていたのであり、豊璋が百済国再興のため立ち上がるに際して、比羅夫も老体を奮って援助したと言うことは十分に推測できる。その老齢の元大使が大軍を率いて戦闘最前線に出陣すると言うことは考えられない。

こうしてみると結論として、『紀』の（A）、（B）の記述内容は安曇連の家記から引用したと思われ、安曇連が大活躍したように宣伝脚色されたものと考えられる。（A）の記述では、百済復興側に武器と食料を送ったと言うのが事実であって、そのとき安曇連比羅夫は多分同行したに過ぎないと思える。彼はすでに引退しており、「将軍」安曇連比羅夫と言うようなことではなかった。

そして（B）の記述では、そのような事実はなく 661 年 9 月条の記述を引用して記述していると考えられる。ただし、このときに安曇連比羅夫は王子豊璋の付き添いとして同行し、文官的立場での補佐をしたということはあったかもしれない。

このように阿曇連比羅夫が軍人であり、白村江の戦いに参加して戦死したということは、事実とは考えられない。安曇連はかつて浜子が犯した皇太子暗殺事件以降、軍事力は最小限に抑えていたと思われる。その後の活動をみても、海上戦闘集団を有していたとする形跡はなにもない。

１１　全国の綿津見神社と安曇氏族

１１－１　綿津見神社の調査

安曇氏族は綿津見命を祖神として祀る氏族である。すると、綿津見命を祀る神社が日本全国のどこにあるか調べることによって、安曇氏族が全国に分布定着した地を探すことができると考えられる。そこで全国に分布して存在している綿津見神社、綿津見命を祀っている神社について神社の由来等を調べ、安曇氏族との関連の有無を調査した。調査した神社数は総数で８５４社であり、その県別集計数を下表に示す。

表 11-1　調査した綿津見神社の県別数　：　合計　８５４　社

県名	神社数		県名	神社数
北海道	6		滋賀	11
青森	3		三重	14
秋田	8		京都	10
山形	2		大阪	10
岩手	7		兵庫	15
宮城	5		奈良	2
福島	20		和歌山	4
群馬	2		鳥取	21
栃木	2		島根	33
埼玉	3		岡山	39
茨城	5		広島	32
千葉	8		山口	26
東京	3		徳島	25
神奈川	6		香川	10
山梨	1		愛媛	44
静岡	56		高知	46
岐阜	2		福岡	130
長野	9		佐賀	61
新潟	10		長崎	37
富山	2		熊本	53
石川	3		大分	33
福井	5		宮崎	13
愛知	13		鹿児島	4
			沖縄	0
小計	181		小計	673

合計　854　社

[ここに入力]

調査対象とした神社は、志賀海神社所蔵のリスト（穂高神社経由で受領した）に記載されたものである。それらは神社の名前は綿津見と無関係であるが、綿津見命を主祭神として或いは合祀して祀っているものである。

また調査中に新たに見出したものもあり、それらはその都度追加した。綿津見系の神社であっても、祭神として豊玉姫命、玉依姫命が祭祀されており、綿津見命は祀られていない神社が多数在った。それらは神武天皇・天皇家との関係から祭祀されていると考えられるので、綿津見神社から除外した。また海外（樺太、ハワイ等）にも綿津見神社があるが、それらは近世に移住した日本人が建てたものと考え、除外した。

調査方法は、現地訪問することを原則としたが、遠隔地の神社、宮司が常駐していない神社が多いので、神社年鑑およびインターネット情報（神社庁データ、訪問記投稿記事）により調べることとした。安曇氏族との関連がありそうな神社であるが情報不足の神社については現地訪問あるいは電話、手紙により問い合わせた。

１１－２　安曇氏族と関連ある神社

前述のリストに記載された綿津見神社について調べたところ、安曇氏族と関連する神社はそれほど多くないことが分かった。調査結果として安曇氏族との関連の有無について、県別に要約したものを以下に記す。

１）北海道の神社（リスト記載の神社数　６社）

いずれも江戸時代以降の創建である。江戸時代以降に入植した人たちが、漁業繁栄や海上安全を祈願し、海の神を祀ったのが始まりである。記紀の記述や山幸彦説話等により綿津見命（海神、龍王）は海の神として、また天皇との関係が強いことから、漁業繁栄および海上安全の神として尊崇され祭祀されていたと思われる。

安曇氏族との関連は見いだせない。

２）青森県の神社（神社数　３社）

漁業繁栄や海上安全を祈願し、既存の神社に綿津見命を後世に合祀したと思われる。

安曇氏族との関連は見いだせない。

３）秋田県の神社（神社数　８社）

神社創建は中世以降であり、綿津見命はその後に合祀されている。漁業繁栄や海上安全を祈願したものと思われる。

安曇氏族との関連は見いだせない。

４）山形県の神社（神社数　２社）

詳細は不明であるが、青森、秋田と同様と思われる。

住吉神社（高畠町）には海津見大神と筒男大神が合祀されている。多分、氏神としてではなくて海の神として祀られたものと思われる。また温海町はゆかりの地との説があるが、綿津見神社はない。

安曇氏族との関連は見いだせない。

[ここに入力]

５）岩手県の神社（神社数　７社）

いずれの神社も創建は平安時代以降であり、綿津見神はその後に合祀されたものと思われる。

安曇氏族との関連は見いだせない。

鵜鳥（うのとり）神社の由来：平安の初め 803 年卯子酉（うねどり）山薬師寺として建立されたのが始まりとも、また 807 年卯子酉大明神として開眼されたのが起源とも言われている。建久元年の義経伝説にまつわる鵜鳥神社御縁記には、鎌倉南北朝時代には鵜鳥神社は何らかの形で存在したと推定されるとのこと。祭神は鵜草葺不合尊、玉依姫、海神ノ命（ﾜﾀﾂﾐﾉﾐｺﾄ）（神社庁データ）が合祀されている。「うねどり様」の呼び名で知られ、大漁と安全祈願、縁結び、安産の神様として古くから信仰されている。

陸塩神社の由来：1395 年、津谷川城主林崎東九郎敬神の念篤かりしが、摂津の国播磨国海神の社を平素崇敬し、遂に村内の鎮護の神としてその神霊を勧請し、古来六社山大権現と称し、御祭神底津綿津見命・中津綿津見命・上津綿津見命・底筒男命・中筒男命・上筒男命、六柱の神を奉祀、当時の開発に努められ、御稜威著しく効を奏し、航海者・漁業者は更なり。近郷の崇敬最も厚き神社なり（以上神社庁データ）。当時、海の神として綿津見命および筒男命の 6 神が考えられていたようである。

６）福島県の神社（神社数　２０社、飯館村の綿津見神社を追加）

神社の大半が年鑑・神社庁データでは由来等詳細は不明である。判明した神社から推測すると、中世以降に漁業・航海・水の神として合祀されたのではないかと推測される。福島県の海沿いの地域、相馬市・南相馬市・双葉郡には綿津見神社が多数ある。これらの神社の由来は不明であるが、飯館村の綿津見神社については、宮司に電話で聞いた。それによると苕野（くさの）神社から平安時代に勧請し、その後綿津見命を合祀し、同時に名称も変更したとのことである（詳細後述）。他の綿津見神社も同様ではないかと推測される。

安曇氏族との関連は見いだせない。

綿津見神社　相馬郡飯館村草野　（宮司の話より）

当初は苕野神社と称していた。創立は大同２年（807 年）に前述の浪江町苕野神社から勧請したこととされている。このころ東北地方では広範囲にわたり宗教改革のような現象が起きていた。その後 1620 年に綿津見神社と改称し、その時から綿津見命を合祀している。地域には綿津見神社が多数あるが、それらとの関連はないとのこと。神輿を担いで海へ入り、榊でお祓いをする「はまおこし」という祭礼行事が以前は行われていた。

苕野神社（福島県双葉郡浪江町請戸東迎 38）

式内社（『延喜式神名帳』記載神社、927 年編纂、以下『神名帳』と記す）

祭神：闇淤加美（くらおかみ）神 、五十猛神 、大屋津姫命 、抓津姫命 であり、綿津見命とは関係ない。

創建：養老元年（717 年）に荒氏が請戸小島に社を建てて奉斎したのに始まり、その後島が海没したため、これを現在地に遷座した（この島は現在海中に暗礁として残っ

ている)。

縁起に関する伝承に、海から流れ着いた女神を祀ったという内容の話が幾つかある。近世においては貴布根大明神と呼ばれていた。

７）宮城県の神社（神社数　５社）

青巣稲荷神社は大同２年（807 年）創建で、当初は観世音菩薩を祀っていたとのことである。その後、近世になって綿津見命を合祀したと思える。また荒嶋神社は創建時代不明であるが、当初は弁天を祀っていた。その後昭和 36 年に、社殿改築と名称変更し、その際綿津見命を合祀した。他の神社は中世以降の創建である。

宮城県には、「安曇」姓の人が現在約 100 人いるとのことであり、全国で飛び抜けて多い。しかしその事情は不明である。

安曇氏族との関連は見いだせない。

なお日高見神社（石巻市）で大綿津見神が祀られているとの情報があるが、『神名帳』では祭神は天照大神であり、綿津見神との関連は見えない。

８）群馬県の神社（神社数　２社）

年鑑・インターネットで検索できず、また手紙での問い合わせにも返信なし。詳細は不明である。

安曇氏族との関連はなさそうである。

９）栃木県の神社（神社数　２社）

八龍神社の創建は平安時代のようであるが、その他詳細は不明である。渡神社も詳細不明である。

安曇氏族との関連は見いだせない。

なお、安住神社（栃木県塩谷郡高根沢町）は「あずみ」ではなく「やすずみ」と読む。安曇氏とは関係ない。由来は、新井吉明が 899 年に国家鎮護のために摂津住吉神社の大神を分霊し勧請したことに始まる。祭神は筒男命３神と神功皇后である。名前と実体にずれがある例である。

１０）茨城県の神社（神社数　５社）

茨城県には「八龍神社」「龍神社」が 9 社あるとのことであるが、祭神は高靇神（たかおかみ）　闇靇神（くらおかみ）である。綿津見神は後世に合祀されたと思われる。

安曇氏族との関連は見いだせない。

１１）埼玉県の神社（神社数　３社）

詳細は不明であるが、中世以降に合祀されたと思われる。

安曇氏族との関連は見いだせない。

１２）千葉県の神社（神社数　８社、渡海神社を追加した）

渡海（とかい）神社（銚子市）の祭神は綿津見大神であり、706 年創建とされるが詳細は不明。宮司の話では、当時九州の方から長崎地区へやってきた人々がおり、その人たちが創建した。そこは海草の良く取れるところであるが、「和布刈り」神事などはしていない。

[ここに入力]

イゴ・エゴ（福岡市周辺で食習慣がある）のことは聞いたことない。また安曇族との関連については全く知らないとのこと。

瀧蔵神社では明治に合祀されたようである。他の神社の詳細は不明である。

安曇氏族との関連は見いだせない。

１３）東京都の神社（神社数　３社）

詳細は不明であるが、江戸時代以降の創建であり、その後に綿津見命が合祀されたと思われる。

安曇氏族との関連は見いだせない。

１４）神奈川県の神社（神社数　５社）

５社のうち４社は、創建が江戸時代以降で、綿津見命はその後に合祀されたものであり、安曇氏族との関連は見いだせない。

残りの１社は子之（ねの）神社（湯河原町）の境内社の龍神社である。ここは式内社ではないが創建は西暦 700 年と言われ、古くからある神社である。子之神社の祭神は大己貴命、素戔嗚尊、他であるが、龍神社の祭神は海住神（わたずみのかみ、綿津見神と同じ）である。神社の由来には、竜王・妃・王子が船でこの地に到来し、この地を開拓したとある。宮司の話では、神社の長い変遷の歴史の中で祭神は変わっているが、本来の祭神は龍神社に祭られている綿津見神であるとのこと。竜王と言うのは海神豊玉彦命、またの名は綿津見命である。すると安曇氏族はこの地に進出してきて開拓し定住したが、しかしその後安曇氏族は衰退して他の氏族（穂積氏かもしれない）にとって代わられたと言うことになる。現在ではその痕跡はほとんど残っていないが、ここは安曇氏族ゆかりの地といえる。

子之神社、宮司の話

「綿津見命は当神社の摂社・龍神社の祭神です。このやしろには、相殿として、歴代宮司、氏子信徒の祖霊も併せて祭られています。由緒の中で、表現がまずかったのですが、綿津見命、当神社の場合「海住神（わだずみのかみ）」が、氏子の祖霊と言うことではありません。ただ、当神社の始まりは、竜王、妃、王子が、当地を開拓し、その霊地が、真鶴岬の三石でありますことは、由緒に述べてあります。祭神の変遷は、いずこの神社でもありますことでして、当神社も長い歴史の中で、現在の祭神へと移り変わり、本来の祭神は、摂社に祭祀されているわけです。

安曇族にご関心がおありのようですが、安曇族の祖神である、安曇磯良は、太平記にのみその名が出てくる神であり、神功皇后の三韓征伐の折に、皇后に、塩満珠、塩干珠を献上し、戦を勝利に導いたことから、志賀海大明神として祭祀され、また鹿島神宮、春日大社も、本来の祭神は、この安曇磯良であったことが、太平記の記述から判断されるわけです。志賀海神社以外は、鹿島、春日ともに祭神は変化していますね。また安曇磯良は、古事記、日本書紀などには出ていずに、綿津見命が、磯良に当たること、また住吉大神も、同じ性格を持つ神と言われています。安曇族は、全国にその勢力を持ち、当神社の隣町であります、「熱海」も、安曇族と関連する土地です。私の推測もありますが、伊豆山神社は、

この関連のやしろであり、ここから、先程の三石が見えるわけで、平安の末に、ここの権律師であった、阿多見聖範と言う人物は、この名前、また職掌からも、安曇族の末裔であり、当地における安曇族の長の家系であったと思うのです。彼の孫が、あの北条時政です。北条家の三つ鱗の紋は、その神話に大蛇伝説があり、また伊豆山から見る三石を意識したものと思うのです。古代海洋民族は、星を見ながら移動しました。その星の中で、聖なる星座が、オリオン座であり、安曇族も、これを重んじたのが、新しいところでは、北条氏の紋、古いところでは、住吉三神、また春日大社の神奈日山である、「三笠山」につながると思います。」

１５）山梨県の神社（神社数　１社）

神部神社は式内社であり、860 年創建とのことである。祭神は伊弉諾尊が黄泉の国から戻って禊祓をした時化生した「祓戸ノ九神」である。記紀の神話に基づいて祭祀したものと思われる。『神名帳』には関係氏族は秦氏とある。

富士吉田市小明見・大明見は安曇氏族ゆかりの地との説があるが、この地域に綿津見神社はない。また南アルプス市に穂見神社がある。式内社であり、祭神は保食神である。神社の名称から穂高見命との関連がありそうであるが、全く関連は見えない。

安曇氏族との関連は見いだせない。

１６）長野県の神社（神社数　９社：川会神社、氷鉋斗売神社、正八幡宮神社を追加）

長野県には『抄』に記載された安曇郡があり、「信濃国安曇郡前科郷戸主安曇部真羊」と記載された麻布が正倉院御物の中にある。これは奈良時代の調布であり、安曇氏族が当時居住していたことの証拠といえる。安曇郡はゆかりの地と言える。

なお、黛弘道氏（「海人族のウヂを探り東漸を追う」（前掲））は「信州には到るところ海洋民定着の跡を検出できる」と述べている。しかし信州に海人族が多数進出してきて定着したことは理解できるが、彼らのすべてが安曇氏族であったかどうかは不明である。今回の神社調査により安曇氏と関係あると考えられる神社は次のようである。

穂高神社（安曇郡、現在の安曇野市）は式内大社であり、創立年代は不明であるが、平安時代ないし奈良時代と思われる。祭神は穂高見命、綿津見神、他であり、『神名帳』でも古来より安曇氏族が祀る神社とされている。

川会神社（安曇郡、現在の安曇野市）は式内社であり、673 年造営といわれる。地元では古来より安曇氏族が祀る神社とされ、当初は前科郷（現在の池田町地域）にあったとのこと。なお、祭神は底津綿津見命の一柱のみである。

正八幡宮神社（安曇郡、現在の安曇野市明科七貴）神社の伝承に、川会神社が慶長時代の大洪水で社地共に流失し、わずかに残った丸い上石と共に八幡宮へ合祀されたとのことである。そして大綿津見命が合祀されているとのことである。

氷鉋斗賣神社（更級郡、現在の長野市）は式内社であるが、創建年代は不詳である。主祭神は宇都志日金拆命であり、氏子の伝承に「安曇氏が下ってきた」とある。安曇氏族との関連が深いと考えられるが、他に安曇氏族の痕跡はなく、あいまいである。

[ここに入力]

玉依比売命神社が埴科郡（現在長野市）にある。ここは式内社であり、主祭神は玉依姫命である。しかし綿津見命は祀られていない。玉依姫命を祀る神社は全国に多数ある。それは神武天皇の母としての玉依姫命を祭祀しているように思え、安曇氏族との関連は見えない。

長野県の他の神社では綿津見命は後世に合祀されたようである。海と関わりのない長野県の場合、地域住民（氏子）と漁業・航海との関連はない。合祀の事情は水の神として雨乞い祈願、あるいは移住してきた住民がかつての居住地で祀っていた神を勧請した等が考えられる。

新海神社（佐久市）は、初めは新開（にいさく）神社であり、それが新開（しんかい）神社になり、さらに新海（しんかい）神社へ変わってきたと言われている。そして新開（にいさく）のサクは、宇都志日金拆命のサクからきているとして、佐久における安曇族の痕跡であるという説がある。しかし、新海神社の祭神は綿津見命と全く関係ない神であり、安曇氏族との関連は見えない。

また松本市安曇村は明治以降に合併した時に、新たに命名したもので、安曇氏族との関連はない。

１７）新潟県の神社（神社数　１０社）

いずれの神社も創建年代は平安時代末以降かあるいは不明である。そして綿津見神は神社創立以降に合祀されたように思える。佐渡島の八幡若宮社の境内社渡海神社の場合も後世に航海の安全を祈願して境内社として祭祀したと思われる。また関川村安角（あずみ）は安曇氏族ゆかりの地との説があるが、綿津見神社はない。

安曇氏族との関連は見いだせない。

１８）富山県の神社（神社数　２社）

創立年代不明であり、詳細も不明である。

安曇氏族との関連は見いだせない。

１９）静岡県の神社（神社数　５６社：ただし浜松市堀谷の六所神社と焼津市の船玉浦神社を追加）

静岡県には非常に多数の綿津見命を祀る神社があり、その中に式内社が６社ある。しかし神社の名称は綿津見神社でなく、伊東市に海津美神社が在るのみである。それらの神社では綿津見命は祭神として合祀しているが、いずれも安曇氏族との関連を見出すことはできない。６社の式内社では、当初は別の神を祀っていたが後世において名称変更して綿津見命を祀る神社に変遷している。浜松市の六所神社はその例である。この点では安曇氏族との関わりがありそうにも見えるが、名称変遷の時代は中世以降と推測され、また筒男命も同時に祭祀している。中世以降に海の神として祭祀したと思え、安曇氏族との関わりは不明である。

六所神社

浜松市地域を中心として六所神社が７５社以上ある。そしてそれらの神社の相互の関連

はないとのことである。浜松市宮口および堀谷の六所神社の宮司の話では、現在は綿津見神と筒男神を祀っているとのことである。これは『神名帳』記載の神と異なっており、祭神の変遷があったと思われる。他の神社も同様と思われるが、未調査である。この祭神の変遷の事情は興味深いことであるが、不明である。現在の祭神は綿津見命三神と筒男命三神である。これらの神が同居しているということは、記紀神話が定着した後世の時代において、氏神としてではなくて漁業および航海の守護神として祭祀されたと考えられる。

浜松地域は愛知県渥美・豊橋の続きであり安曇氏族が定住していた地と考えられるが、綿津見神社との関連においては安曇氏族との関連ははっきりしない。今後の調査課題である。

船玉浦神社は綿津見神と住吉神が合祀されている。宗像神社と共に焼津港の守護神として崇拝されている。この神社は漁業と航海安全の神である。綿津見神が住吉神、宗像神と並んで海の神として敬われていたことを示している。安曇氏族との関連はありそうであるが、はっきりしない。

２０）愛知県の神社（神社数　１３社、ただし名古屋市の綿神社と蒲郡市の赤日子神社を追加した）

『抄』によると渥美半島付近は、渥美郡渥美郷があった地域でありゆかりの地と考えられるが、その周辺地域である濃尾平野全域で綿津見神社は見当たらない。名古屋市北区元志賀地域には弥生時代の朝日遺跡がある。ここは弥生時代前期から中期にかけての大規模な集落跡であり、弥生人が最初に進出してきた時に、先住の縄文文化地域と対峙していた最前線集落であった。

ここには綿(わた)神社（式内社）がある。綿神社の現在の祭神は玉依比売命、応神天皇であるが、古くから志賀海神社と同様に安曇氏が奉斎する神社と言われている。『神名帳』でも関係氏族として安曇氏族と記載されており、『大日本神砥志』その他の古文書に祭神として綿津見神が記載されているとのこと。

また蒲郡市には赤日子(あかひこ)神社（式内社）があり、現在の祭神は彦火火出見尊、豊玉彦命、豊玉姫命であるが、『渥美半島の文化史』（愛知大学総合郷土研究所研究叢書８）によると安曇氏が祭祀する神社であるとしている。

さらに岡崎市には綿積神社がある。これは式内社ではないが古くからの神社であり、綿積命が祀られており安曇氏族との関連を想わせる。これらは、この地域が安曇氏族と関わりの深いことを示している。

渥美郡渥美郷があった渥美半島付近においても綿津見神社は見当たらない。

なお伊良湖水道の神島に八代神社がある。明治に地域の神社を合祀したとのことである。主祭神が綿津見神であることは、神島地域では綿津見神社の影響が強く残っており、ゆかりの地と思われる。（三重県の節参照）

この東海地域においては、安曇氏族との関わりは明白であるが、綿神社・赤日子神社では祭神が綿津見命ではないこと、また綿津見神社が少ないこと、安曇でなく「渥美」と表

記されること等は興味深い謎である。

２１）岐阜県の神社（神社数　２社）

神明神社は多数あるが、その中で岐阜市御望の神明神社は綿津見命を合祀している。ここには古くより海神社（よみは不明）があったとのことである。その海神社と安曇氏族との関連があるかもしれないが、今のところ不明である。

岐阜市はかつて厚見郡厚見郷があった地であり、ゆかりの地と言える。しかし詳細については不明であり、今後継続調査が必要である。なお「厚見寺跡」が岐阜市寺町にある。岐阜市教育委員会によると、寺の創建年代は７世紀末、創建者は不明とのこと。厚見郷は岐阜市南部地域と推測されているが、厚見寺との関連については不明とのことである。しかし、この地域の厚見氏（安曇氏）の氏寺と考えられ、創建者は彼らと考えられる。

岐阜市地域は安曇氏族ゆかりの地と考えられる。

２２）石川県の神社（神社数　３社）

神社名称は綿津見神とは無関係であり、後世に合祀されたと思われる。その事情については不明である。

安曇氏族との関連は見いだせないが、今後の調査が必要と考えられる。

奈豆美比咩（なずみひめ）神社（石川県羽咋郡志賀町安津見（あづみ））は主祭神が豊玉比咩命であり、綿津見神社ではないが、興味深い事情がある。この神社は式内社であり、701 年創建とされている。神社の伝承によると、三人の姫を連れ、桃の木船に乗船、能登国桃ヶ浦へ入港し、各地に立寄り、遂に安津見の「おたび」へ到着した。その地域に窟居し良民を苦しめる土賊を平定し、三姫をこの地に留め、人々に建築法を教授、田畑の開発を奨励したとある。近くに陵と伝えられる円墳もあるとのこと。奈良・平安時代には繁栄し、戦国乱世に頻発する兵火により灰塵に帰したが、その後江戸時代には最も隆盛を極めたとのことである。志賀町、安津見という地名と神社の伝承話を考慮すると、安曇氏族との関連があるように見える。そして舞鶴市・丹後地域では安曇氏族は駆逐された形跡があり、その際、この地に逃げてきたと推測することもできる。今後の調査研究が期待される。

相見神社（石川県羽咋郡宝達志水町麦生）は式内社であり、現在の祭神は大国主命であり、綿津見神とは無関係と思われる。しかし次のような異説もある。相見という社号は大海の当て字だと考えられ大海郷一の惣社として、当地に居住した海神族奉仕の社であるともいわれている。祭神としても綿津見神、海童神、海底童命などの説もある（『大日本史』、『神紙志料』等）。

２３）福井県の神社（神社数　５社）

神社由緒の詳細は不明であるが、神社名称は綿津見神と無関係であり、綿津見命は後世に合祀されたと思われる。

安曇氏族との関連は見いだせない。

２４）滋賀県の神社（神社数　１１社）

琵琶湖の湖北地域にはかつて伊香郡安曇郷（古くにはイカコグンと読んだ）があった。

[ここに入力]

しかし今は西阿閉地区に「安曇橋」（あどばしと読む）と刻まれた石柱が残っているのみである。この地域の神社は戦国時代の戦乱の中で焼失して絶えてしまったとのことである。綿津見命を祀る神社が伊香郡（現長浜市）に２社あるが、ここでは安曇氏族との関連は見えない。

また湖西地域の安曇川町は町史によれば、安曇氏族が弥生時代に開拓した地域とのことであり、「安曇」、「安曇川」（あどと読む）という地名が残っている。この地は伊香郡安曇郷の隣であり、古くには高島郡と称していた。このようなことからこの地はゆかりの地と言える。しかし安曇川町地域では綿津見神社は残っていない。そして安曇氏族は継体天皇以前の時代に三尾氏に征服されて、安曇氏族は大和地域へ強制移住させられてしまったとのことである。

なお安曇川町川島に阿志都弥（あしづみ）神社がある。式内社であり、祭神は島津彦命である。ネットの情報では、「阿志都弥（あしづみ）」は「安曇（あづみ）」のなまった表現であるという説がある。そして神社の祭神の系譜に「志賀神」、「金折命」、「豊玉姫」、「玉依姫」があり、安曇氏族と関連があるという説である。しかし、地元ではそのような扱いはされていないとのことであり、そして祭神の系譜は後世のさまざまな情報を合成した内容と思え、信憑性に欠けると言わざるを得ない。

琵琶湖の湖西地域・湖北地域は安曇氏族ゆかりの地と考えられる。

２５）奈良県の神社（神社数　２社）

奈良県では綿津見神社は少なく、安曇氏族との関連を見いだせない。

２６）京都府の神社（神社数　10 社、ただし宇豆貴神社を追加した。他に関連神社として老人嶋神社、笑原神社、大川神社がある）

京都府の丹後地方には『抄』によると丹後国加佐郡凡海郷があった。そこは凡海連の居住地だったと考えられる。また神社祭神にもさまざまな安曇氏族の痕跡がみられる。この地域はゆかりの地と考えられる。

籠（この）神社（宮津市）の主祭神は彦火明命であり、相殿に海神（わたつみのかみ）が合祀されている。宮司は海部（あまべ）氏である。海部氏の系図は平安時代初期に作成されたものが現存しており、昭和 51 年に国宝指定されている。

相殿に海神を祀っている事情ははっきりしないとのことである。古代史の中では、海人部（海部）が創設されたときその統率者として大浜宿禰（安曇氏の祖）が任命されている。つまり海部氏は統率者である安曇氏に敬意を表して、その祖神とされる海神を祀ったのではないかと思われる。一方、海神とは住吉神のことであるという説もあり、これによると海神とは筒男命と考えられる。

宮司の話では、過去においてたびたび朝廷から出兵要請があったり、地域での勢力争いに巻き込まれたりして、神社としては苦しい時代が続いたとのことである。また海人の宰、つまり海部の統率者が阿曇連だったということについては、日本書紀の編者たちがいい加減なことを書いたことであり大変に迷惑していると苦い顔をしていた。

[ここに入力]

大虫神社は与謝郡与謝野町温江にあり、明治 14 年に阿知江神社を合祀した。大虫神社は、往古は大江山の池ヶ成に鎮座していたが中世に今の地に遷ったとされる。この地は阿知江神社の地であったが、遷ってきた大虫神社の名称のみが残ったという可能性もあるとのこと。阿知江神社の祭神は少童命であり、いまも大虫神社に合祀されている。祭神が少童命とされる事情は不明であるが、度会延経は『神名帳考証』において「あつえ・あちえ」と「安曇（あづみ）」との関係を仄めかしているとのこと（ネット情報：大虫神社）。そうすると、古代において安曇氏が神社を祭祀していたが、その後勢力争いに敗れて名前が変わり阿知江神社となったのではないかとの推測もできる。現在の所在地は海からかなり離れた山奥であり、当初在った場所から追われてきたのではないかとの推測もできる。

矢田神社の現在の主祭神は建田背命（彦火明命の六世孫とのこと）であり、配神として和田津見命がいる。海部直は建田背命を祖神としており、建田背命及其御子武諸隅命、和田津見命を祀ったと言われている。鎮座地は「久美浜町海士」であり、海人と関わりの強い地域であることがわかる。また『古代海部氏の系図』（金久余市、学生社、1999、p103）によると祭神は元は「綿積神」だったとのことである。安曇氏の存在を推測することができる。

老人島（おいとしま）神社は冠島（雄島）にあり、現在の祭神は天火明命・日子郎女命とのこと。しかし祭祀を行っているのは地元の凡海郷（現在は野島、小橋、三浜村）の人々である。するとかつては凡海連の祖神綿津見命を祀っていたが、安曇氏族の衰退に伴い海部氏が祭祀するようになり、祭神を入れ替えたのではないだろうかと思える。

笑原（のはら）神社はかつての凡海郷の野島、小橋、三浜村の総氏神として祭祀されていたが、その後舞鶴市紺屋町に遷座したと考えられるとのこと。いまは笑原（やはら）神社と呼ばれ、祭神は天照大神　豊受大神　月夜見神である。しかし高橋卓郎氏によると元来は冠島凡海息津嶋（おおしあまおきつしま）の神、綿津見命だったと推測できるとのことである（『海と列島文化２日本海と出雲世界』「現代に生きる冠島の古代信仰」高橋卓郎、小学館、1991）。『神名帳』には関連氏族として海部・凡海連と記されている。神社が遷座した事情は、凡海連の衰退に伴い追われて移動したからではないだろうか。

宇豆貴（うづき）神社は式内社であり、主祭神は伊邪那岐命と 宇都志日金拆命 である。安曇氏の氏神神社的存在だったと推測できる。現在地は海から離れた場所で、周囲は水田が多い。神社の境内は手入れが行き届いており、地元の人たちに大事にされているようである。

大川神社は由良川の下流部にあり、冠島より遷し祀ったとの伝承がある。前述の高橋卓郎氏によると、加佐郡では最高の神階をもち宮津の籠神社とともに正一位とのこと。

以上の神社は、かつてこの地域が凡海連の居住地であったことを強く示唆している。安曇氏族はいつの頃か滅亡してしまい、その後海部氏（海部直）がこの地域を支配するようになったと推測できる。

２７）和歌山県の神社（神社数　４社）

[ここに入力]

紀国には多くの海人たちが居住しており、また有力な水軍が本拠地としていた地である。当然のこととして海の神を祀る神社が多数あったと思われる。しかし綿津見命を祀る神社は４社のみで、それも合祀しているに過ぎず、安曇氏族の影は薄い。

安曇氏族との関連は見えない。

２８）三重県の神社（神社数　１４社）

八代神社は伊良湖水道の中の神島にあり、主祭神は綿津見命である。ここは渥美半島との関わりも深く、安曇氏族（渥美氏）との関連を推測させる。弥生人たちは東方進出にあたり、美濃国地方を経由する他に、伊勢から伊勢湾を越えて伊良湖岬へ渡ったと考えられている。神島はその通り道である。

鈴鹿市の小川神社には綿津見命が合祀されている。ここでは綿津見命は住吉さまとも呼ばれている。そして境内の案内板では「上津綿津見神（住吉さま）：海の守護神、　中津綿津見神（住吉さま）：航海・漁業の神、　底津綿津見神（住吉さま）：商売繁盛・子授け・縁結び」と説明されている。綿津見命と住吉神（筒男命）とが混在しており、安曇氏族の祖神としての特性は消えてしまっている。

神島は安曇氏族のゆかりの地と思われる。

また、鳥羽市には海士潜女（あまくぐりめ）神社があり、祭神は潜女神である。この神は「海女のお弁」とのことである。海女たちが祭祀したと思われるが、綿津見神でなく海女のお弁を祀っている点は興味深い。つまり、この地域は安曇氏族と関わりがない海人たちが居住していたのである。安曇氏族＝海人ではないことを示している。

２９）大阪府の神社（神社数　１０社　ただし住吉大社境内社大海神社（祭神豊玉彦命）、岸和田市の夜擬神社（祭神布留多摩命）、吹田市垂水神社（末社に大綿津見命が祀られているらしい）の３社を追加した）

大阪市（摂津国）には住吉大社の境内社志賀神社があり、少童神三神が祭祀されている。少童神は住吉大社宮司の津守氏の氏神とのことである。

また境内社大海（だいかい）神社は式内社であり、祭神は豊玉彦命と豊玉姫命であるが、『神名帳考証』によると大綿津見命が祀られていたとある。関連氏族は津守氏とある（『神名帳』）。

津守氏は明治以前では代々住吉大社宮司として仕えていたとのことであるが、明治 4 年の神職・社家の改訂令により失職したとのことである。津守氏と安曇氏との関係はどうなのか、よく分からない。住吉神と綿津見神が同居している神社も多くあり、これらの事情もよく分からない。

履中天皇即位のとき、阿曇連浜子が住吉仲皇子の反乱に加担したことが『紀』に記載されている。この時代安曇氏族は摂津国で活躍していたと考えられる。そして難波地域には「安曇江」や「阿曇寺」が存在していたことから、ゆかりの地であることは確かである。しかしこの地には綿津見神社が残っていない。隣接する播磨国には安曇氏族の氏神と思われる海（わたつみ）神社があることから、播磨国の方が本拠地だったと思われる。（兵庫県

の項参照）

現在大阪市中央区船場の安堂寺町地域は「渥美連合」と称している。かつて阿曇寺があった場所とのことで、阿曇寺が変遷して安堂寺になったと言われている。ここは難波宮跡の隣であり、かつて安曇氏族が活躍していた地域と推測される。

摂津国（大阪市難波地域）は安曇氏族ゆかり地と考えられ、その詳細については第 13-3 章で詳しく述べる。

河内国には安曇氏族の八木造がいたことが分かっている。八木造は『録』によると「和多罪豊玉彦命の児の布留多摩乃命の後」とあり、安曇氏族の一族とされている。八木氏は河内国和泉郡八木郷（現在の岸和田市八木地区）を本拠地としていたとのことである。その地に古代から式内社である夜疑（やぎ）神社があった。明治時代に近隣の神社を合祀し、隣接の中井町に夜擬神社として設立した。現在は社殿の改修が完了し、立派な社殿が建っている。以前は、周辺一帯は水田地帯だったとのことである。主祭神は布留多摩命である。布留多摩命は綿津見命の次男であり、八木氏は安曇氏の一族と考えて良いと思われる。しかし八木氏と安曇氏の関係は詳細不明である。また淡路島の八木村が八木氏の故地であるという説もあるが、これについては兵庫県の項に記述する。

河内国（岸和田市地域）は安曇氏族ゆかりの地と考えられる。

３０）兵庫県の神社（神社数　１５社　ただし豊岡市小島の海（かい）神社を追加した）

神戸市垂水区（播磨国）に式内社海（わたつみ）神社があり、祭神は綿津見三神である。ここは、『系譜集成』によると海神綿積豊玉彦命の本拠である。海神社の由緒書きでは航海安全、漁業繁栄の神として祀られている。社殿は海を向いて建っており、海から本殿に向かって参道があり、二つの鳥居が建っている。海から参拝した様子がうかがわれる。

さらに古代においてこの地は「海事に従事していた人々を治め、この地域に勢力をもっていた豪族」が海大神を祭祀し神社を創建したと伝承されている。また神社の西方約 550m の所には兵庫県下最大の前方後円墳である五色塚古墳がある。築造は四世紀末から五世紀初めとされ、瀬戸内海の海上航路の重要地である明石海峡を望む高台にある。この墳丘を覆っていた茸石は、明石海峡を挟んで対岸の淡路島から運んできたとのことである。五色塚古墳は今復元されている。その墳頂に上ると、明石海峡は眼下にあり、淡路島も目の前に見える。明石海峡を通過する船を監視するには最適の場所である。この地は摂津と九州を結ぶ海上航路の要衝地であり、航路確保のための重要な場所である。これらのことから、古代にこの地で活躍していたのは、海人の宰として海上交通を支配していた安曇氏族と考えることは合理的と言える。そして海神社は摂津国・播磨国地域に進出した安曇氏族の氏神神社だったと考えられる。播磨国の東部の摂津国より地域は安曇氏族の重要な活動拠点であったと考えられる。神戸市垂水区地域は安曇氏族ゆかりの地である。

しかし海神社の由緒書では、神功皇后、豊玉姫命、彦火々出見命等の天皇家との関連を強調し、安曇氏族については「海事に従事していた人々を治め、この地域に勢力をもっていた豪族」という表現を使い過小評価している。安曇氏の名前を抹殺しようとする動きが

過去にあったかもしれない。それは、安曇川町の「安曇　あど」や東海地方の「渥美」の場合を想起させる。

淡路島は明石海峡の対岸にあり、前述のように海上交通にとって重要な地である。多くの海人たちが活動しており、古代では安曇氏族と強い関係があった。しかしいまでは安曇氏族の痕跡は見えない。そして淡路島には綿津見神社は残っていない。安曇氏族との関連は見えない。

なお、淡路島には淡路国三原郡八木村に式内社笑原（やはら）神社がある。『系譜集成』によると、八木造の祖は八玉彦命（振魂命の孫にあたる）であり、ここが居住地とある。つまり八木造の発祥の地との説である。しかし笑原神社の祭神は素盞嗚命、月読命、少彦名命 であり、綿津見命と無関係であり、この説は疑問がある。

神戸市垂水神社の祭神は豊城入彦命であり、綿津見命とは関係ない。神社の由緒によると、この地方に勢力を持っていた阿利真公が大化の改新（646 年）頃におこった旱魃の折、垂水岡（千里丘）から湧き出す水を、当時の難波長柄豊崎宮に送り、その功を讃えられて、垂水公の姓（カバネ）を賜るとともに垂水神社を創祀したとのことである。すると垂水神社は安曇氏族と関係ないと言える。ただし垂水神社の末社に大綿津見命が祀られているとのことであるが、はっきりしない。

明石市の林神社は式内社であり、主祭神として少童海神を祀っている。社伝によるとこの地の海岸に大きな赤石があり、そこに少童海神が現れたとのことであり、その故にこの地域を明石と呼ぶようになったとのことである。少童海神は綿津見神のことである。明石市地域は神戸市垂水区の隣であり、安曇氏族のゆかりの地と考えられる。

揖保郡太子町地域は古くは播磨国石海里といわれた地域である。『播磨国風土記』（『日本古典文学全集　風土記』植垣節也　小学館　1997）によると大化改新の頃に阿曇連百足と太牟が大規模な灌漑工事を行い、開拓を行った地域である。阿曇連はもとは摂津の浦上里に住んでいたが、播磨国揖保郡の浦上里に移り住んだとのことである。この地域はゆかり地である。しかし現在は綿津見神社もなく、その他の痕跡も残っていない。

また、一宮町安積（あづみ）はゆかり地との説があるが、この地の郷土史家によると全く関係ないとのことである。

日本海側の豊岡市小島 266 に海（かい）神社がある。式内大社であり、祭神は大綿津見命である。この点では、安曇氏族と強い関係があると考えられるが、それ以外に安曇氏族の痕跡は見えない。一方、『神祇志料』では海部直の祖・建田背命を祀るとあるとのこと。ここには海部直の影響力が現れているように見える。ごく近くに絹巻神社が在り、海部の祖、天火明命（彦火明命）を祀っている。この地域では、安曇氏族は舞鶴地域と同様に、海部氏に押され衰退してしまったと思われる。

３１）鳥取県の神社（神社数　２１社）

『抄』によると米子市付近には伯耆国合見郡安曇郷があった。現在は上安曇と下安曇の二つの地区がある。これらは「あずま」と呼ぶが、これは住民が「あづみ」を訛ったこと

によるらしい。これらのことからこの地域はゆかりの地といえる。

しかし鳥取県では「綿津見神社」と称する神社はなく、綿津見命を合祀するのみであり、それらの神社からは安曇氏族の痕跡を見出すことはできない。安曇氏族は長い歴史の中で衰退してしまったと思える。

３２）島根県の神社（神社数　３３社）

隠岐国（現在の隠岐の島）には海部郡があった、現在の海士町である、天平四年（732 年）の正税帳には海部郡の郡司少領として阿曇三雄の名があり（『海士町史』　田邑二枝、海士町役場、昭 49　）、平城京出土木簡には安曇部の名前が記載された木簡が多数見出される（『古代豪族の謎』「安曇氏の研究」松原弘宣）とのことである。隠岐国西ノ島町に海（うみ）神社がある。海士町の隣の島であり、以前は知夫郡であった。式内社であり、当初は海神２座を祀っていたとのことである。この２座とはどの神のことかあいまいであるが、綿津見神と住吉神のことと思われるとのことである。綿津見神社リストでは２社として記載されているが、所在地は同じであり、なぜ２社なのかは不明である。海から参道が伸びており、海人たちが祀る神社と考えられる。これらのことから隠岐島が安曇氏族ゆかりの地であることは確かである。

島根県（石見国）では綿津見神社からは安曇氏族との関連は見えない。

３３）岡山県の神社（神社数　３９社　ただし笠岡市の海（わたつみ）神社と高梁市の海（わたつみ）神社（祭神豊玉姫神）を追加した）

岡山県では創建、由緒、祭神等の詳細不明な神社が多く、はっきりしないが、安曇氏族との関連を思わせる神社はない。ただし平城宮出土木簡に備中国浅口郡船穂郷（現在浅口市船穂町のことか？）阿曇部押男と記載されたものがあり、この地域には安曇氏族がいたと思われる（「安曇氏の研究」前掲書）。

岡山市東区楢原の八幡宮は岡山県神社庁データによると、和田八幡宮と称し、祭神は綿津見大神および応神天皇である。社伝によると、この村が昔海岸であった頃、和田津見神を祭祀し、東南の山上に鎮座していたが、清和天皇の貞観元年（859 年）に八幡宮を合祀し、寛文 3 年（1663 年）2 月に現在地の和田の御崎に遷座し、和田八幡宮と称したとある。そして明治元年に八幡宮と改称し奉ったとのことである。するとここはかつて安曇氏族が活躍していた地であると推測されるが、現在ではあいまいである。

高梁市高倉にある海（わたつみ）神社の祭神は豊玉姫神であり、古くから雨乞いの神として崇敬されていたとのことである。しかし海神社であるのに祭神が綿津見神でないのはなぜか不思議である。笠岡市新賀の海神社の詳細は不明である。

３４）広島県の神社（神社数　３２社）

安曇氏族との関連は見いだせない。

３５）山口県の神社（リスト記載の神社数　２６社）

下関市の龍王神社は、古くからあった大綿津見神社を合祀して改称したものである。神功皇后の三韓征伐の際の伝承が残っているが、あいまいである。その他の神社では安曇氏

族との関連は見えない。

３６）徳島県の神社（神社数　２５社）

徳島県の神社では「綿」の代わりに「和田」、「和多」と表記する場合が多い。綿津見神社リストに記載された神社は、由緒等の詳細不明なものが多く、安曇氏族との関連をうかがわせるものはない。関係ありそうなものとして、次の２社がある。

和多都美豊玉比賣神社は式内社であり、現在は雨降（あまたらし）神社と称している。現在の徳島市不動西町、以前は阿波国名方郡だった地に在る。神社の名称は和多都美であるが、祭神は豊玉姫命である。豊玉姫命は神武天皇の祖母に当たる。綿津見命の娘であるが、安曇氏系というより天皇系の神である。神社の名前から見ると、安曇氏族と関わりがありそうである。また、第 7 章に記したように、正六位上安曇部粟麻呂という人物が阿波国名方郡におり宿禰姓を下賜されたという記録があり、安曇氏族の故地と推測できる。

早雨神社は式内社であり、現在徳島市八多町坂東に在る。祭神は豊玉姫命である。水田地帯の中に小さな嶋状の場所があり、そこに大きな楠と共に小さな社が建っている。近くに犬飼地籍があり、石碑の由緒書きに、この地は海犬飼の領地だったとある。ただし延喜式では、神社の関係氏族は八太造とある。

また阿波国に安曇、安曇部が居住していたことを示す木簡があるとのことであり（「安曇氏の研究」（前掲））、かつて安曇氏が活動していたと推測される。さらに『穂高神社史』によると、男帝の時の神祇官は阿波国から出すこと、その一人に阿曇部を入れることの定めになっていたとのことである。

そうすると、阿波国には阿曇部が多数居住していたと推測できる。そして前記の二つの神社は安曇氏族（海犬養、安曇部）が祭祀していたと推測することもできる。しかし、安曇氏族が祭祀していたとすれば、なぜ綿津見命を祀らなかったのか不可解である。

このように徳島県では古代に安曇氏族が居住していたことは確かと考えられるが、現在ではその痕跡はあいまいである。

３７）香川県の神社（神社数　１０社）

神社の詳細は不明であり、はっきりしない。綿津見命は後から合祀されたと思われる。

平安時代の讃岐国大内郡入野郷戸籍（1004 年作成）には安曇茂丸他多数の名前が記載されており、安曇氏族は古くよりこの地に居住していただろうとのことである（『穂高神社史』）。

安曇氏族ゆかりの地と思えるが、現在ではあいまいである。

３８）愛媛県の神社（神社数４４社　ただし西条市の龍神社（祭神大和田津美命）、宇和島市津島町の綿津見神社（祭神豊玉彦命）を追加した）

西条市の大崎龍神社は漁村地域にあり、漁業との関連は強い。それゆえ海の神を奉斎してきたと考えられる。平城宮跡出土木簡に伊予国伊予郡石井郷海部里の安曇部太隅と記載されたものがあり（「安曇氏の研究」（前掲））、安曇氏族との関わりを思わせる。しかし現在では安曇氏族との関連はあいまいである。

[ここに入力]

３９）高知県の神社（神社数　４６社、ただし６社追加した）

海津見神社が１６社（高知市の大海津見神社を含む）あり、数多い。また綿津見神を合祀している神社も多い。リストに記載のない海津見神社が６社もあった。しかし安曇氏族との関連は見えない。

高岡郡佐川町の海津見神社の宮司の話によると、創建は元禄のころとのことで、あまり古くない。他の神社も同様ではないかと思うとのこと。神社は地区の氏神として、また水の神として祭祀されている。近隣の海津見神社との関連はない。祭神は綿津見神であり、神社名は海津見神社であり、漢字表記がちぐはぐである点について、海をわたと読むことは昔からのことで、どちらも「わたつみ」と読んでいる。当然のことと考えており、問題としていないとのこと。また安曇氏族との関連は全く聞いたことないとのことである。

４０）長崎県の神社（神社数　３７社、対馬市美津島町鶏知の和多都美神社を追加した）

綿津見神社（和多津美神社等含む）の数は多い。安曇氏族の氏神として祭祀しているのかあるいは、漁業・海上安全のために祭祀しているのか判明しない。そして安曇氏族との関連は見えない。

佐世保市高島町の志賀神社の祭神は海童命であるが、瀬戸越町の志賀神社の祭神は底筒男命である。また近くの西海市には志賀海神社があり、祭神は綿津見命である。神社の名称・表示および祭神がちぐはぐのように見える。これは綿津見神社が氏神神社として祭祀されていたのではないからと思える。長崎県では海と関係深い生活であり、海の神を祀っていたことは容易に推測できる。その際海の神として綿津見神、住吉神、宗像神は同等であり、混在していたのではないだろうか。

対馬市ではリスト記載の神社は８社すべて式内社である。この他に関連あると思われる神社が６社ある。ただしそれらは和多都美神社等と称するが、祭神は綿津見命ではなくて、豊玉姫、玉依姫、磯武良、彦火火出尊等である。神社の数は非常に多いが、その由緒等はあいまいである。また綿津見命を祀る神社は名称、祭神の表記に関してまちまちで、統一性を欠いている。狭い島の中なのに、なぜこのようにバラバラなのか不思議である。過去に相当に大きな変遷があったと思われる。現在では安曇氏族との関連は見えない。

壱岐島には５社あるが、その由来ははっきりしない。和多津美神社は豊臣秀吉の時代の創建とのこと。漁業に関わる人が多く、海の神として祭祀されていると思われる。現在では安曇氏族との関連は見えない。

４１）福岡県の神社（神社数　１３０社　ただしみやま市の綿積神社を追加した）

福岡市地域には、『抄』によると糟屋郡安曇郷があった地である。また黛弘道氏（「海人のウヂを探り東漸を追う」）によると、那津宮家があり、海犬養連が守衛役を務めていたとのことである。明らかに安曇氏族ゆかりの地といえる。

福岡県では綿津見命を祀る神社は飛び抜けて多い。神社名として綿津見神社（和多津美神社、海童神社、志賀神社等含む）と称するものも非常に多い。ただし神社数は多いが、神社名や祭神名はまちまちで整合性に欠けている。安曇氏族の氏神としての綿津見神社で

あれば、神社名および祭神名について「綿津見神社」、「綿津見命」、或いは「少童命」として表示が統一されていないのはなぜなのか、不思議である。それらの神社はそれほどに離れた地域の立地ではないから、安曇氏族間での情報は伝わっていたはずであり、神社名や祭神名は統一されているべきと考えられる。たとえば、福岡市の志賀海神社は代々阿曇氏が宮司を務めてきており、安曇氏族ゆかりの神社である。しかしなぜ綿津見神社と表記しないのか不思議である。その理由としていくつもの説明がなされているが、納得できるものではない。

糸島郡にも多くの綿津見命を祀る神社があるが、安曇氏族との関連は不明である。

大川市には風浪宮があり、ここの宮司は代々阿曇氏であり、安曇氏の末裔と思われる。

隣の柳川市には風浪神社が多数あり、大川市の風浪宮との関連を思わせるが、詳細不明である。また柳川市に海童神社（わたつみと読む）が多数ある。綿津見神社と表記しないのはなぜなのか不明である。祭神は綿津見神、海津見神、少童神とまちまちであるが、神社数が多いことから安曇氏との関連を思わせる。しかし詳細は不明である。

福岡県南部、有明海北部の筑後川流域の大川市・柳川市・みやま市には多数の綿津見命を祀る神社がある。この地域は安曇氏族との関連があったと思われるが、詳細不明である。

なお、北九州市門司区の和布刈（めかり）神社の祭神として安曇磯良神が航海の神として合祀されている。安曇氏族の本来の祖先神は安曇磯良神という説もあるが、根拠に乏しくその信憑性は低い（第 5 章参照）。この神社では第１座の祭神は宗像三女神であり、安曇磯良神は第 5 座であり、優先順位は低いようである。この神社は神功皇后にちなんで創建されたとのことである。神功皇后と阿曇磯良の関係は『太平記』（14 世紀ころ作成）に登場している。これに基づいて安曇磯良神を合祀していると思える。安曇氏族との関連は見えない。

４２）大分県の神社（神社数　３３社）

大分県の綿津見神社は海沿いにあり、漁業繁栄の祈願として祀られていると思われる。詳細不明であるが、安曇氏族との関連は見えない。

なお大宝二年（702 年）の豊前国戸籍があり、戸主等の妻として阿曇部馬身賣、阿曇部阿理賣、阿曇部法提賣の記載があるとのことである（『穂高神社史』）。これから推測すると、この集落には多数の安曇部が戸主として居たと推測できる。するとそこは安曇氏族の居住地といえる。しかし現在そのような痕跡は見えない。

４３）佐賀県の神社（神社数　６１社）

佐賀県には綿津見命を祀る神社が多数あるが、海上交通安全・漁業繁栄を祈願して祭祀しているものと思える。また既存の神社に綿津見命を合祀している神社が大半である。佐賀市川副町の志賀神社は町誌によると志賀海神社から分霊したとあるが、祭神は筒男命である。なぜ綿津見命でないのか、不思議である。

この地域は福岡県大川市・柳川市の隣であり、安曇氏族との関連がありそうな地域であるが、神社からは安曇氏族との関連は見えない。

[ここに入力]

４４）熊本県の神社（神社数　５３社　ただし玉名市の綿津見神社を追加した）

熊本県で綿津見命を祀る神社は多い。しかし既存神社に合祀されているものが大半である。玉名市にも数多くあるが創建や由緒は不明である。また宇城市不知火町には永尾（えいのお）神社がある。創建は 713 年、祭神は海童神で海童神がエイの背に乗ってやって来たとの伝承があるとのこと。これは安曇氏族との関わりを思わせるが、根拠はあいまいである。熊本県では安曇氏族との関連は見えない。

４５）宮崎県の神社（神社数　１３社）

宮崎県の神社は少ない。海沿いにいくつかあるが、海上交通安全や漁業繁栄を祈願してのものと思える。安曇氏族との関連は見えない。

４６）鹿児島県の神社（神社数　４社）

鹿児島県の神社は少なく、安曇氏族との関連は見えない。

４７）沖縄県の神社

沖縄県には神社はなく、安曇氏族の痕跡もない。

安曇族が海洋民族であり、南方から海を渡って日本列島に到来したとすれば、その途中に痕跡があってもよいと思えるが、そのような痕跡は見えない。

１１－３　綿津見神社についての考察

１１－３－１　祭神名称表記について

現代の書物・資料に記載されている祭神名称の表記を示すと次のようである。

<u>『記紀』での表記</u>

『記』の表記（『日本古典文学　古事記』より）：上津綿上津見命、中津綿上津見命、底津綿上津見命

『紀』の表記（『日本書紀』より）：表津少童命、中津少童命、底津少童命

阿曇連稲敷が「帝紀及び上古諸事」編者に任命されており、日本書紀の編纂にも参加したと思う。すると、この表記が安曇氏の統一見解と思われるが、どうだろうか？

『録』の表記：海神綿積豊玉彦神、海神綿積命、海神大和多羅命、和多羅豊命

（『新撰姓氏録の研究　本文篇』（佐伯有清、吉川弘文館）を底本とする群馬県立女子大学北川研究室作成の新字体版より）

このように祭神名表記は、『録』が書かれた平安時代にはすでにかなり乱れていることが分かる。

<u>神社祭神の表記例</u>（神社庁資料、神社説明書による）

綿津見命（神）、綿津見大神、綿積見神、綿都美命、綿津美神、綿津美大神、綿積命、綿積神、綿津海神、上津綿津見神、表津綿津見命、底津綿津見命、中津海津見神、海津見命、海住神、海見三柱神、海積神、海少童命、海神命、海童神、海神、

海大神、海祇神、渡津見命、渡海命
少童命、小童命、少童海神、少童三神、少海童命、表津少童命、底津少童命、
中津少童命、和多積神、和気多津見命、土津海祇命、庭津海祇命、和田都美神、
和田津美神、和田津見神、和田住尊、広津綿津見三柱神
これらはすべて「わたつみ、わだつみ」と読んでいる。

関連の神

綿津見命（豊玉彦命、大綿津見命）・・・海神であり龍王とも考えられている。
長男：宇都志日金拆命（穂高見命）
次男：布留多摩命（振魂命）
長女：豊玉姫命・・・神武天皇の祖母
次女：玉依姫命・・・神武天皇の母

このように祭神の名称・表記はバラバラであり不統一である。なぜなのか興味深いことである。この点について少し考察してみる。漢字が無かった弥生時代に、「わたつみ」という神が誕生しており、人々に浸透していた。そこへ漢字が伝わってきて、倭言葉が漢字表現されていく際、「わたつみ」という発音に漢字を当てて表記されたと思われる。その故に、「わたつみ」神の漢字表現はまちまちになっていると考えられる。つまり「わたつみ」神は、漢字文化の中でなく、倭文化の中で発生していたと考えられる。

しかし、氏族の祖神の名前の表記がまちまちで統一されていないということは、安曇氏族として統一性を欠いていたことになる。すると、安曇氏族と関係ない多くの人々も祭祀しており、その人々がそれぞれの知識に基づいて表記した結果と考えられる。結局のところ、綿津見神社の多くは安曇氏族と関係なく、海の神として祀られている神社が多いと推測される。

１１－３－２　神社の成り立ちの事情

本調査により、神社の創建の事情はさまざまであり、長い歴史の中で祭神・神社名称の変遷があり、また神社自体の興亡もあったことが分かった。中央の勢力争いや地域の勢力争いに巻き込まれるケースが多かったと思われる。神社は神社領地や氏子によって支えられており、そうした状況変化により変遷してきたと思われる。

安曇氏族の氏神として綿津見命を祀るために創建した神社は、穂高神社、川会神社、龍神社（子之神社境内社）、海神社（神戸市）、志賀海神社、風浪宮　等々であり、その詳細を安曇氏族と関連の深い神社として次頁の表に示す。

また守護神として祀る場合には、海の神として漁業や航海の守護神、龍神として水の神、・治水の神・雨乞い祈願の神として祭祀している。この場合、既存の神社に祭神を合祀する場合が多いが、新たに設立する場合もあったと思われる。

表 11-2　安曇氏族と関連の深い神社

今回の調査により安曇氏族と関連の深いと推測できる神社をまとめると以下の通りである。

１／３

所在地		神社名	祭神名	由緒等
旧国名	現在地名			
相模国	湯河原町	子之神社／龍神社	海住神	創建 700 年頃、安曇氏が祭祀した
信濃国 安曇郡 安曇郷	安曇野市	穂高神社 川会神社	穂高見命 底津綿津見命	式内社、創建不明、安曇氏が祭祀 式内社、創建 673 年、
	長野市	氷鉋斗賣神社	宇都志日金拆命	式内社、創建不明
三河国 渥美郡 渥美郷	渥美半島	なし		渥美郡渥美郷は豊橋市付近と思われるが、そこにはない。
遠江国 尾張国 伊勢国	浜松市（静岡県、遠江国）	六所神社	（綿津見神と住吉神を合祀）	浜松市周辺に７５社あり、安曇氏との関連を思わせるが、詳細不明
	岡崎市	綿積神社	綿積命他	創建不明だが有史以前から続くとの伝承がある
	蒲郡市	赤日子神社	（豊玉彦命他）	渥美郡誌に安曇氏祭祀とある
	名古屋市北区	綿神社	（玉依比売命他）	古文書に安曇氏が祭祀とある
	神島（三重県）	八代神社	綿津見命	合祀以前の古代から続く
美濃国 厚見郡 厚見郷	岐阜市	神明神社	綿津見神を合祀	古くには海神社あり。大正時代合祀されて、現在に至る。詳細不明であるが、関連あると思われる。厚見寺跡がある。
近江国 伊香郡 安曇郷	長浜市 高島市 安曇川町	なし なし		古くに伊香郡安曇郷があった地で安曇氏族のゆかりの地である。 しかし現在関連する神社はない
能登国	羽咋郡志賀町	奈豆美比咩神社	（豊玉比咩命）	安曇氏との関連は今のところあいまいである。今後の調査期待。
丹後国 加佐郡 凡海郷	舞鶴市	老人島神社	（別祭神）	凡海郷の氏神神社である。
		大川神社（式内社）	（別祭神）	元は冠島にあり、後世に遷座
		笑原神社（式内社）	（別祭神）	元は凡海郷にあり、後世に遷座
	宮津市	籠（この）神社（式内社）	海神（わたつみのかみ）	海神を祭祀する事情は不明
	与謝野町	宇豆貴神社（式内社）	宇都志日金拆命	凡海郷の隣であり、安曇氏との関連を思わせる。
		大虫神社（阿知江神社）（式内社）	少童神	安曇氏との関連を思わせる
	京丹後市	矢田神社（式内社）	（別祭神）	古くは海積神を祭祀とのこと

[ここに入力]

所在地		神社名	祭神名	由緒等
摂津国 難波 河内国 播磨国	大阪市	住吉大社／大海神社（式内社）	大綿津見命	『神名帳考証』では大綿津見命・玉依姫命を祭祀とある。
	大阪市	住吉大社／志賀神社	少童命	宮司の津守氏が氏神として祭祀 （摂津には阿曇寺、安曇江があった） （現在大阪市中央区には「渥美連合」がある）
	岸和田市	夜擬神社（式内社）	布留多摩命	八木造の氏神神社
	神戸市 垂水区	海（わたつみ）神社（式内社）	綿津見三神	この地域は摂津・播磨の安曇氏族の拠点と考えられ、安曇氏族の氏神神社と思える
	明石市	林神社（式内社）	少童海神	「明石」地名発祥の元。安曇氏族との関連はあいまい。
	太子町	なし		石海里は安曇連が開拓した地
淡路国	淡路島	なし		「野嶋の海人」の記述あるが、現在痕跡はほとんどない
伯耆国 合見郡 安曇郷	米子市 上安曇、下安曇	なし		和名類聚抄に安曇郷の記載あるが、今では痕跡は薄い
隠岐国	隠岐西ノ島	海神社（式内社） （わた、うみ、かい）	海神（綿津見神と住吉神）	延喜式では海神２座（綿津見神と住吉神のことか？）を祭祀。漁法は潜水漁と異なる「カナギ」法である
石見国	島根県	なし		播磨国風土記に「石見の工人」の記載あるが、現在はあいまい
備中国	岡山県	なし		古文書に安曇部が居住していたことが分かるが、現在あいまい
周防国 長門国	山口市 下関市	なし 龍王神社	大綿津見神	古文書等によると安曇氏が居住していたと考えられるが、現在はあいまいであり、不明
阿波国	徳島県	早雨神社 雨降神社		祭神は豊玉姫命であるが、安曇部・海犬養の居住地であった。しかし現在は不明
讃岐国	香川県	なし		古文書に安曇部の記載あるが、現在不明
伊予国	愛媛県	なし		古文書に安曇部の記載あるが、現在不明
土佐国	高知県	なし		海津見神社が多数あるが、江戸時代以降の創建

所在地	神社名	祭神名	由緒等	所在地
筑紫国 糟屋郡 安曇郷	福岡市	志賀海神社	綿津見神	宮司は阿曇氏。安曇族の本拠地とされている
	大川市	風浪宮	少童神	宮司は阿曇氏。周辺にも風浪神社が多数あり、安曇氏との関連を思える
	柳川市	海童神社	海津見神	海童神社が柳川市には１８社あり、安曇氏との関連を思わせる。
壱岐国 対馬国	壱岐市 対馬市	なし		和多津美神社あるが、詳細不明
肥前国	長崎県	なし		「阿曇連百足」記載あるが、現在は不明。
豊後国	大分県	なし		古文書に安曇部の記載あるが、現在は不明

補足事項

北海道・東北・北陸　　安曇氏族との関連神社はない

　　福島県相馬郡飯館村　綿津見神社：苕野神社から勧請、近世に綿津見神社と名称変更

新潟県では合祀している神社ばかりであり、安曇氏族との関連は見えない

関東　栃木県塩谷郡高根沢町　安住神社：「やすずみ」と読む、祭神は筒男命３神

千葉県銚子市　渡海神社：祭神綿津見大神、九州方面からやってきて、この地に定着したとの伝承、安曇氏とは関係ない（宮司の話）

三重県　鳥羽市　海士潜女神社：祭神は「海女のお弁」。海人であるが安曇氏族と関係ない

北九州市　和布刈神社　　主祭神は宗像神で、磯良神は第五座の神

長崎県　　佐世保市高島町の志賀神社祭神は海童命、瀬戸越町の志賀神社祭神は底筒男命そして隣の西海市の志賀神社祭神は綿津見命である。祭神はちぐはぐである。

１２　安曇氏族の全国進出

１２－１　安曇氏族の全国進出

[ここに入力]

安曇氏族の本拠地は現在の福岡市東区・古賀市・新宮市付近の筑前国糟屋郡安曇郷、志珂郷（志賀島を含む）地域と言われている。その根拠はいまいち明解とは言えないが、『和妙類聚抄』（平安時代中期 931～938 年に編纂された百科事典のようなもの、以下『抄』と記す）に糟屋郡安曇郷の存在が記載されており、またそこは弥生文化が定着し発展した地域であり、弥生時代に豪族が誕生した地域であることなどから考えて信憑性高いと言える。

その後弥生人たちが日本列島を東方へ移動していった時代に、安曇氏族集団も同様に東方へ進出していったと考えられる。弥生人たちの進出は弥生時代前期から始まり、日本海ルートによって山陰地方へ向かったものと、瀬戸内海ルートによって近畿地方へ向かったものがある。そして近畿地方から東海地方へ進出し、さらに関東・東北地方へ進出した。そして全国各地に定着し、それぞれの地域において発展していった。安曇氏族はその弥生人たちの中で形成された集団であり、弥生人たちと同様の動きをしていたと考えられる。そしてその定着した地は安曇氏族ゆかりの地である。

ゆかりの地で、安曇氏族は勢力拡大し発展したのであるが、奈良時代から平安時代の頃には衰退してしまい、現在ではその痕跡も少なくなってしまった。

安曇氏族は信濃国以西ではあるが広い範囲にわたって進出し定着していたのである。安曇氏族は全国に展開した古代氏族としては、物部氏に次いで大きな勢力だった。このように全国の広い範囲にわたって分布し定着していると言うことは、安曇氏族の大きな特徴である。そして安曇氏族の雄大さを示している。

安曇氏族が古代において全国に進出していった状況は壮大な氏族の移動であり、雄大なロマンに満ちた氏族の叙事詩である。これは神話の世界の話ではなく、現実の歴史の中の史実である。この安曇氏族の全国進出はいつの時代に、どのようにして行われたのか興味深いことである。

１２－２　安曇氏族ゆかりの地を探す

ゆかりの地が全国に多数あることはこれまで多くの学者や研究者たちによって指摘されてきた。それらは信濃国以西に広範囲に分布している。しかし現在ではその痕跡はあいまいとなってしまい、ゆかりの地として判明している地域はわずかである。そしてまだ判明していない地域も多数残っていると思われる。

安曇氏族に関する情報はゆかりの地にも多く残されていると考えられる。その情報はその地域の歴史の中に埋もれており、しかもそれらは相互の関連性のないままに孤立した状況にある。それらはゆかりの地の地方史の中の１ページに登場しているのみであり、安曇氏族の全体像として構成されずに、みなバラバラの情報でつながりがないままに放置されている。そこで全国に分布するゆかりの地の安曇氏族に関する情報を集め、『記紀』や古典等の情報と比較検証して、それらを合理的に再構築することが望まれる。するとそこに安曇氏族の全体像が浮かび上がってくると考えられる。そのためにゆかりの地の情報を多く集めることが大事である。そしてまだ判明していないゆかりの地の探し出すことが必要である。

[ここに入力]

ゆかりの地を探す方法として、一つは古代の文書、戸籍簿、木簡等の文献史料に記載された安曇氏族関連の情報をもとに探す方法がある。これは一番確実であり、信頼できる方法と言える。しかし残念ながら、これらの史料はわずかしか残っていないために、この情報から知りうるゆかりの地はわずかである。

ゆかりの地を全国範囲で調査したものとして、『姓氏家系大辞典』（前掲）がある。これは 1920 年にまず刊行され、その後増補され、さらに戦後に角川書店から復刻版が刊行されたものである。古代人物の姓氏・家系を調べる上で、研究者の誰もが最初に開く書とされている。安曇・海犬養・凡海・安曇犬養・八木に関しては 13 ページにわたって記載している。古代から伝わる幅広い資料を基にしており、安曇氏族研究にとって優れたガイドであり、重要な文献である。ただし、著者の太田亮氏は前述したように『記紀』の記述をそのまま信じていたようであり、安曇氏族に関しては歴史と神話を混淆したものとなっている。しかし後世の研究者たちに強い影響を与えたようである。

明治 40 年に吉田東吾氏によって『大日本地名辞典』が刊行された。地名についての語源や変遷だけでなく、地形や歴史などあらゆる風土的事象を扱った地名辞典である。日本全国を対象としたもので、当時において画期的なものだったようである。当時の多くの著名な政治家や学者たちから賛辞を受けたとのことであり、多くの研究者たちに影響を与えたようである。その後昭和の終わりから平成にかけて、『地名辞典』（前掲）が出版された。日本全国について県ごとに地名の由来・歴史を調査し編集したものである。地名を特定すれば、その地の歴史を見ることができる。地名の由来として、安曇氏族との関わりについても記載している。古代史の調査研究にとって重要な資料である。

つぎに『穂高神社史』（宮地直一、穂高神社社務所、昭 24）、「信濃国安曇族の考古学的一考察」（大場磐雄、『信濃』昭和 24 年 5 月）がある。これらは前述の『姓氏家系大辞典』を踏襲しているように見える。

また黛弘道氏も「海人族のウヂを探り東漸を追う」（前掲）の中でゆかりの地について詳しく記載している。これは海人族全般の分布地域について語り、その中で安曇族を語っている。つまり海人族と安曇族とが明確には区別されていない。そのために安曇氏族ゆかりの地としてはあいまいなところがある。安曇氏族は宗像族・住吉族・海部等の海人族とは異なる氏族であり、両者は分別して考察しなければならない。

そして最近「安曇氏の研究」（松原弘宣、『古代豪族の謎』、新人物往来社、2011）がある。これは平城宮出土木簡等の情報も含めたもので、最新情報を集めたものと思われる。

これらの著書で指摘されたゆかりの地は、多少の差異はあるが、大体のところ同様である。これらの地域では、現在では安曇氏族の痕跡は薄くなってしまっており、その痕跡を探し出すことが重要である。そのためには現地調査および地方史の研究が必要である。

二つ目は地名から探す方法がある。「あづみ」・「あずみ」という地名を基にするものである。この方法は単純明快で分かり易く、その地域の歴史を探るための重要な手がかりである。しかし、地名は長い歴史の中でさまざまな変遷があり、さまざまな変換が混じってい

るので、それらを取り除くことが必要である。

「あづみ」では「安曇」の他に「熱海」や「安積」もゆかりの地であるという説がある。しかし静岡県熱海市では「安曇族とは関係ない」という見解をもっている。兵庫県一宮町安積は「あづみ」と読んでいるが、地元の郷土史家によると「安曇族と関わる史実はなにもない」とのことである。聖武天皇の子供に安積親王がいる。かれは「あさか」と読まれ、母親は県犬養広刀自であり、安曇氏族とは全く無関係である。また、長野県南安曇郡安曇村（現在は松本市安曇という）は安曇族ゆかりの地と言う説があるが、しかし安曇村は明治の行政改革の際に近隣の４地区が合併して安曇村と命名したことが始まりである。安曇氏族とは全く関係ない地である。さらに栃木県高根沢町に安住神社がある。この神社は「あづみ」と読めそうであるが、「やすずみ」と読むとのことであり、祭神は筒男命３神と神功皇后であり住吉神社の系統である。安曇氏族とは全く無関係と言える。

地名を基にして調査した安曇氏族のゆかりの地が『安曇族と徐福』（亀山勝、龍鳳書房、2009）に記載されている。それによると、山形県温海町、新潟県関川村安角、山梨県富士吉田市小明見・大明見、兵庫県一宮町安積は安曇族の居住地だったとしている。しかしこれらの地では安曇氏族の痕跡は全く見られない。また同書では「しか」という地名も安曇族ゆかりの地と考えているが、その根拠はあいまいである。第 11 章でみたように全国に志賀神社が多数あるが、その中には祭神として綿津見命ではなく、筒男命を祀っている神社もある。「しか」と安曇氏族との関係はないように見える。なお、中世において豊後国大野郡志賀村があり、ここに志賀氏が勢力を張っていた。この志賀氏の場合も安曇氏族との関係はなさそうである。

このように地名を基にしてゆかりの地を探す場合には、いろいろと問題が在り、裏付け調査を慎重に行わなければならない。

ゆかりの地を探す手法の三つ目として、全国に分布する綿津見神社(綿津見命を祀る神社)の由来を調べ、その地域の安曇氏族の存在を探る方法がある。ただし綿津見命を祀る神社は、安曇氏族が氏神として祀ったものとは別に、地域の人々が漁撈安全・豊漁を祈ったり、航海安全を祈ったりするために祭祀されている場合も多い。さらに龍神様として雨乞いを祈ったり、治水対策を祈ったりするために祭祀されていることもある。それらの神社の多くは中世から近世において創建されたり、合祀して祭祀されたりしている。それらの地域はゆかりの地とは関係ないと考えられる。そのため綿津見神社の調査においてはこのような分別が必要となる。そういう観点から行った調査結果を第 11 章に記載した。

１２－３　安曇氏族ゆかりの地

古文書等から分かる地、地名から分かる地、綿津見神社調査から分かる地について、これまでに分かったゆかりの地を整理すると次のようである。

１）東北地方　　安曇氏族と関連する地域はない。（温海町に安曇氏の痕跡なし）
２）新潟県　　安曇氏族と関連する地域はない。（関川村安角に安曇氏の痕跡なし）

[ここに入力]

３）関東地方　　安曇氏族と関連する地域はない。

４）神奈川県湯河原町・真鶴町地域　　子之神社境内社龍神社

５）長野県（信濃国）

安曇野市（旧安曇郡）地域　　信濃国安曇郡、穂高神社、川会神社

長野市（旧更級郡）地域　　氷鉋斗売神社

（下高井郡木島平村穂高地域に安曇氏の痕跡なし）

６）山梨県　安曇氏族と関連する地域はない。（小明見、大明見地区に安曇氏の痕跡なし）

７）愛知県田原市および周辺地域（三河国渥美郡渥美郷および周辺地域）

渥美半島、豊橋市、岡崎市（綿積神社）、蒲郡市（赤日子神社）、名古屋市(綿神社)

静岡県浜松市

三重県鳥羽市神島

８）岐阜県岐阜市地域　（美濃国厚見郡厚見郷）　　厚見寺跡

９）滋賀県高島市周辺地域　（近江国伊香郡安曇郷および安曇川流域）

長浜市高月町阿閉

高島市安曇川町

１０）石川県羽咋郡志賀町　　志賀町安津見は可能性大と思われるが、痕跡は薄い

１１）奈良県　　安曇氏族と関連する地域はない（添上郡安曇田荘は無関係である）

１２）京都府舞鶴市地域（丹後国凡海郷）　　雄島参り慣習

舞鶴市、宮津市、与謝野町、京丹後市

１３）畿内地域

大阪市　（摂津国難波）　　大海神社、志賀神社、安曇江、安曇寺

岸和田市（河内国）　　夜擬神社

神戸市　（播磨国）　　海神社、林神社

揖保郡太子町（播磨国）　石海里、浦上里（播磨国風土記）

淡路島　　現在は安曇氏族と関連する地域はない

１４）鳥取県米子市地域（伯耆国会見郡安曇郷）　　上安曇・下安曇

１５）隠岐島地域（隠岐国海部郡（海士郡））　郡司少領阿曇三雄

１６）徳島県徳島市地域（阿波国名方郡）　安曇部粟麻呂、早雨神社の海犬飼氏

１７）中国、四国地方　　安曇氏族との関連する地域は多数ありそうであるが、明確ではない。

１８）福岡市東区周辺地域（筑前国糟屋郡安曇郷・志珂郷）　　志賀海神社

１９）佐賀県地域（久留米市、大川市、柳川市）　大川市風浪宮

２０）他の九州地域　　安曇氏族との関連深そうであるが、その痕跡はあいまい。

１２－４　安曇氏族ゆかりの地分布図

前述したゆかりの地の分布図を次ページに示す。

[ここに入力]

安曇氏族の痕跡を残すゆかりの地は関東以西の全域に多数分布している。全国に進出できた時代は地方の土着勢力が未熟の時代だったと考えられ、安曇氏族が全国に進出したのは弥生時代から古墳時代の初期にかけての頃だったと推測される。その当時には、安曇氏族は相当に大きな勢力だったと推測される。

しかし、その後は全般に衰退してしまい、現在もはっきりした痕跡を残しているところは少ない。衰退した事情およびその時代等には地域ごとに事情があるように見える。それらについては第 13 章に記す。

なお、北陸地域で安曇氏族の痕跡が見えず、一方東海地域には安曇氏族の強い痕跡があるということは、安曇氏族は東海方面から安曇平へ進出してきたことを示唆しているようである。

また、本図は、『海人』（瀬川清子、未来社、1970 年）に掲載された海人の分布図を基にして作成したものである。図より、安曇氏族の分布と海人の分布とは相関性はないことが分かる。

１３　ゆかりの地に見る安曇氏族の興亡

[ここに入力]

１３－１　安曇氏族興亡の概要

安曇氏族の興りについては第 3 章で見た通りであり、それを要約すると次のようになる。弥生時代はじめ頃に中国江南地域ないし朝鮮半島から北九州地域に渡来した血縁集団がいた。その渡来は少人数ではあったがたびたび行われた。そのさまざまな集団の中に安曇氏族の核となる血縁集団がいた。彼らはそこに定着し、非血縁関係を含めてさらに地縁的に拡大成長して大きな血縁的同族集団となった。多分、先住の縄文人たちとの混血融合も行われたと思える。こうして安曇氏族は弥生時代の渡来人たちの中から発生した一つの氏族集団だったと考えられる。

弥生時代から古墳時代にかけてのころ、筑紫国糟屋郡安曇郷・志珂郷地域、現在の福岡市東区・古賀市・新宮市付近に居住し、大きな勢力に発展したと考えられる。そして全国へ進出し、畿内・東海・山陰方面へも進出した。全国進出の時代は弥生時代のはじめ頃から、弥生人たちの東方進出の動きの中に混じって行われていたと考えられる。

安曇氏族が全国進出して定着した地域は安曇氏族ゆかりの地と呼ばれ、関東から西の地域に多数分布している。それらの地域は第 12 章に記載した通りである。それによるとゆかりの地は関東以西の広範囲にわたって分布しており、そして相当に古い時代から安曇氏族が定着していたことが分かる。その分布地域の広さから見ると、非常に大きな古代氏族だったことも分かる。

ゆかりの地において、安曇氏族はどのように活動していたかということは、安曇氏族の特徴を理解する上で非常に重要なことである。しかしそれは地方の古代史の中に埋もれてしまい、あいまいなものになってしまっている。安曇氏族の全国進出の概況について、これまでに分かったことを整理すると次のようである。

安曇氏族は弥生時代の終わりから古墳時代はじめ頃には播磨国・摂津国に進出し、そこに拠点を持ち活躍していたと考えられる。大和王権が確立していく頃に、その王権連合体に参加していたと思われる。そして明石海峡を支配下に収め、九州および大陸との主要な海上交通路を支配していたと考えられる。4 世紀後半から 5 世紀にかけての頃には、大浜宿禰が海人の宰として活躍していた。この頃においては、筑紫国糟屋郡地域よりも播磨・摂津地域の方が大きく発展し、拠点となっていたと推測される。つまり安曇氏族の重要拠点地域は播磨・摂津地域へ移っていたと言える。

その後、阿曇連浜子が住吉仲王子の皇太子暗殺クーデターに加担し敗れるという事件（427 年）があった。死罪は免れたものの皇太子暗殺に加担したのであり、それ以降においては安曇連の威勢はすっかり衰え、大和政権の表舞台からは消えてしまう。

しかし滅亡してしまうのでなく、摂津・播磨地域において雌伏していたようである。そして推古天皇のころに復活し、再び大和政権の表舞台に登場し、6 世紀後半から 8 世紀中頃にかけて大いに活躍した。その頃には安曇連、海犬養連、凡海連が登場し畿内地域、とくに摂津国難波地域で大いに活躍していた。摂津国難波には阿曇寺という氏寺を建立し、安曇江という港を築造していた。そのことから推測して、大きな勢力であったことが分かる。

[ここに入力]

このころは安曇氏族の全盛期だったと言える。

その後も朝廷で活動していたが、桓武天皇の 792 年に安曇宿禰継成が天皇の指示を無視して職務放棄するという事件をおこした。人臣の礼無しとして罰せられ、絞刑に処せられるべきところ特旨をもって死一等を減じられ、佐渡に配流された。安曇継成はその後流刑を許されて都へ帰還したようであるが、その後強盗犯として逮捕され、今度は隠岐島へ流刑となっている。安曇宿禰の没落を示す出来事である。

ここに安曇宿禰は大きなダメージをこうむったと考えられるが、安曇宿禰一族は絶えてしまうのでなく、朝廷の中流貴族として生き残っていた。しかし徐々に朝廷での地位は低下し、9 世紀前半の頃には地方の官吏になってしまい、衰亡の一途をたどることになる。この辺の経過については第 7 章に記載した。

奈良・平安時代において、古代氏族は全般的に衰退潮流の中にいた。奈良時代の律令制度に基づく官僚体制の中で古代からの有力氏族たちは土地から切り離され、実体経済活動から浮き上ってしまい、次々と衰退していった。藤原氏は一人勝ちのように勢力を伸ばしたが、他の有力氏族は政治の中枢からも締め出され、衰退していった。安曇氏族も中央政界においては鳴かず飛ばずの状況になっていったと考えられる。安曇宿禰継成は安曇氏族の長として、朝廷において日に日に氏族の勢力が衰退していく状況を憂い、なんとか盛り返そうとあがいていたと思われる。その結果前述の事件が起こったのだと考えられる。この、律令制度のなかでの貴族勢力の衰退については長山泰孝氏の「政治の起伏」(『古代を考える　奈良（三章)』直木孝次郎編　吉川弘文館　昭和６０年）に詳しく書かれている。平安時代に書かれた『録』(814 年）には安曇宿禰および他の安曇氏族は右京および摂津・河内が本貫と記されており、当時健在であったことは確かである。しかし、その頃に政治の表舞台で活躍したことの記録はない（第 7 章参照)。

これが中央における安曇氏族の歴史の大略である。次に全国に分布するゆかりの地における状況を探ることにする。ただし、これまでに入手した情報はわずかなものであり、今後ゆかりの地の人たちと協同してさらに深く探っていきたいと考えている。

１３－２　福岡市東区地域：筑前国糟屋郡安曇郷

[ここに入力]

安曇氏族の本拠地

『抄』によると、筑前国に糟屋郡があった。「加須也」と表記されているが、糟屋・糟谷・粕谷・滓屋とも表記されることもあるとのこと。そこに 9 郷があり、そのなかに阿曇郷、志珂郷がある。しかし、糟屋郷はなかったようである。すると、糟屋郡の中心、つまり郡衙のあったのはどこなのか、興味深いが不明である。なお筑前国は古くには筑紫国であったが、7 世紀頃に筑前と筑後に分かれたとされている。

糟屋郡という地名は現在も残っているが、安曇郷という地名は残っていない。江戸時代に作成されたと思える河崎家文書があり、そこに糟屋郡の絵地図が掲載されている。そこには安曇郷は記載されていない。かなり古い時代、多分鎌倉・室町時代の頃に消えてしまったと思われる。それは安曇氏族衰亡の経過を示すと考えられ、なぜ消えてしまったのか、非常に興味深いのである。しかしいまは不明である。

安曇郷の位置は、『地名辞典』（前掲）によると「和白村、新宮村」となっており、現在の福岡市東区・新宮町・古賀市付近に位置していたと考えられている。このような事情から、安曇氏族がこの地域に居住し活動していたことは十分納得できるのである。

そして、この地が安曇氏族の本拠地だったということについては、次のような見解がある。太田亮氏は『姓氏家系大辞典』(前掲)の中で、安曇氏について「この氏の発祥地は筑前国粕屋郡阿曇郷ならんかと考える」とし、そして『記紀』の海幸彦神話を引いて「海神綿津見の宮の所在地と考えられる地」と記している。さらに「その富強天下に聞こえ、その宮殿の如きも当時としては頗る壮麗にして他氏族の目を驚かし」としている。太田亮氏は『記紀』神話を信じて、それに基づいて筑前国糟屋郡（粕屋郡）安曇郷が安曇氏の発祥の地としたのである。しかし、これは歴史と神話の混同であり、納得できる話ではない。

黛弘道氏は「海人族のウヂを探り東漸を追う」（前掲）の中で、「阿曇連の祖神発現の地は九州と伝承されてきたのである。その九州で阿曇氏ともっとも縁故の深い所を尋ねるなら、それは筑前国糟屋郡安曇郷（福岡市東区和白・福岡県粕屋郡新宮町あたり）であり、その西の志珂郷（福岡市東区志賀島）に鎮座する式内名神大社志加海（しかのわた）神社三座は綿津見三神を拝祀する古社で神職は今も阿曇氏を名乗っているから、およそこの二郷を中心とした糟屋郡域を阿曇氏の発祥の地と推定して大過ないであろう」としている。安曇氏の本拠地についてのこの推論は、太田亮氏の前記の説に基づいたものと思われるが、おおよそのところ妥当と考えられる。しかしそれでも、志賀海神社は志賀島に在り、その志賀島は安曇郷の外にあり、奴国の辺境にある。なぜ、安曇郷を外れた辺境に氏神神社を建立したのかという疑問が残る。

『紀』によると、安曇連の祖神である綿津見命が生まれた地は、「筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原」である。解説によると、そこは宮崎市阿波岐原町とのことである。すると祖神が生まれた地と本拠地は異なることになる。前述の太田亮、黛弘道両氏の推論の根拠が崩れてしまい、本拠地に関する疑問がでてくる。

安曇連の本拠地に関する黛弘道氏の説明には疑問点もあるが、しかし安曇氏族が福岡市

周辺に渡来した人々を核として、その地域で拡大形成された血縁的同族集団であることを考慮して考えると、福岡市東区付近を本拠地とすることは納得できることである。なお、この地域は奴国と言われた国があった地であり、弥生時代以降大いに盛えた地である。そのような地に有力な氏族が誕生したと考えることは納得できることである。

志賀地と安曇氏族の関係

また志賀という地名は全国に多数あり、そこも安曇氏族ゆかり地であるとする説がある。たとえば、名古屋市北区元志賀に綿神社がある。ここは安曇氏族と関係深いとすることは納得できる。また石川県羽咋郡志賀町安津見地区は近世にできた地名とのことであるが、安曇氏族との関連がありそうに見える。しかし一方、長野県の志賀高原は安曇氏族とは無関係である。そして長野県の佐久市には志賀という地区がある。『角川地名大辞典』(前掲)によると、古代には魚を獲る場所を「しか」と称していたとのことであり、これが元になっているとのことである。すると、ここは安曇氏族と関連はない。また滋賀県に志賀町があるが、ここも安曇氏族との関係はない。近江国（滋賀県）には古代から「しかのこほり」として滋賀郡があり、滋賀と志賀は混用されていたとのことである。さらに、志賀・志加・志何・志我・磯鹿という漢字も使われていたらしい。そして大分県にも、中世に豊後国大野郡志賀村があり、ここに志賀氏が勢力を張っていた。この志賀氏の場合も安曇氏族との関係はなさそうである。

このように安曇氏族と無関係の志賀地域も多数ある。むしろ関連ある場合は少なく、偶然のことと考えるべきである。志賀という地域はゆかりの地であるという論理は成り立たないと考えられる。

倭国と中国との交流

北九州地域は弥生文化が渡来し繁栄した地域であり、弥生時代に奴国等の国的組織が多数成立した地である。そしてそれらの国々の首長たちは中国の前漢とのそれぞれに交流を行っていた。このことは北九州地域に分布している多数の弥生遺跡甕棺墓から前漢製の鏡等の遺物が発掘されていることから分かる。

そのころの状況は中国の歴史書にいくつか記載されている。最も古い記録では、『漢書』地理誌に「楽浪海中に倭人あり、分かれて百余国となり、歳時を以て来たり、献見す」と記載されている。楽浪とは朝鮮半島に紀元前 108 年に設立された 4 郡の一つである。それで、この記述は紀元前 108 年の頃の日本（倭人の国々）の状況を示していると考えられている。この時期は弥生時代中期であり、日本は百余国に分立していたと言うのである。この頃の国は地域的に形成された同族集団の連合体であり、有力な首長がリーダーとなった集団だったと思われ、明確な国家権力と支配体制があったとは思われない。

金印の時代

次に『後漢書』東夷伝には、福岡地域にあった奴国が西暦 57 年に中国の後漢へ朝貢し「漢委奴国王」という金印を授与されたことが記載されている。この金印が志賀島で発見された。それゆえ安曇氏族と金印そして奴国との関連について、具体的な根拠は不明であるが、

強い関係があったと考えられている。

卑弥呼の時代

そしてさらに、「安帝、永初元年（107 年）倭国王師升等、生口 160 人を献じ、請見を願う」とあり、西暦 107 年に倭国王の使者が後漢の都洛陽を訪れたことが記載されている。

倭国はこの頃安定していたが、やがて弥生時代後期に入ると大いに乱れ倭国大乱と言われる時代が来る。そして女王を擁立し、ようやく倭国は安定したとのことである。この頃の状況については『魏志』倭人伝に記載されている。それによると当時使者や通訳が朝貢のために往来する国は 30 ヶ国あり、西暦 238 年には倭の女王卑弥呼が難升米を使者として魏へ朝貢し、「親魏倭王」という金印を授与されたことが記載されている。『魏志』倭人伝にはこれ以外に当時の日本、邪馬台国、伊都国、奴国等々の状況について詳しく記載されており、当時の様子を知ることができる（第 3 章参照）。邪馬台国の女王は卑弥呼とされているが、その国の所在地は畿内説、九州説等があり、論争中であり今はまだ決着していない。『魏志』倭人伝によると、弥生時代後期において日本は 30 ヶ国あり邪馬台国を中心にまとまっていた。ただし狗奴国とは対立していたとある。卑弥呼の死後また争乱が起こり、卑弥呼の宗族の娘台与を立てたところ国内は安定したとのことである。

このように弥生時代の倭国の状況については中国の歴史書によりおぼろげに知ることができる。しかしその中には安曇氏族に関することは何も記載されておらず、全く不明である。

4～5 世紀のころの日本

つぎに日本の状況が判明するのは、朝鮮の高句麗国の好太王碑文である。そこには 391 年に「倭が辛卯年（391 年）に海を渡り百残・加羅・新羅を破り、臣民となしてしまった」とある。この碑文の解釈にはいろいろありはっきりしないとのことであるが、この頃日本の大和王権は朝鮮半島へ進出を試みていたことが分かる。この時代は、前述したように応神天皇の時代であり、大和王権がほぼ確立したころである。そして大浜宿禰が海人の宰に任じられた頃である。

そして『晋書』安帝紀によると、413 年には倭王が東晋に貢物を献じたとある。この後大和王権の王が中国（宋）へたびたび遣使している。これらは倭の五王と言われる時代の史実であり、当時において大和王権は中国皇帝の権威に基づいて朝鮮半島での主権を確保しようとしていたことが分かる。

これは卑弥呼の時代から約 140 年後のことである。この卑弥呼から倭の五王の間の 4 世紀の事情については全く不明であり、空白の 4 世紀と言われている。そしてこれらの時代における安曇氏族の状況もまた全く不明である。

奴国における安曇氏族

糟屋郡地域は奴国の中にあり、それゆえ安曇氏族は奴国地域で活動し、繁栄していたと考えられるが、具体的な状況は全く分からない。「漢委奴国王」金印は志賀島で発見された。その志賀島は糟屋郡安曇郷ではなくて、隣の志珂郷にある。しかし志賀島には志賀海神社

があり、阿曇家が代々宮司を務めてきた。つまりこの地は安曇氏族の勢力範囲にあったと考えられる。そうすると、安曇氏族はこの金印と強く関連していたと考えられ、そして奴国において重要な役割を担っていたと推測される。すると後漢へ朝貢のため奴国から派遣された人々の中で重要な立場を占めていたと考えることもできるのであるが、しかしその具体的な根拠は全く不明である。

そして「漢委奴国王」金印がなぜ志賀島で発見されたのかと言うことは興味深いことであるが、いまはまだ全くの謎のままである。当時は文字がないため金印の実用的な価値は理解されておらず、使用する機会はなかったと思われる。そこで後漢へ使いした者が、安曇氏だったかもしれない、奴国王から下賜され或いは保管していたと言うことも推測できる。その場合、安曇氏族が金印を保管していたと推測できるが、しかし志賀島は安曇郷から離れている地であり、どのような事情によって運ばれてきたのか大いに疑問である。

中国朝鮮との交流窓口

弥生時代には博多湾周辺には奴国の他に末蘆国、伊都国、不弥国等があり、それぞれに漢と交流していた。奴国の博多湾には那の津という港があり、中国・朝鮮との交流の窓口としての役割を果たしていたと考えられている。しかし『魏志』倭人伝では、中国の使者たちは朝鮮半島から対馬・壱岐島を経由して、末蘆国へ到着したと記載している。末蘆国は、現在の唐津市付近にあった。すると朝鮮半島との交流の玄関口は唐津市付近であり、博多の那の津ではないということになる。すると『魏志』倭人伝の頃には朝鮮との交流の港はいくつもあったということ、そしてそれぞれの地域ごとに交流を行っていたと考えられる。

そうすると、朝鮮半島との海上航海を行う海人たちもそれぞれの地域に居住していたことになる。この海人たちは玄界灘沿岸には広く分布して定着していたと考えられる。つまり末蘆の海人、伊都の海人、奴の海人、宗像の海人等々がいたと考えられる。さらに有明海に面した地域や北九州地域にも多くの海人たちがいたと推測できる。第 8 章で述べたが、安曇氏族はやはりこうした多数の海人たちの中の一氏族にすぎないと考えられる。

志賀の海人たちに「持衰」（第 5 章参照）という習慣が残っていれば、彼らが魏志の使者を案内してきた海人であると言えるが、そのような話は伝わっていない。

安曇氏族の特性

奴国は博多湾に面しており、漁撈は盛んだったと思える。ことに志賀島付近では活発だったと思える。しかし漁撈生産は奴国全体の生産活動からみると、やはり僅かなものであり、漁撈民は奴国で大きな勢力となり得なかったと考えられる。安曇氏族という大きな集団として見る場合、その一部は海人として漁撈活動を行っていたが、大半は工業や農業活動に従事していたと考えられる。奴国は弥生時代には北九州地域の中心的存在であり、青銅器生産が盛んに行われていた。安曇氏族はこの青銅器生産にも関与していたと推測される。

また日本の水稲耕作は菜畑遺跡が始まりとされ、ここでは縄文人が耕作したと考えられ

ている。それに続いて板付遺跡でも弥生時代はじめから水稲耕作が行われていた。板付遺跡は福岡市博多区にあり奴国の範囲である。弥生時代に日本に渡来した人々が弥生時代の稲である温帯ジャポニカ種の水稲耕作を始めたと考えられている。奴国の筑紫平野は水稲耕作に適しており、稲作農耕は盛んであったと考えられる。

安曇氏族はこのように漁撈と言うよりも農工業面において優れた技術能力を有しており、それによって全国進出を果たしたと考えられる。

安曇氏族の痕跡と糟屋の屯倉

安曇氏族が歴史に登場するのは、『紀』によると、応神天皇 3 年（385 年）に大浜宿禰が海人の宰に任じられた時である。これは筑前国でのことでなく、播磨国のことと考えられる。つまり大浜宿禰は播磨国で活動していたと考えられる。その詳細は次章 13-3 章で述べる。弥生時代から古墳時代において、筑前国における安曇氏族の動向はまったく不明である。しかし筑前国糟屋郡安曇郷という地名が平安時代までは残っていたことを考えると、安曇氏族が定着し活動していたことは確かなことである。

なお、安曇連浜子の事件以降に、糟屋郡の安曇氏族がどうなったか興味深いのであるが、それは全く不明である、ここは摂津国から遠く離れた地であり、安曇氏族は無事に存続していたかもしれない。

その後 6 世紀に北九州地域で磐井の乱（527～528 年）が起こった。『紀』によると、この反乱は長期戦となったが筑紫君磐井側の敗北となって終わる。その時筑紫君磐井の子供である葛子は罪を免じてもらうために、糟屋郡地域を「糟谷の屯倉」として天皇家に賠償として献上したと記述されている。当時においては糟屋郡地域は新羅・百済・高句麗への玄関口であり、大和王権にとって戦略的に重要な地であった。そこはかつて奴国の範囲であり、安曇郷・志珂郷があり、安曇氏族が活動していた地である。それを葛子の判断で賠償として寄進したのである。このころには糟屋郡地域は筑紫君磐井の支配地だったのである。

筑紫君磐井は佐賀県の八女市地域を本拠地として、筑紫国（福岡県地域）、豊国（大分県地域）、火国（長崎県、佐賀県、熊本県地域）一帯を支配下に収めていたようである。九州王朝と呼ぶ人もいる程であり、相当に強大な勢力であったと考えられる。糟屋郡地域もその支配下に入っており、そして安曇氏族も支配下に入っていたと考えられる。この地域は奴国の時代には安曇氏族が活躍していたのであるが、その後に筑紫君一族の支配下に入ったようである。いつの時代にどのような経緯でそうなったのかは不明である。そして安曇氏族は磐井の乱においてどのような役割を担ったのだろうか。積極的に磐井に加担したのだろうか。その事情はまったく不明である。

糟屋郡は弥生時代から工業および農業の盛んな豊かな地域だったと考えられる。そして那の津があり、中国・朝鮮との窓口と言える港のある地域であった。つまり経済的に豊かな地域であり、さらに対外的にも重要な地域であった。それゆえにこの地が賠償として選ばれたと考えられる。賠償として天皇家に献上されたとき、安曇氏族はどうなったのか興味深いことである。しかしこの頃の安曇氏族の状況についてはほとんど分かっていない。

[ここに入力]

糟屋の屯倉と安曇氏族

板楠和子氏は「乱後の九州と大和政権」(『古代を考える　磐井の乱』小田富士雄編、吉川弘文館、平成 3 年）の中で、隣の那珂郡に三宅郷があることから糟屋の屯倉の管掌者は三宅連だったとしている。そして京都妙心寺の鐘に「戊戌(つちのえいぬ)年（698 年）四月十三日壬寅収糟屋評造春米連広国鋳鐘」と銘があり、春米連(つきしねむらじ)もまた糟屋の屯倉の管掌者だったとしている。

三宅連が居住していた那珂郡は糟谷の屯倉（糟屋郡）とは近隣地であるが別の行政区域である。糟屋の屯倉の管掌者がなぜ那珂郡にいたのか疑問である。そして那珂郡の郡衙は那珂郷にあったと考えられることからも、三宅連が管掌者だったとすることは疑問である。春米連については 698 年という後世の事であり納得できるが、三宅連については、糟屋の屯倉ができた 528 年頃において管掌者だったとすることは疑問である。屯倉の現地管理者はその地域の豪族が任命されることが普通だった。ここでは安曇氏族の存在は全く不明であり、後述するように追放されたと推測される。

那津宮家と海犬養連

磐井の乱の後糟谷の屯倉ができ、さらに宣化天皇元年(536 年)に那津官家が設置された。現在の博多区博多駅南にある比恵遺跡がその跡とされている。糟屋の屯倉の中で、那の津の近くに造られたものと考えられている。『紀』によると非常の時に備えて稲穀を貯蔵するためのものという名目であるが、朝鮮出兵のための兵站基地だったとの解説がある。つまり大規模な食糧保管所だったと考えられる。そして前述の糟屋の屯倉の管掌者はこの那津宮家に在住して屯倉および宮家を管理していたと考えられる。

このころ全国各地に屯倉が多数設置された。『紀』によると安閑天皇二年（533 年）には数多くの屯倉が設置され、そして 536 年犬養部を設置するとある。この犬養部は犬を駆使して屯倉を守衛することを任務としていたと考えられている。これについては黛弘道氏の「犬養氏および犬養部の研究」に詳しく記載されている。黛弘道氏によると、那津宮家の近くには「三宅、みやけ」、「犬飼、いぬかい」の地名があり、那津宮家、犬養部と関連しているとのことである。そしてそこは犬養部の故地であると推測している。その根拠として、福岡市南区に三宅という地名が残っており、この付近が那津宮家の所在地と考えられるとしている。そしてその近くに犬飼という地名が残っており、そこが犬養部の故地と推測している。興味深い説であるが、しかし、那津宮家があった場所は福岡市の発掘調査の結果、博多区博多駅南の比恵遺跡とほぼ断定されている。一方三宅、犬飼は南区にあり、かなり離れている。この点から黛弘道氏説には疑問が残る。とはいえ、糟屋の屯倉、那津宮家を守衛するために犬養部が設置され、そしてその犬養部を統率する伴造が任命されたということは理解できる。

海犬養氏の設立

黛弘道氏はさらに、犬養部を設置した際、安曇部を割いて犬養部を創設し、その際伴造として安曇犬養連ができた。そして糟屋の屯倉・那津宮家の場合、当時安曇連は海部を統

括していたので海部を割いて犬養部を創設し、安曇連の一族をその伴造とし、海犬養連を作ったのではないかとしている。しかし前述したように磐井の乱後に糟屋の屯倉が造られた時に、安曇連は追放されたと推測される。つまり、犬養部を設立する際には、すでに安曇連は追放されていたと思われる。すると安曇連の一部を割いて海犬養連を造ったと言うことは大いに疑問である。

とはいえ糟屋の屯倉および那津宮家の守衛役が設立されたたとき、海犬養連という新しい氏が登場したということは理解できる。海犬養連は祖神を綿津見命としており、明らかに安曇氏族の一つである。かつてこの地に勢力を張っていた安曇氏族が、海犬養連として復活したように見える。

磐井の乱の後の安曇連の消息

これについて次のような推測が考えられる。安曇氏族は糟屋郡地域で勢力の強い有力氏族であり、それゆえ磐井の乱のときには磐井側に加担して相当に活躍したと思われる。つまり反乱軍の主要な勢力だったと思える。そして反乱軍は敗北し、糟屋郡地域は糟谷の屯倉として天皇家に賠償として献上されたのである。そのとき、反乱側の主要人物たちは処罰されたかあるいは追放ないし排除されたと考えられる。つまりこの地域の安曇連という氏族は表面的には抹殺され、志賀島や大川市等の周辺へ移住したのではないかと思われる。しかし安曇氏族は数百年間にわたって糟屋郡に住み付いて勢力を張っていたのであるから、一族郎党としては無数の根を張っていたと考えられる。安曇氏族の係累は強く残っており、糟屋の屯倉となった後でも実質的に取り仕切っていたと思える。那津宮家の守衛役として犬養部が設置された際、それに編入された人々は、海部ではなく安曇氏族の一族郎党だったのではないかと思う。そこで那津宮家の犬養部の統率者として、安曇氏族の一族郎党・縁者たちが氏族名を変えて海犬養連として復活したのではないだろうか。それゆえ海犬養連は自分たちの祖神として綿津見命を祀っていたと思われる。

安曇氏族の転出

安曇連は糟屋郡の周辺に分散してしまい、替わって海犬養連が誕生した。そして周辺地域へ分散した安曇連の末裔が福岡市東区志賀海神社の宮司家阿曇氏であり、大川市風浪宮の宮司家阿曇氏であると思われる。

海犬養連はその後 7 世紀後半までこの地に定着していたと考えられる。その後、大和政権は 663 年の白村江の戦いに敗れて朝鮮半島から撤退することになる。そして那の津地域（博多湾地域）は唐・新羅からの侵攻に脅かされるようになった。その結果、那津官家の食料保管庫としての役割は終わり、大宰府へ撤収することになった。それを契機にして海犬養連一族は畿内地域へ移住し、宮城門の守衛役に専心することになった。

一方糟屋郡地域においては、海犬養連一族が移住してしまったために、その後の安曇氏族の勢力はすっかり衰えてしまったように見える。現在、安曇郷という地名が残っていないということは、こうした推測を裏付けている。

相島

新宮町に相島と呼ぶ島が在る。6km 程沖合の玄界灘に浮かぶ島で、江戸時代に朝鮮通信使が来日した際に宿泊場所としていた島である。この島に 254 基もの多数の積石塚古墳がある。4 世紀末から 6 世紀後半に造られたものとのことで、その被葬者は誰なのかは不明とのことである。地元では安曇族かあるいは宗像族が造ったのではないかと言われている。

積石塚古墳は日本の各地に広く分布しており、長野市松代町には 500 基を超える大室古墳群がある。積石塚古墳は朝鮮半島の高句麗系の墓制と言われている。新宮町の小さな島に多数の積石塚古墳が在ることは興味深いことであるが、安曇氏族との具体的な関わりは不明である。

綿津見神社

糟屋郡の周辺地域である志賀島に志賀海神社があり、大川市に風浪宮神社があり、安曇氏族の系譜を残している。とはいえ安曇神社とか綿津見神社と称さずに、志賀海神社、風浪宮と名乗る事情はなぜなのか興味深いことである。大宰府天満宮の境内に志賀社がある。ここでは綿津見命を祀っているという。しかしここでも安曇神社という名前を使っていない。また、かつて存在した安曇郷と言う地名もなくなっている。このように安曇と言う名前が消えてしまったことは、この地域における安曇氏族の衰退を暗示しているように思える。これが糟屋郡地域の安曇氏族の現状である。

このことはこの地域の綿津見神社の状況からも推測できる。綿津見命を祀る神社は全国に万遍なく分布しており、その総数は 853 社である。そのうち福岡県にある神社数は 130 社であり、他の県に比して飛び抜けて多い。これは福岡県地域が安曇氏族の本拠地であるということを示唆している。福岡県の中で安曇氏族と関連深いと考えられる糟屋郡地域として、福岡市東区・博多区・新宮町・古賀市について見ると、綿津見命を祀る神社は 11 社である。意外と少なく、安曇氏族の痕跡は薄いといえる。一方大川市と柳川市には数多く 48 社あり、福岡市糟屋郡地域よりも多い。ここでは神社名として綿津見神社よりも海童（わたつみ）神社が多く、また祭神としても綿津見命よりも少童命（わたつみのみこと）が多い。このことは、糟屋郡地域の安曇氏族が磐井の乱後にこの地域に移ってきて、此処に定着したと言うことを示唆しているように思える。

なお『姓氏家系大辞典』（前掲）によると、久留米市の高良玉垂宮（高良大社）の小祝（神職のひとつ）に阿曇氏がおり、磯良の後と言っており、これは筑後国の安曇氏であるとしている。これは安曇氏族との関連を想わせるが、確かなものとは言えない。

１３－３　畿内地域（大阪市、神戸市周辺）：摂津・河内・播磨国

１）安曇氏族の第 2 の本拠地

安曇氏族は弥生時代のはじめ頃から日本列島を東方へ進出し、全国の各地に分散定着したと考えられる。しかしその頃、氏族名として「あづみ」と名乗っていたかどうかは定かではない。そして弥生人たちの東方進出の流れと共に畿内地域へ進出し、弥生時代後半には播磨国の現在の神戸市垂水区・明石市付近に定着し大きな勢力となっていたと考えられ

る。ここでは大和王権と強く結びつき、その後摂津国および河内国地域へも進出し勢力を伸ばしていった。これらの地域は福岡市東区地域に次ぐ第２の本拠地と言える。

神戸市垂水区地域

『紀』によると応神天皇３年、『処処の海人、訕彧（さばめ）きて命に従わず。則ち阿曇連の祖大浜宿禰を遣わして、其の訕彧を平ぐ。因りて海人の宰（みことものち）とす』とある。ところどころの海人たちが命に従わず反乱したので、大浜宿禰に命じて鎮圧させたというのである。すでに述べたことであるが、応神天皇 3 年は朝鮮三国史記と対比させると西暦 385 年となる。これによると、この頃安曇氏族が海人の統率者となったこと、大和王権において有力な氏族だったことがわかる。

淡路島の海人の反乱

この処処の海人とはどこの海人かということが重要な問題である。『紀』の解説では不明とのことであるが、次のように推測できる。当時の海人たちが広い範囲にわたって組織されていたとは考えられないから、局所的に発生した反乱と考えられる。そして、わざわざ大浜宿禰を派遣して鎮圧させたと言うことは、その地域は大和王権にとって重要な地域だったと考えられる。

当時の大和王権にとって大陸との交流交易は鉄挺を入手するためにも重要課題であった。その主要なルートである摂津国住吉津・難波津から九州・朝鮮へ行く海上ルートにおいて、明石海峡を安全に通過することは重要課題であった。明石海峡は播磨国と淡路島に挟まれた、狭い海峡である。このころ播磨国側は大浜宿禰が支配していたと推測できる。一方淡路島には古代から海人が多数居住して活発に活動しており、大和王権もその力を活用し、そして頼りにもしていた。明石海峡の安全航行は、この両者によって保たれていた。すると淡路島の海人たちが大和王権の命令に従わず反乱することは、重要な海上ルートを失うことになり、到底見過ごしにできないことである。つまり、このとき反乱を起こした海人とは淡路島の海人だと考えられる。そして大浜宿禰は明石海峡を目の前にする播磨国、現在の神戸市・明石市付近において勢力を確保していたと考えられ、淡路海人の反乱を鎮める役割として適していたのである。

海人が反乱した地域として明石海峡地域の他に博多湾一帯も考えられる。そこは海人の居住地であり、朝鮮半島との窓口に当たるところであり、大和王権にとって重要なところである。それゆえこの地域の海人が反乱したとすると、やはり武力を持って鎮圧することになる。しかし博多湾一帯は古代から地域の支配体制が出来上がっており、農工業が発展し、社会経済的に発展していた地域である。海人たちが大きな集団を作って、大きな反乱を起こすような組織力を付けていたとは考えられないのである。そしてそこは安曇氏族との関連深い地域である。そのような事情からこの地の海人たちが反乱したとは考えにくいのである。

阿波国名方郡

この点に関して『姓氏家系大辞典』（前掲）は、阿曇連は筑前国から阿波国名方郡に本拠

地を移していたと記している。その根拠として、名方郡にある天石門別(あめのいわとわけ)豊玉比売神社、豊玉比売神社（和多都美豊玉比売神社）は安曇氏族の氏神神社だとしている。しかし祭神は豊玉姫命である。安曇氏族の氏神神社の場合、綿津見命、宇都志日金析命（穂高見命）を祭神としている。一方豊玉姫命を祀る神社は多数あるが、それらは安曇氏族系というよりも天皇家系である。こうした点から前記神社は安曇氏族の氏神神社ではないと考えられる。さらに名方郡（なかたぐん）は那縣（那の津）の名を移したものであり、筑前国安曇郷との関連を示していると記している。しかし『地名辞典』（前掲）によれば、名方郡は阿波国の国府が置かれた地であり、粟凡直氏が国造だった地とのことである。つまりこの地域の豪族は粟凡直氏だったというのである。すると大浜宿禰がこの地に移り住んで、勢力を張っていたとは考えられない。

そして『姓氏家系大辞典』は、大浜宿禰はこの地において淡路島の野嶋海人たちを統率していたとも記している。しかし、野嶋海人の居住地は淡路島の北方、明石に近い側と推測されており、阿波国名方郡とは遠隔地である。そして名方郡と野嶋の間には三原海人たちが居住していたのである。両者が強く結ばれていたとは考えられない。

阿波国は摂津国と離れており、大和王権と緊密に結びつくことは難しいと言える。大和王権の要職を占めて活動する場合には、やはり摂津・河内に近い方が好ましいことは言うまでもない。

このように見ると、阿波国名方郡が安曇氏族の第 2 の拠点であるということは間違いと考えられる。なお、第 7-23 で述べたように、この地には安曇部栗麻呂がおり、貞観 6 年（864 年）に宿禰の姓を賜っているという記録があり、この地は安曇氏族と関係深いと言うことは分かるが、この話は大浜宿禰の時代から 4 百年以上も後世の事であり、論拠とするに値しないと言える。

海神社

播磨国（現在神戸市垂水区宮本町）に海（わたつみ）神社がある。古代から続く式内社であり、祭神は綿津見命三神である。神社の由緒では、神功皇后の三韓征伐の帰りに暴風雨を鎮めるために綿津見三神を祭祀したことが始まりとしている。しかしこれは『記紀』に記載された神功皇后の記述に合わせて後世において作られた伝承と思える。そもそも『記紀』では綿津見神に祈ったのでなく、住吉神に祈ったと記述されている。この点で神社の伝承には疑問がある。大和王権が確立し天皇制が成立してから以降の時代、特に明治時代では、多くの神社では天皇家との系譜を求めて、天皇を祭神として合祀して祭祀していることが多い。そうした皇国史観と軍国主義をもとにして作られた伝承と思える。

神社の由緒では、前述の神功皇后の祭祀伝承に基づいて、航海安全・漁業繁栄の神としてさらに交通安全の神としても仰がれているとしている。綿津見大神の娘　豊玉姫尊は彦火々出見尊（ひこほほでみのみこと）に嫁がれて、皇室の親、神武天皇の父親である鵜鷀草葺不合尊（うがやふきあえずのみこと）を産んだ。そのとき大変安産であったとのことで、安産の神としても祀っている。また彦火々出見尊は水産業・農業をはじめ水によって生計を立てる人

の守護神であり、開運厄除の神でもあるとしている。これらの由緒は明らかに天皇家との関わりを強調するために後世に作られた伝承と言える。主祭神が綿津見三神でありながら、綿津見神は棚上げされ、端に寄せられてしまっている。天皇家の威風に圧されて綿津見神、安曇氏族は影が薄くなってしまったようである。

また神社のホームページには神社の歴史的背景として次のような記述をしている。「神社周辺は縄文・弥生時代から人々が定着し生活していた。神社の西方約 550m の所には兵庫県下最大の前方後円墳である五色塚古墳があり、成立は４世紀末から５世紀初めとされ、瀬戸内海の海上航路の重要地である明石海峡大橋を望む高台に造られている。墳丘を覆っていた茸石は、明石海峡を挟んで対岸の淡路島から運んできたものであると云われている。このことから被葬者は、海事に従事していた人々を治め、この地域に勢力をもっていた豪族であったと思われ、この時代からすでに海運が活発に行われていたことがうかがえる。これらのことから海事に関係の深い人々がこの垂水の地には多く存在していたと思われ、航海術が未発達の当時、海上鎮護のため海大神を信奉する人々が社殿を設け祀っていたのが始まりではないかと考えられる。」（下線は筆者記入）

ここでいう「この地域に勢力を持っていた豪族」と「海大神を信奉する人々」は同一であり、そして「海大神」とは綿津見三神のことである。つまり前記の豪族とは安曇氏族のことと理解できる。そして「海事に従事していた人々」とは淡路島の海人たちも含む漁撈や海上輸送を行っていた人々のことと考えられる。すると、前述の大浜宿禰がこの地で活躍した話と合致するのである。海神社のホームページに記載された歴史的背景の記述は本来の史実を反映していると考えられる。

綿津見神社を調査した際、神社の長い歴史の中で神社名や祭神の変遷があることがしばしばあったことを見た。この海神社の場合は祭神の変遷ではないが、神社の由緒書きの変遷であるといえる。

五色塚古墳

『紀』によると、神功皇后が三韓征伐から摂津の難波へ帰還する時に、麝坂（かごさか）王と忍熊（おしくま）王が叛旗をたて神功皇后を討とうとした。そして仲哀天皇の陵墓を造ると言って播磨の明石に山陵を構築し軍兵を集め、神功皇后たちを迎撃しようとしたとある。解説によると、陵墓を造ると称して軍兵を集めたのだろうとある。さらに『紀』には、麝坂王たちは戦勝祈願の狩りを行ったところ、赤猪が出てきて麝坂王を食い殺してしまった。そこで忍熊王は、戦いは不利である考え、軍隊を住吉へ移した。その後、神功皇后はその反乱の動きを知り、迂回して難を逃れ紀伊に上陸した。その後忍熊王は宇治へ退いて、そこで皇后軍と戦い、敗死したと記述されている。この話の明石の山陵が五色塚古墳であるという説がある。これについて森浩一氏は「海と陸のあいだの前方後円墳」（『日本の古代５前方後円墳の世紀』、森浩一編、中央公論社､昭 61 年）の中で、「この記事に該当する古墳であることも良く知られている」として、この説を肯定している。しかし『紀』に記述されている神功皇后の年代はまったく不合理であり、そもそも神功皇后は実在していなか

ったとされている。そのような話に実在の古墳を結びつけることは、とうてい合理的な話とは言えない。

また『日本後紀』（森田悌訳、講談社、2006）の延暦 18 年条に和気清麻呂の出自に関する記述がある。そこに「(神功皇后が) 新羅から凱旋した年の翌年忍熊別皇子が反逆すると、皇后は弟彦皇子を遣わして播磨国と吉備国の堺の山で誅殺した」と記載している。これは『紀』の記述内容と大きく食い違っている。どちらの記述内容が正しいのか断定できないが、どちらにも後世の造作が入っていると思える。

仲哀天皇の陵墓は実際には河内国長野陵（藤井寺市）とされており、播磨国明石に造ることは不合理であった。現在の五色塚古墳は全長 194m、前方部高さ 11.5m、後円部高さ 18 mと大きなものであり、短期間に築造できるものではない。忍熊王たちが短期間に築造したとは到底考えられない。

当時、4 世紀ころにこの地域には安曇氏族が勢力を張っていたと考えられるのであり、五色塚古墳は、安曇氏族が築造したと考える方が妥当である。このことは海神社の由緒書きとも一致する。このように現在の神戸市垂水区地域において、安曇氏族が強大な勢力を築いていたことが分かる。しかし現在ではその痕跡はほとんどない。ことに地名において、何らかの痕跡が在って良いと思うのであるが、見つからない。それは、まるで故意に消し去ったようにも思えてくる。

２）大阪市難波地域、住吉仲皇子の反乱　（地図参照）

難波津、住吉津、安曇江

安曇氏族はその後、摂津国難波（現在の大阪市中央区区）方面へ進出して行った。この頃の摂津国難波付近の状況については『クラと古代王権』（直木幸次郎、小笠原好彦編著、ミネルヴァ書房、1991）に詳しいので、それに基づいて整理してみる。九州方面から瀬戸内海を通過して大阪湾へ入った場合、摂津国の南部地域に到達する。大阪湾の東端であり、上町台地と呼ばれる陸地である。そこは九州や大陸との交通の要衝であり、大和王権にとって重要な地域であった。そのため弥生時代後期から栄え、仁徳天皇の時に難波堀江が開削され、孝徳天皇の時には難波宮が造られ、平安時代には副都として扱われていた。また律令制では摂津国は他の国と異なり国司でなく摂津職をおいて、朝廷の直轄組織としていた。ここには住吉津（大阪市住吉区付近）と難波津（大阪市中央区付近）と呼ばれた港があった。九州方面から運ばれてきた荷物はここで一旦陸揚げされ、それから陸上を河内・大和へ運ばれた。その場合住吉津の方が、陸路が短く便利であり、当初はこちらが栄えたようである。住吉津は、住吉神社の宮司の津守連が管理しており、難波津は三宅連が管理していたと考えられるとのことである。また難波津では大伴氏も勢力を張っていたようである。

住吉津と難波津はともに上町台地の西側の大阪湾側にある。弥生時代上町台地の東側には河内湖と呼ばれた大きな汽水湖があった。つまり上町台地は大阪湾と河内湖を分断する如くに位置していた。河内湖から大阪湾への流出口は小さく、そのため上町台地の東側地

域では大雨の時には洪水の被害が大きかったらしい。そのため仁徳天皇の頃に上町台地を開削して東側地域の河内湖と大阪湾を結ぶ堀（難波堀江という）を造るという大工事が行われた。その結果河内湖の排水はスムースになり、さらに難波津に着いた船はこの堀江を遡って河内・山背へ航行できるようになった。これは非常に大きな利点であり、これ以降では難波津は住吉津より栄えることになったとのことである。難波津は難波宮の至近位置にあり、九州・大陸との交流の玄関口としてますます繁栄していった。

このころ安曇氏族は海人の宰に任じられており、勢力の盛んな時であった。播磨から難波へ進出してきたばかりと思えるが、堀江の開削工事には積極的に参加し貢献したと思える。そして堀江の北岸に安曇江（あづみえ）とする地を拠点として手に入れたと考えられる。

安曇江については『続紀』に天平 16 年 2 月（739 年）に聖武天皇が「安曇江に幸（みゆき）して、松林を遊覧したまふ」と記述されている。海岸沿いに広がる風光明媚なところで、ことに松林が美しかったと言われている。

安曇江に関連して安曇江荘が在ったことが知られている。平安時代の東大寺文書に安曇江荘の記載があり、東大寺領の荘園だったとのことである。安曇江を含む地域にあった荘園のようである。このことについては前述の『クラと古代王権』（第 6 章）に記述されている。そして安曇江の具体的な地図（添付図参照）が記載されている。難波宮の北にある堀江の対岸に位置し、東大寺領の新羅江荘に隣接する位置にある。また堀江を挟んで難波荘の対岸でもある。安曇江は安曇氏族が管理する港だったと考えられ、難波地区における安曇氏族の拠点となっていたと考えられる。なお、安曇江の読み方として、『続日本紀』は「あづみのえ」としているが、大阪市北区野崎町に「アドエ」という小字があり、そこが安曇江の在った場所とする説があることを解説している。安曇氏族は応神天皇の頃には播磨の明石付近で活躍していたが、仁徳天皇の頃には摂津の難波地域に進出していたと思われる。

住吉仲皇子との関係

住吉津は難波宮より南にあり、現在の住吉大社付近にあった。難波堀江が開削される以前は、大和へ向かう場合には陸路であり、住吉津の方が河内・大和に近く難波津よりも便利であり、そのため栄えていたとのことである。住吉津は津守連の勢力下にあった。住吉仲皇子は住吉津を拠点に活動しており、津守連の庇護のもとにいたと考えられる。住吉津は安曇江から約 10ｋｍの近くにあり、住吉仲皇子が阿曇連浜子と日頃から親しい間柄だったと推測することは容易である。

住吉仲皇子の反乱

『紀』履中天皇即位前紀（427 年）条には阿曇連浜子が住吉仲皇子の皇太子暗殺クーデターに加担し、敗北したとのことが記載されている。その経緯は次のようである。住吉仲皇子は仁徳天皇の次男であった。仁徳天皇が崩御したとき、皇太子である去来穂別（いざほわけ：のちの履中天皇）は皇太子妃として黒媛と婚姻する予定であった。しかし弟の住吉仲皇子は黒媛を見て自分の妻に欲しくなり、夜中に忍び込んで一夜の関係を持ってしまう。

[ここに入力]

しかし、翌日皇太子が黒媛を訪ねて、そのことを知ることになる。そこで住吉仲皇子は、去来穂別皇太子を暗殺する決心をして、阿曇連浜子を誘う。阿曇連浜子は皇太子暗殺の為に淡路島の野嶋の海人を動員して皇太子を追撃する。しかしいち早く逃げ出した皇太子側の反撃にあい、野嶋の海人たちは捕捉されてしまい、追撃は失敗に終わる。そして一方の住吉仲皇子は部下の裏切者により暗殺されてしまい、皇太子暗殺計画は失敗に終わる。そして阿曇連浜子は捕えられてしまう。その後皇太子は即位し、阿曇連浜子に対し、国家を傾ようとする罪であり死罪に当たるが、恩赦して顔に入れ墨する刑に処するとし、即日入れ墨した。当時の人々はこれを安曇目といったとある。また野嶋の海人たちの罪を免じて、倭の蒋代（こもしろ）の屯倉に移して労働に従事させたとある。蒋代の屯倉がどこかについて解説では不明としているが、門脇禎二氏は奈良県橿原市付近とする地図を示している（『古代を考える　河内飛鳥』吉川弘文館、平成元年）。

この事件からいろいろなことが分かる。この頃、住吉仲皇子は摂津国住吉津に住んでいたと思われる。そして阿曇連浜子はそのすぐ近くの難波津付近の安曇江に住んでいたと思われる。二人は日頃からかなり親しい関係にあったと考えられる。皇太子暗殺計画を告げられてすぐに行動を起こしていることは、こうしたことの裏付けとなる。また住吉仲皇子が頼りにしたと言うことは、阿曇連浜子が大きな勢力を持っていたからと考えられる。さらに野嶋の海人をすぐに動員して戦闘に参加させたことから、野嶋の海人に対して絶大な支配力を持っていたと考えられる。しかし安曇部を動員するのでなくて野嶋の海人を動員したということは、このころ安曇部は摂津付近には居なかったと思える。

阿曇連浜子が住吉仲皇子の誘いに乗って皇太子暗殺に加担した狙いははっきりしない。難波津の支配権を狙って、三宅連に対抗しようとしたのだろうか。

この事件では、首謀者である住吉仲皇子は配下の者の裏切りにより刺殺されてしまった。阿曇連浜子は従犯とはいえ、皇太子暗殺・国家転覆という大逆罪を犯したのである。死罪は免れたものの安曇目という屈辱的な刑罰を受けた。これは世の人々の目にさらされ、嘲笑を浴びることになる。安曇連は当然のこととして、大和王権の表舞台には登場できず、さらに日常的にも日陰の存在になり下がったと考えられる。それまでの海人の宰としての権勢はなくなり、従って海上支配権はなくなり、安曇氏族の経済的な富の源泉はなくなってしまったと考えられる。このころ天皇に背いた場合、その罪を贖うために自分の所有地を屯倉として差し出すことが通例だったようである。この時は何を賠償として差し出したのだろうか。全くの推測であるが、堀江の北側一帯の地域を安曇氏族は領有しており、この土地を安曇江部分のみ残して他を差し出したのかもしれない。平安時代の東大寺文書に安曇江荘の記載があり、東大寺領の荘園だったとのことである。つまり平安時代には安曇江の地域は安曇氏族の領有から離れ、東大寺に移っていたのである。或いはまた土地ではなく海上航路支配権を差し出したのかもしれない。しかしそれでも安曇氏族は生きながらえることができたのである。その後長い間雌伏していたようである。

この事件が他所の地域の安曇氏族にどのような影響を与えたのかははっきりしないけれ

ど、国家の大逆罪であり、地方においても他の氏族から虐げられたと推測することもできる。そしてその結果近隣の有力氏族から攻められ滅ぼされたかもしれない。京都府舞鶴市地域、滋賀県安曇川町地域、愛知県旧渥美郡地域にみられる安曇氏族の衰亡現象はこうしたことの反映かもしれない。また神戸市の海神社が由緒書きのなかで、ことさらに安曇氏族や綿津見命を伏せていることは、この事件の後遺症かもしれない。

復活への動き

そして推古天皇（593～628 年）の頃に再び大和朝廷の表舞台に登場し、天皇のそば近くに仕えるようになった。このころ大和朝廷は奈良県明日香村にあった。安曇氏族の本拠地は播磨・摂津国と考えられるが、奈良の都付近にも居住地を持っていたと考えられる。このころ安曇連は蘇我氏に近づき、そして朝廷でも要職を得たようにみえる。『紀』では推古天皇の 624 年に、蘇我大臣馬子の使いとなって葛城県を蘇我氏に下賜して欲しいと推古天皇へ願い出ている。安曇連は、蘇我大臣の使いとはいえ天皇に直接このような大それた要望を申し出ている。このことから当時安曇連は蘇我氏に近かったと思われる。また安曇連は朝廷の中で天皇のそば近くに仕えていたと思われる。

安曇寺（あづみてら）と旻法師

難波宮の少し南に行ったところに安曇寺を建立している。その時代は不明であるが、孝徳天皇の時代には完成していた。『紀』によると、653 年に孝徳天皇が阿曇寺に僧旻を親しく見舞ったとの記述がある。僧旻は中国系の渡来人で学僧であり推古天皇から孝徳天皇のころにかけて活躍し、孝徳天皇のとき国学博士に任じられており、朝廷で重要な役割を果たしていた。その旻法師が病気となり、阿曇寺で病気療養していたのである。旻法師は天皇の見舞いを受け、その翌月に亡くなっている。国学博士である旻法師が阿曇寺で死の床についていたのである。それは安曇氏族と旻法師の関係が強かったことを示している。そして孝徳天皇の安曇連に対する信頼も強かったといえる。これらのことから当時安曇連は朝廷においてかなり重要な地位を占めていたと思われる。

阿曇寺の存在した場所はこれまであちこちの候補地について検討されてきたが、いまだ特定されていない。当時の状況からみて摂津国難波地区、現在の大阪市中央区安堂寺町地区が最有力とのことである。そこは孝徳天皇の難波長柄豊碕宮の隣に位置している。現在この地区の町内会は渥美連合と称している。町内会の方の話によると、明治から戦前までこの地区は「渥美（あつみ）」と云われ「渥美小学校」もあったとのこと。そしてここは「安曇寺（あんどうじ）」跡であったといわれ、地名の「安堂寺町（あんどんじちょう）」のもととのことである。長い歴史の中で地名表示は変遷し、阿曇は渥美に変わり、阿曇寺は当初阿曇寺（あづみ）であったものが阿曇寺（あどんじ）と変わり、つぎに安堂寺（あんどんじ）となり、そして安堂寺（あんどうじ）と変わったとのことである。

ただしこれとは異なり、大阪府柏原市に安堂町があり、安堂廃寺があるとのことである。『続紀』によると奈良時代には河内国大県郡に家原寺（えばらじ）があった。この家原寺が安堂廃寺とされている。しかし、河内国大県郡安堂村は近世になって登場する名前であり、

古代には家原里だったようである。そして家原寺は家原氏の氏寺だったと言われている。すると、この地は大阪市の安堂寺とは無関係と言うことになり、安曇氏族とは関連のないことになる。

阿曇寺は飛鳥寺、四天王寺、法隆寺に続く飛鳥時代の寺であり、安曇氏族の氏寺と考えられる。寺の規模ははっきりしないが、この時代に氏寺を創建していたということは、安曇氏族が大きな財力と勢力を有していたとことを示している。この時代は仏教の普及期であり、安曇氏族が仏教普及に深く関わっていたと考えられる。このころ安曇氏族は蘇我馬子大臣に近づいて大和朝廷での復活を果たしたと思え、それゆえ蘇我氏に同調して仏教導入・普及に関わり、自分たちも氏寺を創建したと考えられる。

安曇氏族の復活

これらのことから安曇氏族は推古天皇のころ、6 世紀末ころに復活し、そして桓武天皇のころ、8 世紀末ころまで難波の阿曇寺、安曇江の地域を拠点として活躍していたことが分かる。安曇氏族は播磨・摂津地域に弥生時代終わりころから定着し勢力を張っていたのであり、阿曇連浜子の天皇暗殺事件以降では朝廷の表舞台から離れ日陰の存在になったけれど、それでもこの地域を離れずに住み続けていた。5 世紀から 6 世紀にかけての約 150 年間の雌伏の時代が続いたといえる。そして推古天皇のときに復活したのである。

３）兵庫県揖保郡太子町

『播磨国風土記』（前掲）に播磨国石海里、現在の兵庫県揖保郡太子町付近、について次のような記述がある。孝徳天皇の時代（645～654 年）、阿曇連百足（ももたり）が里に百枝の稲が生えているのを見て、それを取って天皇に献上したところ、天皇はこの野を開墾して田を作ることを命じた。そこで安曇連百足は安曇連太牟（たむ）を遣わして、石海（石見国）の工人を使って開墾した。それゆえこの野を百便（ももたり）、村を石海（いわみ）と名付けたとある。

地元の郷土史家の話によると石海里の開拓工事は大規模な灌漑工事を伴うものだったとのことである。石海里は林田川の左岸にあり、水田用の水は林田川から導水しなければならない。しかし林田川の水量は少なく石海里の灌漑用としては不足だったとのことである。そこで西に約２ｋｍ離れた所を流れている揖保川から林田川へ導水しそこに井堰を造り、そこから石海里へ導水したとのことである。当時の工事として、具体的な数値は不明であるが、相当に難工事であり、莫大な財力と労力動員力を要したことと思われる。

古代において大規模な古墳を築造する大工事がたびたび行われていた。また難波の堀江の開削工事も大規模な土木工事であった。そうした大工事は大王や豪族が指令し、兵士を動員したり住民を徴発したりして行ったものである。この開拓工事は、天皇の指示があったとはいえ、安曇氏族が石見から労働力を動員して行ったものである。安曇連は大規模な灌漑・開拓工事を遂行する知力・能力を有していたのである。このことは安曇氏族が海人とは言えないような高い技術能力と大きな勢力を持っていたことの証拠である。

また前記書には安曇連百足はもと摂津の浦上に住んでいたが、播磨国へ移ってきたとあり、その地を揖保郡浦上里と名付けたとある。浦上里は現在の揖保川町浦部に比定されて

おり、太子町の西隣にある。ここは播磨国の西部にあり、揖保川の河口にある。良港であり、海上交通の要地でもあった。安曇氏族は播磨国を西方へも勢力を広げたと思われる。

４）河内国八木郷

河内国和泉郡八木郷（現在の岸和田市）は八木造の本拠地だったとされている。ここに夜疑（やぎ）神社があり、祭神は布留多摩命（ふるたまのみこと）であり、八木氏の氏神神社である。『録』によると八木造は「和多羅豊命（和多罪豊玉彦：筆者注記）児布留多摩乃命之後也」とあり、布留多摩命を祖神として祭祀する氏族である。それゆえ八木氏は安曇氏族の一氏族と考えられている。

また淡路島には淡路国三原郡八木村に式内社笑原（やはら）神社がある。『系譜集成』（前掲）によると、八木造の祖は八玉彦命（振魂命は別名布留多摩命と呼ばれ、その孫にあたる）であり、ここが居住地とある。つまり八木造の発祥の地との説である。しかし笑原神社の祭神は素盞嗚命、月読命、少彦名命 であり、布留多摩命とも綿津見命とも無関係である。

５）住吉大社

摂津国難波の南隣、現在の大阪市住吉区には住吉大社がある。この宮司は、明治以前は代々津守氏であった。この津守氏の氏神は綿津見神とのことであり、それゆえかつて境内の大海（だいかい、おおわたつみ）神社に祭神として祀っていたとのことである。大海神社の祭神は、現在は豊玉彦命（ただし綿津見命と同一神とされている）、豊玉姫命となっているが、古文書では大綿津見命、玉依姫命或いは塩土老翁、豊玉姫命、彦火々出見尊と記載されているとのことである。また住吉大社の境内に志賀神社があり、祭神は綿津見神である。住吉神と綿津見神の関係は関連深いようであるが、その関係はよく分からない。

なお、大海神社について「神奈備」と題するインターネット記事がある。それは、「オオワタツミと訓む。延喜式神名帳に元名として津守安人神とある。安人神とは現人神の意である。海人の信仰する現人神とは塩筒老翁のこと。また安曇磯良である。祭神については前記の他、大綿津見命・玉依姫命、また塩土老翁・豊玉姫命・彦火火出見尊などがあるが、安曇氏が祀っていた海神を津守氏が祀ることになって津守安人神となったと、『日本の神々３』で大和岩雄氏は述べている。この大海神社は住吉大社創建以前からこの地に鎮座していたと推測されている。大社の場所は田裳見宿禰の領地であった所を社地として提供したとされる。田裳見宿禰の後裔の津守氏の氏神的存在であり、祭祀は安曇氏、管掌は津守氏であり、津守氏はもっぱら住吉大社の祭祀にかかわっていた。」と記している。しかしこれでは安曇氏・綿津見命と津守氏・筒男命の関係はますます分からなくなってしまう。

６）淡路島

淡路島は明石海峡の対岸にあり、大和朝廷と九州・朝鮮を結ぶ海上交通にとって重要な地である。また天皇たちがしばしば狩りをしていたところであり、大和王権と関係深い地域だった。そして多くの海人たちが定着していた島だった。また弥生時代の大きな鉄鍛治工房跡が見つかっており、古くから活発な地域であった。

『紀』によると、応神天皇のとき海人がさばめいて反乱したのを大浜宿禰が鎮めて従属

させた。その功により大浜宿禰は海人の宰に任命された（385 年)。この海人とは、前述したように淡路島の海人であると推測される。この時から淡路島の海人（野嶋の海人）は安曇氏族従属したと考えられる。

その後住吉仲皇子の皇太子暗殺事件に際して、阿曇連浜子は淡路島の野嶋の海人を動員して、住吉仲皇子に加担した。しかしその反乱はあっけなく失敗してしまった。その結果安曇連は顔に入れ墨する刑に処せられ、そして野嶋の海人たちは一族全体が他所へ移住させられ、淡路島にはいなくなったと考えられる。なお、淡路島には野嶋の海人以外に御原の海人（三原の海人）も定着しており、天皇家の従属海人として活動していたことが知られている。現在では淡路島には綿津見神社もなく、安曇氏族の痕跡はないのである。

前述のように八木造の本拠地は淡路国三原郡八木村であるという説があることを述べたが、安曇氏族・八木造との関連は見いだせない。結局のところ、淡路島は古代においては安曇氏族と関わりあったと考えられるが、現在ではほとんど関連は無くなってしまったと言える。

このように大阪市（河内、摂津)、神戸市（播磨）地域は福岡市地域よりも安曇氏族の影が強く残っており、安曇氏族ゆかりの地である。そしてこの地域は長い歴史の中でさまざまな戦闘が繰り返され、いまでは安曇氏族の痕跡はすっかり消えてしまったが、興味深い地域である。

１３－４　滋賀県高島市安曇川町地域：近江国伊香郡安曇郷

伊香郡安曇郷

『抄』によると琵琶湖湖北に伊香郡安曇郷があった。『地名辞典』（前掲）によると「あどのごう」と読むと説明している。場所は、現在の長浜市高月町阿閉（あつじ）地域とされている。現在、西阿閉地区に安曇橋があり、そこに「安曇橋」と刻まれた石柱がある。地元の人は「あどばし」と呼んでいる。いつの時代の設立か不明であるが、「阿」でなく「安」と言う文字を使っているところから、奈良時代以降の設立と思われる。奈良・平安時代には安曇郷が存在していたことの痕跡と考えられる。

『地名辞典』によると、その後安曇河御厨ができたとのことである。場所は琵琶湖湖西の高島郡の中だったとのことである。これは堀川天皇の寛治４年（1090 年）に設置され、上賀茂神社に寄進されたとのことである。そして戦国時代には安曇川荘に変わったとのことであるが、江戸時代にはその地名は残っていなかったようである。こうして、伊香郡の安曇郷と高島郡の安曇河御厨はともに消滅し、江戸時代には安曇という地名は消えていたようである。

伊香郡は『地名辞典』によると、河内国伊香郷に住んでいた物部氏一族が移り住んだ地とのことである。そして伊香郡には伊香郷があり、その他に７郷ある。その中の一つが安曇郷である。すると、この地においては伊香郷・物部氏が中心であり、そして安曇郷・安

曇氏族の勢力は小さかったと思える。それは、安曇氏族は後から伊香郡に移住してきて、定着したのではないかと示唆しているように思える。

『録』の皇別編に幾つもの阿閉臣が記載されており、「阿閉」（あへ）という氏族がいた。高月町阿閉では「あつじ」と読むが、阿閉臣からきていると考えることもできる。阿閉臣は孝元天皇皇子大彦命の末裔とされ、阿部氏と同系とされている。すると高月町阿閉地区と安曇氏族との関連はまったくあいまいなものとなる。なお「阿閉」と「阿閇」は同じであり、元明天皇は、即位前は阿閇（あへ）皇女と呼ばれており、乳母が阿閉氏の女性だったらしい。この辺の事情については「阿閉氏に関する一考察」（近畿大学水産研究所）に詳しい。

湖北地域は戦国時代に激しい戦闘が何度もあり、古くからの家屋敷・神社・寺院などはすべて焼けてしまい、古文書等は何も残っていないとのことである。そのために安曇郷や安曇氏族に関する史料、伝承はなにも残っていないとのことである。また綿津見命を祀る神社の調査結果からも安曇氏族の痕跡は見えない。

しかしこの地域は安曇氏族が定住していた地域であることを疑う根拠は何もない。

高島市安曇川町

高月町から西の方にある琵琶湖湖西に高島市安曇川町がある。前述の安曇河御厨が在った地域である。そこは安曇川という大きな川の河口に広がる三角州地帯である。この地は古代から高島郡であるが、安曇川という名称があり、また安曇という小字地名が記された古文書が残っている。しかし、古代において安曇郷という地名があったことを示す痕跡はない。

安曇村という地名が登場するのは近世である。明治に入り合併を重ねて徐々に大きな村に編成され、明治 22 年に常磐木村、五番領村、田中村、三尾里村、西万木村の 5 村が合併して安曇村が発足した。その後昭和 29 年に安曇町（安曇村が名称変更）・広瀬村・青柳村・本庄村が合併し安曇川町が発足し、さらに平成になって高島市安曇川町となった。つまり安曇川町という地名は古いものではなく、新しいものである。湖北の伊香郡には安曇郷があったが湖西の高島郡には安曇郷はなかったのである。

後述することであるが、この地の安曇氏族は古代、古墳時代の中頃において駆逐され、この地から移住させられたと言われている。そのため、古代においては存在した安曇という地名が抹消されたのではないかと推測できそうである。

高島市安曇（あど）族勉強会があり、そこの方たちから『安曇川町史』、『まんが安曇川町の歴史』（滋賀県安曇川町）、その他関連資料を頂き、またいろいろな話を聞いた。それらをもとに安曇川町地域と安曇氏族の関係をまとめると次のようである。

安曇氏族の進出

『安曇川町史』によるとこの地は古代において海人族・安曇族が居住していた地域である。安曇川の上流に上古賀地区があり、ここに弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が発見されている。そこで土錘が出土している。この土錘は弥生時代に使用された漁撈用具の

部品と考えられ、海人族がこの地域に定着していた証であるとしている。そこは海人族・安曇族が日本海側から進出してきた時の源郷（ルーツ）ではないかとしている。そしてこの海人族は日本海の若狭湾地域から進出してきたと推測している。

また安曇川に隣接する大字安井川の大宝寺遺跡から、蓋つきの坏が発掘され、その中にハマグリが５個入っていた。そのハマグリはこの地では採れないもので、おそらく若狭湾で採れたものを運んできて、死者の霊前に供えたものであろうと記述している。これも海人族がこの地に定着していた証としている。

海人族が近江国高島郡・伊香郡へ進出してきたルートとしては、日本海・若狭湾側からのルートと瀬戸内海・大阪湾・淀川・瀬田川方側からのルートが考えられる。そのうち若狭湾側からのルートとしては小浜市から上古賀・安曇川町へ入るルートと敦賀市から伊香郡へ入るルートが考えられる。町史では、「古くから波状的に侵入を繰り返したに違いない」としている。つまり進入ルートはいくつもあったというのである。若狭湾からの進入についても、伊香郡安曇郷地域へ進出した安曇氏族がいて、そして安曇川地域へ進出した安曇氏族もいたということのようである。しかしこの点については疑問であり、後で再検討することにする。

『安曇川町史』によると上古賀地域に進出した海人族・安曇族はその後安曇川下流へ進出し、安曇川町地域へ移動した。その時代は 3 世紀以前であると推測している。古文書（大字安井川字限図）には「安曇」と表示された小字地名が載っており、これが安曇川、安曇川町のもとになったと推測している。つまり小字地名の安曇と一級河川の安曇川とが、この地に進出してきた海人族が安曇族であることを示していると言うのである。

また安曇川周辺の古墳のうち安曇川の南側にある古墳群は継体天皇（507～531 年）の出身氏族である三尾氏のものと考えられるが、北側の饗庭野丘陵にある熊野本古墳群や大宝寺山古墳群は安曇族のものであった可能性が高いとしている。このようなことから古代において安曇族がこの地で大いに勢力を張って居住していたとしている。

湖西の安曇人

司馬遼太郎氏は『街道をゆく』シリーズの第 1 回目として「湖西の道」を書いている。その中で「湖西の安曇人（あづみびと）」という章を作って、安曇族について少し触れている。司馬氏は安曇族＝海人族という思い込みを持っており、安曇族のことを「この海で魚介を獲る種族は、どうも容貌がひねこびて背がひくく、一方、長身で半島経由してきた連中にくらべて一目みてもなり姿がちがったようにおもえる」と書いている。さらに「アヅミは日本の地名では、厚海、渥美、安積、熱海などとさまざまに書くが、この琵琶湖の西岸にやってきた安曇族は、なんとも侘しげで、ひょっとするとほうぼうの海岸の同族と大げんかして、ついに内陸へのぼり、やっとこの湖をみつけてしぶしぶながら住みついたひねくれ者ぞろいだったかもしれず」と書いている。司馬氏の安曇族に関する認識について、私はかなり強い違和感を覚えるが、古代において湖西地方で安曇族が定着していたということには異論ない。湖西に限らず湖北地方にも広がって定着していた。

[ここに入力]

「あど」と読む理由

この地域では、安曇の読みは「あづみ」でなくて「あど」である。『安曇川町史』によると、音韻論的にはイヅミは泉であり、井水とも表記する。これは水の出るところという意味であり、井戸と同じである。つまり井水（イヅミ）は井戸（イド）と同じであり、結局ヅミとドは同じであり、その結果「あど」と発音されたと説明している。

これについては次のようにも考えられる。『紀』の崇神天皇紀に武埴安彦命を謀反の罪で誅殺しようとしたとき、「挑河」を挟んで両軍が対峙したと言う記述がある。そして今は「泉河」と訛っていると記述している。この例では、「ど」は訛ると「づ」になるという例である。この話は『記』の崇神天皇記にもある。河の名前でなく、その地の名前として「伊杼美」という。そして今では「伊豆美」と言うと記述している。これも前述同様に、「ど」が訛って「づ」に変わっている。安曇川の場合もこれと同様の訛り、つまり「づ」が「ど」へ転訛したと考えた方が分かり易い。

しかし私には、こうした説明は後から無理矢理こじつけた説明のように思え、実際はもっと深い事情が隠されているように思う。それは次のようなことからも推察できる。

万葉集に安曇川に関する歌がいくつも載っているが、「安曇」と表記されずに、「阿戸」（＃１２３０）、「吾跡」・「余跡」（＃１２９３）、「阿渡」（＃１６９０）、「足速」（＃１７１８）、「足利」（＃１７３４）と表記されている（『新編日本古典文学全集　萬葉集』小島憲之・他、小学館、1995 掲載の原文より）。当時安曇川という地名表記はすでにあったと考えられるのであり、『記紀』にも阿曇・安曇と表記されているにも拘わらず、なぜこのような表記をしたのだろうか。万葉集の歌は万葉仮名と言われる漢字で表記されている。漢字の意味とは無関係に発音を使って、当時の日本人の言葉を表記したものである。それゆえに、漢字文字の差異について論じることは無意味なのかもしれない。

しかしそうではないように思えるのである。つまり前述の「あづみ」という読みを「あど」と変えたことに関連して、さらに「安曇」、「阿曇」という表記も抹殺した結果のように思えるのである。そのようななにか深い事情があったのではないだろうか。

この点に関連して『安曇川町史』は次のような推測をしている。弥生時代から古墳時代において安曇族はこの地域で勢力を張っていたが、その後三尾氏に征服されその支配下に入った。それは継体天皇の時代より以前、5 世紀から 6 世紀にかけての頃であり、氏族の主だったものはすべて大和・河内方面へ強制的に移住させられたのではないかと記している。つまり安曇川町地域では、古代において壮絶な争いがあり、安曇族は抹殺されたというのである。万葉集に次の歌（旋頭歌）がある。

霰降り遠江の吾跡川楊　苅れれども　またも生ふとふ余跡川楊　（巻７－１２９３）

（町史によると大意は「遠い近江の安曇川の楊よ。いくら刈ってもまた伸びてくるという安曇川楊よ」とある）

町史を編纂した橋本鉄男氏はこの歌について、安曇川から強制移送させられた安曇族が自分たちを吾跡川楊にたとえ、自分たちはなんとしても故郷の安曇川へ帰るという願望を

込めて、刈られたがまた復活するんだという意を込めて、都で歌った歌であると推測している。安曇氏族の悲運を想わせるが、納得できる解釈である。すると、安曇氏族は古代において三尾氏との争いに敗れて、氏族民は移住させられ、さらに安曇郷という地名は抹消されそして地名の読みを「あど」と変えさせられたのではないかと思えてくる。氏族民ばかりでなく地名まで抹殺するような憎しみを伴った争いとはどんなものだったのか、いまの日本では想像し難いことである。

その結果として、安曇川町地域では安曇氏族の痕跡は少ないことは当然と考えられるのである。しかし不思議なことに安曇比羅夫の墓と刻まれた石柱碑がある。ここが安曇比羅夫の終焉の地である根拠はなにもない。多分後世に地元の篤志家が建てたと思える。

また安曇川町には蒲生の薬師という安曇氏の氏寺があるとのことであるが、これも一体いつの時代に誰が建立したのだろうか。安曇氏族が残っていたのだろうか、不思議なことである。そして逆に、安曇川町には綿津見命を祀る神社はないのである。なぜなのか不思議であり、ちぐはぐに思える。一方、湖北の旧伊香郡には綿津見命を祀る神社が 2 社残っている。ただしその神社から安曇氏族の痕跡は見いだせない。

安曇郷と安曇川町の関連

安曇川町地域の安曇氏族と伊香郡安曇郷地域の安曇氏族の関係について考えてみる。両者は若狭湾周辺に定着していた同一の氏族集団だったが、その後別々に移住し、それぞれの地域に定着したと考えることもできる。しかし、若狭湾周辺で安曇氏族の痕跡の強いところは舞鶴市付近である。そこから近江地域へ進出することを考えると、小浜経由で上古賀地域へ進出するルートが最適といえる。これに対し敦賀経由で伊香郡地域へ進出するルートは、敦賀地域にはすでに別の氏族が定住していたと考えられることから、そこを集団で通過することは困難だったと考えられる。

また、両者とも安曇のことを「あど」と読んでいた。全国の安曇氏族の中で「あど」と読む地域はこの２か所のみである。このことは両者の近親性を示している。つまり両者は同じ氏族集団だったと推測される。

このように見ると、舞鶴市地域に定着した安曇氏族は小浜経由で安曇川町地域に進出し定着した。そして弥生時代から古墳時代に活動していた。その後三尾氏に征服されたのは 5 世紀代と考え、それ以降は安曇川地域では安曇氏族の痕跡は消えてしまう。しかし三尾氏に征服されたとき、安曇氏族の一部は湖北方面へ逃げたのではないかと思われる。そして伊香郡安曇郷地域に定着したと思えてくる。伊香郡は前述したように物部氏の勢力範囲であり、安曇郷は後からそこに加わったように思えるのである。伊香郡安曇郷地域に移住した安曇氏族は生き残った。少なくとも『抄』が作成された平安時代中頃までは安曇郷は存在していたのである。

すると、先に述べたように、はじめは安曇川町地域にいたが、駆逐されて伊香郡地域へ逃げてきて安曇郷地域に住み付いたと考えることが合理的と思える。

内陸部へ移住した理由

安曇川町地域は琵琶湖の畔にあるとはいえ漁撈の方法は海でのそれとは異なる。そして海とは縁のない内陸地域である。なぜ、海人族と言われる安曇族が進出してきたのだろうか。それは長野県安曇野市の場合と同様の謎である。ただし安曇川町の場合は、背後の山を一つ越えればそこは日本海・若狭湾であり、安曇氏族が九州から進出して来て定着していた地域である。『安曇川町史』が指摘するように、そこから進出してきたと考えることは合理的と思える。とはいえ、その理由なり狙いは不明である。

こうしてみると安曇川町地域には安曇氏族に関する大きな悲劇と深い謎とが眠っているように思える。阿曇連浜子が摂津で皇太子暗殺事件に加担して敗北したのが 427 年であり、おおよそその頃に衰退の時期があるようにも思える。

これらは私の推測に基づく問題提起であり、今後地域の人たちと共に調査研究していきたいと思っている。

１３－５　舞鶴市周辺（大浦半島、由良川下流地域）：丹後国加佐郡凡海郷

丹後地方を中心として若狭湾沿岸地域には、弥生時代から漁撈を主とした生活をする海人たちが多数定着していた。丹後半島の京丹後市久美浜付近、宮津市与謝野町付近、舞鶴市大浦半島付近に海人たちの痕跡がある。その中で舞鶴市大浦半島と対岸の由良川下流地域には安曇氏族の痕跡が色濃く残っている。舞鶴市教育委員会からいろいろとご教示を受け、いくつかの参考図書を紹介された。それらを勉強した上で、この地域の安曇氏族について整理してみた。

加佐郡凡海郷　添付地図

舞鶴市地域は『抄』によると丹後国加佐郡凡海郷の在った地である。『加佐郡誌』（京都府教育委員会編）によると、現在の舞鶴市大浦半島付近および由良川下流付近としている。ここは凡海連の居住地だったと考えられる。『録』は平安時代の書であるが、そこでは凡海連の本貫地は平安京の右京とある。しかし彼らの拠点は加佐郡凡海郷だったと考えられる。『地名辞典』によると、室町時代には建福寺領となっており年貢の多寡を巡って訴訟沙汰があった。その時の記録に「丹後国凡海郷代官職事」という記述があるとのこと。すると室町時代までは凡海郷の地名は残っていたのである。しかしその後凡海郷地名は消えてしまい、現在は残っていない。なぜ消えてしまったのか、それは興味深い謎である。

黛弘道氏（「海人族のウヂを探り東漸を追う」（前掲））によると、平城京跡から出土した木簡に「周防国大嶋郡美敢郷（みかもごう）」とあり、続いて「凡海直薩山御調尻塩（みつきしりしお）」と記載されたものおよび「凡海阿耶男御調塩」と記載されたものがあり、それにより大嶋郡、現在の山口県周防大島町には凡海連の一族が居住していたと記している。すると凡海連の一族は瀬戸内海方面にも広がっていたと思われる。ただし、凡海直という姓（かばね）が存在したか疑問であり、凡海が姓であり、直薩山という名前だったのではないだろうか。とすると、連という姓をなくしてしまった後の凡海の一部が丹後国から周防国へ移動して行き、

直という姓を名乗ったとも考えられる。しかしあいまいなところが多く、はっきりしない。

とはいえ凡海郷とする地名は丹後国加佐郡凡海郷だけであり、凡海連の本拠地はこの加佐郡の凡海郷だったと考えられる。

凡海郷の位置ついては加藤晃氏の「幻の凡海郷と古代加佐郡の郷域」(『舞鶴地方史研究第 44 号』(舞鶴地方史研究会　平成 25 年) に詳しい。『紀』の天武天皇 5 年 9 月条 (676 年) に「新嘗(にいなめ)の為に国郡を卜(うらな)はしむ。斎忌(ゆき)は尾張国の山田郡、次(すき)(須伎(すき)ともいう) は丹波国の訶沙郡(かさのこほり)、並びに卜(うら)に食(あ)へり」との記述がある。これは新嘗祭で使用する稲籾を採取する場所を決めるための占いを行ったところ、尾張国山田郡と丹波国訶沙郡がでたというものである。なお、丹波国は律令制が確立されたころ、7 世紀後半頃に但馬国を分離し、その後 713 年に丹後国を分離した。そして丹波国訶沙郡は丹後国加佐郡となっている。また天武天皇 2 年 12 月条に「大嘗(おおにへ)に侍奉(つかえまつ)れる中臣・忌部及び神官の人等、あはせて播磨・丹波、二つの国の郡司(こほりのみやつこ)、また以下(しもつかた)の人夫(おおみたからども)等に、ことごとくに録賜(ものたま)ふ。」とあり、天皇即位の際の大嘗祭の時にも丹波国が選ばれていたと考えられる。加藤晃氏は、これは天武天皇と丹波国訶沙郡（現在は丹後国加佐郡と表示される）の関係が深いことの現れと考え、幻の凡海郷と古代加佐郡についての考察を行っている。それによると、凡海郷は加佐郡にあった 9 郷のうちの一つであり、境界ははっきりしないとしながら、大浦半島の西北部付近と西側の対岸にある由良川下流付近としている。そして大浦半島の千歳地域が中心的地域だったと推測している。凡海郷の位置についての加藤晃氏の考察は、『加佐郡誌』と同様であり妥当と言える。とはいえ加藤氏は凡海連は天武天皇（大海人皇子）の養育者だったとしているが、その根拠についての説明はあいまいである。天武天皇と凡海連・凡海郷を関係づけることは、説明不足であり難しいと言わざるを得ない。凡海連と大海人皇子の関係については第 6 章で詳述した。またそこで触れたことであるが、凡海連真磯という人が加佐郡安曇郷に居住していたと言う話もあるが、その痕跡はなにもない。

雄島まいりの慣習

丹後地域は、弥生時代に弥生人たちが、九州方面から日本海沿岸に沿って出雲地域を経て、進出してきて定着した地である。安曇氏族が弥生時代から全国各地へ進出していったことを考えると、丹後地域に安曇氏族が進出してきて定着したことは容易に納得できる。そしてこの地を経由して、安曇川町地域へ進出していったと推測することも妥当と言える。

凡海郷から海上北方に約 10 キロのところに冠島（雄島、大島ともいう）がある。この島はオオミズナギドリの繁殖地として有名な無人島である。今でも「雄島まいり」という習慣が続いており、地域の人々の厚い信仰の対象となっている。毎年６月に島にある老人嶋(おいとしま)神社を地元の人が船でお参りする習慣である。「老人嶋（冠島）は古来から三ヶ村（野原、小橋、三浜）の氏神である」とされており、島の管理は野原村、小橋村、三浜村の人々が行っている。この３ヶ村はかつての凡海郷の在った地域にあり、かつては凡海連の一族郎党が活動していた地である。雄島まいりの習慣は古代の凡海郷の習慣を継続していると考えられる。つまりこの地域は古代から続いている安曇氏族ゆかりの地であることを示してい

ると言える。雄島まいりについて、高橋卓郎氏が「漁撈習俗と民俗信仰」（『海と列島文化２　日本海と出雲の世界』、網野善彦　他、小学館、1991）に詳しく書いている。

老人嶋神社祭神の変遷

冠島が凡海郷の氏神だとすると、そこに祀られる神は凡海連の祖神である綿津見命と考えられる。古代ではそうだったと思われるが、しかし現在はそうではない。冠島の老人嶋神社の現在の祭神は天火明命（あまのほあかりのみこと）と日子郎命（ひこいらつみこと）である。天火明命は海部（あまべ）氏の祖神とされている。安曇氏族は海人の宰に任じられ、海人の統率者となっていたのであるから、海人としての海部氏は安曇氏族・凡海連の支配下にあったと考えられる。海部氏の祖神がなぜ冠島の祭神となっているのだろうか、不思議である。その後、安曇氏族と海部氏族との争いがあり、安曇氏族は敗れて衰退し、その結果神社の祭神も入れ替わったということかもしれない。

前述したように現在凡海郷地名は残っておらず、中世ではすでに消えてしまっていたようである。そのことは、この安曇氏族衰退の表われである。つまり室町時代の頃には、凡海連はこの地域から駆逐され、消えてしまったと思えるのである。

しかし「雄島まいり」と称して冠島へ渡り、老人嶋神社へお参りする習慣は古代から現在まで続いている。これは凡海郷の野原・小橋・三浜地区の漁師たちが豊漁と安全祈願のためにお参りするものであり、年に 1 回だけ島に上陸して行っている。かつての凡海郷の時代の習慣が続いているように思える。なお、老人嶋神社がいつ創建されたのかはふめいである。そして地元では凡海郷に関する伝承は残っていないようである。

神社の祭神の変遷

この地域には安曇氏族関連の神社がいくつもあるが、祭神に関しては変遷があるように思われる。その事情は以下のようである。

笑原（やはら）神社

舞鶴市紺屋町に笑原神社がある。式内社であり、祭神は天照大神、豊受大神、月夜見神である。笑原神社についてはいろいろな所見があり混乱している。笑原神社と表記し、えばらと読んでいるものもある。また祭神についても、豊受大神、月夜見神との説や、北野大明神との説などがある。さらに神社を祭祀する氏族として海部氏、凡海氏と記載しているものもある。その辺の事情について、高橋卓郎氏が「漁撈習俗と民俗信仰」（前掲）に記載している。それによると笑原（やはら）神社は、元は笑原（のはら）神社と呼ばれて野原村にあり、野原、小橋、三浜村の総氏神と言われていた。そして現在は舞鶴市紺屋町へ移転し、前述の笑原（やはら）神社と呼ばれているとのことである。

これらのことを整理してみると次のように考えられる。笑原神社がかつて野原村にあり、野原・小橋・三浜村の総氏神として祀られていたときは、当然のこととして凡海郷の氏神であったと考えられる。すると凡海連の祖神である綿津見命が祀られていたことになる。そして、その後神社は移転し、祭神も入れ替わったと言うことになる。ここに凡海連と海部直との勢力争いがあり凡海連が敗退し駆逐されたこと、或いは凡海連は衰退し滅亡した

ことが背景にあるように考えられる。

宇豆貴（うずき）神社

舞鶴市の隣の宮津市与謝町に宇豆貴神社がある。安曇氏族が祭祀する神社とされ、式内社である。海岸から約 15ｋｍ離れた山間部にあり、舞鶴市・凡海郷からかなり離れた場所である。境内はよく手入れされており、地元の人たちに大事にされていることが分かる。しかし静かに、ひっそりと建っている。祭神として伊邪那岐命と宇都志日金拆命を祀っている。宇都志日金拆命は穂高見命の別名であり、その点で安曇氏族・凡海連が祀ったと考えられる。しかし神社の名称は安曇氏族・凡海連との関連性なく、また江戸時代には臼木（うすき）大明神と称していたとのことである。そうしてみると舞鶴市・凡海郷地域で駆逐された凡海連一族がこの地に逃れてきて、ひっそりと宇都志日金拆命を祀っていたのではないかと思える。そして凡海連という名前も変えていたかもしれない。

大川神社

舞鶴市大川（由良川左岸）地区は凡海郷の西半分にある。そこに大川神社が在る。式内大社（式内社の中で大社と扱われている神社）であり、この地域では宮津の籠（この）神社とともに正一位と言われ、最高級の神階をもっている。高橋卓郎氏「漁撈習俗と民俗信仰」（前掲）によると、かつては冠島（雄島）にあったものを遷し祀ったとの伝承があるとのことである。伝承によれば、冠島から海を渡り、金色の鮭に乗り、右手に五穀の種、左手に蚕を携えた神がやってきて、その神を祭祀したのが始まりとのことである。神社は農業の神、蚕の神と考えられているが、漁民の信仰も厚く、祭には船に乗って参拝する風習もあるとのことである。

大川地域は凡海郷にあり、弥生時代に九州方面から進入してきた人々が定着した地域であり、海人族の痕跡が強く残っているとのことである。安曇氏族・凡海連が定着していた地であると考えられる。

現在の祭神は農業神としての保食（うけもち）神であるが、以前冠島にいたとすれば、元来の祭神は冠島の神と考える方が素直である。古代には綿津見命を祀っていたのではないだろうか。ネット記事に「明治政府が編集した「特選神名牒」には、祭神欄が空白になっています。つまり、本当の祭神はよく分からないのです」というものもある。神社の長い歴史の中で祭神の変遷が在ったことは他の地域の神社でも数多くみられることである。大川神社の場合も祭神の入れ替えがあったのではないだろうか。

矢田神社

丹後半島の西部の京丹後市久美浜町に矢田神社がある。式内社であり、祭神は建田背命（たけたせのみこと）であり、配神として和田津見命、武諸隅命（たけもろすみみこと）を祭祀している。建田背命は海部直（海部氏）の祖神であり、海部直が祭祀する神社である。海部直はこの地域で活動しており、丹後国造・但馬国造をしていたとされている。そこで祖先の建田背命およびその児武諸隅命を祭祀していたことはよく理解できるが、和田津見命を祭祀する理由は分からない。一説によると、

神社の鎮座地の地名が「海士」なので、「海士」と関係深い和田津見命を祭祀したのではないかという。また『古代海部氏の系図』（金久与市、学生社、1999）によると、かつては綿積神を祀っていたとのことである。矢田神社では海部直の祖神と安曇氏族の祖神が同居しているのである。これはかつて海部直（海部氏）と安曇氏族が関係深かったことの現れと思える。一方、舞鶴市の老人嶋神社、笑原神社、大川神社の場合では綿津見命は排除されている。どうも祭神にはさまざまな変遷がありそうである。

籠神社

丹後半島の東部の宮津市に籠神社がある。式内大社であり丹後国一宮として古代から続いている神社である。主祭神は彦火明命であり、相殿に海神も合祀されている。古代より海部氏が宮司を務めてきた。平安時代に書かれたという海部氏の系図が残っており、国宝に指定されている。相殿に合祀されている海神は航海安全、漁業繁栄の神とのことであり綿津見神のことと考えられている。冠島・舞鶴市付近では綿津見命は排除されているのであるが、ここで海部氏が綿津見神を祀る事情はなぜなのだろうか。宮司の話でも、その事情ははっきりしないとのことである。なお、海神とは住吉神のことであるという説もあり、これによると海神とは筒男命と考えられる。

この辺の事情ははっきりしないが、勝手に推測すると次のようになる。応神天皇の時代、職業集団として「海部」が創設されたときその統率者として大浜宿禰（安曇氏の祖）が任命されている。つまり海部氏は安曇氏に従属していたのである。海部氏が安曇氏族を駆逐、或いは安曇氏族が衰亡したとき、舞鶴市地域においては綿津見命を排除したが、ここでは統率者である安曇氏に敬意を表し、また安曇氏からの祟りを恐れて自分たちの氏神神社である籠神社に配祀して怒りや恨みを鎮めようとしたのではないだろうか。

大虫神社

宮津市の海岸から約 10km 内陸に入ったところ、前述の宇豆貴神社より海岸に近い位置の与謝郡与謝野町温江地区に大虫神社（式内大社）が在る。明治 14 年に阿知江神社（式内社）を合祀した。大虫神社は古くには大江山の池ケ成に鎮座していたが中世になって今の地に遷したとの伝承がある。本来この地は阿知江神社の地であつたが、遷ってきた大虫神社の名称のみが残つたということも考えられるとのことである。阿知江神社の祭神が少童命とされる事情は不明であるが、度会延経は『神名帳考証』において「あつえ・あちえ」と「安曇（あづみ）」との関係を仄めかしているとのことである。そうすると、古代において安曇氏族が神社を創建したが、その後地域での勢力争いに敗れて名前が変わり阿知江神社となったのではないかとの推測もできる。

海神社

丹後半島の西側の豊岡市小島 266 に海神社がある。神戸市の海神社は「わたつみｊ神社と呼ぶが、ここでは「かい」神社と読んでいる。その理由は全く不明である。式内大社であり、祭神は大綿津見命である。『神祇志料』では海部直の祖・建田背命（天火明命六世孫）を祀るとあるとのことである。また、ごく近くに絹巻神社が在り、海部の祖、天火明命を

祀っている。この地でも海部直の影響力が現れているようであり、安曇氏と海部氏の混在が見える。

なお、「大綿津見命」はどのような神なのかあいまいであるが、それは前述したように、『記』の記述があいまいだからと考えられる。『記紀』の海神の宮においては、三柱の綿津見神を一人の神として表現しており、「海（わたつみ）の神」、「大神」、「綿津見大神」、「海神豊玉彦」と表記している。これが「大綿津見神」として表現されるようになったと解釈できる（第5章参照）。

丹後半島における安曇氏族の衰退

以上の神社は、かつてこの地域において安曇氏族・凡海連が活躍し定着していたことを強く示唆している。安曇氏族は弥生時代に丹後地方（若狭湾沿岸一帯）へ進出し定着したが、その後平安時代の頃には地域での勢力争いに敗れ駆逐されてしまった。あるいは衰退してしまったと思える。替わって、海部直（海部氏）がこの地域を支配するようになった。そして安曇氏族としての名前は消され、神社の祭神も変えられたのではないかと思われる。冠島の雄嶋まいりは、安曇氏族が古代に凡海郷に住んでいたことの名残のように思える。前述したように、凡海郷と言う地名は室町時代までは残っていたようであるが、その後はなくなってしまった。

このように現在は丹後地域、若狭湾沿岸地域における安曇氏族の痕跡は非常に薄いのであるが、興味深い地域である。

１３－６　豊橋市地域：三河国渥美郡渥美郷地域

１）濃尾平野への弥生人の進出

渡来系弥生人たちは弥生時代前期に九州地域から日本列島を東方へ進出してきた。近畿地域に到達し、さらに東海地域へも進出した。しかし濃尾平野に到達したところで、その東方進出の動きは停止した。そして約百年間、そこに定着していたとのことである。当時は東日本地域に先住していた縄文人たちの勢力が強かったために、渡来系弥生人たちはそれ以上東進できず、ここで対峙することになったようである。つまり弥生文化と縄文文化が対峙する状況だったのである。その頃の弥生文化と縄文文化の分布域の様子とその後の両文化の融合の状況が当時の土器の研究によって明らかになっている。それについては田中琢氏の『日本の歴史２倭人争乱』（集英社、2007）に詳しい。

濃尾平野・東海地域では縄文時代に多くの人々が定住していた。それは吉胡（よしご）貝塚のように大きな貝塚遺跡が幾つもあることからわかる。縄文時代の貝塚遺跡は他の地域でも多数発掘されており、縄文人が積極的に漁撈活動を行っていたことが分かる。漁撈活動は海人族と言われる人々に限ったことではない。また吉胡貝塚からは大量の人骨も出土している。その調査によると、この地の縄文人はほとんどの人が抜歯をしており、そして一部の人は歯を叉状に研削していたとのことである。なぜそのようなことをしたのか興味深いことで

ある。これについていろいろな説があるが、いずれも納得しがたい。今後の研究課題であると思う。

濃尾平野を含む東海地域には弥生遺跡も多数発掘されている。弥生時代の初めころに伊勢地方から海を渡って渥美半島へ到来した人々、伊勢地方から北上して名古屋市地域へ到来した人々、そして琵琶湖方面から関ヶ原地域を経由して名古屋地域へ到来した人々がいたと考えられる。名古屋市・清洲市の朝日遺跡は東海地方における最古の弥生遺跡であり、大きな規模の集落跡である。貝塚が幾つもあることから、当時海進が進み海岸線はかなり内陸部へ達していて、弥生人たちは魚介類を多く採取して生活していたと思われる。

豊橋市の篠束遺跡（しのづかいせき）は米作りを主眼とした弥生集落である。一方、隣接する瓜郷遺跡（うりごういせき）は半農半漁の生活をする弥生集落とのことであり、おそらく海人的特性を持った人々が居住していたと考えられる。そして篠束遺跡と瓜郷遺跡のように隣接していても生活形態に差異があるということは、弥生人集団は一様ではなく、氏族的集団ごとに分かれて定着し、それぞれに特徴的な生活をしていたと考えられる。つまり、弥生人たちは東方進出した時に、氏族的集団を形成して移動していたと考えられる。そのために、定着して地域において、それぞれの集団の特性に応じた生活様式ができたと考えられるのである。

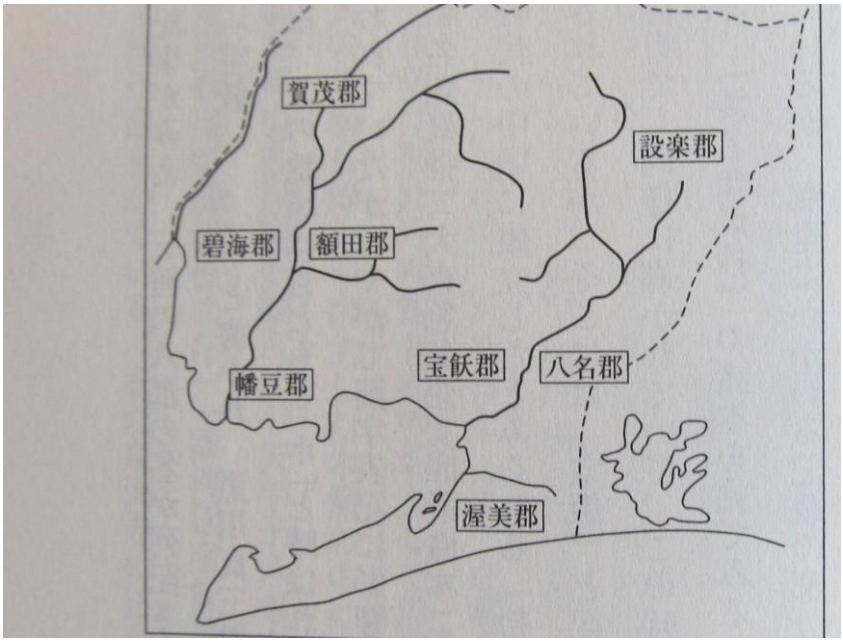
弥生文化と縄文文化が対峙していた期間は約百年間続き、その後弥生人たちはさらに東方、中部（信濃国）地方・関東地方・東北地方へ進出していった。この対峙の期間に弥生文化と縄文文化の混淆・融和が行われたようである。それは弥生人たちが信濃国へ進出した頃の遺跡から水神平式土器と遠賀川式土器が共存して出土していることから分かる。水神平式土器は対峙の時代に縄文集落で始まったもので、東海地域独特の条痕文土器とのことである。縄文土器の系譜をひいているが弥生土器の影響を強くうけており、弥生文化伝播の一つの指標ともされている。そして遠賀川式土器は福岡県の遠賀川流域で弥生時代初期に作られた土器で、弥生文化の代表的指標とされている。

長い対峙の時代の中で縄文人たちは土器や水稲耕作などの弥生文化を吸収した。この文化の融合は、縄文人と弥生人の混血融合の面でも積極的に行われたと考えられる。そして彼らはその混淆文化を持って、信濃国方面、関東地方へ進出していった。そこでこれらの土器の出土地域を辿ると、当時の弥生人たちの進出ルートを知ることができる。そしてその弥生人たちの中に、安曇氏族集団もいたと考えられるのであるが、しかしその痕跡は全く見つからない。

２）渥美郡渥美郷

『抄』によると、古代に三河国には渥美郡渥美郷があった。この渥美は安曇からの転じたものと言われている。このことを疑う根拠は何もないが、しかしなぜ渥美なのかということはあまり明確ではない。いくつかの説を見てみる。

律令制時代の三河国渥美郡位置（ネット情報より）



太田亮氏は『姓氏家系大辞典』で三河の安曇氏という項を作り、次のように記している。『抄』に三河国に渥美郡（阿豆美と訓あり）渥美郷があったと記されている。総国風土記には三河国に赤日子神社があり、祭神は海神綿積豊玉彦神である。安曇氏が祭祀していると記載されている。これらの事情から、渥美という名称の起源は安曇氏より起こっているとしている。分かり易く整理すると、三河国赤日子神社の創建は天智天皇の頃といわれている。するとその頃安曇氏は三河国宝飯郡、現在の蒲郡市に定着していたと言うことになる。渥美郡渥美郷は三河国にあり、隣接する地域である。当然のこととして、安曇氏の勢力範囲に入っていたと考えられる。従って当初には「安曇」「あづみ」「阿豆美」だったが、その後「渥美」に転じたというのである。しかし、渥美郡渥美郷が安曇氏の勢力範囲だったことは理解できるが、なぜ「安曇」が「渥美」へ転化したかは、いまいちあいまいである。

『渥美郡史』は古来から海人を支配する安曇氏が伊勢・渥美地域において勢力を張っていたとし、それがいつの頃からか郡の名となり、そして渥美と呼ばれるようになったと記している。さらに『三代実録』に清和天皇貞観二年（860 年）のときに参河国が銅鐸を献上したと記し、続けて「渥美郡村松の山中にこれを獲たり」と記されているとしている。そしてこれが渥美郡が文献に現れた最初であると記している。この説明も前述と同様に、渥美半島・豊橋地域が安曇氏の勢力範囲だったことは、後述する事情等とも合わせて理解できるが、なぜ渥美と表記されているかということはあいまいである。

『渥美半島の文化史』（愛知大学総合郷土研究叢書８、久曽神　昇）は次のように記している。「半島及び郡名の「渥美」はもと「あくみ」であり、豊橋の古名「飽海」も「あくみ」であり、海洋部族の安曇氏の名に負うことは今更いうまでもない。即ち渥美半島の名称は

安曇氏の勢力範囲となってからの呼称であろう。而してこの部族は、更に海岸を北上し、蒲郡市赤日子神社などが根拠地となったのではあるまいか。惣国風土記に「所祭、海神綿積豊玉彦神也、安曇氏、祝祭之」とあるのは注意すべきである。この部族は更に沿岸を北上し、幡豆郡、碧海郡に進出したことも、殆ど定説となっている如くである。なお、渥美半島南岸を経て浜松地方に達し、更に天竜川を遡上し信濃に到達したことも定説の如くになっている。わが渥美半島の文化は、この海洋部族によって開かれたと考えることもできよう。」この説はもっと分かりにくい。渥美半島はもともと「あくみ」「飽海」だったと言うのであれば、安曇氏が進出してからも「あくみ」「飽海」或いは「安曇」でよいと考えられる。なぜ渥美かということはあいまいなままである。

また古代三河は、三河国と穂国（ほのくに）に分かれており、大化の頃に二国が統一され三河の国になったとのことである。そして碧海、賀茂、額田、幡豆（はず）、宝飯（ほい）（後に設楽を分立した）、八名、渥美の七郡であった。前述の赤日子神社は宝飯郡に在る。安曇氏は渥美郡渥美郷を本拠地としたと思うのが素直であるが、するとなぜ宝飯郡に氏神神社を建立したのかという疑問がある。

『地名大辞典』は次のように記載している。「郡名は、天平年間に当地の豪族だった渥美氏の先祖阿曇連に由来すると伝える。阿曇連は主に漁撈に従事する海部と呼ばれる部族を統率する長で、記紀にも記載されている。渥美半島の先端地方に住み付いた有力な海部の長が阿曇と称し、豊川地方まで勢力を拡大するようになり、これが郡名として呼ばれるようになったと推定される。」とし、さらに「古代、三河国八郡の一つ。「和名抄」の訓は「阿豆美」。」とある。そして「おそらく好字統一により（あるいは郷制実施以後）、渥美の表記が固定したと考えられる。」（注：好字統一とは和同 6 年、713 年の好字令のこと）としている。この説明によると、古代に阿曇連に従属する海部氏がこの地域に定着し勢力を張った。その海部氏は阿曇と名乗っており、それゆえ阿曇（阿豆美）という地名が付いた。その後天平年間の好字令のころ渥美という表記に変わったと言うのである。しかし、他の地域では阿曇から安曇へ変わっているのに、この地域だけが渥美と代わったのはなぜかという疑問は残る。

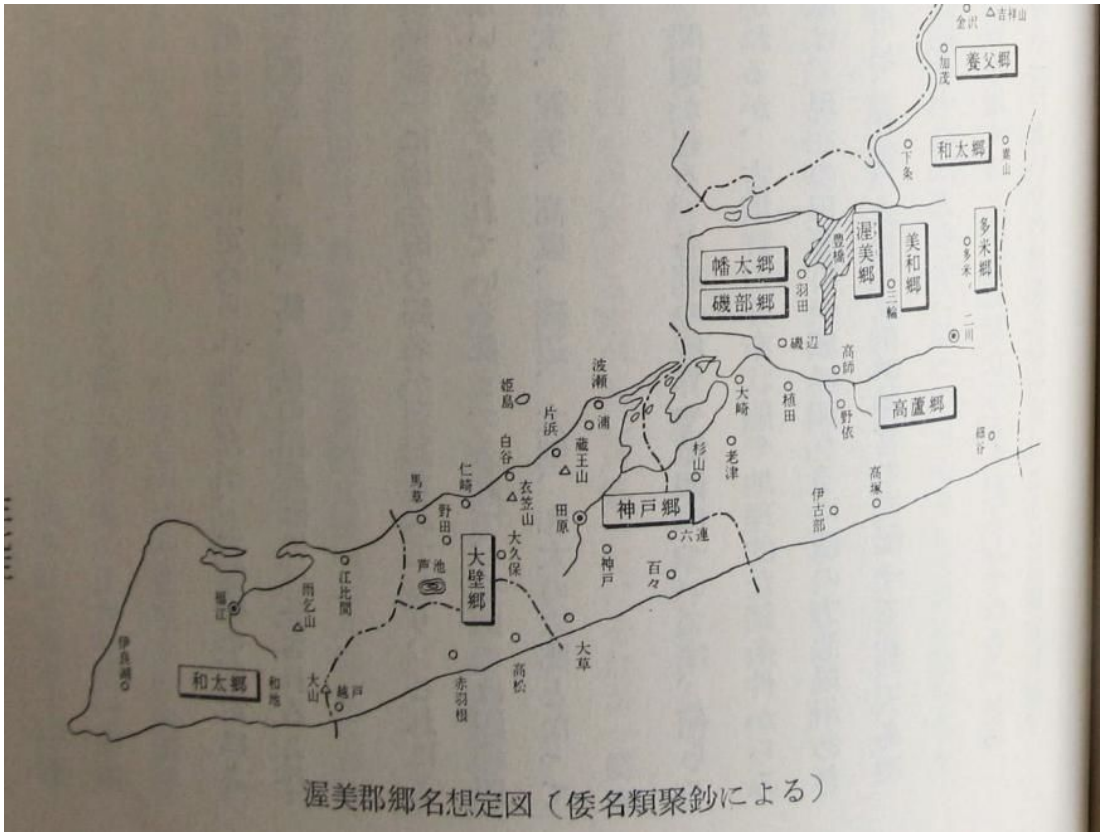
このような事情であり、渥美が安曇の転じたものとすることはあいまいなところであるが、しかし前述したように、渥美は安曇からの転化と考えることは納得できる。

渥美郡は渥美半島全域とその付根部にある豊橋市地域である。かつての渥美郷の位置ははっきりしないが、『田原町史』には「渥美郡郷名想定図」（和名類聚抄より）とする地図が掲載されている。それによると渥美郡域は渥美半島全域と豊橋市の西部地域である。そして渥美郷は渥美郡の北部にあり、ＪＲ豊橋駅周辺のようである。そこは瓜郷遺跡、篠束遺跡に隣接する場所である。弥生時代から人々が居住していた地域である。なにか安曇氏族との因縁を想わせる。しかし安曇郷は平安時代以降の歴史の中で存在を確認できず、そして現在その痕跡も無くなってしまった。

渥美郡は明治まで存続していたが、渥美郷は古くに消えてしまった。渥美郡はその後だ

んだんに市町村が分離していき、平成 17 年に田原市と渥美町の合併を機に、消滅した。なおこの渥美町は昭和 30 年に福江町、伊良湖岬村、泉村が合併して、渥美半島の南部地域に誕生した町であり、渥美郷の位置とは異なっている。

渥美郡渥美郷位置図（『田原町史』より）



渥美郡郷名想定図（倭名類聚鈔による）

３）渥美氏の変遷

平安時代の書である『録』には渥美氏は掲載されていない。そして渥美氏の姓（かばね）が何かという記録もなく、不明である。というより、渥美氏は姓を有していなかったと考えられる。ということは、渥美氏は三河国の中で活動していて、都とは関わりのない地方豪族だったということになる。つまり、阿曇氏は古代になんらかの事情があり、渥美氏に変わり、大和政権との縁が切れ、姓を失っていたのではないかと推測されるのである。

とはいえ、渥美姓を名乗る人々は現在においても多数活躍している。他のゆかりの地では、安曇を名乗る人は少ないが、渥美郡の場合は古代から渥美氏は存続しているのである。

このように渥美郡が安曇氏族の故地であることは疑うことないのであるが、「阿曇」が「渥美」に変わった事情については不明であり、そして渥美氏の姓（かばね）が何かも不明である。これは興味深い謎である。濃尾平野全体について見た後で、考えることにする。

前記の位置図によると渥美郷は豊橋市の西部付近にあり、そこが渥美郡の中心地だったと考えられる。すると安曇氏族は渥美半島の南端から進入してきてのち、さらに北上し、豊橋地域を拠点として活動していたと思える。ただし後述することであるが、濃尾平野に

は広い範囲にわたって安曇氏族の痕跡が残っており、安曇氏族の進出ルートがこれだけとは考えられず、他にも伊勢方面から北上して濃尾平野へ進出するルート、琵琶湖方面から東進するルートもあったと考えられる。

４）渥美半島の安曇氏族

渥美半島の南端部に渥美郡渥美町があった。昭和 30 年に福江町、伊良湖岬村、泉村が合併して誕生した町である。ここは古代の渥美郷とは異なる場所である。さらに平成 18 年に合併により田原市に変わった。ここに渥美安曇会という集まりがあり、そこの方たちから『渥美町史』、『渥美郡史』、『渥美半島文化史』、その他多数の関連資料を頂いた。また『渥美町むかし探訪』（愛知県渥美町農業協同組合）も頂いた。それらに基づいて、渥美地域と安曇氏族の関係をまとめると次のようである。

渥美半島の先端の伊良湖岬の恋路ヶ浜に阿祖（あそ）の磯（いそ）といわれる場所がある。古代においては、海岸線はもっと沖合であり、この地に海神を祭祀していた。海神とは綿積神（綿津見神）であり、阿祖の磯地名は阿曇族の祖という意味で付けられたとのことである。そこは伊勢方面からの最短位置にあり、安曇氏族が伊勢方面から海を渡って進出してきたと考える場合の上陸地点ということらしい。

旧渥美町地域には古墳が多数あり、そのうち藤原古墳（6 世紀末から 7 世紀初頭築造）の発掘調査記録によると、古墳の石室は規模が大きく壁石や天井石は大きく、築造者が大きな勢力を持っていたと考えられている。その巨石のうち砂岩は渥美湾の佐久島産のものであり、花崗岩は蒲郡市星越海岸ないし篠島産と考えられている。すると藤原古墳群を営んだ人々は漁業に関わりを持ち、操船技術に長けた人々であったと考えられるとしている。それは海人族と言われる人々であり、安曇族と考えられると言うのである。

渥美半島では舵子（かじこ）漁師は船に綿津見命を祀っているとのことである。『渥美郡史』は、これは海路の安全を海神に祈るとともに祖先崇拝の延長とみるべきだろうと記載している。そして、神戸（かんべ）村新美潮海山に海神を祀っているのは安曇氏の勢力地だった証だとしている。これらの情報から渥美半島（旧渥美町を含む）地域が安曇氏族の故地であることは理解できるのであるが、しかし渥美半島には綿津見命を祀る神社は残っていない。なぜなのか、大きな疑問である。渥美半島の式内社は阿志神社のみであり、この神社は安曇氏族とは全く関連しない。

５）濃尾平野の安曇氏族とその変遷

赤日子神社

つぎに濃尾平野について見てみる。前述したように渥美郷は豊橋市の西部付近にあった。ここは濃尾平野の東端である。そこから濃尾平野を西に少し寄ったところに蒲郡市がある。そこに赤日子（あかひこ）神社が在る。式内社であり、現在の祭神は彦火火出見尊、豊玉彦命、豊玉姫命であるが、前述のように古代では安曇氏が海神綿積豊玉彦神を祭祀していたと言われている。なお綿津見神は海神綿積豊玉彦神あるいは豊玉彦神とも表記される。その点では、

古代から安曇氏族が祭祀してきた神社と考えられる。しかし他の地域と同様に、この地域における安曇氏族の痕跡ははっきりしない。

神社の祭神は、その時の地域の支配者によって変遷することがしばしばあり、この場合も創建当初は安曇氏族系の綿津見命であったが、その後天皇家系の彦火火出見尊、豊玉姫命を合祀し、同時に綿津見命を豊玉彦命に変えたたと思われる。そうするとこの地域では、かつては安曇氏族が定着していたが、その他の氏族、例えば尾張氏との勢力争いに敗れて駆逐されたと推測することもできる。そして神社の祭神としては、天皇家の祖である彦火火出見尊を合祀したと思われる。

綿積神社

さらに北西隣の岡崎市には綿積神社がある。これは式内社ではないが古くからの神社であり、綿積命が祀られており安曇氏族との関連を思わせる。神社の由緒に「この地は元矢作川に臨む土地にて、有史以前より住民居住し、海神、綿積命を祀る。神仏習合時代は、海神としての性格より八大龍王社とも称する」とある。この地域も古代では安曇氏族が定着していたと考えられる。しかしいまはその痕跡は綿積神社だけである。

綿神社にみる安曇氏族の変遷

さらに西の濃尾平野の中心部、名古屋市西区と清洲市にまたがって弥生時代の朝日遺跡がある。ここは弥生時代前期から中期にかけての大規模な集落跡であり、弥生時代前期に先住の縄文文化地域と対峙していた時代の最前線集落であった。ここに綿(わた)神社（式内社）がある。弥生時代から大規模な集落が在った場所に位置しているということは、弥生時代からの系譜を思わせる。安曇氏族が弥生人集団のなかにおり、彼らとともに東へ進出していたと考えると、この地は安曇氏族と関連ありそうに思える。

綿神社の現在の祭神は玉依比売命、神功皇后、応神天皇であるが、神社の社頭掲示板には由緒として次のように記載されている。「主祭神　玉依比売命（神武天皇の御母）　応神天皇（八幡様）　１．綿神社の創建は大変古く、文字の使用もなかった弥生前期□□弥生人が此の地に定住し稲作農耕文化を東海以東へ広めた基となった、其の中核は北九州「志賀」の安曇部族であろう。則ち故郷九州「志賀」には祖神、海神の裔「玉依比売命」を祀り「海神社」と称し、此の地も亦「志賀」と偲び名も同じく玉依比売命を祀って「海神社」と称した。既に「延喜式」にも「尾張の山田郡綿神社は筑前志加の海神社と□□の社なり」と記され、本国帳にも「従三位綿天神（略）綿は海の仮字で昔は此のあたりまで入海にてさる神社のおわしますなり（略)」とある。文字の転化は縁起や因縁等時代により珍しい事ではない。以下略」と記されている。

そして『神名帳』の解説では、祭神として『大日本神祇志』では綿津見神、また『神祇志料』では志加綿津見神、そして『神名帳考証』では海童神と記載されていると記している。さらに関係氏族として安曇族が記されている。

このようなことから、古くから福岡市志賀島の志賀海神社と同様に安曇氏族が奉斎する神社と言われている。所在地が「元志賀町」であることも、志賀海神社との関連を思わせ

る。

しかし現在の祭神は綿津見命ではない。従って表面的には安曇氏族とは関わりのない神社に見える。これは不思議というよりも、不自然に思える。なにか表立って祭祀できない事情があるように思える。これは前述の赤日子神社の場合と同様の疑問であり、安曇連が渥美へ変わり、渥美郷という地名も消えてしまった事情と同じと思える。つまり、古代において他の氏族との争いがあり、それに敗れて、その結果変遷を余儀なくされたと思われるのである。

６）美濃国厚見郡厚見郷

『抄』によると、濃尾平野の北部地域の岐阜市付近には、美濃国厚見郡厚見郷（「阿都美」と訓がついている）が在ったことが記載されている。そして「美濃国厚見郡大口郷」と記された平城宮出土木簡等からもその存在が分かる。『地名大辞典』では「郡名の由来は、尾張国から木曽川・長良川を経て入った阿曇氏が開拓した地であることによるという」とある。なお、『姓氏家系大辞典』は厚見氏は羹見氏であり、地名に基づいて名乗っていたという説明をしているが、前述の説明の方が合理的と言える。すると、厚見氏はこの地に定着した安曇氏族の末裔と言うことになる。

厚見郡は明治まで存続していたが、合併して稲葉郡となり厚見郡の名前は消えた。稲葉郡はその後昭和になって岐阜市に編入された。そして厚見郷は平安時代までは存続していたが、その後の存在ははっきりしない。明治に郡内の三つの村が合併して新たに厚見村が誕生した。そして昭和になって岐阜市に編入された。そこ厚見村の場所が元の厚見郷があった場所なのかどうかは不明である。なお厚見郷の場所は厚見郡の中心だったと考えられ、その場所は岐阜市市街地と言われているがはっきりしない。

厚見寺跡

厚見寺跡が岐阜市寺町にあり、その跡地に瑞竜寺が建っている。これは厚見氏つまり安曇氏族の氏寺と考えられるが、創建者が誰かは分からないとのことである。岐阜市教育委員会の情報では「本寺跡からは、複弁八弁蓮華文縁軒丸瓦や「厚見寺瓦」の文字瓦等が出土している。出土瓦からは白鳳期に創建された寺院と考えられるが厚見寺という当時の呼称がわかる点で注目に値する。本廃寺の瓦は、各務原市那加桐野の山麓にあった柄山古窯で生産されたものである。この古窯跡からは、四重弧文軒平瓦・唐草文軒平瓦・鴟尾等がみられた外「厚見寺」等の文字瓦及び花鳥の陽刻文の瓦が出土している」とある。白鳳期と言うのは７世紀後半の頃であり、このころには、安曇でなく、厚見と名乗っていたことになる。濃尾平野の南部では渥美氏を名乗ったが、北部では厚見氏を名乗ったようである。ただし渥美氏の場合と同様に『録』に厚見氏は記載されていない。そして姓（かばね）もない。やはり美濃国の中だけの地方氏族だったと思える。

なお、『続日本紀』の称徳天皇天平神護元年９月（765 年）条に「河内国古市郡の人正七位下馬□登夷人、右京の人正八位下馬□登中成らに姓を厚見連と賜ふ」とある。馬□（文字は原文と異なる）登とは馬史で河内国を本拠とする百済系の渡来氏族とのことである。

[ここに入力]

この厚見連は他の箇所にも記載されておらず、また『録』にも記載されておらず、詳しいことは不明である。美濃国の厚見とは別系統の氏族だったと思われる。

厚見氏がなぜ氏族の名前を変えたのか、大きな謎である。それは渥美氏と同様に、多分他氏族によって駆逐されたと思われる。しかしそれでもなお、厚見氏は相当に勢力を有しており、氏寺を建立する力を持っていたようである。そして現在、渥美姓を名乗る人は東海・関東に分布し、宮城県にもかなり存在している。また厚見姓を名乗る人々は大阪・静岡県を主として分布しているが、それほど多くはない。

７）浜松市地域の安曇氏族の痕跡

豊橋市の東隣は浜松市である。弥生人たちは、豊橋地域から浜松地域に進出し、そして天竜川沿いに北上して信濃国へ進出したのである。豊橋地域に安曇氏族が定着していたとすれば、浜松地域へも安曇氏族が進出して行ったと考えられる。そして浜松市地域には綿津見命を祀る六所神社が数多く存在している。それらの点では安曇氏族との関連が強いと思われるが、しかしその痕跡ははっきりしない。

８）安曇氏族の衰退

このように濃尾平野では渥美半島、豊橋、蒲郡、岡崎、名古屋、岐阜にわたる広い範囲で安曇氏族が古代に定着していた。しかしその後他の氏族、尾張氏などとの激しい勢力争いがあり、安曇氏族は敗れ、駆逐されたと推測される。そして氏族の名前表記を渥美および厚見に変え、神社の祭神も別神に入れ替えて、安曇氏族の人々はしぶとく生き残ってきたという思いがする。

１３－８　米子市上安曇・下安曇：伯耆国会見郡安曇郷

『地名辞典』（前掲）によると、伯耆国に会見郡（相見郡とも書く）があり、安曇郷・会見郷・巨勢郷等の 12 郷があった。会見郡の中心は会見郷であり、中世には会見神社神主として会見氏がおり勢力を張っていたとのことである。つまり安曇氏とは別に会見氏が定住しており、会見郡ができたと考えられる。三河国の場合は渥美郡渥美郷であり、美濃国の場合は厚見郡厚見郷である。そして信濃国の場合は安曇郡である。これらでは安曇氏族は郡域に勢力を張っていたと考えられるが、伯耆国では近江国伊香郡安曇郷と同様に、勢力範囲は狭く勢力は小さかったと思われる。

また正倉院御物に調（税）として収められた狭絁（さきあしきぬ）があり、そのうちの一つに「伯耆国会見郡安曇郷戸主間人安曇?調狭絁壹込」（?は不明文字）という墨書きされたものがあるとのこと。絁は絹織物の事で、狭絁は何かの用途に使った残りの切れ端片と思われるとのことである。これにより会見郡に安曇郷があり、そこに間人（はしひと）安曇と言う戸主がいたことが分かる。

この間人安曇がどのような人物であるのか興味深いことである。『紀』の天智天皇紀に、門人連大蓋という人物が百済救援軍の第 2 陣の前将軍上毛野君稚子・間人連大蓋と記され

ている。間人連は『録』にも記載された氏族であり、天玉櫛彦命の末裔とされている。すると、間人と名乗る人物は安曇氏族とは別系統氏族ということになる。

間人安曇が、先に間人と名乗り、次いで安曇と名乗っていると言うことは、多分父親が間人連系であり、母親が安曇連系と推測するのが妥当と思える。安曇郷に居住していた人物に間人連系の者がおり、安曇連の娘を妻としていた。その子供が間人安曇ということと推測できる。なお名前の最後の文字は読み取れないようである。このように見ると、会見郡安曇郷には安曇氏族も居住していたことも分かる。

この地域における安曇氏族のその後の状況は不明であるが、安曇郷は存続し、近世には上安曇村、下安曇村として存続していた。現在は上安曇、下安曇という地名が残っている。地元では「かみあずま」、「しもあずま」と呼ぶとのことである。ゆかりの地は数多いが、安曇という地名が残っている地域はこの地と信濃国安曇郡の 2 か所のみである。しかし安曇氏族の痕跡薄く、この地名と正倉院御物調庸布だけである。

播磨国石海里を安曇連百足が開拓したとき、石見の人夫を連れてきて灌漑工事をしたと記されている。当時安曇連は石見国に支配地を持っていたと思えるが、しかし石見国には安曇氏族と関連する地域は見当たらない。するとこの人夫とは会見郡の安曇郷の人々ではないかと思われる。或いは、伯耆国には石見という地域があるので、この地の人々だったとも思われる。結局のところはっきりしたことは不明である。

また上安曇集落には昔から門松を立てないという習慣があるとのこと。その事情は次のようである。この地区の氏神は楽楽福（ささふく）神社であり、「そ**の氏神さんは、**なかなかの美男子で村の中に彼女がおられたそうな。ある年の大晦日の晩にも、明日は元旦だがマア鶏の鳴く前にお宮に帰りゃぁ良いわい、と思って彼女の家に行って泊まらんしたそうな。とこうが、まんだ夜が明けん真夜中に鶏が鳴いてしまった。神さんは、やれコリャしまった寝過ごした、と慌てて彼女の家を飛び出っさったところ、暮れからこしらえてあった門松の松で眼を突かれ大怪我をされた。出てみると外はまだ真っ暗闇。お気の毒なことで。それで上安曇の氏神さん（楽楽福神社）は片眼がつぶれたそうだし、**それから後は村では門松を立てんようになったし、憎っくき鶏を飼うことも、鶏の卵を食うことも戦後のしばらくまでしなかった。今は鶏も飼うし卵も食うが、門松だけはいまだに作りませんぜ」（米子市ホームページより）**

この話で興味深いことは、上安曇地区が安曇氏族の居住地であれば、氏神は綿津見命のはずである。しかし楽楽福神社の祭神は大日本根子彦太瓊命（おおやまとねこひこふとにのすめらみこと）であり、綿津見命ではない。結局この地域には、綿津見命を祀る神社は無いのである。この観点から見ると、長い歴史の中で安曇氏族は衰退してしまったようである。

１３－９　隠岐島海士町：隠岐国海部郡

『海士町史』（田邑二枝、海士町、昭和 49 年）によると、隠岐島には縄文時代の遺跡があり、縄文人が定住し、狩猟採集生活をしていたことが分かる。そして弥生時代の遺跡も

あり、環濠集落跡もあり、さらに古墳もある。弥生時代には水稲栽培がおこなわれ、半農半漁の生活をしていた。この弥生人たちがどこから到来したのかは、不明とのことであるが、九州方面から船で移動してきたものと思われる。

藤原宮跡出土の木簡や天平年間の隠岐国正税帳により、7 世紀代には国郡制は定まっていたことが分かる。隠岐国には４つの郡が在った。周吉郡（すき）、隠岐郡（おき）、海部郡（あま）、知夫郡（ちぶ）である。周吉郡と隠岐郡は現在の隠岐の島町であり、海部郡は現在の海士町で、知夫郡は現在の西ノ島町である。海部郡には湧水のある場所があり、水稲栽培に適した場所である。今日では、そこの生産量によって隠岐島全体の米需要を賄っているとのことである。古代においての生産量は不明であるが、米が採れ、漁も豊かだったと考えられることから、他の郡に比して豊かだったと思える。『抄』によると海部郡には三つの郷があったとのことであり、一郷 50 戸とし、一戸 15～20 人と考えると、海部郡としては 2,250～3,000 人の住人がいたと推測できる。当時の税として籾などの農産物の他に、アワビ・イリコ・イカなどの海産物があった。隠岐島では地勢的に農業は少なく、漁撈の方が盛んであったと考えられる。

平城京出土の木簡が多数あり、それらから海部郡および知夫郡に安曇部が多数居住していたことが分かる（『古代豪族の謎』「安曇氏の研究」松原弘宣）。また天平四年（732 年）の正税帳には海部郡の郡司少領として阿曇三雄の名がある（『海士町史』）。この阿曇三雄は姓（かばね）を持っていない。しかし「外従八位下」という官位をもっている。安曇連との関連、安曇部との関係はどのようなものか、どのような素性のものか興味あるが、全く不明である。しかし安曇氏族の中の一つであると思われる。第 9 章で述べた安曇宿禰継成は隠岐島に流された時（802 年）には、阿曇継成と記されている。

隠岐国西ノ島町に海神社がある。『神名帳』は「うみ」と呼び、地元の人たちも「うみじんじゃ」と呼んでいる。海から参道が神社へ向かって真っ直ぐに伸びており、神戸市の海神社と同様である。海人たちが祀る神社としての体裁を持っている。海神社は式内社であり、当初は海神２座を祀っていたとのことである。この２座とはどの神のことかあいまいであるが、綿津見神と住吉神のことと思われるとのことである。これらの神がなぜ同居しているのかは不明である。また西ノ島町は海士町の隣りの島にあり、以前は知夫郡であり、前記の木簡から安曇部が居たことが分かっている。これらのことから隠岐島がゆかりの地であることは確かである。

なお、天平元年の隠岐国正税帳には海部郡の少領に海部直大伴がいたことが記載されており、海部氏は「直」という姓を持って山陰地域一体に勢力を張っていたことが分かる。また、天平四年の正税帳には知夫郡の郡司として大領の海部諸石がいたことが分かる（『黒木村誌（復刻）』平成四年）。これによると、海部氏は海部郡では直という姓を持っており、さらに知夫郡では大領である。一方安曇氏は姓を持たず、少領であり、海部氏より下位にいたと考えられる。このころには海部氏の勢力は安曇氏を上回っていたと思われる。

隠岐島の漁法

[ここに入力]

『海士町史』（前掲）によると、隠岐島では弥生時代から稲作が行われ、半農半漁の生活だったとのことである。漁業は原始的な漁法であり、生産性は低かったようである。隠岐では「カナギ」という独特な漁法が行われていた。カナギ漁法については田辺悟が「海人の伝承文化」（『日本の古代８海人の伝統』大林太良編　中央公論社　1996）で紹介している。この漁法はアワビやサザエなどの貝類を素潜りで海に潜って採るのではなく、男が小さな舟に乗り、舟の上から海底をのぞき見て、アワビをアワビカギと呼ぶ漁具ではがしたり、サザエをヤス（サザエヤスとも）ではさみとるものである。カナギ漁は現在では箱メガネを使って海中をのぞき見るために視界良好であるが、古くには箱メガネはなかった。それで海水面を安定させるための工夫が必要であり、サザエのわたを刻んで口に含み、それを海面に吹き付けて海水面を平滑に保たせるというような工夫をしていたとのことである。しかし風が強いときや波の高いときなどは、なかなかうまくできなかったようである。そのため生産性はあまり高くなく、素潜り漁の方が効果的で収穫量は多かったようである。そこで江戸時代になって、長崎県の五島から「あま」を連れてきて、アワビを大量に獲ろうと言う動きがあったとのことである。しかし、あまを海へ入れて漁をされたら自分たちの暮らしが立ち行かないと言う島の漁師たちの反対があり、中断したといいう記録がある（『海士町史』）。

古代において北九州の海人（志賀島の海人を含む）は潜水漁法を行っていたのであるが、隠岐の海人はこれとは異なる「カナギ」という舟上漁を行っていたようである。北九州から稲作技術は伝わったのであるが、潜水漁法は伝わらなかったのである。そうすると隠岐島の海人は志賀島の海人、綿津見系海人とは別の部族系であると考えられる。つまり隠岐島の海人たちは、縄文時代から定住していた人々であると思われる。少なくとも北九州の海人ではないと言える。

天平年代には隠岐国に安曇・安曇部が居住していたことが分かっているが、彼らと海人のつながりは希薄であったと言える。結局、安曇氏族は海人とは関わりない人々と考えられる。

エビス神信仰

隠岐の島では海の神としてエビス神（恵比寿神）を祀っている。古代からの漁師たちの信仰らしい。漁師集落の集落ごとに恵比寿神社があり、集落ごとにお祀りしている。これは豊漁と漁の安全を祈る祀りであり、隠岐島の海人・漁師たちの古来の信仰である。これも綿津見命を自分たちの祖神として祀る安曇氏族とは大きく異なる様相である。

１３－１０　阿波国名方郡

四国地域では全般にわたって安曇氏族が居住していたと思われるが、明確な痕跡はなく、断定できない。ただし『姓氏家系大辞典』（前掲）は次のような説明をしている。安曇氏族は九州地域から畿内地域へ進出し、阿波国名方郡に定着し、第 2 の拠点とした。大浜宿禰はここにおり、海人の反乱を鎮定し、海人の宰に任じられた。その根拠として、安曇部粟

麻呂が部字を改めて宿禰を賜ったこと（『日本三代実録』、本書第７章参照）をあげている。

しかしこの見解については同意しかねる。この地域に安曇部が賀陽親王の家令として居住し、活躍していたことは確かである（第 7-23 章参照）。しかしそれは平安時代のことであり、安曇氏族が畿内地域へ進出した時代からはるか後世のことである。さらに当時、安曇部粟麻呂は賀陽親王に家令として従属していたのである。安曇氏族の第 2 の拠点とする根拠とはならない。一方、大浜宿禰に関しては第 8-3、13-3 章で述べたように、播磨地域に居住していたと考えるのが妥当である。このように見ると阿波国名方郡が安曇氏族の拠点だったとは考え難い。

また名方郡（徳島市不動西町）には式内社和多都美豊玉比売神社（現在は雨降（あまたらし）神社と呼ばれる）があり、安曇氏族との関連を想わせる。しかし祭神は豊玉姫命であり、綿津見命系というより天皇家系である。こうしてみると、この地域に安曇氏族が定住していたことは理解できるが、古代における第 2 の拠点だったと言うことには同意できない。

隣の勝浦郡（徳島市八多町）には速雨（はやさめ）神社がある。式内社であり、祭神は豊玉比女神であり、『神明帳』には関連氏族は八太造とされている。由緒書きによると、古代には中央の豪族海犬飼氏の領地であったと記されている。海犬養（海犬飼）氏と八太造との関係は不明であり、神社と海犬養氏との関連も不明である。海犬飼氏は姓が付いていないことから、八太造の方がこの地域の有力者だったと思われる。ただし、近くに犬飼地籍が現在も残っており、犬飼農村舞台があり、国の民俗文化財となっている。こうした事情から考えると、海犬養（海犬飼）氏が八太造に従属する形でこの地に定住していたと思われる。

１３－１０　神奈川県湯河原町・真鶴町：相模国土肥郡　子之神社

湯河原町・真鶴町地域は相模国足柄下郡土肥郷に相当する地域である。古くには足下郡と呼ばれ、垂水郷と呼ばれていたようであるがはっきりしない。

子之神社は湯河原町にあり、真鶴半島の付け根部に位置している。境内社に龍神社がある。ここは式内社ではないが創建は西暦 700 年と言われ、古くからある神社である。子之神社の祭神は大己貴命、素戔嗚尊、他であるが、龍神社の祭神は海住神（わたずみのかみ、綿津見神と同じ）である。神社の由来には、竜王・妃・王子が船でこの地に到来し、この地を開拓したとある。宮司の話では、神社の長い変遷の歴史の中で祭神が変わっているが、本来の神は龍神社に祭られている綿津見神であるとのこと。竜王と言うのは豊玉彦命、またの名は綿津見命である。すると安曇氏族はこの地に進出してきて開拓したが、しかしその後安曇氏族は衰退して他の氏族にとって代わられたと言うことになる。現在の宮司は穂積氏が代々受け継いでおり、物部氏の末裔とのことである。現在では安曇氏族の痕跡はほとんど残っていないが、ここは安曇氏族のゆかりの地といえる。

子之神社の詳細は第 12－14 章に記載した。

[ここに入力]

１３－１１　大和郡山市：大和国添上郡　安曇田荘

安曇田荘は、『地名辞典』によると、大和国添上郡にあった荘園で、平安期から室町期に存在していたとある。場所は現在の大和郡山市とある。安曇田荘は安曇氏族の故地であるという説があるが、この時代には安曇氏族は衰退してしまっており、この地に居住して活動していたとは考えられない。

１３－１２　瀬戸内海沿岸地域

瀬戸内海沿岸地域全域にわたって安曇氏族が活動していたことが、古文書によって分かる。しかし現在ではその痕跡は薄く、ゆかりの地を特定することは難しい。

なお平城宮跡出土木簡に周防国吉敷郡神埼郷（現在山口市吉敷と推測するが神埼は不明）戸主阿曇五百麻呂と記載されたものがある（「安曇氏の研究」）。また、周防国正税帳には「長門国豊浦團五十長凡海我孫」の名が記載されており、この地に安曇氏族が居住していたと推測できるとのことである（「信濃国安曇族の考古学的一考察」前掲）。さらに、平城宮跡出土木簡に周防国大嶋郡美敢（みかも）郷凡海直薩山御調尻塩、同凡海阿耶男御調塩と記載されたものがあるとのことである（「海人のウヂを探り東漸を追う」前掲）。このように山口県では古代に安曇氏族が居住していたと思われるが、いまでは痕跡は定かではなく、郷土史研究者に聞いても不明である。前述の古文書に見える安曇、凡海は、安曇氏族の一部が何らかの事情で移住して住み付いていたのではないだろうか。

１３－１３　山梨県北杜市大泉町

『山梨郷土史研究入門』（山梨郷土研究会編）によると、北杜市大泉町の東姥神Ｂ遺跡から墨書土器が出土した。墨書土器とは土器に墨書きで文字が記されているものである。ここでは土師器であり、遺跡の状況から平安時代のものと考えられている。その中に「安曇」と書かれたものがある。この土器は甲斐型の坏（つき）であり、甲斐の国のどこかで作られて、この地で使われていたと考えられている。安曇は安曇氏族の名称と考えられ、安曇氏族との関連が推測されている。平安時代に甲斐国のどこかに安曇氏族が定住していたと推測される。安曇氏族は都では平安時代には衰退している。そして、北杜市および甲斐国では安曇氏族の痕跡は不明である。今後の調査研究がまたれるとのことである。

１３－１４　各地域間の連携・交流はあったか

全国に分布した安曇氏族が、連携ないし交流を行っていたのかということは、全く不明である。しかし安曇という氏族名を名乗っていたことを考えると、何らかの氏族としてもまとまりを持っていたのではないかと推測できる。この問題は、今後の課題と言わざるを得ない。